
為政者の戦い

ルーシェン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
為政者の戦い

【Nコード】
N0510G

【作者名】
ルーシェン

【あらすじ】
ミストリア王の家臣であったトウーロとドルクレンが国王シャリィの手から逃れ、宿屋に潜伏していた。そこで偶然家内奴隷の双子の姉妹を手下にする羽目になった彼らは、シャリィに対して反逆を決意するが……。

(1) 英雄の生誕

プロローグ1(1) 英雄の生誕

大ミストリア王国の首都ル・シーの宮殿、アイリスの馬小屋にて王家の嫡子たる男子が誕生した。

その第一報をハイファ・エルフ族の皇帝シャリー・レナンスに告知した、ドワーフ族の長で、首都にそれぞれ20名の部族民を持つ、ドルクレン・ファシスとトゥーロ・デモクールは、後難を恐れて、賢明にも宮殿を脱出して城下町の薄汚れた汚らしい宿屋に潜伏している。

シャリーの身籠った、反逆者ビルーダ公爵に殺された前夫の子供は、予言により女の子と言う事になっている。

何処の世界でも、男の方が王位継承権は上だ。

それ故に、宮殿にとどまれば王権を弟の系統に奪われることになった、独身のシャリーの絶え間ない八つ当たりの対象となり、縊り殺されることになるのは明白なのだ。

シャリーはそういう女性である。

すでにその兆候はあった。王子誕生の第一報を予言により知っていたシャリーは直属の鉄器団をかき集め、王子派の公爵、ミラル・カツペンの所領たる、ラーゼルン島をいきなり没収して、命乞いをして泣き崩れるミラルを公開処刑したのだ。

所領は公爵である王子の大叔父、セタ・ブレイメンに与えられた。

これがミストリア随一の孟将ドルクレンと、知謀の名将にて宰相のトゥーロを酷く脅えさせたらしい。

2人共王子派なのだ。

正体が分かれば確実に暗殺者を送り込んで殺される筈である。

それ故、スラム街の貴族で議会の議員職を有する、セタ・ブレイメンが経営する鈴区の家と言う宿屋に籠っていたのだ。

マイナーな貴族なのでドルクレンとトゥーロは不覚にもその名を知

らなかった。

知っていたら別の宿に潜伏したことは間違えない。セタはシャリー派の急先鋒なのだから。

しかも王子の首を狙うべく暗躍しそうなのは実はこの人なのだ。

王子とトゥーロ達さえさえ葬れば、王女殿下の宰相の椅子はこの人に決まりなのだから。

「これからどうするね？トゥーロ君」

万が一に備えて3人の従僕に宿屋の門に立たせながら、ドルクレンが尋ねた。

彼は孟将だが頭の方は宰相で、兄貴分であるトゥーロに頼りきりである。

当然だろうとドルクレン本人は思っていた。大体軍人が頭を使って政治的な話をするなどミストリアでは御法度である。

軍人は戦術だけ考えられればそれで宵のだ。

それが文民統制というやつである。

しかし、頼られるトゥーロの方は時々うざったくなるらしい。

この時も嫌味をこめてドルクレンに言ってみた。

「お前は少しは自分で考える気はないのかね？俺はもう宰相でもないのだよ」

正確には罷免されていないがトゥーロはそう言っておいた。

その言葉にドルクレンは少し考えて返答した。

その口元が嫌らしく笑っている。

「俺がものを考えるようになっっちゃミストリアは長くないだろうよ。

軍人は馬鹿だからこそ命をかけられるのだ」

いけしゃあしゃあとドルクレンは言っただけだ。

彼の心に寸分のやましさも存在していない。

軍人は主の命令に疑問を持って、自分で考えてもいけないのだ。

トゥーロは、そんな融通のきかないドルクレンを理性を持ってたしなめた。

無駄だと思うが一応言っておかねばならない。

「お前はすでにシャリーを裏切っている。シャリーの命令を待たずに逃亡したのだからな。それはお前の意思ではないのか？俺はお前にそういう命令を出したつもりはない。ならなぜお前は王子に付く事にしたのだね？」

ドルクレンは一瞬返答に困った。

実はよく考えてなかったのである。

気持ちより先に、運命に導かれてこうなつたと本人は思っていた。然し実の所はシャリーに殺されるのが嫌だっただだだけの話だろう。

それ故に、裏切り者の汚名を着せられてしまったのだ。

そう、己を納得させたドルクレンは王子の部下としての所信演説をトウーロに語って聞かせようとした。

「そんなにミストリアを分裂させたいなら聞くといいさ」

ドルクレンはそう前置きすると語り出した。

「そうさ。俺は裏切り者だ。王子の為に国を捨てた以上、うまく立ち回って王子をミストリアの王にしないとこつちの命が危ない。俺にできることは各地の夜盗をかき集め、どこぞの山奥にでも帰農させて王子の隠れ家を作ることだ。早々に王子を支持して無残な惨死体となった、ミラル・カツペンの二の舞にならぬ様に、密かに兵力を蓄えるのだ。そうして頃合を見て、反逆して王位をシャリーから奪い取るのだ」

ドルクレンは一気に言い放った。

ドルクレンの本心を知ったトウーロは啞然としてこのイエスマンの親友を見る。

こちらは一応王国の宰相である。

辞めたつもりでいるとはいえ、さすがに反逆する気にはなれなかった。

しみじみとドルクレンに言う。

「確かにお前はイエスマンでいたほうが良い様だ。お前の考えではミストリアは確かに滅びる」

トウーロが水を向けると、わが意を得たとばかりにドルクレンは喜んだ。

「だろ？俺は軍人でいるべきなのさ。戦略はお前が練ればいい。俺はそれに従うだけさ」

ドルクレンは話の途中で、宿屋の給仕娘が薄汚れたトウーロ達のいる部屋にいつの間にか持ち込んだおにぎりをロ一杯に頬張りながら、軽口をたたいた。

トウーロは渋い顔をしてそれを眺める。

疑心暗鬼になっているトウーロは、あいつ等、俺達の正体を知っているのかと思つたのだ。

そう言えば迂闊にも大声で話すぎた。

俺達は御握りを注文した覚えもない。

俺達をシャリーに売る心算なのか？

「お前の領地と部族民はお前が治めているのではないのかね？」

トウーロが唐突に嫌味を言った。

給仕娘に悟られぬように話題をかえたのだ。

単純なドルクレンはトウーロの詐術にあっさりとかかった。

「確か金鉱の収入が60デイルスだったか？俺の領土は武器職人からの税収が500デイルスだ。ゴブリンなら千名は雇えるぞ」

トウーロは国家からも給料を貰っている。350デイルスだ。

ドルクレンはトウーロの作為には気付かず、自慢げに答える。

「トロールが2人いる。彼らの用心棒代が700デイルスだ。俺が二割の税金を受け取っている」

ドルクレンは他にもドワーフを使って、人間の諸部族をかき集めて4千人のラティール党を組織して、800デイルスの税収を得ていた。

トウーロは不覚にもその事を知らない。

「俺はこの領地を王子の代わりに治めているのだ」

ドルクレンはそう公言してはばからない。然し、ラティール党のことは誰も知らなかった。

シャリーにとっては頭の痛い存在である。

ドルクレンは別に反逆の兵を募っている訳ではなかったが、そう思われても仕方がないだろう。

そして軍馬は私財を投げ打って5千頭ほど飼育していた。

どう見ても反乱の準備としかシャリーには受け取れない筈だ。

ちなみに給仕娘はシャリー派である。

国の許可制である旅の宿屋は、国王たるシャリーを支持せずに営業できない。

不支持を表明すれば認可をもらえてもすぐにシャリーの不興を買い、首にされるからだ。

それでいくと潜伏しているこの宿屋もシャリーの手下が来るのは時間の問題である。

トゥーロはようやくこのことを思い出し、軽率にも宿屋などに逃げ込んだ己の作戦ミスを呪った。

今シャリーの兵がなだれ込んで来たら何も出来ずに、シャリー派に殺害されてしまう、これでは只の馬鹿ではないか？

トゥーロがふとドルクレンのほうを見ると事の重大性に気付いていない彼は頓狂な事を言い出した。

「さっきの給仕娘、子供のようだがなかなかの美人だな」

ドルクレンはドワーフなのに酔狂にもエルフの娘が好ましい。そんな戯けた発言を幾度となく繰り返した。

エルフとドワーフが仲が悪いのは昔の話だがそれでもメデューサ・エルフとの間には抗争もある。

彼女が何故わざわざ、メニュー表にも載っていないおにぎり話を途中で運んできたのかドルクレンはまったく気付いていなかった。

ドルクレンは従僕の娘に酒を注がせ、安らかな夢を楽しんでいる。給仕娘との甘く切ないラブストーリーな妄想に浸っているのは、そのにやけた顔からも分かるのだ。

「あいつは何か企んでいるな」

トゥーロは、いち早く真相を悟り、廁へ行くふりをして給仕娘の住

むタコ部屋の前で聞き耳を立てた。

あいつは俺の正体に気づいているのか？トウーロは何時でも脱出できるように身構えた。

給仕のエルフ娘、トルハとペレトンの2人がシャリーに密告する可能性が高いからだ。

あいつらはおそらく家内奴隷であろう。

家内奴隷である2人を解放できるだけの金を手に入れる為には密告者に支払われる、50デイルスの賞金が是が非でも必要だからだ。

それ故に、放置すれば王子派に未来はない。

密談の現場を押さえて捕らえるしか方法がなかった。

下手に攻撃を仕掛ければセタの反撃によって殺されてしまうだろう。証拠を握るしかない。

案の定すべて聞かれているとも知らずに、ペレトンが軽率にも口を開いた。

因みにドルクレンの意中の姫は妹のトルハのほうである。

「どうする？トルハ」

双子の姉であるペレトンが、妹のトルハに尋ねた。

言わずと知れたお約束の、トウーロ達の処遇問題の話である。

トウーロの読みは見事に当たったようだ。

後は油断した2人を捕らえて物置にでも放り込めばいい。

その後はさっさと逃げるだけだ。

「あいつらを売れば私達、確実に自由になれる上にお金までもらえるのよ。このチャンスを逃したらご主人様は私達に何をくれるかしら？革紐でこっぴどく打たれた上に、女郎屋に売られるのが関の山」ペレトンは希望的観測を口にした。

建前だけでも前向きでなければ奴隷家業はやってられない。

トルハはそんなペレトンを哀れむような目で見た。

トルハはペレトンほど甘くはない。

世が世なら1国の軍師になれる位には聡明だ。

「それでどうやって生計を立てるつもりなの？奴隷の私達を雇う企

業は何処にもないわ。自由になつたつてのたれ死ぬだけよ」

夢見がちな少女であるペレトンに比べてトルハは冷静であった。現実というものを良く分かっている。

一瞬味方に抱きこめるかなとも思ったトウーロは、金の用意を部下にさせようかと考えた。

然しそれは最後の手段だ。

トウーロはドアの前に潜むと、2人を拉致する機会をうかがった。非力なエルフの女の子2人とはいえ、トウーロとドルクレンでは逃げられてしまいかもしれない。そうなればすべては終わりだ。

トウーロは密かに味方にだけ音を聞かせる魔法のアイテム、静寂の鈴を3回鳴らした。

ミストリアの怪しげな御用商人から買いたいんちき商品だが、2回くらいは使えるはずである。

なんでも備えておくべきだ。

「お呼びか、トウーロ様」

従僕の一人が音を立てないようにトウーロの元へやって来た。

トウーロは冷徹な口調で（小声で）命令を下す。

「出入り口を固めてエルフの給仕娘が逃亡できないようにしろ。逃がせば俺もお前もシャリーの追撃を受ける事になるだろう。裏切るなよ。裏切ればお前も家族も結局はシャリーに殺されるであろう」
従僕は之を聞くとあきれた。

トウーロは以外と小心者だ。

怒りに任せて小声で言い返した。

「ここで裏切るくらいなら最初にやってますぜ。どうかご安心を」
エルフの従僕ルイス・トウースは、確かに裏切るつもりはなさそうであった。

野心家だがトウーロを裏切ることはしない男である。

ルイスはトウーロに提案した。

「俺が聞いていようか？あんたが客間にいないとあいつらは怪しむ

かも知れねえ。エルフの給仕娘の他にも1人、下男がいるんだ」
下男？さつき庭先で掃除をしていたあの門番の爺さんか。

確かカルトミール・ヘラホツへとか言ったか？

「あの爺さんなら心配するな。あの年寄りを長者に対する礼もわきまえず、門番にするようなシャリーに忠誠など尽くすものか。年寄りはそのだけで長老として奉られるべき存在なのだ」年齢的に150歳のトゥーロは心情的に、年寄りを軽視するシャリーが許せなかった。もつともトゥーロは、ドワーフとしては青年である。

ドルクレンは78歳であった。

「分かった、ルイス。お前が見張っておれ。俺は客間に戻る」

そう言うと、トゥーロは音を立てないように客間へと戻っていった。

「何？」その時、妹より格段に臆病なペレトンがトゥーロとルイスの密談を聞きつけ、ドアを開けた。

その意味では作戦は失敗している。

ペレトンと鉢合わせたルイスは適当に誤魔化そうとした。

腹を抑えて空腹をアピールする。

「腹が減ったよ。悪いが俺達の分のおにぎりも作ってくれないか。

話が終わってからでいいからさ」

所詮子供である双子は間抜けそうに食事を要求するルイスの迫真の演技にすっかり騙されてしまっていた。

自分達の悪行を全て聞かれているとは露ほども思っていない。

ドア越しではドワーフや、エルフの耳でもない限り、聞き取れないと思っっているのだ。

ペレトンはルイスを人間だと信じている。

「分かりました。2時間後にもって行きます。御飯を炊かねばなりませんので・・・」

動揺を隠せぬ、か細い声でペレトンが呟いた。

それを聞いてルイスが言う。

「脅えることはない。トゥーロ様はお前らを殺したりしないさ」

この台詞を聞いたペレトンの顔がさっと青ざめた。

こいつらは私達の事を怪しんでいるのか？

「どうしたね？ああ、名前の事が、宰相のトゥーロ様になんで名付けられたらしいね。よく勘違いする奴がいるんだ」

うっかりとトゥーロの名を呼んでしまったルイスは動揺を悟られぬようにしながら、言い訳をした。

「そうなのですか？」

ルイスの言い訳を最初から信じているペレトンとトルハは、自由になれる手蔓が、空振りに終わったと重い、意気消沈した。

そこへ追い討ちの一言を告げる。

「ああ、忘れていたが手間賃だ。これで主のことは忘れてくれないかね？妙な噂を立てられると関係のない同姓同名の主に迷惑がかかるのだ」

そう言うところルイスは捨て値で500ディルスはするであろうルビーの指輪をペレトンの指にはめるとよく言い含めた。

正体はばれている様だと流石のペレトンも思った。

ルイスはこの点で失敗を犯している。

「妹と相談してからでもいいですか？私達は自由になれさえすればあの人が宰相でなくともかまいません。口止め料のつもりならできれば現金でいただきたいのですが」

宰相が自分たちを怪しんで買収工作をしている位には思っていたが、他の発言は信じていた。どうせお互い、正体はばれているのだ。

社交辞令はなしにしよう。

少なくともペレトンの後ろでルイスを観察していたトルハはそう思っ

「ご心配には及びません。あんたらを売ってもご主人様が手柄もお金も独り占めするだけよ。あたしたちには1ディルスも入らないわ。当然自由になどなれないわね。私達は無駄なことはしないわ」

トルハがそこまで言うのと、ペレトンが悲壮な顔つきになって言った。「ならどうしたら言いの？」

トルハは持論を展開した。

「あたしならトゥーロに付くけど。王子は反シャリーの象徴だからトルハは姉の質問を軽くいなした。ここに500デイルスの指輪を湯水のように使えるバトロンがいるのだ。」

現にルビーの指輪をくれたのである。

味方に出来る余地がありそうではないか？

然しペレトンは、この背信行為を知ったご主人様のセタの壮絶な復讐を予想して脅えているようだ。

「あいつらを見逃したらご主人様が怒るでしょ、どうするの？あいつらの為に私達の人生を棒に振るわけ？」

そのペレトンの台詞に、トルハがあざ笑うように言った。

「あいつらはある馬鹿でもミストリアの宰相閣下と孟将よ。口止め料に五百デイルスも払ってくれば母の残した借金の24デイルスをたたき返した上に生活資金も得られるわ。確か利子は15%だから4デイルスくらいね。ご主人様はあの馬鹿の事を知らないからあの馬鹿に身請けしてもらえば角が立たないわ」

おい、ちよつと待てよとルイスは思った。こんなに金に汚ねえエルフは初めてだ。高貴なエルフ族も長年奴隷していると心まで汚くなるものか。

然しそれはいい考えだとペレトンは思っていた。

一応東方の大陸、ペクダール大帝国の王族に連なる血筋のペレトンとトルハには、シャリーに義理立てするいわれはなかった。

ペクダールを滅亡に追いやったのはシャリーである。

「でも、私達は失脚した宰相の首を差し出せば確実に報奨金が入るよ。トゥーロの方は払ってくれるか分からないじゃない」

既にルビーをくれてやっただろう。

それでは不満なのか？

ルイスは憤慨した。

こんな奴、さつさと斬るべきではないか？

ルイスが剣の柄に手をかけたその時、トルハの一喝がとんだ。

「私達はこれでも王家のエルフなのよ。主家を滅ぼしたシャリーに媚びる等と恥を知りなさい」

トルハがそう言うのとペレトンがぼそりと呟いた。

「誇りでご飯は食べられないわ」

ルイスは心中思った。

王家のエルフが金にまみれるなよと。

その時、怪しげな行動をとる給仕娘に、疑惑を感じたドルクレンが宿屋の客間から声を出した。

「おい。エティル・ゼフィナ産の紅茶が飲みたい。金を渡すから買ってきてはくれんかね？」勤めて穏やかな声で頼んだ。

こそこそと宿屋の自室で密談する怪しげな双子に疑念を持っているとはおくびにも出さない。ペレトンも脅えた口調で言い訳をした。

「困ります。あたしたちが外に出られないのはお分かりでしょう？」

不意に自分達を呼ぶ声を聞いた、トルハとペレトンは慌てて声を返した。

この国の法律では奴隷の主人の許可なしでの外出は禁じられている。大体その法律を作ったのはトゥーロではないか？

姉に比べて感情の出やすいトルハは不条理な怒りをトゥーロに向けたが一応、慌てて客間に駆けつけた。

その間、ドルクレンはトゥーロの説得を受けている。

「あんな素敵な娘が俺達を売るわけないだろ？」

トルハの魅力にぞっこんのドルクレンはトゥーロの説得に反感を覚え、弱弱しく抗議した。

イエスマンを気取っているドルクレンにしては珍しい反応だ。

「お前がどう思おうとあいつらは俺達を売る相談をしていたんだ。

あいつらは俺の首を狙っているんだ」

これにドルクレンが噛み付いた。

「狙われているのはお前の首だろう？俺はお前の犬だがあの給仕娘を敵に回すなら見捨てるしかないな。話し合え。知謀の宰相の名が泣くぞ」

これを聞いたトゥーロは妥協案を示した。

取り合えず給仕娘を人質にして反応を確かめてみようと言う事になった。

それでトルハに声をかける。

「おい。さつさと茶を持ってきてくれんか？この宿屋にある奴でいいから」

エティル産の最高級茶を飲みなれているトゥーロとドルクレンにとって庶民の飲むお茶にも興味はあったがそれは口実で、給仕娘を一人きりで誘い出すのが狙いである。

「はい。今行きます」

トルハはそう言いながらも身の危険を感じてうるたえていた。

「る、ルイスさん、一所に行つてよ。密談のことはばれてるんでしょ？一人で行つたら凌辱された上で弄り殺されるに決まっているわ」トルハはドルクレンの方には好感を持っていて、

どうせ凌辱される運命ならドルクレンの方に抱かれない、位には思っている。

然し、トゥーロは馬鹿宰相だと決め付けていた。

大体ミストリアに奴隷制度などというものがあるのと、彼の在任中にペクダールが滅んだのがその根拠であろう。

彼女の治世に、多くのエルフがメデューサ・エルフと呼ばれ、その瞳を狙う強盗団により殺害されたのだ。

女郎屋に売られ、凌辱されたエルフも数多い。

雑役婦として24デイルスで売り飛ばされた双子は幸運なほうであった。

「あいつらはドワーフだぞ？エルフにとってお前は美女だがあいつらにとってはゴブリン並だ。凌辱などしないから安心しろ。ちなみに俺には妻のエミリーと娘のルシーとアミとエレナがいる。アミは4歳だ」

可愛い娘がいる身で他の娘に手など出すかといいたいらしい。

それで何とか勇気を振り絞ってトルハはトゥーロの面前に現れた。

「申し訳ありません。ご主人様は外出中ですので、私達は法律により外出できないのです」

全てばれているのは知っているがそれでも芝居を続けることにした。トウーロはそれを聞いて思った。

そういえば先代の宰相のアーカルトン・フェシスがそんな法律を作ったな。

事情を知っているトウーロは眼球に怒りと脅えをたたえるトルハに優しく言った。

「あんたはやはり俺を知っているのか？」

その時ドルクレンが素早くトルハの手を取ると彼女を客間に引き込み、その首筋にナイフを当てた。

トルハの顔が死の恐怖に真っ青になる。

降伏して命乞いしようかと思ったその時トウーロの脅し文句が飛んだ。

「もう一人の娘に言え。逃げれば殺す。助かりたければエルフの血に誓いを立てて俺の兵士になれとな」

之を聞いたトルハは面喰らった。

この人は宰相の癖にやっている事は夜盗も同様ではないか。

こんな馬鹿宰相の支配下にあるミストリア人は哀れでならない。

捕らわれの身になったトルハはそんな他人事のようにルーシー人に同情していた。

そしてこの事がトルハの王族の誇りに火をつけたらしい。

公然と言い放った。

「あんたらは夜盗なの？高貴なるエルフ族が汚らしいドワーフなどの脅しで魂を売るなどと本気で思っているの？凌辱するなり殺すなり好きにしたらいいわ」

トウーロを売る密談を聞かれたと思ったトルハはどうせ命乞いしても無駄だと諦めたらしい。トルハはあっさりと抵抗を止めると様子を見る事にした。

それを見たドルクレンは言う。

「ほら、やはりこの娘は俺達を売るような娘じゃないだろ？」

ドルクレンは神妙なトルハの態度に安心したのかトウーロに嫌味を言った。

そのまま説得モードに入る。

「あんたらが俺達を憎んで戯れにもでも売り飛ばす相談をするのは分かるが凌辱される覚悟まであるなら俺を嫌うのだけはやめてくれないか？俺はぶっちゃけた話、あんたに惚れちまったんだ。取り合えず友達から付き合ってくれる気は・・・、やっぱないよな」

「はあ？」

唐突で突然の一目惚れ宣言にトルハは間抜けな声を出して反応した。メデューサ・エルフにとってドワーフは不倶戴天の敵である。

その恨みはミストリア建国戦争の折、軍資金調達のため、ドワーフがメデューサ・エルフを虐殺して瞳を奪い取ったことに由来する。それが恋愛をしようというのか？ドルクレンは血迷ったか？

「私メデューサ・エルフなのよ？ふざけて言ってるの？」

トルハはドルクレンに好意を抱いてはいるがあくまで友人となるならである。

ドルクレンは如何見ても恋人としての関係を望んでいるようだ。

エルフとドワーフならプラトニックな恋愛が一般的だがドルクレンの目を見れば誰だって身の危険を感じる。

「俺は都市出身のドワーフだからな。人間のような好みなのだ。あんたはドワーフは嫌いかね」

当たり前じゃないとトルハは思った。
メデューサ・エルフにとってドワーフは悪魔より邪悪な卑劣漢である。

いや悪魔はエルフの瞳で（宝石としての価値と魔法製品としての価値がある）商売などしないから悪魔に失礼だろう。

悪魔の中にも正義の心に目覚め、地上に降り立った、ダーク・エルフと呼ばれる種族もいる。勿論エルフとの血縁関係は無い。

余りにも世間体が悪いので同盟を結ぶ勢力も無く、結局魔界にも戻

れず、夜盗化するものが殆どだ。

東方大陸にはダーク・エルフの一大勢力が潜んでいて王国を造っていたがブアンレイア帝国と称する宇宙国家と取引をして月を入手したと伝えられている。

この権利は50年前のシャリーによる東方遠征でミストリアに移った。

然し宇宙軍を持たないミストリアではテレポートの呪文でも使わぬ限り屯田兵を送り込めない。

この呪文を使えそうな素質を持つものは今の所シャリーとカルトミールしかいなかった。

それはともかくトルハは取り合えずドルクレンと話し合う事にした。少なくとも殺される心配はなさそうだ。

トルハが唐突に質問する。

「瞳狩りはトゥーロ様の命令なの？」

ドルクレンの執拗な説得の言葉を適当な聞き流していたトルハは聞いてみた。

実はトルハは無常にも瞳狩り事件を全く他人事として捕らえているのだが、ドルクレンにとっては冷酷に聞こえたらしい。

慌てて言い訳をしたのが今の状況だ。

「トゥーロ君は関係ない。瞳狩りはミストリアの商人がやっている事だ。俺達の部下に1000デイルス以上の資産を保持しているものはいない。」

瞳狩りは合法だからやっている奴がいれば贅沢な生活をしている筈だ。

そして瞳狩りはシャリーの命令じゃないと廃止できない決まりになっている。トゥーロ君を攻めないでくれ」

ドルクレンに好感を持っていたトルハはこれを聞くと神妙な顔つきになって言った。

穏やかに微笑む。

機嫌を良くしたトルハがドルクレンの問いに答えてやった。

「友達からで言いなら、交際してもいいよ。でもあんた自分の恋人に刃を突きつけないと話もできないタイプなわけ？年上の癖にしっかりしてよね」

それを聞くとドルクレンは刃を捨て、トルハを自由にした。

そんなトルハの態度に気を良くしたトゥーロは穏やかに尋ねた。

「なら同族の王子に忠誠を尽くせないかね？俺はできれば殺人鬼などと呼ばれたくはない。お前達が王子に仕えてくれれば俺はお前を殺さずにすむのだ。お前はどうせ俺をシャリーに売る相談をしていたのだろう？なら王子に仕える。月120デイルスと契約金500デイルスにドワーフの召使4名と王子の遊び相手の地位を保証してやるう。俺はまだ正式に宰相を解任されていない。お前をミストリアの貴族に登用するだけなら簡単だ。どうだ？俺は金で解決するから10万デイルスだつて出すぞ」

トルハは呆れた表情でトゥーロを見た。

この外道な誘拐犯は自分の手下になりそうな人材を金に任せて雇っているのか。

まったく、こんな金に汚いドワーフなど始めて見た。

こんな奴が宰相とはミストリアも長くはないな。

心中そう思っていたのだが考え直した。

折角の出世の手蔓なのだ。

王女たる身分を回復する為の第一歩なのだ。

「それならまず、私達を奴隷から解放してくれませんか？ご主人様にその金を渡して自由にして下さい。それなら王子に忠誠を誓いましょう。そして宰相の命令で大赦令を出して債務奴隷だけでも解放してください。そうすれば王子の名声が高まり、シャリーも迂闊に王子に手が出せなくなるはずですよ」

之を聞いたトゥーロは意外な拾い物をしたと思った。

この娘は使える。

今から訓練すればシャリー亡き後のミストリアの親衛隊長になるかもしれない。

この娘が後20年早く生まれていたらペクダールは滅亡しなかったかもしれないとトウーロは思った。

トウーロは考えた末、ついに決断を下した。

「ドルクレン。宰相の名の下に大赦令を宣言する。名目は王子誕生だ。ルーシーの住民に触れて回れ」

トウーロは、トルハを手下にする為だけに、大赦令を国内に宣言した。

この頃になると、ペレトンも諦めたのか王子支持に回っている。

こうして以外にあっさりとトルハとペレトンは奴隷から開放され、市民となった。

然し人の欲はこうなると加速するものである。

トルハは宿屋の主人のセタを追い詰めるべく、狡猾で非道な作戦を考え出した。

取り合えず、2人の持ち物である官給品を整理し始めるとセタが戻ってきた。

「何をしている？」

セタが怒りを含んだ声を出した。

まあ、短気なセタの事である。

之でも我慢している心算なのだろう。

「大赦令が出ました」

トルハは覚悟を決めて事の成り行きを説明した。

「何だと？俺の奴隷を勝手に自由にされてたまるか」

所用から戻って来た宿屋の主人、セタ・ブレイメンは、これを聴くと怒り狂ってトルハを革帯で殴りつけた。

その額から鮮血が噴き出ている。

「大赦令を出したのはあの憎きトウーロです。私に文句を言われても困ります」

トルハが必死に言い訳したがセタは聴く耳を持たない。

強かに殴りつけられたトルハは戦術を変更した。

セタの目にはそう映っただけでトルハにとっては予定どりの行動

である。

セタを怒らすことだけが目的なのだ。

「殴りましたね」

トウー口は大赦令を聞きつけて集まってきた元家内奴隷8千人の目の前でセタの行為を確認した。

「殴って何が悪い。奴隷を躰けるのは飼い主の義務だ」

セタは状況によっては確実に元家内奴隷によるリンチ事件に発展しかねない立場に気が付いていない。

トルハを殴ると胸ぐらを掴んで地面に叩きつけた。

トルハは勝利を確信した目でセタを見た。

セタは之に気付くと、トルハに殴りかかろうとしてあっさりと足を掛けられ、倒されてしまう。

「お前は俺の奴隷なのだ。大赦令など俺は認めん。シャリー様に願い出て貴様を逮捕してやる」

セタはトルハに突きつけられた棒から迸る閃光に脅えながらもトルハを脅そうとした。

そのセタを冷たい目で見たトルハは静かに通告した。

「大赦令により私達は家内奴隷ではなくなりました。その私に暴力を振るうことは傷害事件になり、千デイルスの慰謝料を払う義務が生じます」

セタは之を聞くと逆上してトルハを殴りつける。

トルハはあっさりと之をかわした。

「その馬鹿が宰相だという証拠などないぞ」

セタはトルハが血みどろになって倒れるまで殴り続けた。

「どうだ思い知ったか、奴隷の癖に生意気な発言をしているんじゃないぞ」

トルハは法律に乗っ取ってセタを挑発して慰謝料としてセタの領地となっていたラーゼルン島を差し押さえる計画のだが、逆上したセタは全く気が付いていないようだ。

元奴隷達は拳ってセタの行為を告発するであろう。

8千人も証人がいればシャリーも無碍にする事は出来ないのだ。

「お、おいもういいだろう、止めてくれよ」

ドルクレンもトルハの狡猾な計画を知らなかったが取り合えず止めに入った。

自分の恋人が悪漢に殴りつけられているのを止めないわけには行かない。

「殴りたければ俺から殴れ。但し、俺はドルクレン・ファシスだ」
名将ドルクレンに楯突く奴もいないだろうと言ってみたが無駄だった。

セタは逆上する。

「それが如何した？邪魔するな。この腐れドワーフ」

セタは今度はドルクレンを革帯で殴り続けた。

セタがドルクレンを殴ることは、（市民権と軍籍は剥奪されていないので）単なる殺人未遂もとより障害事件となってしまう、セタは追放か処刑される運命なのだが逆上したセタは気付いていないようだ。

「俺に逆らうやつは全てこうなるのだ。お前ら。大逆罪で処刑されたくなければこの偽宰相を殴り殺せ」

セタは態度を表明していないカルトミールを盾にすると、そう宣言した。

セタはシャリー派だからセタに手を出すとシャリーが出てくるといふ脅し付である。

然し誰も動かなかった。

奴隷の逃亡を知り、捕まえに来た主人達ですら体制非なりを悟ってセタの資産を没収してそれを分けて奴隷を失う損害補填をし、事なきを得ようと思っただけだ。

それにどう見てもエルフの少女を虐待する暴虐な主の攻撃から少女を庇ってドワーフの若者が殴られ続けているように周囲には見える。

「止めないか。その少女はもはやお前の奴隷ではないのだぞ」

良識のある若者がセタを羽交い絞めにして無理矢理ドルクレンから

引き離した。

「お前にはこの約8千人の元奴隷が見えないのか？いつ暴動を起こしてお前の命と財産を根こそぎ略奪するかもしれないのだぞ。小娘2人などさっさと解放して、慰謝料を払って事なきを得ろ。大赦令が出た時点でお前の負けだ。宰相本人の命令はシャリーだって無視できない。お前が引かなければ体よく見捨てられるぞ。それでこの暴徒に身包みはがれても良いのか？」

別の若者が適切な指摘をした。

「その娘はお前が慰謝料を払う義務が生じるようにお前を挑発しているのだ。拒めばラーゼルン島を差し押さえてトルハがラーゼルン王になる筋書きなのだ。既にお前の行為は俺達も暴徒達も目撃している。言い逃れは出来ないだろう。お前はあの奴隷がお前の資産を横取りして王になるのを是認するつもりか？その娘はお前よりはるかに狡猾だぞ」

トルハはこれを聞くとセタに殴られた怒りも手伝って逆上した。

「人聞きの悪いことを言うな。私がこの計略を思いついたのはセタに殴られた後だ」

半分は嘘だが元奴隷達は信じ込んだ。之を聞いたセタは逆上する。

「この奴隷娘があ」

セタは若者の手を振り払い、ストレートパンチを繰り出した。

トルハはそれを左手で抑えると左手から繰り出す電撃の魔法でセタを黒焦げにする。

「貴様。奴隷の癖に主に齒向かうとは」

とたんに大人しくなったセタは泣き言を言い出した。

「この奴隷が俺を殺そうとするんだ。だっ誰か助けてくれ」

セタは従順無垢と信じていた奴隷の反抗に恐怖して気が動転しているらしい。

あの高圧的なセタの突然の狂奔に唾然としながらも正当性を主張した。

「これ、正当防衛だよな？殴りかかってきたのセタの方だし」

トルハは泣言を言うセタを蹴倒して長年の恨みを晴らすと、冷酷に宣言した。

「セタは私への傷害行為により、慰謝料を払う義務がある。本人に払う意思がないことは明白であるので資産を差し押さえて王子の直轄領とする。私個人には1500デイルスのみ、領地から支給される」

青ざめるセタにさらにトゥーロが補足の言葉を付け加えた。

「大赦令により奴隷から解放された諸君にはラーゼルの市民として保護される。4カ月間の猶予期間を得て納税の義務が発生する。その代わり最初の5ヶ月間の基本税は一晩農民の5倍とする。大体月金貨1枚が基本税で後は収入に応じて徴収する」
セタの顔がさらに青ざめる。

ようやくトルハの悪逆な計略に気付いた様だ。

もはや遅すぎるが・・・。

「ちよつと待て。俺の資産だぞ」

トルハの足元にすがり付き、情けを求めだしたセタにトルハは冷酷な面で言い渡す。

「もはやお前の物ではない。お前はこの国の貴族でもなくなった。

下郎が、宰相様の御前であるぞ。土下座して媚びるがいい。そうすれば犬の糞掃除の仕事を与えてやる。喜べ、さぞ嬉しかろう」

増長したトルハがこの3年間言いたくてたまらなかつた嫌味を言い出した。

「そつえば貴族だったお前は世俗の法律では裁かれないのだったよな？市民に対する犯罪は裁かれても貴族への犯罪は法で裁けない。そんなことはありえないとされるからだ」

トルハは勢い余ってセタの処刑を命じようとした。

それをドルクレンとペレトンが力づくで止める。

「もう良いじゃない。計画通り、ラーゼルンは私達の物になったのでしょう、トゥーロ？」

ペレトンがすぎる様な目でトゥーロを見た。

それをトルハがたしなめる。

「あいつを生かしておけば王子が受難を受けることは明白。ここで処刑してしまおう。そうすれば100年はミストリアは安寧のときを過ごすであろう。然し彼を逃がせば多くの市民が殺されますぞ」
何故か偉そうな口調でトルハが宣言した。

「たつたしけてくれえ」

セタが見苦しく命乞いを始めた。

トルハは得意の雷撃の呪文でセタを狙う。

「そうだ。私を庇ってくれて有難う。殺人鬼になっても私は貴方に好意は持っているよ」

変な言い回しだが自分を対称に話しているらしい。

遺言のようにも聞こえた。

「止める。どんな理由があっても強姦と殺人だけはやってはいけな
い」

ドワーフにしては俊足の100m8.28秒を叩き出し、トルハ引き寄せるようにして抱き寄せ、腕を掴み雷撃を消した。

ドルクレンは雷撃をまともに手に受け、大火傷をする。

「あんたは人殺しなどしないでいい。それが出来るのは裁判所だけだ。逮捕状の出でない者を処刑すれば罪に問われなくとも確実に仇討ちされるぞ。そんなことが社会通念上許されるわけが無いだろう。セタを殺せばセタの家族があんたを殺す。そしてセタ派と王子派に分かれての内戦になる。多くの民が飢えと略奪に苦しめられるぞ。そしてあんたのような立場のものが激増するのだ。それでも良いのか？」

普段からイエスマンを気取るドルクレンの台詞とは思えないとトゥーロは思った。あいつは本気でトルハに一目惚れしたというのか？
トゥーロは場違いな感慨にふけていたが冷静になるとトルハを嗜めた。

「ドルクレンの言うとうりだ。それにセタを殺したら王子が天下を

取れん。綺麗事だけでは政治は出来ん。セタを生かしておいて利用する方法を模索するべきなのだ」

ドルクレンも発言する。

「そうだ。早速王子派を連れて赴任したいものだが王子を連れにルシーに戻ると俺は確実に処刑されてしまう。どうしたものか」

トルハが2人の説得によつて態度を軟化させたその油断を狙つてセタは渾身の力を振り絞つてトウーロに殴りかかろうとした。

「死ねえ。この偽宰相があ」

「セタ。お前にはもう少し役に立つてもらうぞ」

トウーロはセタの一撃を受け止めると従僕2人に取り押さえさせた。

「放せ偽宰相」

トウーロは構わずセタを縛り上げさせる。

そして取り合えず宿屋の納屋に放り込んでおいた。

シャリーの落日

(2) セタがトルハの謀略により失脚した頃、アイリスではシャリーが、トゥーロの出した大赦令を取り消す命令を出すため、トゥーロの解任決議案を貴族議会に提出し、新たな宰相としてジョン・ラッセルと名付けられた王子を担ぎ出した。勿論傀儡政権であるジョンを人質にしてジョン派を封じ込める稚拙な作戦である。

それにもう少したてば、シャリーにも娘が生まれる。ジョンを宰相に封じておけば彼は王にはなれない。

そう考えたシャリーは議会の即決により、ジョンを担ぎ上げたのだ。シャリーの苦肉の策である。

知謀の宰相トゥーロを自らの愚策により野に放ち、敵に回してしまったシャリーには取れる手段はそう多くなかった。

大赦令のせいで各地で起きる奴隷達の反抗や奴隷主人による傷害事件も、シャリーにはもはや止める事も出来ない。

下手に止めれば傷害教唆の罪で500デイルスの慰謝料が国庫から消える事は明白だからだ。最初は愚かにも暴動を鎮圧したのである。そしたらトルハの口添えで知恵をつけた6万人の解放奴隷から損害賠償を請求され、即決裁判で国庫の金を差し押さえられてしまった。解放奴隷は、階級は市民だから暴動鎮圧は人権侵害となるのだ。

それ以来、なるに任せている。下手に手を出せば今度はシャリーの私領が差し押さえられてしまうからだ。

こうしてミストリアの領地の半分は解放奴隷によって合法的に接收されてしまった。

因みに領土の名義はシャリーの第一子となりえる少女に捧げられている。

ジョンの叔母で宮廷占者の、リュギア・レナンスの占いにより、

女の子であるのは分かっていた。

誕生すればジョンについて、王位継承権2位となるはずである。

事前に行われた国民投票により、ミューファ・レナンス姫と名付けられたミストリアのアイドル的な存在だ。

ミューファの関連商品は、税込だけで3万デイルス弱となる。

ミューファの乳母に内定している者が、彼女の資産を管理しており、着実に資産を増やしていた。

占者が味方にいるので、賭けの類は大勝を続け、ミューファ軍は貴族有志で構成された4千人のエルフト、3千頭の馬を金に任せて所持していた。

名義は議会であるので、シャリーは直接命令を下せない。

取り敢えずは議場の警護を担当していた。

ちなみにリユギアは叔母といっても4歳なので、周囲からはレナという愛称で呼ばれていた。

もう一人いる叔母はラーゼルン西方の大陸ミレイド公国の太守、ミレイアである。こちらは12歳であった。

国名は音楽を奨励する国なので音符にちなんで命名されている。

当然公旗は五線譜であった。

ミレイア本人の執筆した小説の収入だけで680万デイルスの純益を導き出す芸術の都であった。

ミストリアの伝説の芸術家アリスはミレイドの出身であった。

そしてミクリュリア大草原のバルランと呼ばれる玉蜀黍はミストリアの食料自給率の98%を占めていたのだ。

万が一ミレイアが反乱を起こしたらミストリアの国民は全員餓えて死ぬであろう。

それ故にミレイドに対して強い事がいえなくなり、かの国は中立国の体をなしていた。

軍隊は騎馬隊が5千騎。歩兵が3万、海軍が500トン級戦艦600隻という桁外れの人数である。

水兵は5万人ほどだ。

この軍事力を背景にして、ゴブリンやトロールを自国から追い払い、名声をはくしていた。

シャリーは勿論ミレイレアに、トウーロ討伐を命令したのである。しかしミラル・カップンを処刑して以来ジョン派はトル八とか言う奴隷の謀略により詐取されたラーゼルン島に逃げ込んでしまい、今や人口2万人。

名将ドルクレンの指揮下にある軍隊は解放奴隷の義勇兵8百人。農民4千人の大国で、戦争でもしない限り、とても落とせそうになり。

しかも2万人も労働力を失ったルーシーとミレイドの経済的打撃は凄まじく、とても他の領地へ侵攻する余裕はなかった。

ミレイレアは2万人の歩兵を募兵しただけ様子を見ることにして、自らはルーシーに向かった。

シャリーはその頃、側にいた召使を殴り倒しながら喚いていた。反逆者トウーロの所在が分からぬことが、シャリーを情緒不安定にしているらしい。

殴られた召使はその後ジョン派に寝返ったらしいが、ついに出世することはなかった。

「トウーロめ。奴はまだジョンを奪回するべくルーシーにて機会を伺っているはずだ。探し出して見せしめに晒し首にしろ」

こう、強がってみたが今のシャリーには兵を養うすべもない。

すでに殆ど全ての兵士はシャリーに勝ち目はないと見るやジョン派となつてシャリーの命令を拒否したのだ。

兵士の言い分はこうである。

「労働の報酬が支払われる見込みがない以上契約は打ち切られたという事になる。貴方の為に働く言われはない。食料は食わせてもらっているし、正式に解任されていないから通常の雑務はこなしてやるが」

こうあからさまに叛意を表明されても止める事も正式に解任する事もできなかった。

そんな事をすればミストリアは内部崩壊してしまう。
いや既に崩壊しかかっていた。

健在なのはミューファ軍のみである。

しかしそんな状況でも、シャリーにはいいアイデアも浮かばない。
シャリーは仕方なく謝礼を出してアイデアを募集する事にした。

「あのドワーフを退治する名案はないか？金貨3枚の賞金を出すぞ」
このあたりの庶民との金銭感覚の違いも人心がシャリーから離れる
遠因となっていたのだが本人は本気で気が付いていないらしい。

今時金貨3枚など、その日の宿代にもならないのにだ。（1デイル
ス150円の設定）

大抵のミストリア人は喜ぶどころか馬鹿にされていると思うのでは
ないか？

ドルクレンの命令で、あえて城に残り、シャリー派の様子を偵察し
ていたドワーフの曹長カインは忠告しようと思っただけ。

ミストリアに滅亡されるのもそれはそれで困るからだ。
然しシャリーは元々ドワーフが嫌いであった。

直接の原因は宝石として珍重されているメデューサ・ハーフの瞳狩
りの被害に自分の養子である秘蔵っ子のミュイリーグ・シャムシラ
ンがあい、片目を奪われたせいらしい。

逆上したシャリーはペクダール大帝国の全てのドワーフを皆殺しに
して祝杯を挙げた。

この戦いがペレトンとトルハを奴隷に落とした、瞳狩りの乱である。
勿論この戦いがきっかけで、シャリーとトゥーロは仲が悪くなった
のだ。

ドワーフに組したメデューサ・エルフ（髪は緑髪）も捕虜にされ、
瞳狩りの被害にあっているのだが、不覚にもシャリーは知らなかつ
た様だ。

しかもこの戦いにトゥーロとドルクレンは参加しているが虐殺命令
は出していない。

それゆえ、ドワーフの俺が忠告しても逆効果である。

ミラル・カツペンの二の舞いは御免こうむる。

カインは落日のミストリアと心中する気は毛頭なかった。

シャリーは瞳狩りを行った時は自分の養女に危害が加わると思わなかつたらしいとカインは誤解していた。

「おい。民衆は強欲だ。最低でも千デイルスは出してやった方が良
いぞ。もつともボンビーなお前には3デイルスしか出せないか？
ぎ
やははは」

カインは、嘲り尽くした態度で大笑いした。

もはやこの国の殆どの者がシャリーを王とは認めていない。

トゥーロの出した大赦令のせいでジョン生誕2日にして失脚寸前の
幽霊王と化したシャリーは万策尽きて総選挙に打って出る事にした。
この国の王位と重要議題は、形骸化しているとはいえ、議会の決議
によって決められている。

選挙に打って出ればまだ勝ち目があるとシャリーは信じているのだ。
厄介な事に宰相はシャリーの独断では、解任できない。

やれば国民の反発は凄まじく、今のシャリーでは抑えられないであ
らう。

「解散総選挙を宣言するか？もしそれでジョン派が圧勝してしまっ
たら」

決断はしても不安は尽きないらしい。

そしてその不安心理に漬け込む家臣がいるのだ。

「解任されていない宰相を殺せば慰謝料を請求され、セタの二の舞
いになりますぞ。それでも良いのか？」

隠れジョン派の公爵、パツテリンがシャリーに叛意を悟られぬよう
にトゥーロを援護する。

この表現ならあの傲慢なシャリーもトゥーロに対する追撃の手を緩
めざるを得ないだろう。

然し予想に反してシャリーは強行であった。

「反逆者を放置せよというのか？」

シャリーは冷たい声を出した。部下は慌ててシャリーに媚びる。

「総選挙はどうでしょう？」

シャリーの質問は無視してパツテリンが提案した。

「この機会に議会のジョン派を一掃してしまうのです。そうすればトウーロ討伐の命令が堂々と出せ、あの薄汚いドワーフは捕まるでしょう。国民は大赦令に激怒しているはずですよ。必ず勝てます」
無責任にシャリーを煽った。

シャリーはおそらく気が付いていない筈だ。

大赦令により、国民の半分に当たる600万人の奴隷に選挙権が生まれているという事実だ。元奴隷は結局、かつての雇い主に正規労働者の4分の1の低賃金で即日再雇用されることになったが、それでも当然選挙権は残るのである。

シャリーがこれに気付かず、愚かにも総選挙をやってくればジョン派が貴族議会の第一党を占めるのは確実だ。

「そうだな。天は正義の味方だ」

叛徒の思惑には気付かず、シャリーは決断した。

シャリーは確実に謀略の好きなジョン派の陰謀に巻き込まれつつあった。

堅物なシャリーはトルハの手の中で弄ばれている。

「わらわは之より解散総選挙を告示する。出馬を希望する奴隷以外の階級は王室書記官のマイケルも申し出ると良い」

この言葉でシャリーの権力は完全に崩壊した。

総選挙はジョン生誕1月と決まったがシャリーはセタ・ブレイメンを筆頭に総議席の半分に当たる50人を擁立できただけであった。セタはトウーロの手に落ちているのでおそらく偽者であろうが。

それに比べてジョン派は解放奴隷の票を見込んだ元奴隷のトルハ、ペレトンを旗印に100人が立候補を申し出てマイケルに承認された。

その殆どが、トルハに煽られた解放奴隷である。

不覚にも、これを予期していなかったシャリーは、案の定烈火のごとく怒り狂い、マイケルを詰問した。

「お前は何故奴隷などに被選挙権を認めるのだ。私の命令が理解出来ないともいうのか？」之に対してマイケルは空とぼけて言った。マイケルもジョン派である。

金の払えない王に付く馬鹿な奴は世界中探したって一握りだけだろう。

「そうは言ってもこの国の何処に奴隷がいるのです？市民が立候補を表明しただけなのに拒否するわけには行きません」

とぼけてマイケルが言った。

シャリーの脳裏に不安がよぎる。

こいつもトウーロの手先なのか？

「あの腐れドワーフを宰相にしたあたりから、あんなの負けは決まっていたんだ」

これにシャリーが噛み付く。

「理由はどうあれお前の行動は私を裏切っているのだぞ？」

之に対してマイケルも言い返した。

「忠誠を要求するなら給料払ってください。国と部下は貴方の私有物ではない」

「この裏切り者」

シャリーは恫喝してマイケルに飛び掛った。

マイケルはあっさりと蹴倒すと言いつつ。

「力で男にかなうと思うのか？契約不履行の罪で情欲に餓えた男共のいる牢獄に放り込まれたくなければ大人しくしている」

シャリーの顔が屈辱に歪んだ。

給料を払えないのは事実だが、王たる身で何故このような屈辱的な言われ方をされねばならない？

「貴様の官職を剥ぎ、追放する。首だ」

当然怒りに任せてクビを言い渡したシャリーにマイケルが言った。

「クビにするなら退職金。払えないだろ？なら貧乏人の癖に偉そうなこと抜かしているんじゃないか」

こうなると兵士のほうが立場は上だ。

金がなければ首に出来ぬ考え方は、資本主義社会では主流である。よって金が滞ると途端に、膨大な余剰社員を抱えて倒産するまで何も出来なくなるので、すぐに首を切れる派遣労働者が注目を浴びる事となった。

しかしそれも人権問題で廃止の方向に向かったら、資本家は如何すれば良いと言うのだ？

派遣の惨状は分かるが、もう少し資本家の立場を考慮せねば共倒れになるだけだろう。

それはともかく、この時差別的発言で慰謝料を請求するチャンスが2度訪れたが、既に逆上しているシャリーは気付いていなかった。

「なに。奴隷などに投票する者などいるものか」

シャリーはこの期に及んで、トウーロ一党を甘く見ていた。

こうなつては早々と辞職するしかないだろうが・・・。

そして四面楚歌の状況でも行われた総選挙は予想どおり、奴隷票の取り込みに案の定失敗したシャリーは、98議席をジョン派に奪われ、敗北した。

トウーロは騒乱の一応の責任を取って辞任。

シャリー派の顔を立てて温厚堅実の美少女ミレイレアが議会の全会一致で宰相に就任した。

シャリーは最後の切り札としてこのミレイレアを使って形勢の立て直しを図る心算なのだ。

早速ミレイレアはシャリーに形勢逆転の策を講じ始めた。

「まずはジョン派に抵抗する為の軍資金の1090万デイルスを2割の金利でお貸しいたしましょう。之で兵士の給料を払い、姉上への忠誠心を呼び戻すのです。兵士さえ味方につければあからさまに姉上を解任する事はできません。そうして時間を稼ぎ、トウーロ派の分裂するのを待つかふただび総選挙に打って出るかすればよいでしょう。」

今は着実に力の回復を待ち、持久戦に持ち込むべきです。兵が権力です。兵士さえ押さえれば後はどうともなります」

ミレイレアは矢継ぎ早に改革案を提案した。
シャリーもこの案なら依存はない。

「それと私領から臨時税を取り立て、財政基盤を強化して国庫に蓄え、領地間の交易を再会して失業者を救済して陛下の人徳を世に知らしめればいならずしてトゥーロを打ち破る事ができるでしょう」
之は的確な戦略である。

こうすれば確実にトゥーロは自滅していく。
ただしトゥーロが何もしなければであるが。

「大変です。貴族議員のトルハがシャリー様の解任決議案を提出いたしました。即日投票で可決される見込みです」

シャリーの公務室に駆け込んだ、シャリーに最後まで忠誠を尽くしていた部下の一人が報告をしたのだ。

やはりトゥーロはシャリーに反撃の時を与えるほど甘くないか。
というよりあればトルハの策だな。

シャリーを解任する心算なら私を宰相にせずトゥーロが留任しておいて、解任してしまえばすむだろう。

どう言う心算なのだ？

ミレイレアは最後の手段を進言する。

「姉上。こうなってはご病気を理由に解任決議を延期させるしかありません。トゥーロ派とトルハは意見の違いがあるようです。いま少し待てば必ずジョン派は分裂します。その間隙を縫って再起を図りましょう」

「病気だと？何日引き伸ばせる」

シャリーは尋ねた。

「王抜きの強行採決に走るでしょうな」

諦めたようにミレイレアが言った。

所詮気休めの発言に過ぎないのだ。

シャリーが王座を捨てる気があるなら大政奉還と言う手もあるのだが。

「要するに私が解任されるのは防ぎようがないと言うのだな？」

ミレイレアが答える。

「後3日あれば情勢も変わったのですが。」ミレイレアは残念そうに呟いた。

「シャリー様。ミレイドにいらっしやいませえんか？国賓待遇でお世話させていただきます」ミレイレアはシャリーの心情を察して亡命を唆した。

「いや良い。流石に部下の世話になるわけにもいくまい」

自分の妹まで信じられなくなっているらしいシャリーは慌ててその申し出を却下した。

そんな時、最後まで忠誠を貫いているフリをしたシャリーの手下が何事か呟いた。

要約するところである。

「シャリー様。只今貴方の解任決議案が可決いたしました。ルーシーとミストリアの王位はジョン様に禅譲されることとなります。3日間の猶予期間を得てシャリーには退位していただく」

ジョン派の最長老マーキュリー・ストラップ伯爵がシャリーへの嫌がらせに報告にやって来たのだ。

シャリーはマーキュリーを見ると露骨に嫌な顔をするが上機嫌の彼は気付かない。

「分かった」

シャリーは意外にあっさりと受諾した。

受諾しなければジョン派の兵士に軟禁されるだけだ。

ミレイレアは憤怒の表情でマーキュリーに宣告した。

「覚えておけ。切り札はこっちが握っているのだ。私はミレイドを領有しているのだぞ。ミレイドなしでミストリアがやっていけるか見物だな」

それはミレイドからのバルランの輸出を停止する宣言であった。彼女は本気で怒っている。「姉上。私はミレイドに帰ります。貴方を裏切ったミストリアに壮烈な復讐をして見せましょう」

ミレイレアは後難を避け、さっさと帰ってしまった。

そんな時トルハと数名の部下に脅しつけられながらセタがシャリーに面会を求めてきた。

「王様。無官のセタ・ブレイメンが無礼にも謁見を願っておりますが叩き出しましょうか？」シャリー派のグランパス・エーデルホツへ公爵が、こちらはあからさまにジョン派を憎んでいるふりをしていた。

エルフである彼は、何故かミュイリーグの同族のペクダール人を虐待する、シャリーを見限り、隠れジョン派の一人となっている。

一応シャリーの最も信頼する側近だ。

役職は徴税司令官である。

この国では、宰相に並ぶ重職だ。

「王。セタが余計な事をするから大赦令への同情が強まり、ややこしい事態を招いているのです。この上はセタを処刑して見せしめにし、トゥーロ派の攻撃対象を消去するのがよろしいでしょう」

この論理ならシャリーは恐らくはセタを庇うであろう。

そうすれば大赦令を出したトゥーロの名声が高まるだけである。

もし、諫言を受け入れてセタを処刑してしまったらあの狡猾なトルハが今度はセタを不当に処刑したシャリーを断罪するだけだ。

「今ならまだ間に合います。セタを処刑するべきです。そしてあのトルハとか言う奴隷は官職を餌に宮廷に誘き出し、忙殺するのがよろしいでしょう」

之ほど傍目には主君を諫める忠臣に見える謀略をパツテリンは知らなかった。

シャリーの眉毛がピクリと動いた。

「セタは我が忠臣。見捨てるわけにはいかん。奴隷などに策略とはいえ官職を与えるなどとよくそのような恥さらしな忠言を出来るものだな。お前には謹慎を命じる。150年間領地から出るなよ」

「王。トルハを侮ってはなりませんぞ」

あくまで忠義者の芝居を続けるグランパスにシャリーはうんざりした様だ。

「資産の流入は禁じる。全て焼き払え」

シャリーはこの命令により、グランパスを飢え死にさせるつもりらしかつたが彼は命令を逆手に取った。

徴税官を解任されていない以上領地で仕事をせねばならない。そのため書類は流入を禁じられているので命令どおり焼かねばならない。

そう曲解したグランパスはそれを実行した後領地から使者を名乗り出たトルハを立ててその旨を通告した。

この時捕虜のセタを連れて来ている。

「何？グランパスが裏切ったと？」

荘厳華麗な執務室で、シャリーは命令どおり行動しただけのグランパスを裏切り者と罵った。謁見を許されたセタも同席している。

セタは当然トルハを名指して言った。

「あの奴隷娘の陰謀に決まっています。あの奴隷め。宿屋の給仕娘に取り立ててやった恩をあだで返しやがって」

セタは背後にトゥーロの従僕が控えているのも忘れて怒号した。

勿論セタは、シャリー派の部下が抑えている筈のジョン奪回を企てるトルハの謀略に利用されているのだ。

トゥーロ達はその後、グランパスの領地で、反乱の意志を示した彼と意気投合してこの策を練ったらしい。

やたら逆上しやすいセタが同席している事はトルハの計画に好都合であった。

事情を知らないシャリー派の部下達はそう思った。

然し口には出さない。

シャリーの負けは決まっているからだ。

「人聞きの悪い。命令を出したのはシャリー様ではありませんか。

我が主はシャリー様の忠臣でイエスマンであります。ミラル・カッペンの二の舞いにはなりたくありませんからね」

そう言うトルハは金縛りの呪文でシャリーを押さえつけ、従僕も飛び掛ってシャリーをあっさりと捕虜にしてしまった。

「セタ。お前も私を裏切ったのか？」

怒り狂うシャリーに、この状況ではどう抗弁しても助からないと諦めたセタは隙を見ると、出入口口に向かって逃げ出した。敵も味方も、もはやセタなどには構っていない。

トルハは味方の兵を8名側に置くと、居並ぶ家臣に厳命した。

「シャリーの命が惜しければ宝物庫の財宝全てとこの国の解放奴隷598万人とついでにジョン様をここへ連れてくるのだ。それさえもらえれば大人しくラーゼルン島に籠り、5年間は一步も出ない。交易船以外は」

シャリーは悲鳴を上げた。

「それではわが国の産業は崩壊してしまう」

シャリーは己の命とミストリアの将来を天秤にかけた。

答えは決まっている。

出来るだけ有利な条件で交渉するのだ。

「奴隷10人と金貨6枚でどうだ？奴隷のお前などが見た事もない大金だろうか？」

シャリーは下男くらいしか話相手にした事がなかったのだろう。

奴隷に与えるなら最高の榮譽なのだろうが。

「もう少し現実的な身代金を提示してくれない？もつともこちらの条件を飲まないのならクレスア島を追加するわ。それとも腕の一本も叩き落さないと自分の立場が認識できない？」トルハは哀れむ様に諭した。

「わっ分かった。金貨千枚と奴隷5千人。いや、1万人出す」

之だけ出せばさぞ満足だろうという思い上がった態度が癪に障った。

「ジョン様は？之が一番重要なんだけど？」

シャリーは悩んだ。

ジョンさえ渡せば大人しく引き上げてくれるだろうか。

「ジョンのみで妥協してくれないか？大体598万人もどうやって養う心算なのだ？奴隷をラーゼルンに運ぶ船だって1万隻は要るのだぞ」

トルハはシャリーを蹴倒すと冷酷に宣言する。

「元国王殿。このルーシーはジョン様の物だ。ジョン王の命令によりお前の領地は没収する。ジョン様を渡せぬなら反逆罪で塔に幽閉する」

シャリーは最後の抵抗を試みた。

「私が退位すればミレイドからの食料輸入が途絶えるぞ。それでもいいのか？」

シャリーはついにミレイアと計って得た兵糧作戦を切り出した。然しトルハは鼻で笑うと言いつつ切った。

「こちらの分裂を期待しているなら無駄な事。その前に貴方の権力は根こそぎ奪うからな。仲間割れは政権を倒した後に起こるもの。遊びは終わりだ。兵士共。ジョン王の命令である。シャリーを塔に幽閉しろ。そしてジョン王を連れて来い」

兵士達は次々にジョンに忠誠を近い、シャリーをルーシーの中央に聳える東の塔に引つ張っていった。

「兵士諸君。君達は之よりジョン王の指揮下に入る。給料は必ず出すゆえ王に従ってほしい。取りあえずの仕事は食料危機が起こる前に臨時税を取り立て、エテイルの穀倉地帯から食糧を買う事だ。手の空いている子供や女性には食料調達の命令を出す。荒野に出て食料と金貨を集め、国庫負担を少しでも軽くしろ。それから位の高い僧侶に命じて食料を降らしてもらおう」

トルハはその日のうちに臨時税（一家族当たり）5デイルスを徴収して国庫に積み上げた。

民衆はぶちぶち文句を言ったが幸いにもそれ以上の行為には及ばなかった。

播種量の戦い

(3) 「それでこれからどうするのだね？」

小手先の謀略を駆使してミストリアの政権を奪取したトゥーロとトルハは途方にくれていた。とにかく食料がないのだ。備蓄量は1200万人が2ヶ月食べていける程度である。

3ヶ月も経てばトレニアと(豚)鶏以外の食料はあらかた食べつくされ、民衆の8割には荒野に出して食料調達に奔走させる事になりそうだ。

然しその日の食料しか集められない状況だ。

ジョン付きの女官に出世していたペレトンが、旧ペクダールのメデューサ・エルフから雇った8名の部下に、当面の食糧確保の疑似餌にする為に、薪用の倒木を掻き集めさせている。

倒木に巣くう虫を使って、大魚のレトニアツスを釣上げ、ついでに冬用の薪として、隣国のパタレーンに売って食料に換えるのだ。

この仕事をドルクレンが率先して行っている。

民衆から詐取した600万デイルスはエティルで食料の売買に使い、840万食に化けたが、之では全国民の一日分にも満たなかった。

このままでは、春のシレーリム麦の収穫の頃には大飢饉が訪れる事間違えなしである。

どうやって民衆の反発を抑え、種蒔きをする事が当面の課題であった。

然もこのままでは飢饉になるのは明白であるから農民はあからさまにやる気を失っている。

ちなみに現在は11月だ。

「農地を増やすしかないよ。荒野の兵を集めて屯田兵にするのはどう？」

驚異的な成長の速さで生誕3ヶ月で口を聞ける様になったジョンにトルハが指示を仰いだ。

ジョンはシレーリム麦といろんな土を混ぜ合わせながら本人は農業の研究でもしているつもりらしい。

恐ろしく早熟な子供であった。

一般的なエルフは生後1年で人間の4歳位である。

エルフが成長が遅いのは俗説だ。

エルフは植物の精霊がモデルだから、成長は早い。

「良いよ」

ジョンはあっさりと許可を出した。

意味が分かっていて許可を出しているなら天才である。

「出来るだけ上質な土を調達してくれないか？僕はシレーリムの播種を多くする研究をする。それとライトの魔法を使えるエルフを税収を上げて買収するんだ」

トルハは頭を抱えた。

やはりこの人は子供だ。

まあ仕方ないが。

トルハは何を期待しているのか理不尽な悔りをジョンに向けた。

期待しているのは勿論王者としての風格であろうが。

いくらジョンが早熟でもそれは過度の期待であろう。

トルハは仕方なく言った。

「ミストリアには裂ける兵力はありません。ご自分で何とかしてください。みな食べるだけで精一杯なのです」

突然こんな事を言い出したジョンにトルハは慌てた。

播種量の向上が、国策にとっていかに重要か、謀将トルハにもトウ

ー口にも分かっていないらしい。

ペレトンの要請に応じて、補給の仕事を担当していたドルクレンだけはこれを支持した。

他の家臣は流石にこの要求は拒んだ。

子どもの土いじりに構っている暇はないとあからさまに思っている。こういう反応の方が普通だろう。

「王。まずは研究成果を出して我々に認めさせるのが先決ですぞ。」

ま、税収は貴方のものでないから60デイルスの給料のみは保証しますが」

ジョンの物となっているラーゼルン島以外は彼の物ではない。領地の税収も保護者であるトゥーロの管理下であった。トゥーロはジョンを見くびっている。

100歳以上の老人であるトゥーロにとってはジョンなど傀儡に過ぎないと、心底思っているようだ。

ジョン派は、ここで争うのも愚作と思い、折れることにした様だ。「分かった。それでエルフを2人雇ってくれ。それなら良いだろう？」

ジョンは不条理な怒りをトゥーロに向けた。

「では王のうまみが全然ないではないか。」

「まあ5年間は我慢してください。金は国家の再建費用に全て使いますが土地はいつかお返しする」

之を聞いたジョンは、トゥーロに対して反抗する決意をした。

トゥーロに隠れて新しく雇ったエルフをミストリアの大洞窟リーフの星門の地下深くに送り込み、金を拾い集めさせ始めたのだ。

かつて2頭のドラゴンに守られていた、この門周辺には財宝狙いの愚かな冒険者の落とした宝石や金貨が山のように眠っている。

モンスターや、魔族も多いが、機転の聞く食い詰めた盗賊なら、盗み出す事は可能だ。

ジョンは、ペレトンの部下と合わせて、10人の兵を星門へ送り込み、魔族を追い払い、莫大な食料と金を半分だけ召し上げ、王の権限で星門の居住権を認めてやり、数十名のゴブリンを配下に収めた。ついでに拾った金を元手に、ゴブリンや近隣の夜盗をかき集め、食用の軍馬を買い漁り、次第に強力な勢力になっていき、たった2ヶ月で4千人の大兵力を有するまでになったのだ。

「この兵で北方の島、クレスアを制圧する」

この快挙で、調子に乗ったジョンは北部の島、クレスア攻略の兵を準備をさせる。

夜盗の幹部クラスで構成された60人の親衛隊に命じて、船を用意させると、

総兵力を動員してクレシア島に上陸。

何故かこの時、10万人の兵力を有するクレシアは、抵抗せずにジョンに降伏した。

之により、180万人の民を抑えてしまう。

この快挙によりジョンに帰属する者が急増。

弱小の豪族達が、貢物を送ってジョンに忠誠を誓った。

この時かき集めた夜盗出身の屯田兵76万人。

幼子が51万人の383万人が新たにジョンの私兵となった。

そして夜盗の海戦部門が所持していた500トン級戦艦ラミアスをジョンは接收して、42隻を保有している。

76万人の夜盗は帰農させ、食料自給率のアップに努めた。

そしてクレシアが貯め込んでいた金貨6億枚と外交に使おうと思つて育てていたららしい煙草を入手する。

因みにクレシアは、女子教育制度を（学問）いち早く取り入れた先進的な領地で、スクール水着やブルマーの開発では世界でもトップクラスである。

というより女子教育制度を推進する国は世界でここだけであった。女子が体育をやると必ずナマ足だの腹チラだの着替えを覗かれたのだと言つたいわゆるセクハラ問題が浮上するものだが、2年にも及ぶ女子本人との話し合いの結果セクハラ問題は黙殺する事に決まつたらしい。

いちいちセクハラをとがめだてしてはきりが無いし、ある程度は仕方ないと思つたのだ。それに人心が豊かな国はセクハラを気にしない傾向にある。

ようするに国を繁栄させることがセクハラ問題に対する答えなのだ。

「まさかこうもあっさりと降伏するとは思わなかった」

侵略戦争を仕掛けたジョン本人が啞然とするほどクレシアは早々と降伏したのだ。

「貴方を倒して何が如何なる？私達が貴方の軍門に下ればそれですむ事だろう？何故に抵抗する必要があるのだ？」

クレシア太守はそう言つと、あっさりと姿を消し、二度とクレシアに戻らなかつた。

「君達は魔法が使えるのか？」

残された者達に唐突にジョンが質問した。

兵士は多少前途に不安を感じたが、明るく振舞っている。

クレシアの元兵士でジョンの配下に組み込まれた女性のみの騎士団に所属する将軍（最高司令官）モリアはこう答えた。

「はい使えます。並の男よりははるかに上出来でしょうね。私だけではなく騎士団10万人は全て火球位なら使えます。貴軍に降伏したのはジョン王に従うべきとの占者の占いがあつたからです。然しジョン王の兵は躡が行き届いておりますね。5人位は貴軍の毒牙に掛かる女の子がでると覚悟していたのですが」

モリアはそう言つてジョンを煽つた。

それが為政者の言う台詞かとジョンは思った。

然し国が1つ入手できたのだ。

細かいことは気にしないことにしよう。

「君達は屯田兵にはなりたくないかね？トルハさんも同じことをやっているが僕も真似している。僕の資産はトゥーロに押さえられているから自分で領地を切り開く。君達の住んでいた土地を僕の私領として譲つてはくれんか？毎日の食べ物と水は保障しよう」

たどたどしい口調でジョンが言い切つた。

クレシア出身の兵士は不安げにジョンを見る。

クレシア王ラーバンの時代は一日3食が保証されていた。

「本当に？今までのように5日に一度と言うのは嫌だぞ」

ジョンの手下の言つたこの台詞を聞いたモリアは痛烈な後悔にさい悩まされた。

降伏しなければ良かった・・・。

この国には我等を食わずだけの食料が無いのか。

然しもう降伏してしまった以上今更反乱を起こすわけにもいくまい。そんな不穏な気配を察したジョンがあわてて言った。

「分かった。これからは1日一食を保証する」

かなり不満が（クレスア兵の間に）残ったが取り合えずジョンに従う事にしたらしい。

既に48日分の食料が新鋭ジョン歩兵団の懐に収まっていた。

金貨も6万デイルス蓄えられている。

トゥーロがすっかり管理を怠っていたセタの宿屋からの収入である。クレスアから詐取した金貨は、食料の確保に使われた。

この時、気紛れを起こしたジョンは何を思ったのか、食糧危機の余波で倒産寸前のミストリアの商社の株を根こそぎ買占め、商社の部下38名を傘下に収めたのだ。

この国の商業形態は株式と個人商社である。

領主もたいがい株を買って占めた者がるのだ。

それはともかく、ジョンは商社を買収すると部下を350人も募集して借財に勤め、4千万デイルスを掻き集めた。

「これだけ借財が出来るのに何故株を手放したんだ？」

ドルクレンはそんな感想を抱いた。

ジョン王とこの商社の社長では、信用が違いすぎるからか？

「この商社の商品は馬車の生産らしい。一台300デイルス位のよ
うだ」

馬は別でこの値段だ。

ペレトンは、意外な商才を発揮して、ミストリアの金持ちに馬車を売りつけ、50万デイルスをジョンの個人資産に積み上げた。

借財は国庫の武器と引き換えに清算した。

どれだけ借りられるか知りたかっただけで、借財に頼る気は最初からない。

しかし大勢の国民を養うためには、金は必要だ。

食料自給率さえ（クレスアを含めて12%になった）好転すれば3食食べられる日がまた来るだろうが今は金に頼るしかない。

蓄えの武器は、王の個人資産なので、ペレトンが無理やりに押えられないが、これがジョンの権力増大に大いに貢献した。

この収入で、成り行きに任せて、800トン級帆船50隻を船会社に注文してみた。

取り敢えず、餓死者の出る心配はなさそうだから、軍事力の増大に力を注いでいる。

木造船だが、倒木を中心に造られているらしく、エルフも文句を言わなかった。

食料確保と景気振興策は、同時にやらねば意味がない。

国が民間企業の株や品物を買う機会は利用すべきなのである。

景気がよくなれば、ミレイド以外の他国から勝手に食糧を輸入出来るから国が面倒を見る必要もなくなるし……。

このジョンの計略により、食糧危機にもかかわらず、ミストリアの人口は鰻登りに増え続けた。

そしてエルフ達は家族をミストリアに呼び寄せさせ、3千人となったのだ。

ジョンは、このエルフに交代でライトの呪文をかけさせ、シレーリム麦150億本の促成栽培に乗り出したのだ。

光なら太陽光でなくても、光合成は可能らしいし、ちゃんと育つのである。

土は兵士達の出す人糞であった。

最初は気まぐれにやってみただけなのだが、之が以外に旨くいき、一月後には播種量4粒の麦が8192本も出たのだ。

「何でもやってみるものですね……」

ペレトンは感嘆の声を上げた。

「見たかね？これが僕の実力だよ」

自慢げにジョンは答えた。

ジョンは之をさらに高名な僧侶に1万デイルスを報酬に、シレーリムを4分割させて32768粒にした後ヒーリングの呪文で修復させた。

之をもう1回繰り返し、131072粒にした後再び地面に播かれた。

ファンタジー世界ならではの食糧倍増作戦である。

ジョンは之をトゥーロに横流ししてたらふく私財を蓄えた。

「王。意外と出来るものなのですか」

ジョン軍歩兵団隊長であり、夜盗出身のローゼイン・アモン・ドム・ローレスダムが感嘆の声を上げた。

意外だと思う向きが多いが、大抵の夜盗は食い詰めた農民である。それ故にジョンの政策を支持した。

「土さえ良ければもつと収穫はあがるはずだ。取りあえず残りの700億本（播種量3粒）と掛け合わせて様子を伺うんだ。それと頭数がほしい。700億本の方も4分割を2回続けよ」ジョンはローゼインに命令した。

そして1兆粒となった播種量3粒のシレーリムの種子も地面に播かれた。

之もクレスアの魔法使いの地道な努力の賜物である。

この頃になると、クレスアの魔法使いを動員できるようになっていった。

クレスアでは景気が良いせいか、良い人糞も豊富にあったようだ。

「少しでも栄養を与えよ。この一年で1200万人の食料を得なければならぬのだ」

ジョンの恫喝の下、兵士達は団結した。

食糧を調達出来ねば餓えるだけだから皆必死だ。

「この播種量4粒が花を咲かしたら近くの農家を全て回って掛合わせろ。良いな？」

ジョンが命じた。

幾ら早熟でも子供のジョンには、代わりに行動する手下が必要だ。

「はい、必ず」

ローゼインはこの時から農家を回って説得を続けた。

トゥーロも荒地と言う荒地を根こそぎ開墾して人糞を注ぎ込み、収

穫量のアップを図った。

ジヨンの真似をして僧侶にシレーリムの分割再生を繰り返させ、それを根こそぎ播いたのだ。然しジヨンの様には旨くいかない。せいぜい播種量3粒が限界であった。

「あの男は俺が見込んだとおりだ。農業にやたら詳しい」
トウーロが感嘆の声を上げた。

とても生誕4ヶ月とは思えない。

エルフの成長の速さはだてじゃねえな。

「領地は返すべきか」

トウーロは管理していたジヨンの領地を返還する事にした。

こうなつては領地を管理する意味がないと思つたのだ。

然しはつきりとは言わない。悔しいからだ。

「トウーロさん。僕の部下は26500人の人間。138名のゴ布林親衛隊、14920名のゴ布林がいる。それにクレスア兵が10万。彼女らを養うためには領地が必要なのだ。領地さえあればシレーリム麦の大規模な生産に取り掛かれる」

トウーロを憎んでいるジヨンは、わざわざ代理人のペレトンに之を言わせた。

トウーロは、この人の処遇についてグランパスや、マーキュリーと話し合ったが、物別れに終わった。

ドルクレンは完全にペレトンとトルハの犬と化している。

カイン曹長はミストリア軍学校の教師としてクレスア人主体の士官候補生を育成していた。「引渡しを拒めば王命により兵を送る。僕の土地を取り戻すだけだから議会の許可は要らないはずだと王は申していた」

嘘つけとトウーロは思った。

お前が機転を利かせて言っているのだろうか。

トウーロは毒づいた。

幾ら成長が早くても生誕4ヶ月の幼児に国を任せる気になれないのは仕方がない。

然し王命は絶対であった。

俺はミラル・カツペンの二の舞にはなりたくない。

「ジョン様。俺はあんたに忠誠を誓いたい。然し領地は返さん。」
トウーロは領地の引渡しを拒んだ。

しかしそれは無駄な抵抗である。

ジョンの代理人（彼女が国政を取り仕切っていると一般のミストリア人は思っていた）はジョンと同じだ。

「どうか王よりたちが悪い。」

「あんたの言葉を信じてあんたの命令で生産力アップの戦いを始めよう。良いか？春は近い。それまでに食料自給率を25%以上にせねば我々は餓死するか他国へ渡るしかないだろう。」

トウーロは偉そうに宣言した。

ペレトンも偉そうに言葉を返す。

「小心者の真骨頂だ。」

「エルフを雇ってライトの呪文で促成栽培するしかないだろう？質は落ちるかもしれないが」

ペレトンは一字一句にいたるまでジョンの詔どおりにトウーロに伝えた。

恐らく奴隷からいきなり国政のトップに躍り出て舞い上がっているのだろう。

トウーロはそう思った。

ペレトンは補足の言葉を続ける。

「理論上は播種量7粒まではいけるとジョン王は言っていました」
之にトウーロが噛み付いた。

「7粒だと？2倍か。ジョン王が経済力で我等を凌駕するのは時間の問題のようだな」

トウーロの手下は食料を探しながらの麦作りである。

重労働にあえぐ国民にこれ以上の負担を押し付けるわけにも行かない。

しかしクレスア経由の、ミレイドとの密貿易によって幾らかはミレ

イドからの玉蜀黍の輸入が回復していたジョン派は、屯田兵に全兵力を投入出来る。

交易停止は、ミレイドも国内の御用商人が嫌がるので、全面的に禁止できなかつた。

ジョン派の粘り勝ちである。

「ジョン王は100万粒のシレーリムの種を所望している。出す気があるかね？」

ペレトンはとつさの機転で大嘘を付いた。

トウーロの忠誠心を試す作戦である。

「何？」

トウーロは、一瞬耳を疑つた。

100万粒程度のシレーリムを貢がせてジョンとペレトンは何をしたいのだ？

そう思つたトウーロであつたが、それについては言わなかつた。

「予備のシレーリム100万粒を差し上げる」

ジョンの集めたジョン歩兵団に謀反人よわばりされて領地を没収されるよりはましだつた。

こうして100万粒のシレーリムを召し上げたペレトンはジョンが開墾した新畑にそれを播いた。

成長速度を高めるために篝火を炊いている。

エルフの中に火球の呪文を使えるものが3人と人間に500人、こちらは雷撃の呪文の使い手がいたのだ。クレスア兵は全員火球を使える。

「ふん。以後呪文の出し惜しみはしないように」

ジョンは人間とエルフを叱り付けると、作戦を強行した。

之が後にカルラド山脈の木材の2%を消失させたと言われる事になる篝火作戦だ。

でも然し取り敢えずは森の守護者、エルフの怒りよりも食料の方が大切だ。

「エルフの反乱は気にするな。だが若木は切るなよ。若木を残して

おけば10年で森は復活する」

「はい。出来るだけ葉と小枝を採集するように心がけます」
部下達はエルフの植物好きは知っているので素直に命令に従った。
親衛隊は各地に散って龍部隊の編成に取り掛かっている。

作物の促成栽培には炎を吐ける金龍と穴掘り名人の白龍が必要不可欠なのだ。

然し不幸な事に龍は大飯食らいなのである。

牛や馬程度なら、一日で三頭はたいらげる。

当然部下の反応は冷たい……。

「この食糧難の時に金龍だと？ ジョン王は血迷ったのか？」

そういう事を言う部下も大勢いる。

食糧不足はミレイドの嫌がらせだけが原因ではないらしかった。

然し食べ物に事欠いた龍達が白龍が318頭、金龍が418頭、ジョンの配下になるべく集まって来たのだ。

しかも卵つきで金龍が1055個、白龍が954個である。

「民衆が餓えているときにドラゴンを食わせなければならんのか？」

トウーロあたりはそう思っていた。

大体ジョンがヒーリングで増やしたシレーリムを吐き出せば食料は確保できるのではないか？ 「些末な事に拘るな」

ジョンは言った。

「災害の時までとっておく。ヒーリングはやる度に質が落ちてくるのだ。食べてしまったら麦の頭数がそろわないし、これを播いても芽が出るか分からぬぞ。それでも良いのか？」

トウーロは言う。

「かまわん。俺達は今たらふく食べたいのだ」

その時一人の男が報告にやって来た。

「お望みどおり、小枝と枯れ木を運んできました。」

ドラゴンの長、銀龍のイナクレンがジョンに挨拶した。

手土産代わりなのかその背には大量の枯れ木と枝が、ぎっしりと乗せられている。

「王の名声を聞きつけ参った。俺達の食事を保証してくれるなら配下になっても良い。何ならミレイドとか言う国を攻略してバルランを接収しようか？あの国さえ配下にすればこんな面倒な食糧生産などやらずに済むのではないのか？」

イナクレンがそう忠告するとジョンはそれを遮って言い返した。

「それは違う。自分の国で食料を作れてこそ真の食糧安保が実現できるのだ。食料を自国で作れない為に、僕達はこういう不条理な目にあっているのだぞ」

それはあんたの手下が理不尽な反乱を起こしたせいだろ？

イナクレンはそう思ったが口には出さなかった。

然しジョンは敏感に感じ取ったようだ。

「言いたい事は分かる。だが僕があの人たちの支援を失ったらシャリー伯母様が復権するだろう。それは僕が困る。伯母様が復権したら僕は確実に処刑されるじゃないか？嫌だぞ？可愛い女の子のブルマー姿やスクール水着も拝めずに死んでいくのは」

スクール水着やブルマー云々は勿論冗談で言ったのだがイナクレンは真面目に受け取ったらしかった。

声を荒げて言い返す。

「そんなものは飢饉を片付けた後にもやってくれ。あんたの為にスクール水着になるような奇特な娘がいたらな」

ジョンはエルフに中でも特に成長が早いらしく、見た目には4歳くらいに見える。

エルフはみなこうだ。

そして最低でも600年は生きる真に羨ましい種族なのだ。

それ故にイナクレンの目には只のエロ子供にしか見えならしい。

しかもジョンの王宮のメイド頭ペレトンは、之を聞いて心ならず動揺した。

ペレトンは堅物で冗談の通じない人なのである。

(王は私達をそういう目で見ていたんだ)

ミストリアの作法では奴隷しかブルマー姿などにはならない。

スクール水着は海女さんの養成学校で使われているだけだからそれ程酷い迫害はなかった。

海にはシステリアと言う、海底王国が栄えているので、滅多に海女さんの出番はなく、この世界ではスク水はレアアイテムである。

「このエロ子供が。こんな馬鹿王の支配下にあるミストリアの国民が哀れでならんわ」

普通生後6ヶ月の幼児がこんな事を言ったら「冗談と受け取ると思うのだが、不幸な事にジヨンはエルフなのである。

それでもイナクレンはこの国に留まった。

ジヨンのブルマー好きなどドラゴンである俺の知った事じゃねえと思っっているのだ。

然しペレトンは同族である上に、ジヨンにそういう感情が既に芽生えていると信じ込み、うろたえた。

王命により自分がジヨンの欲望の対象にされる可能性があるからだ。ペレトンは悩んだ末、真坂の時はジヨンの欲望を受け入れる決意を固めてしまった。

元々奴隷経験のあるペレトンはご主人様の命でブルマーショーをさせられた経験もあり、そんなにブルマーに対する拒否反応はない。ちなみにその祝宴でペレトンに一目惚れした、ミストリアの公爵ミラル・カッペンの夜の誘いを冷ややかに拒絶してセタに酷く殴られている。

（あの子の愛妃になれば奴隷出身の私でも公爵様になれるのかな）ちなみにペレトンは4歳である。

見かけは12歳位なのでこの国の常識では恋愛感情を抱いても不思議ではなかった。

ペレトンはジヨンの望み通り、ブルマー姿で誘惑してやろうと心に決めてしまう。

そしてジヨンは自分の思いつきを気に入ったらしくジヨン王の愛妃を決める養成機関と称して大魔法学院と名付けられた大学を作り、エルフ達に人間の女の子の（4歳〜20歳）教育を任せただ。

勿論女の子のブルマー姿やスクール水着を国民なら誰でも鑑賞できるジョンの趣味の間である。

王が女の子を独占していると言う批判をかわすため、公開授業制となった。

（一応スパッツと短パンも用意したが何故か人気がなかった）

エルフは人間の女の子などに興味を持たないから只の建前である。

本心はクレスア流の女子教育制度の採用目的であった。

これは軍師のトルハの策と後の歴史書に伝えられる事になる。

それに体操服や学生服の独占販売による税収アップも期待していた。ジョンのこの方針を当初男共は反対したが女子徴税制度を（身内の女性から家長が収入の15%を税金として召し上げられる制度）示すと渋渋、（実は喜んで）命令に従った。

之によつて税率は農民男子が収入の40%、女子が35%となる。

女子は農地の権利を保有できなかったものが多く、農作物と土地の税金を払えないからこの税率となったのだ。

因みに、町人女子の税収は20%、（男子は40%）商人は男女共に40%である。

100%取り立てることに成功すれば、最低レベルでも7千万デイルスは見込める。

「税制改革を先にやればよかった」

王国の財務担当官はそう言つて嘆くことしきりであった。

然し今更如何にもならない。

因みにクレスアのブルマーは、一番安いので7デイルスであるから、国営化に成功すれば1千万デイルスは堅いであろう。

スクール水着は20デイルス位が相場だ。

後、2デイルスの水泳帽に、バスタオル。

その他諸々の装備品で一人当たり50デイルス位は経済効果が見込める筈だ。

更にミストリアはファンタジーの王国なのである。

一般的に、この世界では混浴が当たり前である。

それなら何の問題もないではないか……。

しかしブルマー云々のジョークを本気にしたものがここにもいた。トウーロである。

彼はジョンの正気を疑った。

ジョンにとつては不幸な事に子供らしいジョークを皆本気でとるの
でうっかりと発言が出来ない。

「ジョン王は血迷ったのか？この大変な時にブルマーだと？王は今
がどれだけ大変な事態になっているか分かっているのか？」

事の真相を知らないトウーロは居並ぶ重臣の中で怒号した。

いくら春の収穫が大豊作で食料自給率は35%を超えとはいえ、予
断を許さない状況なのである。

ブルマー姿の女の子とイチヤイチャ楽しむのは出来るなら男として
は是非にもやってみたいセクハラ行為だが今じゃなくても良いだろ
う。

トウーロはそう思った。

かくなる上は諫言の候補者選びである。

「あの馬鹿王を誰が諫める？ペレトンとトルハは論外だ。女性だか
らミイラ取りがミイラになる可能性が高い」

あのスケベ王がペレトンとトルハにそれを強要して万が一受諾した
ら政治的にトウーロの権力が弱まるだけでなく、奴隷が台頭してし
まう。

トウーロは熱心な奴隷解放論者ではなく、政権をとつたら奴隷を低
賃金労働者として国家に隷属させ、重い税をとり、借金のかたに再
び奴隷に落としてしまう計画を立てていたのだ。

長命なドワーフにとつて人間は只の労働力である。

エルフや人間に媚び諂うドルクレンとは違った。

そこだけはドルクレンと意見が合わなかった。

「トウーロ様。この王の思い付きではブルマーやスクール水着姿の
女の子が見放題なのですぞ？このセクハラに厳しいミストリアで、
男にとつて之ほど都合のいい王の思召しの何処が不満なのです？」

私には理解しかねます」

と何故かペレトンがこのセクハラ的思い付きを擁護すると、

「俺達をあんな変態と一緒にするなあ」

トウーロは怒って会議室の机を拳で叩き割った。連日の農地開墾と、政務とでノイローゼ気味になっているらしい。

「俺達の担ぎ上げた王がブルマー好きなどと之ほど恥さらしな事があるかあ。大体之はお前達の立場も悪くするのだぞ。同じ娘としてこんなセクハラな衣装で男供のやらしい視線に晒されて言いというのか？お前がそれを許容する変態娘なのは勝手だが俺は御免こうむる。この思い付きでは俺の娘もブルマー姿にさせられるのだからな」
ついに本心を表したトウーロは他の重臣に呼びかけた。

「とにかく早急にジョン王の差別的政策を止めさせ、食糧増産を続けるべきだ」

然し重臣たちの反応は冷たかった。

後日行った世論調査でも国民の娘の反応は仕方ないかと言う意見が97%である。

「平民や貴族の娘はそうだろうが元奴隷の娘は受け入れるだろうよ。ブルマー姿（奴隷の作業着）になるだけで長年の夢であった教育を受けられるのだぞ？しかも高給取りの（一月2万デイルス）魔法使いになれるのだ。こんなチャンスを逃す奴は少ないと思うがね」

ジョンの家臣となっていたレナが粗暴な言葉で女性に教育権を与えなかつたトウーロに対する嫌味を言った。

レナも教育は受けていない。

この制度が採用されれば学生になるつもりであった。

レナはトウーロに事の真相を教えてやった。

「王は御自分の愛人を選ぶ名目で女性が従属する家庭から女性を切り離す作戦を立てているのだ。それには全うな理由では駄目だ。もっともらしい理屈で丸め込まれて意見が通らないのが落ちだからな。それゆえブルマー好きの変態王が情婦候補をかき集めていると言う事にしたのだ。その理屈ならあきれ返って誰も何も言い出せないと

思ったのだよ。大体常識で考えてみる。生誕6ヶ月の幼児がやらしい意味があつてこんな事を言い出すと思うのか？しかもエルフだぞ」レナは呆れ返つて言った。

トウーロも流石に黙りこくる。そして代理人が大声で皆に言った。

「その為に食糧増産が遅れてもいいのか？」

トウーロの部下が吠える。

レナは落ち着いて言った。

「35%なら配給制にすれば持ちこたえられるわ。それに食料などエテイルから買えばいいだろう？紅茶が買えて麦は買えんのか？確かエテイルは友好国だったはず。ジョン王になつてからも紅茶の輸入再開に躍起になつていたな。南方の、傾斜国経由で麦を輸入すれば良いだろう？」

レナは友好国のエテイル・ゼフィナ公国を使ってトウーロを説得しようとしているらしい。

然しレナは情勢が変わつたのを知らなかった。

「一ヶ月前まではな」

トウーロがあざ笑つた。

「ルイスがエテイルで反乱を起こし、王となつて以来ミストリアには麦はこない。エテイルは崩壊して幾つかの国に分かれてしまったからな。我々には自給自足の道しかないのだ」

トウーロはあの狡猾な嘗ての従僕ルイスの以外な軍事的才能に心底悔しがつていた。

ミストリアにいればさぞ出世した事だろう。

「分かつたらジョン王の愚かな政策を止めさせる。今は食料自給率を100%にする事の方が重要だ。それとも魔法使い様は食料を降らせる事ができるのかね？」

レナは黙つて呪文を唱え始めた。

すると光のオーラが2つのパンに変わっていく。

「どうだ？神官でもある私はパンを作り出す事ができる。本気でやれば一日300人分ぐらいは作れるぞ。之でも反対かね？」

トウーロは之お聞くと反論できずに黙ってしまった。

初歩的な手品なのだがトウーロはすっかり騙されているようだ。

「望みとあらばあと4ヶ月で一万人の神官戦士団を編成しだ見せよう。それには法皇様に収める税金がいるがな。王が十分の一税を払わんと魔法を教えてくれないんだ」

仕方なくトウーロは言った。

「金なら幾らでも出す。素質のあるものは全て神官にせよ」

ようやく諦めたトウーロは、神官戦士団の編成にOKを出した。

かくなるうえは、レナとジョンが抗争でも起こして共倒れになる事を期待しよう。

ブルマーネタのスキヤンダルでジョンに対する忠誠心が少し鈍ったトウーロは之以降領地の国民の数を大幅に増強して(月20デイルスで50人雇った)各地のドワーフ達と連合して力を蓄える事にした。

こうしてミストリアは、ジョンの愚かな政策で3つの勢力に分かれてしまった。

シャリー派とトウーロ派とジョン派である。

ところで春の収穫で9本のみが播種量7粒となり、分割再生作戦により、掛け合わせにより32%が播種量3粒になった。

トウーロから召し上げた100万粒のシレーリムは、ジョンの絶え間ない努力により、68%が播種量5粒となったのだ。

トウーロが押さえている農地では播種量4粒が限界であった。

「この位が限界だな。今の農業技術ではこれ以上は播種量は上がらん。

掛け合わせて播種量の多い、この品種を増やす事が当面の課題であろう」

ジョンは取りあえず要らなくなった32%の麦を褒美として部下に分け与えた。

之でも他国では決して手に入らない貴重品である。

一粒金貨50枚にはなるだろう。

ジョンは部下に、食糧難を解決した後、金持ちになれるチャンスを保証したのだ。

「ジョン王万歳」

「ジョン王万歳」

手下たちは之をジョンに因んでシヨセルとなずけ、家宝にして水田で育てる事にしたらしい。シヨセルは水田で力を蓄え、播種量12粒になっていたのだが情報は秘蔵され、かなり後になるまで分からなかった。

そして当面の課題はトゥーロの抑えるジョン派を友好的に政権から引き摺り下ろし、自分の政権を作ることだ。

「まずは議会に諮ってラーゼルの支配権を取り戻すのだ。トゥーロの指揮下にあるジョン派に対抗してラティール党を立ち上げる。確か王の権限で議회를解散できたよな？」側近、ローゼインに尋ねた。

「ああ。でも本当にやるのか？こちらにはジョン派に勝てる候補者がいないぜ。どうやって戦う心算なんだ？」
之に対してジョンが答える。

「僕がジョンでトゥーロも建前上はジョン派だ。だから僕の政党に対抗することは王家に対する謀反だ。民衆はどちらに付くかね？王家に付くに決まっているだろう？」
ジョンには独自の秘策があるようだ。

「ふふつ。トゥーロ派がどう出るか楽しみじゃないかね？たぶん無条件降伏するしか手はないと思うよ。僕は女性に選挙権を認める心算だしね。トゥーロが反対すればトルハさんがこちらに付くのは間違えない。そうして議회를切り崩し、こちらの勢力を少しずつ拡大するのだ」

この台詞をジョンの配下のトゥーロ派がトゥーロに報告した。
平たく言えばスパイである。

「何だと？ラーゼルの支配権を得る為に総選挙をやると言うのか？この大事な時に何を考えている？」

トウーロは困り果ててトルハに言った。

「如何すればいい？トルハは如何思う？」

トルハは秘策をトウーロに授けた。

「ジョン王のお望みど通りにすれば良いかと。そうすれば選挙で勝てます。それとも反対して惨敗の憂き目を見る方がお望みか？折角議員になって月300デイルスの給料を戴き、騎士の位を金で買ったのに之を失つてたまるものか」

トルハはその他にも私領を沢山所有していた。

トウーロ派に付いて万が一彼が選挙で負けたら再び領地を失い、傾斜国あたりの奴隷にされてしまいかもしれない。

「トウーロさん。ジョン様の私領を返したらどうだ？そうすれば総選挙は先送りになるかもしれない」でも結局、総選挙はやるだろうな。

ジョン政権の信任投票になるわけだし・・・。

そうトルハは思っていたが口には出さなかった。

折角農地を2ヘクタールも入手したのにジョンに取り上げられてたまるか。

どちらについても勝利はおぼつかなく、特にトウーロはトルハを信用していない。

ちなみに国体は株式会社である。

貴族は全員自分の所有する領地の株を平民に売りつけた以外の51%を保持していた。

ジョンも保持している筈だがトウーロの管理化におかれている。

之を返せと言うのだ。

「あれを返したら俺の立場はどうなる？王は確実に諸侯の株を無償で取り上げられる権利を持っているのだぞ。株を抑えている限りは議会の解散権と領地の没収（名分があれば）しか王には権限がない。ミストリアの王国株は67%をシャリーが抑えている。あの王は暫定王に過ぎんだよ。俺の協力なしで何が出来る？」

「領地の没収は議会の承認が必要なのよ。今戦えば議員の大半がラ

テイル党に味方するでしょうね。反対票は如何見ても王への謀反になりますから」

「それではどうしようもないではないか？」

トウーロは呻いた。

「分かった。総選挙を2年やらなくてくれるならミストリア王国株とラーゼルン島株をお返しすると伝えよ」

ついに観念したトウーロはどうせ守られないと思いつつも一縷の望みをかけてその日の内にジョンの領地を返還した。

案の定領地が返還されるとジョンはすかさず解散総選挙に打って出た。

シャリーを倒したトウーロ政権に対する国民の審判と銘打って100人の候補者を送り込んだのだ。

之に対してトウーロは630人の候補者を送り込み、(中選挙区制であるから)ラテイル派への票の分散を狙ったらしい。

然し之は愚策であった。

トルハはともこのトウーロを見限っているらしい。

出なければもう少しましな策をことうずるであろうから。

「トルハ。本当に勝てるのか？お前は前にも失敗している。二度目はないぞ」

トウーロが痛烈な嫌味を言った。

「奴隷に学問を教える奇特的な教師が貴方の臣下にいればもう少しましな計略を思いつけたでしょうにね」

すかさずトルハも言い返す。

「ジョン王に付きたいのかね？奴隷から開放してやった俺を差し置いて」流石にこの露骨な嫌味は石頭のドワーフにも通じたようだ。

「私は最初からジョン王の配下ですよ。トウーロさんは何か勘違いをなさっている。お前はもう宰相ではない。国の政策を決めるのは、宰相がミレイドに籠っている今、王とされるのだ。お前に発言権はないのだよ」

トルハは高圧的な態度でトウーロに己の立場を分からせた。

一瞬トウーロは、トルハの発言の意味が分からなかった。然しすぐさまトルハの意図を読み取ると顔を青くする。

「ミレイレアを宰相として呼び戻す心算か？」

「宰相は最初からミレイレアさんですよ。トウーロさんがそう決めたのでしたよね？」

トウーロは毒づく。

「裏切りの口実に過ぎんな。俺の手には負えんよ。ジヨンはお前らのブルマー姿を見たいがために教育を餌にしているのだろう？お前はそれでも良いのかね？」

トウーロがそう尋ねた。

「教育さえ受けられれば魔法は誰にでも使える筈です。それにスパツツや短パンでも良いとの事。

普段から生足を人前にさらすくらいこの世界では誰でもやっている事です」

トルハは怒りで喚き散らすトウーロを残してジヨンの下へ去り、2度と戻らなかつた。

パタレーン攻略作戦

(4) 6カ月後、3回の総選挙でトウーロ派を根こそぎ落選させ、議席の99%を保持した連立政権。ジョン内閣の面々がルーシー城の大会議室に集結した。

この年ついに達成した、食料自給率76%到達の祝宴をかねての当面の目標を定める会議である。

ジョンは、唐突に思いついた塩と天然水の独占販売によってこの頃には、7億デイルスの金貨と、物々交換により30億食分の麦を手に入れている。

砂糖と馬の中継販売にも手を染め、13億デイルスもの臨時収入も得ていた。

之を景気よく、公共事業に注ぎ込み、経済の活性化を図っている。10万人以上の解放奴隷を動員して大規模な植林事業に乗り出したのだ。

植物を愛するエルフにあるまじき政治方針であるが、薪用の木は必要だし、落ち葉は肥料として他国で売れるかもしれない。

しかも若木はCO2を吸収してくれるので温暖化対策には最適だ。木の実や草や虫は、動物達の食料となるので、狼や熊や狐や鹿に猪などの金になりそうな獣が増えるであろう。

獣の繁殖期は殆どが食料の草が豊富な春なので、すでに鹿や猪は確実に増え始めている。

その他の獣も食料の小動物が豊富なので、餓死せずに順調に増え始めていた。

肉食獣の死亡原因は、捕食より餓死するケースの方が多いらしい。そして何処からやってきたのか、ゴブリン族がトロールを引き連れて森へ住み着き、ミストリアに税金を払って、狩猟の許可をもらった。

金額は月に宝石3個。

兵士なら2千人は雇える程の高値だ。

ジヨンはこの宝石で、カルトミール老と弟子に武器を作らせ、他国に輸出攻勢をかける。

こうして得た金の一部をジヨンは景気よく、民衆に分配して人気取りに勤めることも忘れなかった。

残りの、10億デイルス以上の金と兵糧の集積所にラーゼルン等が使われ、解放奴隷3千人によって守られることになった。

更に、ミストリアの新鋭海軍の乗組員に、水夫3万人が雇用され、軍需景気で各地の港や都市は潤っている。

そんなミストリアでは、人頭税を増やす為に、大規模な植民希望者を募集していた。

景気がよければ、景気の悪い地域から人がやってくるので、ミストリアは急速にその人口を増していた。

好況に沸く、ミストリアの商人や地主からの献金は月2億デイルスにもなる。

献金者には位の低い、貴族の称号を惜しみなく与え、支持を獲得する事も忘れなかった。

金山とミスリルの鉱脈を押える事も忘れない。

金鉱の採掘には解放奴隷が、25万人も動員されたが、報酬は収入の半分に当たる700万デイルスという事もあって、(頭割り)文句を言う者は皆無である。

税金は高めだが、この人為的に造り出した好景気が民衆の不満をそらしている。

なお、ジヨンの命令により、建てられた急ごしらえの学校は魔法使いを目指す未成年の女子360万人全員が生徒になり、就学率100%を達成した。

男子には魔法戦士としての訓練を受けさせ、兵士として教育する事に決まった。

こうなったのは兵士こそが、手っ取り早く就職できて、大金も得られる(略奪により)唯一の職業だからだ。

身一つで就職でき、金もかからないし、武器防具は官給品である。特にミストリアでは、海賊が多く、鎮圧の為に海軍の需要は多かった。

ジヨンは引き続き、海兵の募集を続けて、海賊を蹴散らし、降伏兵は森林管理の仕事をあてがって、国力の増強に努め始める。

増えすぎた獣や草食獣は、ドルクレンの配下によって干し肉にされ、毛皮にされ、なめし皮にされてレザーアーマーの材料などにされてしまう。

干し肉は、ラーゼルの食料庫に保管され、冬が訪れて食料の需要が高まる時を狙って売りに出す計画なのだ。

毛皮とかは、防寒具やブーツに加工され、クレスアで少しずつ売りに出される。

ちなみに天下の悪法ブルマー条例は（と名付けられた）ブルマー着用と引き換えに与えられると誤解されたゆえに99%の女性がブルマーを着用したが（体育の授業の話である）以外にもセクハラだとかそういうたぐいの苦情は極めて控えめである。

女子の方も初めて受ける教育に絶大な期待を寄せているからだとして、ジヨンは思った。

取りあえず、懸念事項の反乱は起こらず、ジヨンの教育改革を見守ろうとしている様だ。

因みに学費は無料である。

無事学府を卒業して就職すれば、学費にかけた元手など、重税と技術革新で十分元は取れるのだ。

為政者たるもの学費と食糧生産の諸経費だけは、ケチってはいけない。

誰に何の才能があるか分からない以上、教育は出来るだけ受けさせるに限るのだ。

勿論無料で・・・。

そして暫く会議は食糧生産と税収アップについて話し合われた。

そして議題はこの春に生誕してそのまま塔に幽閉されている、シャ

リーの第一子ミューフアの処遇に移っていく。

「あの娘はシャリーと共に安らかに天に召されるべきかと」

こんな鬼畜のような発言を平気でするのは勿論トウーロである。総選挙で負けて領地も没収されかかった為、腹をくくってジョンに気に入られようと忠誠を見せびらかしているのだ。

ジョンはこういう手合いが一番嫌いである。

なおトウーロの領地人口は現在630名、同盟国は45領地で2万人を超えていた。数だけならジョンに引けはとらない。

トウーロの領地では、税金は武器、鎧の収入を合わせて一人当たり300デイルスで3千万位である。

折からの好景気で、売れに売れ、こうなった。

そしてトウーロは、この金で鉱山を買占め、10万人以上のドワーフを雇ったのだ。

雇ったドワーフに、鉱物を掘らせて採掘後にこの廃鉱を、龍の借家として月1万デイルスで貸し出し、大金を得た。

龍はジョンには忠誠を誓わなかったので、集まった8万頭の龍は、一大勢力となり、龍王セドランの元で繁栄を極めた。

特に、ミストリアのセドン島に住み着いた一族はドラゴニア王国と呼ばれてジョンから、独立を認められるほどになる。

龍達は、獲物を求めてミストリア各地で協定を結び、食べ物と引き換えにトウーロの用心棒になる者まで現れる。

この軍事力を背景に、ジョンに対抗しようと思っているのか、蓄えた資金力を背景にして、ミストリアの農業部門の会社株を買占め始めたのだ。

然しそれでもジョンの方が財力では上だ。

ジョンの私領での農民は収入が270デイルスで所得税金が100デイルス、まとめて2億デイルスだ。

商人が住んでいるルーシーはどいつもこいつも金持ちばかりで所得税3億デイルスを収めていた。

諸侯は全て一度ジョンに領地を返して改めて別の所領を開拓する資

金として一人当たり50万デイルスを与えられた。

所得が400デイルスが限界だった諸侯にとつて12億デイルスの
ジョンの収入は（この時点でほとんど全ての領地はジョンの私領と
なっていた）途方もない金額に思えてらしくジョンの命令に背くも
のはいなかった。

正確には一人いたが（ミレイレアのこと）黙殺された。

それ故に、ジョンにはミューファを恐れる家臣達の気持ちが理解で
きない。

何度も言うが、財力でも兵力でもジョンの方が確実に上だ。

それに兵権は確実にジョンが掌握している。

どうやったら負けるというのだ？

ジョンは、ミューファを保護することに決めた。

美人だし、一応従兄妹なので妹も同様だ。

因みに、ジョンの両親は、生きてはいるのだが、何故か遠くの領地
に左遷させられている。

ジョンもあえて呼び戻さなかったので、身内は彼にとってはミュー
ファのみだ。

それ故に暗殺する気に離れないのだ。

「殺すな。あの娘が反乱を起こすのが心配ならあなたが僕を守れば
良いだろう？あの娘よりあなたの方がよほど信用できないんだがな」
ジョンは軍事大臣に成り上がったトルハの真似をしてトゥーロに嫌
味を言ってみた。

トゥーロは農水大臣である。

ドルクレンは補給大臣となっていた。

金儲けが国策のミストリアでは宰相に次ぐ重職である。

「よろしいので？あの娘が蜂起すれば、ジョン様に勝ち目はありま
せんぞ」

ドルクレンは珍しくトゥーロの殺人計画に賛成した。

この男は元軍人だし、所詮殺人鬼に過ぎんのか？

「人殺しなんかが偉そうに国策を語るな」

ジヨンはイエスマンの元軍人とシャリーの元腰巾着に怒りを向けた。「あんたらの過去をどうこう言う心算はないが、僕が王である限り、人殺しはやらん。覚えておいてくれないか？」

ジヨンが、ミストリアの鍛冶職人に戯れに作らせた、髭剃りと備中鍬を突きつけて脅しにかかる。

2人は進言を止めた。

「とにかくあの娘を塔から解放しろ。分かったか？」

もはや、トゥーロもドルクレンも口を挟まない。

ジヨン王は幾ら天才的な金儲けの才能があろうと、やはり子供だ。

甘すぎる。

「それから金をかけてルイスとの交易交渉に入れ。交易が再開されるなら幾ら金を使ってもかまわん。必ず成功させる」

ジヨンは従兄妹の処遇より、こちらの方が重要だとアピールしてみた。

別に密貿易商人の暗躍により、（希少価値で値段が8倍以上に跳ね上がった）ルイスが抑えている商品は手に入るのだから構わないのだが、王としては安い良質な商品を国民に提供する義務があるらしいのだ。

義務を怠ったパン屋と王は民衆に殺される事となる。

他の国では如何か知らないが、ミストリアではそうなるのだ。

然しトゥーロは言った。

「無理だ。お前の民をブルマー姿にするようにはいかん。独立国だしな」

あからさまに嫌味を込めてトゥーロが言った。

ジヨンも尋ねた。

「エテイルに軍需物資を送っても駄目か？あんたの手下に防具を造らせ、ルイスに送ってやれば交易再開に応じるかもしれない。エテイルの紅茶は金になる。失うわけにはいかないのだ」

ジヨンは取りあえず、金になりそうな事は何でもやる心算らしい。

人殺し以外は……。

そのジヨンは取り合えず、即興で編成した大魔法使い86名とヘボ魔法使い672名に1万デイルスずつ与えて配下にしていった。之を使つて、エティルに圧力をかける心算なのか？

側近の2人はそう邪推していた。

いくらルイスでも、たつたの800名弱の魔法使いでは落ちないだろうと思つのだが・・・。

因みにヘボ魔術師660名は11歳から15歳までの女子であり、ロリコン後宮魔術師などと年かさの市民から陰口を叩かれたが、当人は殆ど気にしていない。

86名の大魔法使いは特殊訓練を受けて6ヶ月で修行を終えた、超エリートである。
全員女子だ。

この世界での魔法は学問であるから力馬鹿の男より、知恵のある女の子の方が早く魔法を覚えられるらしい。

男の学生は6ヶ月程度の訓練では魔法を覚えられない。

しかも戦士の訓練も受けているのだから2年くらいはかかるだろう。なお、女子の体育の授業は有志による魔法戦士を目指す女子のみが行っていた。(週5時間の基礎体力訓練以外は)

よつてブルマー解禁でも実際に穿くのは全体の97%位であるが、それでもスポーツ用品店の売り上げでは、全員所有している事になっている。

公式の練習ではほぼ全員が穿いていた。

然し、部活などでは短パンなどが主流である。

ジヨンはこの即興の魔法兵団を使ってルイスとの交渉を有利に進めようと思ひ立つたのだ。

新兵器の、眠りの魔法を切り札にして・・・。

「エティルの統一を急がせる。几帳面な交易国として独立国であるエティルが必要だ」

ジヨンはこの時点ではエティル併合の野心は持っていなかった。自国の経済圏の確保が目的である。

その為にエティル企業の買収や、会社との闇取引を積極的に行っていた。

ろくな産物のないミストリアでは、船位しか造れない。

それ故に、好景気により安く製造した武器や防具を売って、産物の開発に努める必要があるのだ。

「ルイスはエティルの統合に忙しいから、武器の類は飛ぶ様に売れる筈だ。急いで馬車と食料と武器を国中の商人に集めさせよ」

この命令に補給大臣のドルクレンは慌てた。

「ミストリアの全ての職人を動員しても馬車と武器は間に合いませんし、馬は外国から輸入しているので、直には届きません。食料はまだまだ不足気味で、他国に回す余裕は・・・」

命令に講義するドルクレンにジョンが秘策を授けた。

「僕は人殺しをする気はない。武器などいらんのだ。ミストリアの将兵の中古品の鎧や武器を高値で売りつければ良いだろう」
なるほどとドルクレンは思った。

然し馬と食料は如何するのだ？

「馬と砂糖の生産地であるパルキアとジードンを何れ攻略する。だから兵5千人分の装備は残しておけよ」

之にだんまりを決め込んでいたトゥーロが口を開いた。

「ミストリアには他国に侵攻する余裕は・・・。それに武装を売りさばいたら、たった5千でどうやって攻め取る心算なのだ？」

ジョンは之に対応する。

「先に攻め落とせば、新品の馬を売りさばくさ。ドルクレンは密かに安い老馬を買い占めて置くように・・・」

「・・・」

「そうだ。魔術師を送ってやるか？如何するトゥーロ」

ジョンは実戦訓練もかねてエティルへの、魔法使いの派遣を提案してみた。

トゥーロが答える。

「ルイスのことは俺がよく知っている。あいつは物で動くエルフで

はない。奴は無類の女好きなのだ」

之を聞いたジヨンはペレトンを側に呼んで命じた。

「シャリーを送ってやれ。人質としてな」

之にペレトンが反対する。

「女性としては反対です。ブルマー程度なら我慢も出来ませんが人質作戦は止めていただきたい。人道に反するゆえに貴方が認めた女性票を失い、議席を失いますよ？それよりも私を成功報酬2千万デイルスとアルカド領（ミストリアの1州）でエティルへ派遣してください。必ずルイスを説得して見せます」

珍しくペレトンが（ブルマー姿で）功名心に満ちた発言をした。

王国のブルマー娘として評判だが、権力には興味のない人であるのに……。

之にジヨンが噛み付いた。

「説得だと？分かった。君に盗賊出身の兵278名と幹部11名の指揮権を与える。軍資金に537万デイルスを持つていけ」

ジヨンは目的の為なら金に糸目をつけぬ性格らしい。ペレトンは了承した。「ではルイスを誑かしてまいりましょう。エティルの領地は保証すると確約してもよろしいですか？」

ジヨンが答える。

「かまわん。何でも約束していい。然し食料と領地と産物の譲渡だけはするなよ」

ペレトンは更に進言した。

「今、服飾職人のエランペに製造を委託しているブルマーとスクール水着の独占販売権と製造工場のエティルへの移転をルイスに申し入れてよいでしょうか？」

それに対して疑問に思ったジヨンがペレトンに尋ねた。

「どついう意味だね？」

ペレトンが説明する。

「はい。ブルマーは只で女子に配っているわけではありません。親の金で買っているのです。以外にも女子が学問を受け、家事労働か

ら撤退する事に反対するものは少ないのです。王の妾に自分の娘がなれば王族としての左団扇の生活が待っているとか、使用人を雇えば良いと思っっているものが多いのが幸いでした。だからこそ、きつとエランペもルイスもブルマー姿を見たさにこの提案に同意するでしょう」

よく分らない理屈であったが取り合えずその場のノリでジョンは許可を出してしまった。

ペレトンは更に、今後の政治方針を進言する。

「ジョン様。産業を興すのです。そして南方のパタレーン大陸へ進出して兵の忠誠心を試みましょう」

パタレーン大陸はミストリアの属領だがシャリー派の残党の巢窟となっていた。

中央政府は夜盗と位置づけている。

ジーダンとパルキアは、パタレーンの小国だ。

因みにルイス率いるエティルも侵略の手を伸ばし始めていた。

それ故に、侵略するなら速いほうが良い。

ジョンはルイスとの交渉の片手間に、パタレーンを攻略する腹を決めた。

2、3日は間を置く心算でいたのだが・・・。

「今26500の兵を国境に動かし、パタレーンを武力で脅せば弱小の勢力が少しばかり降伏してくるでしょう。その兵力に背後を付かせ、心理的に追い詰めればパタレーンの1950万人は労せずして落ちます。ジョン王のブルマー政策が少しばかり貴族の抵抗を呼ぶかもしれませんが」

ペレトンは月額二億の収入をかもしたすブルマーとスクール水着に若干の羨望を覚えていた。国庫に収まる税金と違ってブルマーとスクール水着を売った代金の4割に当たる8千万デイルスはジョンの私有財産となるのである。

ジョンはこの収入を根こそぎつぎ込み、ラーゼルン島と国領の私有財産化を議会に要求して了承された。

ジョンはラーゼルンでパン屋を始め、観光客を呼び込む作戦に出た。産物が乏しいミストリアでは、観光資源で儲けるのが一番だと思っただらしい。

それと祭りをやるのが一番手っ取り早いだろう。

ジョンは矢継ぎ早に、ミストリアの4千箇所、7回の祭りを実行に移して、50億デイルス近い大金をせしめる事に成功していた。この収入は、ミストリア防衛の要となる防壁の資金となっている。金に任せて通常賃金の50%増しという大盤振る舞いで職人を雇った。

ミストリアの海岸線を根こそぎ城壁で被ってしまおうという壮大な計画である。

浜辺の生き物を保護する為に砂浜の内側に構築される事になった。

その労働力を確保する為に、ミストリアでは武装解除した国軍まで動員し始めた。

ちなみにミューファはジョンの命令どおり塔から開放され、ミストリアの皇帝職に付く事になり、之によってシャリー派は、(ジョンのブルマー条例に対する)支持基盤を完全に失い、セクハラ反対派と称するテロリストと(謀略専門)結びつき、反政府ゲリラ、マクユイを結成した。

然しこれは水面下で行われている事なのでジョン達はまったく知らずにスクール水着ネタをさらに発展させたレジャーランド、アケミスト川遊泳区域の新設を兵士にやらせていた。

川を遊泳区域に指定して、泳ぎを国内に普及させれば(スクール水着以外の)ワンピース水着が馬鹿売れするじゃないかとジョンは思っただらしい。

はたから見ればギャグかセクハラな話なのだがワンピース水着の販売収入はジョンの個人収入の増加に繋がり、本人達は大真面目であった。

部下の給料もブルマーと水着の販売収入から出ているゆえに文句を言う部下はトゥーロ口だけである。

海のレジャーランドにしなかつたのは海には怪物がいる上に、海を支配する王国の勢力化にあるため勝手に領有化できないからであった。

前のミストリア王が同じ事を考えて王国の配下である鯨による大虐殺を引き起こした。

それ以来、海で泳ごうと考えるものは度胸試しで位でしか現れない。ジヨンも前ミストリア王の二の舞いになる気は更々なかつた。

それ故に川に重点を置き、食料自給率100%達成以後の、国力の要となる水着販売収入に期待をかける以外にないのだ。

それに加え、観光収入はラーゼルの主な収入であった。

5億デイルスもの国庫税収は、食料に化け、南方の大国、傾斜国へ流れた。

この収入によつて傾斜国は兵を雇い、国軍280万人のゴブリン兵による大傾斜国を建国していた。

之によつてラーゼルンは食料供給率140%（輸入66%）までになり、飢えから開放された。

貧困を平定したこの日は、国民の祝日とされ、一週間ぶつ続けの祭りが開かれる事となつたのだ。

後年この祭りは、一ヶ月に拡大され、規模もい大きくなり、2京デイルスもの収入を上げるが、今の所は7億デイルス程度である。

国家予算は、総ざらいしても平均70億デイルス位が限界であった。収入を増やす為には、国民を増やすか産業を興すか、植民地を増やすしかない。

ジヨンはそれ故にパタレーン攻略の為、クレスアに兵10万。ミストリアに主力軍26500を配置して、敵国の侵入に備え、1500隻にも及ぶ大艦隊（千トン級）の製造に乗り出した。

あまり知られていないが、材木製造の魔法は存在するのである。

最近開発されたいが、森林保護の為にこの魔法を利用する事にしたのだ。

御蔭で、魔法使いと造船工は特需景気に沸いている。

「王。取り合えず賊軍のミレイドと交渉したいのですが」

この頃皇帝ミューファが、他国侵略の許可をジョンに執拗に願っていた。

当然であるが、前王シャリーの娘であることが余程こたえているらしい。

本来ならシャリー共々、処刑されても文句は言えないほど立場は弱いのだが……。

手柄を立ててジョン王のご機嫌を取らねば、命が危ないかもしれない……。

それにしてもどうもあの娘は傀儡の意味が分かっていないらしいとトゥーロは思った。

役に立つならまあどうでもいいが。

「今ミレイドと戦う能力はミストリアにはありません。兵はたったの26500人しかいませんからね。交渉してくれるなら有難いですが」

ジョンは丁寧に応じた。

一応従兄妹である。

向こうが敵意を抱かぬ限りは友好路線を維持しようと思っ
ていた。

彼はミューファの望みをあっさり叶えてやった。

「ミレリアさんを降伏させて下さい」

ジョンは丁寧な言い方を続ける。

怒らせたら損だからだ。

「王の御心により、私はミレイドと交渉いたします」

ミューファは喜んで交渉に臨もうとした。

ジョンは部下に命じて補足させる。

「ところでミューファ領はあなたの物だ。あの地だけは没収せずにそのまま残してある。赴任して経営するといい。ジェナンの港があるから傾斜国と交易できるはずだ。ミレイドとの交渉が可能ならそれもいい。税金は国庫に納めるように」

ジョンの側近中の側近、ペレトンが偉そうに言ったのだ。

ミューファは喜んで言い返した。

「分かりました。税は国庫に納めさせていただけ。必ずやミレイドの楽器でラーゼルの収入を跳ね上げて見せましょう。そして貴方の為にミレイドの五線譜を掲げさせましょう。」

そう言ったミューファは悲しげに空を見上げた。

そして本題に入る。

「母様は何時解放してもらえるのでしょうか？私はそれを陛下に期待しているのですが」

ミューファの問いにジョンがため息をついた。

そうか。それが目的か……。

「ようするに忠誠を誓うからシャリーを開放しろと言う訳か？シャリーを幽閉したのは僕じゃない。恨まれる覚えはないぞ。それにミューファさんと違ってシャリーは政敵だ。このまま解放するわけにはいかんのだ。エティルへ送って永遠に厄介払いが出来ねば、僕の政権基盤の固まる5年後位先でないと開放できない。良い子ぶるのに耐えられなくなったのだろう。」

今度は高圧的な態度でジョンが公言した。

幾らジョンに忠誠を誓った兵士や魔術師がいるにしても所詮寄せ集めである。

どんなきっかけで裏切りだすか分かったものではない。

しかも魔術師は全員年頃の娘だ。

それに強制的に性的慰み者になっている（建前はともかくやっていることはそうだと国民の目には映る）ジョンを恨んでいるかもしれない。

「皇帝陛下。そういうわけですから僕に協力してパタレーンを落し、ミレイドを屈服させたほうが身のためだ」

之ではますます評判が下がるなと聡明なミューファは思ったが黙っていた。

ジョンを怒らせては我が身が危ない。

折角命が助かったのである。

たとえシャリーが殺されても怨むのは筋違いだと幼いミューファは思っていた。

「勿論王に忠誠を誓います。母様のこともありますが個人的に貴方の事が気に入りました。命に代えてもジョン王に仇なす者を蹴散らしてご覧に入れる」

ミューファは大見得を切った。自分を皇帝にしたあたり、利用価値はあるとらんでいるのだろう。

それなら幾らかでも兵を入手してジョン王に忠誠を尽くし、復権を図るまでだ。

もつともシャリーの起こした戦争で奴隷にされたらしいペレトンとは違い、生まれた時から虜囚生活であるミューファは、そんなにジョンを恨む気もなかった。

然し私は如何すれば良いのか？パタレーンを落とすのか？それともミレイド？

「ミレイレアさんは後でゆっくりと降伏させてもらおう。まずは弱いパタレーンから片付けてくれないか？一人も殺さずに・・・」
出来るかそんなもん。

ミューファは一瞬そう思ったが口には出せない。
人を殺さずに戦争など出来るか？

然しそれがジョンの希望とあらば仕方がない。

「その為の兵を6名、お貸し願いたい。それを元にパタレーンとミレイドに揺さぶりを掛け、必ず降伏させてごらんに入れましょう」

この殊勝な態度にジョンは完全に油断したようだ。
ジョンは余計な事を言い始める。

「300名位は出しても良いぞ。僕の兵がどれだけ強いかわかるチャンスだ」

賢明にもミューファはそれを謝絶する。

「結構です。6名もいれば十分。ジョン王は新たな未成年兵を編成して国境に展開してくればそれで十分です。後は勝手に2国が降

伏を申し出るでしょう。2、3年はかかるかもしれませんが」
ジヨンは不覚にもこの言葉を信じた。

そして選抜きの精鋭6名をミューファの直轄にしてしまう。

魔軍将ギラル。

ゾンビ指令クルザーム。

妖魔書記リューグター。

騎士將軍シャームリー。

大僧侶ドツペリー。

龍軍騎兵長リザーの6名だ。

ミューファ自身の地位は皇帝兼魔軍元帥となった。

軍資金として3千万デイルスと馬5千頭を与えられる。

「あの方は何を考えている？之では私の元に大兵が集まるじゃないの？」

申し出た本人が啞然とするほどジヨンはあっさりと軍権の一部をミューファに譲渡した。

こんなお人よしの王は始めて見る。

反逆者と聞いていたからもう少し冷酷な人かと思っていたのだが。

「そうか。私が謀反するかどうか試しているのね？ジヨン王も猜疑心の強い事。まあ良いわ。リューグターさん。パターレーンの港町に潜入して噂を流して。隣国が密かに同盟を結んで貴方の国を包囲攻撃しようとしている。之を全ての国に触れ回って。一カ国位は信じられる国があるかもしれない」

ミューファは誰でも考え付くような小手先の流言作戦を指示した。

リューグターは一応命令に従う。

「分かった」

「其れから信じた国には先制攻撃の世論を巻き起こさせるのよ。こうすれば攻撃を恐れた他国が周辺諸国と同盟を結んで疑惑が真実になるわ。そうして孤立無援に陥れてから同盟の話をした国に持つていく。そうすればどうしようもなくなつて同盟に応じるしかなくなる。こうして一州を1つずつ切り取るのよ」

「そんなに上手く行きますかね？」

クルザームとリザーは、懐疑的な目をミューファに向けた。どちらも、謀略には慣れていない。

「ミストリアの13万の兵がバックについているのよ？あっさりと降伏するわ。貴方達は、船をジョン様から借り受け、征服した土地の産物で直に儲けられるようにするの。分かった？」

「ああ。魔軍元帥殿」

部下達はミューファに従った。

6人の部下は忠誠を近い、この作戦はすぐに実行されたのだ。

噂が広まる暇な時間に、ミューファはエルフの兵を募兵し、直属の兵を4千と、馬3千頭を掻き集めた。

暇潰しに、この兵を訓練して、ミューファ弓戦隊と名付けられた最強の軍団を編成してジョンの許可をもらった。

之を魔將軍ギラルに指揮させ、ミューファ領の税收強化に努めている。

パタレーンの産物である砂糖の仕入れ値を、強制的に20%引き下げ、内紛で手も足もないパタレーンに承知させた。

之が原因でパタレーンは、ミストリアの取り込まれ、謀略に慣れていないパタレーンの諸侯は仕掛けた方が拍子抜けするほどあっさりと噂を信じ込み、国同士で仲間割れを始め、パタレーン18州の1つパルキア領とジータン領が耐え切れなくなり、降伏と領土安堵を前提とした和議をミストリアに申し出たのだ。

「偉大なるミューファ様。蓄えた軍資金と砂糖は献納しますので所領安堵を確約して頂きたい」

「うん。約束しよう」

ミューファ無責任に、約束してやった。

まあこちらの所領が減るわけではないから。

然しそれでもこの展開にはミューファも啞然として最初は信じられなかったようだ。

「もう降伏してきたのか？」

樽を流して17日目にパルキアとジーダンが降伏の使者を送つてきて傘下に入った。

この地が砂糖きびにあたるバルモアの一大生産地で人口160万人の大国であった事もジョンを喜ばせた。

一部で評判の悪い、ブルマーやスクール水着の販売収入よりもはるかに儲かりそうだからである。

砂糖は角砂糖1つで70デイルスもする超高級調味料であるのだ。こんな国が独立国でしかも小国だとは、ジョンにとってはまさに幸運だった。

「よくやった。パルキアとジーダンの兵の使用を許可する。軍備を強化して大国アルトニア（3カ国）の攻略に備えよ」

ミストリアの大臣兼軍師にのし上っていたトルハは王の言葉を代弁した。

「褒美に150万デイルスの賞金を授ける。好きに使つと良い」
之を聞いたミューファが嘆息した。

意外とけちな男だ。

10億デイルスは軽く稼ぎ出すであろう砂糖を手に入れたのに褒美は之だけか？

ミューファはアルトニアを攻略する為の兵を之で雇わなければならなくなった。

領地の収入の8千デイルスでは600名くらいしか雇えない。

人口470万のアルトニアは兵も6万人いる。

パタレーンに展開できる兵は3万がやっとだ。

農民兵を募兵して、結集させれば5万人はいけるが、それをやると産業が崩壊してしまう。

仕方なく流言作戦でアルトニアの民を動揺させる作戦に出た。

「アルトニア王はミストリアと裏で手を握っているのだ」的な噂である。

この謀略も長年シャリーに苦しめられた恨みも手伝つて旨くいぎ、武将の一人、セタ・ブレイメンが反乱を起こした。

この男はミストリアを追われた後、アルトニアへ身を潜め、武將に取り立てられていたらしい。

セタは4千の騎馬隊をアルトニアに向けると、ジードンとパルキア占領に向ける為の兵を募った。

名目は裏切り者の王を倒せである。

そこへ3州の隣国が便乗してアルトニアに攻め込んでいた。

慌てたアルトニアは苦し紛れにミストリアに救援を求め、疑惑を現実のものにしてしまう。

ミストリアはパルキアとジードン軍を送り、アルトニアを保護領としてしまった。

王はミストリアに忠誠を近い、両軍を合わせた9万の兵でセタに迫った。

セタは之を防ぎきれないと思ったのだろう。

兵を置いて遁走した。

アルトニアに侵攻していた3国も、之を見て降伏し、パタレーンの10州は全てミストリアの傘下に入ったのだ。

この間僅か3ヶ月である。

ミューファはアルトニアの商人に命令して軍資金を献納させると、人気取りに各地の民衆に分配する。

ジョン王とミューファの名声は之により高まった。

名声を金で買えるなら、惜しむことはない。

この工作によってパルキア、ジードンの兵士と民衆は、完全に餌付けされてしまう。

ミューファは民衆の抵抗を封じ込めると、アルトニアの産物を早急に調べさせた。

アルトニアの産物は金鉱山とモースと呼ばれる馬であった。

ミューファは略奪を固く禁止し、その代わりに国庫に蓄えられていた全ての財宝とジョンから授かった資産（金だけ）の95%を兵に与えた。

之が民衆に受け、進んでミストリアのジョン王に忠誠を誓うことに

なつてしまつ。

「王。ミューファは使える人材ですな」

軍師のトルハがミューファの手並みを褒め称えた。文句ばかり言うトウーロより余程使える。

「シャリーを解放してやれ。パタレーンの反ミストリア勢力の元に返してやるのだ」

ミューファに対する褒美の心算なのかジョンが突如命令を下した。反対するものは部下にはいない。

反対すれば給料を停止されるか首にされるのは明白だからだ。

「皇帝陛下にこれ以上の権力をお与えになれば専横の限りを尽くし、開放されたシャリーが反乱を起こしますぞ」

周囲に押されてジョンの諫め役に抜擢されたカルトミール老がおずおずと申し出た。

この人はジョンの正式な部下ではない。只の爺さんだ。

「シャリーを盾に取ればミューファは逆らえません。残りの8州とミレイドを抑えた後に解放すればミューファは如何する事もできずに我等に従うでしょう。如何か御自重を」

カルトミールはジョンの部下たちが約束した60万デイルスの為に必死に説得しようと試みた。

然しジョンは命令を撤回しない。それどころか、シャリーに千金を与える命令を付け加えた。之にカルトミールは観念して苦情を言うのを止めた。

そして穏やかに聞く。

「良いのですか？出来れば作戦の趣旨を聞きたいのですが」
ジョンはこう答える。

「シャリーがアルトニアやパルキア、ジータンの帰参を許すと思うか？シャリーがいる限りパタレーン10州はミストリアに組するしかないのさ。それにカルトミールさん。シャリーを解放すればミューファとシャリーは敵同士になる。ミューファさんは、シャリーに

とつては裏切者だからな。之が戦略というものだよ。カルトミール老もその心算で僕に仕えてほしい」

ジョンは地面に頭をこすり付けて頼んだ。

目的の為には手段を選んではいられない。

その神妙な態度にカルトミールも心を動かされた。

「分かりました。お使いいたしましょう」

こうして新たな知恵者を得たジョンは砂糖の独占販売権を議会に認めさせ、パルキア、ジードン領から輸入して国民に販売。

4千万デイルスの収益を上げた。

全部売れば30億は儲けられるが、少しずつ売って品薄感を煽り、値段をじわじわと吊り上げるのは、商売の常套手段だ。

更にモースを買いあさり、2万人の騎兵団を組織してミレイドに圧力をかけた。

ミューファにはシャリーの捕縛を命令してシャリーの心中に疑惑を持たせるように心がける。ミューファはこの命令を聞くと思に9万の兵でパタレーン8州を有する、人口840万の大国アリシア・フリューゲント王国に圧力をかけた。

国王は大方の予想に反して交戦を主張して20万の大軍を全国から徴発して国境に展開する。こうしてミストリア最大の内戦。アリシアの戦いが始まった。

エティルの内戦

プロローグ2(1) エティルの内戦

ルイスはトゥーロに暇をもらうと海を渡り、ミストリアの東方のエティル・ゼフィナ大陸を訪れていた。

パタレーンでの戦火を逃れ、ルイスに助けを求めてきたエルフ720人と3人の娘を引き連れてである。

姉のルシー・トウースと妹のエレナとアミだ。

エティルの東にある旧ミストリア領のペクダール大帝国を目指している彼らは、エティルの1州ババロアで有り金をはたき、補給を済ましていたのだ。

一応軍隊を所有しているのですが、難民の中から編成した50名の精鋭軍の為の馬も必要である。

主要武器は5mの長槍であった。

鎧は軽装のレザーアーマーであった。

この武装を整える為に使ったトゥーロからの退職金とミストリアの実権を奪ったペレトン達が褒美にくれた軍資金は底をつく。

軍隊は滅多に生産活動はしないので、金は減る一方なのだ。

領地はないから、屯田を起こすわけにもいかない。

仕方がないので、1万デルスの賞金を賭けて、賭け路上武道会を開き、参加費100デルスで数百人の挑戦者を集めて試合を行った。

ルイス軍の豪傑白鷺將軍の活躍により、475勝6敗と言う、好成績で資金を蓄え、ルイス軍に参加を求めてきた豪傑8人と流民400名(人間)を配下にした。

之が折角集めた軍資金を枯渇させる事になる。

路上舞踏会で儲けようにも、豪傑白鷺の噂は街中に広がり、1000デルスも払って挑戦する物好きな腕自慢はババロアにはもう居なかった。

因みにルイスの逗留によってババロアは、好景気に沸き、税収も6割り増しにまで増えている。

「ルイスさん。俺達どうなるんでしょうね？」

720人のエルフ達を代表してルイス軍団のスポンサー、アーケノイドが言った。

「金はもうないぜ。ペクダールではリース・サーパント率いる夜盗勢力の支配下にある。やはり正統派のペレトン様にお仕えするべきではないのか？それともお前は王になりたいのかね？」

取り合えずこの状況を何とかしてくればルイスが王になっても反乱者になっても構わないのだが忠告だけはしておいた。

ルイスは何を今更と言うべき表情でアーケノイドを見つめている。

「俺だつて王の血をひいている。オリジナルのエルフは6人しかいないのだからな。ジョンとミューファとシャリーとミレイレアとレナとセタの6人だ。後は古代ミストリアが培養した2体の複製品から増やしたのだ。その2体がペクダールの初代の王なのだよ。当然全てのエルフが王の血をひいているのだ。俺が王になって何が悪い？」

ルイスはそう公言した。

之を聞いたアーケノイドは諦めたように呟いた。

「それなら他のエルフの流民達にも声をかけましょう。ルイスさんはこの国に腰を落ち着けて兵力を養ってはいかがいです？そして領主のバーゲン王に使いを出して領地を分けてもらいましょう。この国は豊かです。税収9割でも餓死者が出ないのですからね」

それは謀反せよという心算か？

「エティルの軍人になるのです。そして北をバーゲン王のモラギーナ公国。南をエティルに分け取りして勢力を蓄え、ペクダール王を討つのです。そして頃合を見てモラギーナを討てばミストリアに対抗できる大国にのし上がるでしょう」

アーケノイドの献策はルイスによって魅力的であった。

北部7州を支配する（直轄地1州）モラギーナを後ろ盾にすれば天

下統一も夢ではない。

気掛かりなのはモラギーナを裏切る時がいつか来るといふ事だ。

ルイスはモラギーナと天下を二分する気はない。

「アーケノイド。あんたが交渉してくれるのか？」

ルイスはその場で手紙を書くとアーケノイドに渡した。

「俺は土産代わりにモラギーナ国境外の大国サーター公国を（2州）落す。エルフ達はサーターに進出して反乱を起こせ。残りはサーターのアルカニアン城を奇襲して之を占領する」

ルイスはそう言うつと50名のエルフを引連れ、その日の内にアルカニアンに奇襲をかけ、激烈な攻防戦の末、敵兵全員を捕虜にして之を落した。

この地で、50名のエルフ軍のうち、怪我をした7名を除いた43名に、帰順させた敵兵3千人を再編成して自軍に取り込み、軍を強化すると金蔵を開いて民衆に分配して人気取りに勤めた。

更に4日後、サーター公国首都ダルニアンを制圧。王と騎士団6千は、東方の7州を領有するエンドレ公国に落ち延びた。

ルイスは取り合えず追撃は避け、国内の整備に時間を費やした。国内の商人を拝み倒して軍資金を用意したり、国民の税金を2割下げ収入の40%までに引き下げたり、エルフの流民を受け入れて3千の兵を編成したりである。

この軍資金集めは慣習化して一月に40%の臨時税を払う事になってしまふ。

「分かっていると思うが産業を興せ。人口102万のサーター公国ではエンドレの反撃を食らえば全滅だ。兵を雇う安定収入が必要なのだ」

ルイスはエンドレと細やかな軍事紛争を起こしていた。

このままでは人口1500万人のエンドレが60万の大軍を率いて反撃してくるだろう。

それだけは避けねばならない。

「ルイス王陛下。敵が反撃してくる前にこちらから奇襲してエンド

レ王を打ち破り、その兵を合わせてエンドレを占領してしまうし、手はありません。兵力を総動員しても4万人くらいしか集められませんが、

部下の1人がそう進言した。

そのとうりだ。俺もそう思う。

「最初の計画通り、モラギーナに援助を頼んだら如何だ？」

アーケノイドがルイスに忠告した。

「金と食料と馬を集めてからだ。基本税が20万デイルス。臨時税が100万デイルス。貢物が200万デイルスだ。之で傭兵を雇えるだけ雇え」

ルイスは部下の進言を無視。

主力隊5千をエンドレに派遣した。

ルイス軍は局地戦にてエンドレ軍を敗退させ、捕虜にした兵を自軍に取り込み、総兵力2万人にまで数を増やした。

エンドレ軍は国境守備隊を15万に増強。

無敵の騎馬隊にて対抗する。

「騎馬隊など、柵で防いでしまえば良い」

ルイスの部下の一人が、そう忠告して褒美に、金貨5千枚を貰っていた。

その部下は、サーテーに豪邸を買い、部下を10名雇ってルイス軍の中尉に取り立てられた。

その兵で近隣の夜盗や海賊を制圧して、捕虜5千名と鹵獲した400トン級帆船6隻をルイスに献上して、海軍大尉に昇進したのだ。

大尉となったその部下は、デトンと名乗り、捕虜の海賊を通じての密貿易により、資金を蓄え、100隻以上の600トン級帆船の製造と、乗組員8千人の訓練を始めた。

「何だと？ルイスの奴が海軍の編成と訓練に乗り出しただと？」

エンドレ王は、宰相メツサイアと警護隊長ロラン、国軍司令官ガイの前で恐怖に震えた。

如何考えてもルイスの次の侵略目標はエンドレだからだ。

「はい。一応国境守備隊は増強しておきましたが、たぶん負けるでしょう」

ガイは数こそルイス軍の30倍だが、貴族による寄せ集めの騎馬隊では、ルイスに勝てない事を悟っている。

しかもルイスはあの名宰相トウロ（元）の部下だった男だ。

ルイスの背後には、パタレーンの大半を無血開城にて制圧して、好景気に沸いているミストリアがついているのだと、誰だって誤解するだろう。

「だが降伏するわけにもいかぬ。我が部下達への義務もある。メツサイア。海軍を動員してデトン軍を撃滅させろ」

この命令を受けた海軍500隻は、サーターの港を早速攻撃すると、デトンの軍を港の防備に釘付けにして、上陸部隊4万を陸から港に差し向けた。

港の守備兵400は、当然敗れ去り、補給を絶たれたデトン軍は水上艦隊の夜襲に切り替えて応戦する。

この戦法は、20世紀のテラ（地球）でもやった軍隊は少なかった。闇の中では連携作戦は困難だからだ。

「港は占領するな。占領したらルイスは諦めてこの地を放棄する。

ルイスがこの地に送り込むであろう救援軍を撃破して、そのまま国境守備隊15万で各個撃破するのだ」

作戦の司令官に任命された、白衣将軍は港を含むサーターの村々を、広範囲に襲撃する事で、ルイスが派遣するであろう討伐隊を分散させて各個撃破する作戦を採用した。

ルイス軍は陸軍2万。

海軍8千。

兵を分散させ、5千位になった所を奇襲して壊滅させれば、ルイスに勝機はない。

案の定ルイスは、娘のルシーに本国兵2千を預け、次女のエレナに1万の兵を与えて港を救援に行かせ、末娘のアミに5千の兵で国境守備隊を奇襲させた。

「白衣將軍。ルイス軍が出撃しました」

エンドレのスパイが報告してきた。

白衣將軍は、報酬の500デイルスをスパイに与えると引き続きルイス軍を監視させる。

白衣將軍は命令を下した。

「15万の兵を5万ずつ分け、三方からルイス軍本隊である1万の兵団を攻撃する。我が軍の主力部隊であるエンドレ王の本隊を狙っている5千の兵は、エンドレ王が片付ける手筈になっているから心配するな」

白衣將軍はエレナ軍の進撃するであろう山岳地帯に兵5万の本隊を、残りを5万ずつ川を前にして布陣させた。

エレナ軍を川に誘い込んで三方から攻撃して壊滅させる古典的な戦法だ。

エレナは、敵の作戦は分かっていたが、取り合えず川を前に布陣させると増援部隊を待つ戦略に出た。

上陸部隊の4万は、エレナ軍の背後に布陣して、慎重に敵軍の分裂を待つ。

アミ軍の方は、エンドレ王自ら指揮している40万の軍隊に囲まれ、山岳地帯に逃げ込み、応戦していた。

2人共初陣であるが、脅威的な統率力で白衣將軍の配下の猛攻を防いでいる。

慎重なれど、やはりルイス軍を見くびっていた、白衣將軍は攻めあぐねて、当惑していた。

普通60万対3万で、勝てないなどと言う事はありません。

エンドレ王もエレナ軍は兎も角、アミ軍は一蹴する心算でした。

「如何して40万の精鋭を動員して5千の兵を打ち破れないのだ？何故かルイスの軍才に恐怖しているエンドレ王だが、やはり味方の勝利を信じたらしい。」

苛立ちを隠さずに、無能な部下を罵った。

ガイがそれを止める。

「焦りなざるな。補給は出来ないように完全に包囲しているのですから、一月もすれば崩壊します。今は建物にありつたけの火矢を打ち込んで、敵軍の野営を焼き払う事です」

敵の兵力は3万。慎重に持久戦に持ち込めばルイス軍に勝ち目はない筈だ。

アミ軍さえ崩壊させれば、ルイス軍は劣勢になり、増援部隊も集まらなくなる筈だ。

敗軍の将に雇われる物好きな兵は少ないだろう……。

然しアミ軍は巧妙だった。夜な夜な、敵軍の火矢により燃え上がる炎と煙に紛れて、夜襲を行い敵軍を恐れさせた。

勢いに乗ってエンドレ王の本陣を急襲して双方に犠牲者なしで、エンドレ王を国境まで押し戻した。

アミは直接対決はアミ軍の自滅を招くので兵を休ませ、本国に補給部隊の派遣を要求した。

ルイスは募兵した3千の新兵と一月分の食料を送ってくる。エンドレ軍は、軍隊の建て直しに躍起になり、補給線の襲撃は行わなかった。

エレナ軍はこの勝利を知ると川を渡り、挟撃覚悟で正面の軍を攻撃して、奇跡的に勝利した。

犠牲者は双方0である。

白衣将軍が挟撃を仕掛けた時には、大勢は既に決していた。

白衣将軍は兵を纏めて、山岳地帯に引き上げてしまう。

唯一港に派遣された4万の兵のみが、転進して訓練不足のルイス海軍を崩壊させた。

エレナ軍は之に構わずに、兵力を増強。

5千の兵と3千の馬を募り、川を前に再び布陣した

「それでいい。直に兵を発して国境守備隊を撃滅する。兵は後から送ってくれ」

先発軍の勝利を知ったルイスは、自ら兵を率いて前線にやってきた。

速戦速勝がモットーのルイスは3千の兵と共に国境の砦に奇襲を掛け、之を降伏させた。

辛うじて何を逃れた司令官のモザトブは州都ヘザンに立てこもり、体勢を立て直そうとしたが敗残兵を吸収して15万に膨れ上がったルイス軍に包囲され、降伏した。

ルイスは更に3州を攻略。首都のコールを包囲した。アミは4万。

エレナは5万の兵を引き連れ、港を攻撃しているエンドレ軍を攻撃、之を散らした。

白衣將軍の軍は本隊の敗北を知ると、ルイス軍の侵攻に備えようとして本国に帰還中、エレナ軍の奇襲を受け、総崩れとなり、エレナの捕虜になってしまう。

「白衣將軍殿。我が父上に従う気はないか？その気があるならあたしの一存で5千デイルスの月給と領地を捻出してもよい」

エレナは破格の条件で、白衣將軍を誘ってみた。

「お前ならルイスを裏切るのか？そうではないだろう」

予想どおり白衣將軍は寝返りを拒否した

まあ本国には家族もいる。

寝返ったら家族が酷い目にあつので、降伏するわけにも行かないのだ。

「ではエンドレに帰るといい。貴方は人傑だが、兵数が同じ条件で戦うなら負けはしない」

エレナは白衣將軍に武器と食料を与えて、あっさりと放逐した。

その白衣將軍に、敗残兵6万が合流して一大勢力となる。

敗軍の将ではエンドレには帰れないので、兵と自分の家族を本国から密かに呼び寄せ、船に乗り、アリシアに落ち延びていった。

アリシアには、不世出の名将イーボルト率いるイーボルト商会が存在するのだ。

彼の力が借りられれば、形勢は逆転するかもしれない。

彼の恋人のマリーも、ジョン王と比べても遜色のない名君として評

判である。

ある事件により、故郷を追放されなければ、エティルはイーボルトによって統一されていた事は間違えない。

然し追放された事により、彼がその才能を発揮する機会は今の所は失われていた。

「イーボルト殿の力を借りて形勢を挽回するしかエンドレには再起の道はない」

白衣將軍は、海軍をエレナ軍への押えに、2隻残して本軍とアリシアに向かった。

白衣將軍はアリシアに着くと、イーボルトに20万デイルスの大金を献上して、面会と助力を乞うた。

イーボルトの兵は2千名だが、エンドレ兵などよりは、見た目も強そうである。

イーボルトは面会を許可すると、あからさまに嫌そうな態度を見せた。

「俺は何度か帰国に仕官を申し入れた事があつた筈だ。今になって何を言っておるのか？」

イーボルトは、一応面会には応じてくれたが援助する気はないようだ。

然しそれでも諦める訳にはいかない。

「非礼は王に代わってお詫びいたします。エンドレが滅亡すれば、ルイスは貴方の故郷のギルモアも征服しますぞ。それでも良いのですか？」

白衣將軍は、部下と共に懇願した。

イーボルトは之を聞くと冷酷に言い渡す。

「俺を脅すのか？俺はお前と友好関係にはない。アリシアもエンドレとは国交がない筈だ。俺がお前らを捕虜にしてルイスに送りつけようとも勝手と言う事だ」

イーボルトはアリシア国軍司令官のマリーに声をかけると、マリーは5千の兵を繰り出して白衣將軍を包囲した。

外に展開している6万の兵は、アリシア軍4万にあっさりと降伏して捕虜となっている。

「白衣將軍。お前はルイスに引き渡す。お前の兵は再編成してマリ―姫の配下に組み込まれる」

「正気か？ギルモアを裏切るのか？」

白衣將軍は捨て台詞を吐いたが、時既に遅し……。

白衣將軍はマリ―の近衛兵のよつてたかつての攻撃について降伏した。

「待つてくれ。分かった、降伏するからルイスに引き渡すのは止めてくれ」

白衣將軍は所持していた剣を放り投げると、大人しく捕縛された。

「良いだろう。特別に許してやる」

イーボルトは大嘘をついた。

命乞いに応じる気はない。

イーボルトは取り合えず白衣將軍を屋敷の地下牢に放り込むと、ルイスに呼応してアリシアに侵攻するかもしれないミストリアに備える為にマリ―を国境まで追いやった。

因みにイーボルトに軍の指揮権はなく、立場はマリ―の副官である。それも実権はなく、早い話居候であった。

それでも自腹で雇った2千の兵は、その頃アリシアに侵攻して来たアルトニアの大軍5万を打ち破り、ミストリアのミューファのアルトニア攻略に貢献している。

それに加えて度重なる勝利で、調子に乗ってアリシアに侵攻して来たミューファ軍10万を激戦の末撤退させた。

お互い不殺の兵団を気取る將軍である故に、犠牲者は出ていない。この局地戦が、酷くルイスを不安にさせたらしい。

アミの軍権を剥奪して、有効使節として派遣した位だ。

アリシアはアミの提案をのみ、ルイスとアリシアは同盟を結ぶ事となった。

「己。ルイスの奴。全ての国境兵を集結して袋叩きにしてやる」

同盟の話を手ンドレ王が知ると、彼は心底怯えた。

手ンドレ王はいきなり訪れた、帝国の落日に少し混乱しているようだ。

国境兵を動員すればルイス以外の隣国が領土に侵攻を始め、コールだけになつてしまふ。

首都にはまだ8万の兵が残っていた。

「落ち着いてください。敵は強行軍を続けて疲れきつていないはずで。今、夜襲を掛ければ、ルイス軍はヘザンまで後退する筈です。

そしてモラギーナを誘つてサーテーを突かせれば確実にルイス軍は孤立して崩壊します」

之を言ったのがセタの妹セリア・ブレーメンである。

彼女はへたれキャラのセタと違い、冷静温厚な人柄であった。

鬼畜な兄に耐えかね、別行動をとっているらしい。

「籠城すればアリシアの名将マリーとイーボルトが援兵を送るかもしれません。イーボルトは白衣將軍などとは比べ物にならない人傑ですぞ」

夜襲により、決着をつけてしまえば、アリシアが如何動こうと数の力で押さえ込むことは出来る。

セリアはそう計算していた。

手ンドレ王はそこまで読みが深くない。

「お前の忠告は有難いが其れは出来ない。危険を冒さずとも兵糧が尽きれば撤退するさ。其処を襲撃すれば良いだけではないかね？」

ルイスの恐ろしさを知らない王は軽く笑い飛ばした。

潜在的に恐れていても何処かでルイスを見くびっている。

現実逃避という奴かもしれない。

セリアも言い返した。

「それではルイスは併合したケタルカルキセアかドトーランに要塞陣地を構築して守りを固めてしまいます。決戦を日延ばしにする度に勝ち目がなくなるでしょう。こちらの兵糧も2か月分しか残っていません。もし先に兵糧が尽きたらこの国は滅亡します」

この言葉に王が折れた。

不運な事に、エンドレ地方は凶作である。

食料の補給は望めなかった。

50万人以上の兵と数万人の使用人を抱えていたのである。

余剰食糧などあるわけがない。

籠城は滅亡を早めるだけだろう。

「良いだろう。2万の兵を授ける。3州を奪回してヘザンに撤退させてみよ」

どうせ無駄死にだろうと思ったが、兵を与えた。

口減らしにはなるだろう。

「はっ。必ずルイスの首を取って見せましょう」

セリアは大見得を切って宣言した。

セリアはその夜、2万の兵でルイスの本陣めがけて突撃した。

「やはりそうくるよな。おい、民衆にあのことはちゃんと言ったか？」

奇襲を予期していたらしいルイスは兵に撤退命令を出した。

兵糧の補給が続かないのはルイス軍も同じである。

戦争で商船が通れないので、傾斜国からの麦が入手出来ないのだ。

しかも海軍ではルイス軍のほうが劣勢である。

エンドレ海軍は2隻しか残存していないが、それでもルイス軍が相手なら対応できた。

「はい。ルイス様が領主である限り税金は収入の40%であると触れ回りました」

「そうか。ではヘザンに撤退する。糧食の欠乏しているこの時を狙って猛攻を掛けてくるとはエンドレにも知恵者がいるようだ」

ルイスは、足手まといになる投降兵を先に監視付きで逃がしてから4万の兵と共にヘザンへ逃げ帰った。

それを追撃して15万に増えたセリア軍がヘザンを包囲する。

「この機に乗じてサーテ・とモラギーナを占領するのだ」

初めての大勝利に浮かれたセリアは最初の作戦を変更して直接モラ

ギーナを攻撃して散々に打ち破った。

そして強制的にサーターに宣戦布告させ、10万の兵で難攻不落の名城アルカニアンを攻撃させた。

ルイスはアミに5千の兵でアルカニアンを守らせ、本隊はセリア軍を牽制する。

ミストリアからの交易再開の交渉の使者はこの時来た。

ペレトンはここぞとばかりにミストリアとの同盟を提案する。

「ルイスさん。久しぶりですね」

まずは丁寧挨拶した。

「ようこそ。俺に用があるならあいつらの首を手土産にくれんかね？」

ルイスがいきなり条件を言い出した。

エンドレ王の首とセリアの首である。

この条件にペレトンは多少戸惑った。

ミストリアは、不殺の王国である。

ペレトンは答えてやった。

「良いでしょう。でもミストリアは人殺しはいたしません。平和的にエンドレを内部崩壊させましょう」

「ほう？ミストリアの謀略好きは有名だがエンドレも落とせるかね？」

ルイスはヘザンで兵力の精鋭化に勤めて、8万の精鋭部隊と2万の親衛隊を編成していた。

補給は続かないので何時までも雇っては置けないのだ。

占領地の金蔵や、商人からの信用貸しも、底をつけてこれ以上は望めない。

「ペレトンさん。エンドレなど後一押しで落ちる。その前に金が尽きればシャリー王の二の舞になるのだ」

ルイスにとって必要なのは金と糧食である。

金を前面に押し出す者は後世の評判が悪くなるが、この2つがなくて国家経営は出来ない。

ルイスは改めて、ペレトンにエンドレ討伐を依頼した。この時からペレトンは金に任せてエンドレ中に王の悪口を触れ回った。

信じ込むまで何度でも。やがてあまりに多く聞かされた悪口は、だんだん部下の信頼を低下させたようです。3ヵ月後、エンドレの將軍、アルト伯は国境守備隊を率いて反乱を起こした。

電撃的に首都を急襲。

全ての兵を殺さずに追い払ったアルトは、自立を宣言、アトナリ国を建国した。

其処へ、ペレトンの兵がアトナリ国を2百の兵で急襲。

アトナリ国は4日で滅亡してエンドレは5つに分裂してしまった。

その鮮やかな手際よさに流石のルイスも脱帽するばかりである。

モラギーナはこの勝利で後顧の憂いが立てたと思っただのかセリア軍は無視して12州の大国アドレン国と3州のメサイア国を攻撃した。セリア軍はエンドレ軍を見限り、モラギーナに降伏。

之を受け入れたモラギーナ王はセリアをメサイアに派遣して屈服させた。

サーテーではこの隙に、特産品のエールビールの生産に追われえていた。

之をエンドレで売りさばき、軍師金を得るためだ。

然しこのままでは取引は出来ない。

エンドレはサーテーの仇敵なのだ。

「ミストリアと同盟を結べば、中継貿易でビールを売りつけられる」先にイーボルト一派が差し出した白衣將軍を、400万デイルスの身代金でエンドレに引き渡したルイスは、闇商人ギルドと手を結び、エンドレにビールを売りつける計画を立てていたらしい。

然しこの計画は、ギルド側から取り立てる予定税収が、250万デイルスだった事もあって、頓挫した。

イーボルトが500万デイルスの税収を納めるから独占販売権をくれと言ったかららしい。

ギルドも、そんなことをされては困るので、イーボルトの配下に入り、結局ギルドが取引を仕切る事になったが、ルイスは知らない。他にも海の王国の財源確保の為に唯一漁が許されている、エティル・サーモンの輸出を始めた。

此方は、ミストリアに闇で売りに出す予定だ。

「ペレトンさん。紅茶の生産国はエンドレでもサーティーでもない。7州の大国ギルモア国なのだ。ギルモアを何とかせぬ限り紅茶の交易はありえない。エンドレの諸侯達と同盟が結べるように仲介してはくれんかね？」

ペレトンの要求は分かっていたのでルイスは正直に言ってやった。

「ジョン様は事を急いでいます。出来れば3ヶ月で紅茶を調達してほしいのですが・・・」

「無理だ」

ルイスははつきりと言った。

「エンドレを支配下に置くのに5年はかかる。ギルモア攻略は更に5年はかかるだろう」

占領するのは3ヶ月で十分である。

領地としてルイスの民として手懐けるのに手間取るのだ。

ルイスは2カ国を押さえ、残り5カ国を攻撃していた。

人を殺さず、捕虜にしなから少しずつ力を弱める作戦である。

そして適当な時期にペレトンを派遣して5カ国を降伏させた。

こうして9州を攻略したルイスは、ビールの販売権を握り、エンドレ領内で売りさばき、国力を充実させる基盤づくりに奔走した。

養鶏にも手を出してみた。鶏というものは便利な生き物で一日に一個のペースで卵を産む。

数さえそろえれば安定収入が保証されているのだ。

しかも有精卵でなければ命が宿っていないので僧侶が食べてもOKな筈である。

ルイスはこの鶏を大量に買いあさり、エティルブランドを立ち上げた。

株価は最初から2デイルスである。

この買占めでエティル・ゼフィナの他の国の株価は鰻登りに上がり、エティルの殆どの鶏がサーテに集まった。

鶏の値は、1羽7デイルスにまで跳ね上がり、エティル中で鶏の高騰による便乗値上げに苦しんだ。

卵は一個1デイルスである。集中的に有精卵ではない卵を、ギルモアに売りつけ、暴利を貪ると、その金でトレニア（黒豚）を1頭80デイルスで買い漁り、卵を与えて育ててみた。

トレニアもこの買占めによって異常高騰を続け、450デイルスまで値が跳ね上がってしまう。ルイスは子供の産めなくなった老トレニアを法外な価格で売りつけ、五百万デイルスを叩き出した。

この金は国庫に納められ、ルイスの居城メルビア城の建設費用に充てられた。

「ペレトンさん。紅茶が目当てならギルモアに行くといい。国王のギル・シャーンは温厚誠実な人の筈だ。それ故に安心して謀略を掛けられる」

エティルの農業を改革しようとジョン秘蔵の播種量7粒のシレーリムを播いて密かに育てていたペレトンは、ルイスの一言で追い払われた。

ルイスはこの播種量7粒の価値にきづいていない。

その為、折角ジョンから送られた播種量7粒のシレーリムを雑草としてトレニアの餌にされてしまった。

然しそれでも、経済的にギルモアを痛めつける能力は持ち合わせている。

ルイスの作戦によってギルモアの農業は壊滅的な打撃を受け、激高のエティルブランド製品を買わざる負えなくなった。僅か2ヶ月でギルモアは3億デイルスもの借金をする羽目に陥ったのだ。

「俺が何をしたって言うんだ？こんな理不尽な商売があつてたまるか。」

農業破綻し、農業収入の99.87%を失い、食料の無くなったギ

ルモア市民は逃亡して、エンドレに逃げ込んだ。その数200万人。之により、ギルモアは市民税も取れなくなり、軍隊は崩壊。6州の長官が食料を求めてサーターに降伏した。こうなるとギルモアに選択の余地は無い。王家の娘エミリーとルイスとの縁談を条件に降伏するという策に出た。

ちなみにルイスの妻は肺結核で死亡している。

喪が明けぬうちにルイスの姫と同じ名前の娘との縁談を持ってきたギルの失礼な態度にルイスは激怒した。

「何？縁談だと。ギルは血迷ったのか」

ルイスは大笑いをして嘲った。

今頃和議など結ぶ馬鹿な国王など世界中探したっていないさ。

既に味方の大勝利で、しかもギルモアには食料が無いはずである。降伏するなら無条件降伏しろといえる立場であった。

「君は今がどういう状況なのか分かっていないようだね」

ルイスは高圧的に言い渡した。

「無条件降伏だ。それ以外認めん。帰ってギルにそう伝えよ」

之に対して会見に出席した使者はこう答えた。

「ギルモアの皇女を娶ればお前が正式なギルモア王だ。他に直系の子孫はいないのだから。それでも無条件降伏しろというのか？」

ルイスは鼻で笑った。

「俺はギルモア王ではない。エティル王を目指しているのだ。モラギーナもペクダールもいずれ俺の物にしてみせる。俺はお前らの手は借りない。ただ・・・。」

そこでルイスは少し考えた。

「紅茶の權益をくれないかね？それと5ヶ国割譲するなら考えてやろう。暫定的な処置だがね。」

この言葉にギルは呻いた。やはりこのルイスという男俺から全ての權益を奪う心算なのだ。「くそう、あのペレトンとかいう子供さえいなければ今頃俺は世界1の皇帝になれたのに」

そう言いながらもギルは持参した5州の株をルイスに渡した。

「偽者だつたらエミリーとお前は処刑する。この者を軟禁しろ。兵はギルモアに進軍させる。」

それを聞いたギルは慌てて言う。

「待ってくれ。俺はお前の言うつもり降伏したのだぞ。お前にやつた5州にちゃんと茶畑もある。俺の民には何の責任も無いだろう？」
ルイスは冷淡に宣告した。

「俺の領地に進軍して何が悪い？お前を王に対する不敬罪で処刑する。者共。この謀反人をこの場で処刑せよ」

「ひい、助けてくれえ」

ギルは必死に命乞いを始めて助かろうとした。然しルイスは許さない。

「斬れ」

ルイスの命令は即座に遂行され、ギルモアは滅亡した。

ルイスは、ギルの首を火葬して散骨すると進軍命令を出した。

「モラギーナが余計な干渉をする前にギルモアを滅ぼすのだ。エン Dreの兵をギルモアに向かわせる。幾ら犠牲者が出ても構わぬ。3日でギルモアを征服するのだ」

そうしないとセリアがモラギーナをたきつけて、サーテーに侵攻してくるに決まっている。

時間は無いのだ。

「之で俺は南エティルの王になれる」

ルイスは味方の勝利を確信していた。

動かした兵はたったの2千だが、内部崩壊を続けるギルモアなら丁度いい。

ルイスが派遣した兵はギルモアの逃亡兵を吸収しながら、州都を占領した。

1部の者がマクユイと合流してレジスタンス、炎風を結成。

ゲリラ戦でルイス軍の侵攻を10日間遅らせた。

之がルイスにとって仇となる。

案の定、沈黙を守っていたモラギーナがセリアに唆されて軍をサーテーに送ったのだ。

迎え撃ったルイス軍は、国境沿いに引き上げて守りを硬くしたモラギーナ軍に手も足も出ず、持久戦に持ち込まれた。

後方はセリア率いる軍団によってあっさりとは分断され、蜂起したエンドレの5将軍を糾合しながらサーテーを襲った。

然し以外にも国民はセリアを見限り、ルイスに味方した。

アルカニアンに侵攻するセリア軍の背後を襲い、補給を断ったのだ。セリア軍はエンドレを占領。

ルイスは仕方なく自分に味方する者には、税金を2割に減らすと言いつらさせた。

「父上。私が行きましょうか？」

ルイスの娘、エレナはルイスに進言した。

渡河作戦で、エンドレ軍15万を撃破した名将である。

疲弊しきったエンドレなど、エレナの敵ではない。

「私が出陣とあれば子供と見くびってセリア軍は全軍で出撃してまいります。そこを徹底的に殲滅してエンドレを解放いたしましょう」

エレナは大見得を切った。

ルイスを言いくるめて兵を借りれば後は気魄で押しとおす心算なのだ。

「いくらいる？5千位か？」

エレナは即座に答えた。

「50名もいれば敵軍の敗残兵を合わせて10万位にはなりません。

ご懸念は無用です」

エレナはそう言うのとルイスの指示を待った。

ルイスは考えた。

どうせ次女だ。

ルシーさえ生きていれば問題ない。

ルイスはエレナをセリア討伐に派遣する事にした。

「やってみる。成功したらエンドレの港を1つやる」

ルイスは無理矢理に3千の兵をエレナに与えるとエンドレへの進撃を命令した。

エレナはその日の内にヘザンに入城して統治権を太守から剥奪。迫ってきたセリア軍を散々に奇襲して追い払った。

双方に犠牲者はいない。セリアは首都に立てこもり、敗残兵をかき集め、再起を図ろうとした。

然し思いがけない敗戦で兵士の心に恐怖が暗い影を落している。やっと4千集まっただけであつた。

エレナには生来の人徳があるようでこちらには8千の兵が集まってきた。

セリアを見限つた敗残兵である。

「セリアには降伏の使者を送りなさい。出来るだけ怖そうな人を送るのですよ。気魄で敵の戦意を喪失させるのです」

エレナは恐持て男で有名なカールをセリアの本城に送りつけた。然しその工作は無駄に終わりそうだ。

セリアは初めての敗戦で気力を失つたようだからだ。

「私は逃げる。お前達はルイスに降伏するといい」

そう言つと一目散にモラギーナに逃げ帰つた。

その後でエレナが4万人に増えた軍隊を率いてエンドレ全土を奪回する。

エレナは住民の歓喜の声と貢物に迎えられた。

褒められて調子に乗つたエレナはギルモアに侵攻。

抵抗する兵を一蹴して首都を落し、全土を支配した。

この間双方共に犠牲者はいない。

マクユイと炎風は東の山岳地帯に逃げ込み、抵抗を続けた。

それゆえエレナもギルモアから撤兵するわけに行かない。

仕方なくルイスの指示を待つ事にした。

「エレナ様。次はどういたしますか？」

物好きな兵士が尋ねてきた。

略奪の許可を待っているのだ。

「略奪は出来ない。あたしに免じて略奪を諦めてくれないか？この国はもうルイス王の領地なのだ。略奪などしたらあんたらは皆殺しにされるぞ」

その言葉に圧倒された兵士たちは渋々略奪を諦めた。然し食い下がるものもいる。

「エレナ様が褒美の領地をもらつたらちゃんと請求しますからね」全員分保証したらどう考えても1千万デイルスは掛かりそうだが然し恩賞はきちんと与えなくてはいけない。給料で雇われているミストリア兵とは状況が違う。

所詮恩賞を餌に掻き集めた烏合の衆だ。

「あたしはサーターに戻る。あんたらはギルモアを炎風から死守せよ。」

そう言うともースに乗り、一目散にサーターに戻った。

「父上。反乱を平定して戻りました。ご懸念の無いよう、軍はギルモアに置いて来ております」

エレナは神妙に詫びを入れた。

「つい調子に乗り、ギルモアを制圧してしまいました。如何か処刑だけは身内に免じてお許しください」

こう素直に詫びを入れられるとうっかり処刑するわけにはいかない。ルイスは優しく言った。

「お前を軍功によりギルモアの太守に任命する。一応左遷だから5年間は任地から出てこないように。それから勝手にギルモアに兵を進めた罰として王位継承権を剥奪して伯爵に降格する」

エレナはそれを聞いて思った。

私をギルモアの太守にするあたり、やはり子供だと思って甘く見ている。

「父上。話を聞いてください」

エレナはわざと不満そうな声を出した。

大人しく受け入れられはかえって叛意を疑われる。

「王の命令である。それとももつと降格されたいというのかね？」

「そっそれは」

エレナは悔しそうに俯いた。

そして拳を握り締めて言う。

「分かりました。陛下の思し召しのとうりにいたします」

エレナは軍権も守備兵4千のみとされ、ギルモアに左遷された。

反乱の序曲

(2) エレナは領地に赴任すると農民をかき集め、公定価格で作物を買う事を条件に農業に復帰させた。

そして物価高騰の原因となりし、鶏の増加に全力を投入。

ミストリア出身の怪しげな商人から買い付けたり、商人を拝み倒して借金をしたりして鶏の買い付けに精を足していた。

都市の民には重い税を課し、(6公4民)軍資金を商人や職人に献納させる。

廃村になった農地は、取り合えず屯田兵に耕させ、鹿や猪、狼などの当座の食料の確保に努めていた。

エレナは、国内の夜盗討伐にも力を注いだ。

ギルモアはルイスの経済封鎖で疲弊しきっている。

景気対策に、女官を30万人を、現物支給で雇ってみたが、ギルモアの主要都市ザナハント

改名された首都のゼネシアを潤わせるに止まった。

この2都市からの収入は25万デイルスである。

エレナは、失業者救済の為に大規模な海軍の増強を決定して、800トン級戦艦4隻の建造に着手したのだ。

兵員と船員も、総勢1200名が訓練を受け、1万人以上の雇用が生み出された。

エレナは、ルイスと組んで鶏の相場で、大儲けしていたらしい商人ギルドから献金させ、その金で農民を50万人雇用して、人口の増加にも勤めた。

ギルモアで一旗挙げようとした、エンドレ人のみが集まったが、エレナは気にしない。

エレナは雇用対策に、兵を8万人雇うと16万デイルスの給料を出し、国庫の食料庫を開いて民衆に分配した。

兵士用の食料は、最近数を増した大蜥蜴のパラトルクと狼肉、兎や

猪などの肉である。

野菜は、ミレイド産の玉蜀黍などであった。

「最近金が底をついてきてね・・・、如何する？」

エレナは、雇用対策で掻き集めた兵士達に尋ねた。

「ここでいいアイデアを出す者がいれば、將軍に昇格か、中央官僚になれるところである。」

「アリシアとは同盟を結び、ミストリアは友好国であります。アリシアとミストリアを和解させ、援助をこの2国から受ければよいと思います」

エレナ軍少尉の（部下5人）マルクは、常識的な意見を述べた。

「私はミストリアには援助を仰がない。お前達はあたしがあのブルマー好きの変態王の配下に、なった方が良いと言うのか？あたしはアリシアにつく。父上がミストリアと事を構える気がないなら話は別だけど・・・」

エレナは、ミストリア王に偏見を抱いているらしい。そう断言した。

「イーボルト商会の援助を受けるのですか？あの方が何故ギルモアを追われたかご存じないのですか？」

その理由を知ったら、ギルモアを援助しそうな国は、地上から消えてなくなるので理由はいわなかった。

エレナは少し不審げに部下達を見たが深くは追求しない。

「イーボルトさんの恋人のマリー姫は、アリシアの名将と聞く。味方にすればミストリアとの戦いに有利だよ」

エレナはマルクを、献策の褒美に陸軍少将（部下1万人）に任命して、ゼネジアに屋敷を構える命令を出した。

マルクは、有り金をはたいてゼネジアの王城より豪華な屋敷を4日間で作ってしまい、その才能を買われて、新たに新設した工兵隊の司令官に任命される。

之を知ったペレトンは、ジョンへのゴマすりの為に、マルクを5億デイルスで雇ってパタレーンに巨大な城を造らせてジョンに酷く褒

められた。

マルクはペレトンと交渉して、ミストリアのなけなしの食料と家畜を少し分けてもらい、ギルモアの経済再建に多大に貢献してみた。そしてエレナは、この3ヶ月で、ルイス侵攻の前の水準まで鶏の生産量を増やした。

然し如何言う訳か、鶏の値は下がらない。

「エレナ姫。何物かが買い占めているのでは？」

事の真相をいち早く悟ったマルクは、ミストリアに疑いの目を向けた。

然しそれなら有能な部下のペレトンを派遣する筈がない。

ならイーボルト位しか容疑者がいなかった。

ギルモアは気付かなかったようだがアリシアも養鶏をやっている。

買占めの影響を受けなかったアリシアでは一羽1デイルスで売られていた。

之を知っていたギルモア王の勘当王子、イーボルトはここで仕入れた鶏をギルモアで大量に売りさばき大金を得ているのだろう。

アリシアにはイーボルト商会の本店が存在し、他の商人から営業税をとれる特別の権利まで得ていた。

それを聞きつけたエレナの侍女サモーナは早速援助をもらうようにエレナを説得する。

この次女は真相を知らないようだ。

「姫様。援助のあてがあるとすればイーボルトしかいません。積年の恨みは忘れて和解するべきです」

エレナは之を拒否した。

あんな卑怯者共にどの面下げて従えと言うのだ？

「あたしが？まあ良いけど、あいつは援助しないとと思うよ。それより国産鶏をブランド化して高値で売りつけながら徐々に値段を下げる方向で行ったほうがよい。出来るだけ早期に有精卵を5億個を調達するのだ。今、鶏の値を下げればアリシアがこの地に侵攻してくる。イーボルトが損をするからだ」

それでもエレナは手下をアリシアに送ってアリシアの鶏を2デイルスで買い取り、5デイルスでギルモアの富裕層向けに販売した。この大幅な値下げに養鶏で暴利を貪っていたルイスは理不尽な怒りをエレナに向けた。

然し合法的に商売をしているエレナに文句を言うわけにもいくまい。新たな嫌がらせの方法を模索した。

「月800万デイルスの税金を払え」

ルイスは言いがかりとしか思えない新税をエレナに要求した。

現在のギルモアの人口は1200万人（乳児も含む）であり、農業は破綻。

商業も破綻寸前。

4万デイルス位しか金は無かった。

勿論儲けは全て雇用対策と農業の復興につき込まれている。

「ふざけるんじゃない」

案の定エレナは怒り狂った。

「ルイス王は御自分でギルモア経済を破綻に追い込んでおきながら税が取れると本気で信じておられるのか？」

側近の黒仮面卿にエレナは尋ねた。

黒仮面卿は仮面の中でククと笑いながら答える。

その仕草がエレナの気に触ったが黙っていた。

「ルイス王は試しておられるのですよ。然し最後まで税の納入は遅らせた方がいい。山賊に命じて正式な使者を軟禁して催促の命令書を奪えば、後は知らぬ存ぜぬで半年は持ちこたえられます。その間にギルモアを再建すれば良いでしょう」

黒仮面卿の進言にエレナは躊躇した。王命に逆らうのは武人としてあるまじき行為である。「実際払えないなんて言ったら姫は太守の地位を剥奪されますぞ」

エレナの心情を察した黒仮面卿がたきつけた。

「俺がやってもいい」

エレナに甘い誘惑を吹き込み続ける黒仮面卿にエレナは疑惑を覚え

た。

（この男はルイス王の放ったスパイかもしれない）

子供が財疑心を持つと厄介だ。

理屈でやり込める事が出来ないからだ。

「税を誤魔化すのは金策に失敗してからでも良い。アリシアとの鶏交易を続け、税を捻出する。2、3ヶ月はこれでもたせるのだ」エレナはルイスの送り込んだ徴税官を引見すると言い放った。

「ギルモアでは4万デイルスしか税収入は無い。どうやって払えと
いうのか？ルイス王は何に税金を掛ければ800万デイルスもの大金を捻出できるか言っておられたか？何の根拠もなしに税を払えとは言わないだろう」

徴税官は威張って宣言した。

「ミストリアが欲しがる紅茶があるではないか。ペレトンという娘は紅茶を欲しがっていた。その権利を貸し出せば月1千万デイルスにはなる筈である。前ギルモア王が健在であった3ヶ月前は紅茶収入が国庫の7割を占めていたらしい。それに比べりゃ安いものだ。どうだね？」

エレナは物凄い形相で徴税官を見た。

「紅茶は輸出規制によって持ち出せない。ルイス王は紅茶の売買を認めたのか？帰って聞いてきてくれないか」

エレナはこの不快な徴税官を言い包めて追い払ってしまった。

「黒仮面卿。紅茶畑の再編に取り掛かれ。紅茶の密貿易で800万デイルスを入手する」

エレナはこの時背信を宣言した。

ルイスは軍人であって政治家ではない。

あの男ではエティルは路頭に迷うであろう。

エレナは軍隊を増員して、正規軍2万を新設すると、ルイスに対抗する地盤作りに乗出した。

ペクダール大帝国の西の島大陸へ山賊を装って侵攻。

人口4千万人のアトポック大陸を手中に収めて賠償金2億デイルス

と、国庫に納められた6千万デイルスを入手したのだ。そしてもう1つの属領サーシア大陸も割譲させた。人口は1800万人である。

この2国を押えた事によつて、税金の800万デイルスは払えるようになったのだが、一度芽生えた反逆心は抑えられない。

「姫。この調子でペクダール本島も攻略してしましましょう」65万人に増えたエレナ軍はひとまず軍をギルモアに返して800万デイルスの税金の撤廃とルイス王の辞任を要求した。税金問題がエレナのクーデターの動機である。

何処の世界でも無茶を言うから反乱が起こるのだ。

「何だと。エレナが反乱を起こしたというのか？」

ルイスは之を聞くとエンドレ国の元宰相に、30万の兵をつけてエンドレに派遣した。

ガイには、海軍12隻を任せ、港からギルモアをつかがわせる。

「何故反乱など起こしたのだ？」

ルイスにはその理由が分からない。

「エティルの派遣が欲しくなったか？」

ルイスサイドの人間はそう解釈した。

ルシーは既に諦め、エレナを受け入れるようにルイスを説得している。

「妹に理不尽な税金を要求するから怒つて反乱を起こしたのです。

こうなつては大人しく軍門に下るしかありません。ルイス王の配下には、エレナと互角に戦える将軍がおりません。軍は瞬く間に敗走するでしょう」

之に対してルイスは激怒して言った。

「俺は辞職などせんぞ。直にエンドレの兵をかき集めてエレナ討伐に行かせるのだ」

「無駄です。その前にエンドレは落ちるでしょう」

ルシーはそう言い切った。

たったの4ヶ月で3ヶ国を落す戦術家にルイスの兵がかなう筈は無

い。

案の定、ルイスがエレナ討伐の兵を編成していると本人が知ると、エンドレに侵攻。

かの地を占領した。

例によって犠牲者は0である。

之を知ったルイス軍は崩壊して600人にまで減り、ルイスは、クーデターを起こしたルシーの侍女6名によってたかつて捕縛された。3日後にはサーターとエンドレ、エレナ領は合併。

神聖エティル・ゼフィナ帝国が誕生する。

皇帝はルシー。宰相が2歳のエレナであった。

皇帝に実権は無く、宰相が全てを取り仕切る軍事独裁帝国である。

ルシーは政権を取るとエレナと謀って、紅茶交易を再開する為に、モラギーナで待機していたペレトンを呼び戻し、一人の1月分辺り7デイルスで紅茶を売る事を宣言した。

「本当によろしいのですか？確かに高いが15デイルス位は出しても良いですよ」

ペレトンがうっかりと言ってしまった。

然しエレナは穏やかに言う。

「暴利は敵を呼び低利は福を呼ぶ。汝欲を出す事なかれ」

エレナはギルモアの再建のことしか頭に無いらしい。

5千万羽の鶏を所望した。

「あたしを助ければミストリアはアリシアを攻略できる。あたしがアリシアに付く事がないからだ」

アリシアとの同盟をちらつかせ、揺さぶりを掛けた。

この辺の外交手腕は直情過ぎてあからさまだとペレトンは思った。

「送らしましょう。紅茶交易は再開されると報告してよろしいですね？」

ペレトンは念を押した。

「勿論よ。出来たら農業技術に長けた魔法使いを送ってくれれば嬉しいな」

エレナは欲を出して言ってみた。

「王に会われますか？ご希望の農業経営者のジョン王なら破綻した農地の復興に力を注ぐでしょう」

エレナは嫌味を言われていると思ったようだ。

あのブルマー好きのロリコン王に会ったら何をされるか分からないじゃないか。

「いやいい。鶏だけで復興させて見せる」

エンドアには1500万人の民がいる。

税収は300万デイルス間で回復していた。

之だけで何とかなるだろう。

エレナはそう確信していた。

「エレナ。良いのか？ミストリアは援助してくれると言っているのだぞ」

皇帝ルシーが皇帝の椅子から声を掛けた。

「姉さん。あたし達はミストリアの属国になるつもりはありません。経済的に依存すれば何時か制圧されてしまっはすです。紅茶交易だつて危険なのですよ」

それでも農業技術者は送ってもらった。

エレナは政治的にも優れているらしく3圃制なる新農法を考え出していた。

ミストリアの農法は基本的に2圃制である。

もう少し時間があれば経済力でもミストリアに対抗できるとエレナは信じていた。

「ジョン王が望むのは紅茶交易の利益だけです。後でどうなるかは分かりませんが、今の段階ではジョン王はエティルとの友好を心がけております」

ペレトンが慌てて言った。

「ではミストリアに報告しに戻ります」

そう言うとペレトンはその場を立ち去った。

「あれでよろしいのですか？」

黒仮面卿がエレナに尋ねた。

「アトポックが4000万人。（エルフ）

サーシアが1800万人。（メデューサ・ハーフ）もいる。

税収は問題ない」

問題なのはミストリアかペクダールの反撃を食らったら瞬く間に敗れ去る事だ。

エティルの首都はアトポックの東方漁港に定められた。

ペクダールの反撃を封殺する心算なのだ。

然し之によってミストリアはアリシア侵攻のチャンスを得た。

食料自給率がついに149%を超えたミストリアは自ら特訓して鍛え上げた18万の大戦士にて圧力をかけ、恐れをなしたアリシア兵が1人また1人と逃亡を企てた。

反アリシアの弱小貴族がジョンに寝返り、アリシアは次第に追い詰められていった。

局地戦では、マリーの軍がミューファ軍を圧倒していたが、幾ら敗れてもゾンビの如く戦力を立て直して、奇襲をかけるミューファ軍に、兵は疲れ果てている。

「かくなる上はエティルに援兵を送ってもらうのが最善の策かと思えます。エティルの次の目的はミストリアかモラギーナに決まっております。ミストリアに味方すればパタレーンとミレイドを征服した後、エティルが攻撃の対象になるからです。どうせやるなら早めに各個撃破するはずです」

アリシアでこのような会話がなされている頃、エレナは、モラギーナとアドレン国（12州）とメサイア国の3カ国を滅亡させ、東方領土からマクユイを追い払った。

モラギーナだけは何故か家名の存続を許され、港町ピンチを与えられた。

人口34名の廃港だが無いよりはましである。

怪我人が双方の89%に及ぶ激戦であったが不思議と犠牲者は出ない。

傷を直す事のできる僧侶業が大繁盛して20億ディルスもの税金がエレナの懐に入ってきた。その上機嫌のエレナに不吉な知らせを持ち込んでくる。

その男は口上を述べた。

「アリシアからの援軍要請だと？国土が之だけ増えてしかも東南に仇敵を抱えている状況で兵など出せるか。ペクダールの反撃に備えて海軍も編成しなければならぬし、第一補給が出来ない。残念だがあんたらはミストリアに滅ぼされるしかなさそうだ。それに最も重要なことはミストリアとは交易を始める事となった。貴国に援兵など送れる筈は無い。それに援兵を送れば貴国はエティルの属国となるだけだ。それでも良いのか？」

それは困る。然し援兵は送ってくれねばアリシアはお仕舞いだ。

「お願いです。援軍を送ってくれれば月150万ディルスの貢物を納めさせていただきます。何ならアリシア特産の1200トン級の大型ガレー船アルカルトの製造方法も伝授させていただきます」

「ほう？」

エレナの目が興味を帯びてきた。

「アルカルトの製造方法を教えてくれるのか？ミストリアを追い払えばよいのだな？」

エレナは不覚にも男の口車に乗り、援兵を出す事を承知した。

節操のない外交だが普通こんなものである。

庶民上がりの姫であるので、考え方が極めて小市民だ。

「6万人しか出せんぞ。それでも良いか？」

エレナは即断すると50隻の400トン級船でパタレーン北の海域に船を駐留させ、ミストリアの補給線を分断した。

之にはジョンも激怒した。

得意満面の笑みを浮かべながら成果報告をしていたペレトンはたちまち周囲の冷たい目に晒され、一時的に投獄された。

そしてラーゼルの船大工に命じて強弩級戦艦(2500トン)の製造に取り掛からせる。

ドルクレンが何故か総指揮を取らされた。

船大工出身の彼ならそれくらい出来て当然と思われるらしい。

ドルクレンは恋人のトルハと謀って50万人もの農民（未成年の男女）を金で雇い、大海軍の設立に全力を注ぎ始めた。

陸上兵の方も250万人の男性（女性は志願制で37人）をかき集め、訓練を施し始める。

給金は30デイルスだ。

その間エレナはパタレーンに侵攻。

4日で全土を攻略。アリシアにその領土を献上した。そして逃げるミストリア兵を捕虜にして身代金4億デイルスをミストリアに出させてその部下を解放する。

ジードンとパルキアは辛うじてエレナの侵略を防ぎきり、ミューフアは援軍の派兵を本国に要請した。

ミューフアは、魔將軍ギラルルに軍勢を預け、海軍の停泊地を襲撃する作戦に出た。

「流石はエレナ姫。あの凶暴なミストリア兵を簡単に追い払うのですからな」

アリシア王はエレナがミストリアを追い払うと、何だ弱いじゃないかと思つたらしい。お世辞は言つても約束を果たそうとしない。

それどころか暗殺者を送り込んでエレナを殺そうとした。報酬を払えば海戦で勝てなくなるからだ。

「ミストリアさえ追い払えばあたしは用済みなわけね」
怒つたエレナはその日の内に海軍を率いてアトポックに帰ってしまった。

そこでアトポックを奪回しようとするリースの海軍と偶然遭遇。之を打ち破り、兵士全員を捕虜にした。

「何？エレナがエティルへ帰つたと言つのか」

ジヨンはミストリア1国に領地が減ってしまったこの状況でも之を喜んだ。

然し直ちにパタレーンに再侵攻する気はないようだ。

「240万人の大人が懐妊しているようだ。戦争をしてミストリアを戦火に巻き込むわけにもいかん。しばらくは捨て置け。それからシレーリムの播種量を増やして国力の拡大と技術向上で、失った領地の穴埋めをする」

ジョンはアリシア攻略作戦の不利を悟ったらしい。

圧力を掛けるだけで再侵攻する気は本当にないようだ。

ジョンはスク水とブルマーの販売価格を2デイルス上げて2千万デイルスもの大金を得て、アリシアの豪商アドバン出版の株を20%買占め、反撃してみた。

アリシアは、増資により抵抗。

之が他の株主の反感を買って、株価が急落。

社長が解任される騒ぎとなった。

之がアリシアの経済を圧迫して、同業者が2社ミストリアに寝返り、世論は一気にミストリア派に優位に働いた。

金の力で買収されたアルトニア領を収めていた太守が、ミストリアにわざと敗北して、領地を明け渡したのだ。

マリーは太守の軍に包囲され、敗北して本国に逃げ帰った。

エレナはその隙に、アトポックの復興に力を注いでいた。

雇用対策にエルフの兵150万人を編成したエレナは、海軍と貿易船の生産に没頭。

之を使つて特産のエルフの雫なる鉱物と、蜂蜜に香辛料などをミストリアに運ばせ、交易をしている。

戦争はしていても、経済封鎖を仕掛けない限り、交易は続く。

両国とも交易で資金を調達しているのだ。

ミストリアは、特に産物がない為に、資本は急速にエティルに流れ込み、ミストリアは物価高に悩まされ始めている。

ジョンは食料をエティルに送り、金貨を得ていたが、徐々にエティルに経済力で押されていた。

ジョンは群臣を集めて聞いてみる。

「ところで兵士諸君はシヨセルを知っているかね？持っていたら一

粒500デイルスで買いたいのだが。別に怒ってはいないさ。只、播種量12粒のシヨセルを譲って欲しいだけなのだ」誰かがジョンに密告したのだろう。

慌てて兵士達は口を開いた。

「あれは大量の水を使います。本格的に栽培をすれば水不足に悩まされるでしょう。連作は出来ませんが」

それを聞いたジョンは早速部下のシヨセルを買い漁り、試験農場で栽培を始めた。

とにかく播種量と飢饉に強いシヨセルを栽培してシレーリムと掛け合わせる心算なのだ。

シヨセルとシレーリムは同じ種でDNAも100%一致する。

畑作か稲作かの違いだけだ。

「おい、ドラゴン。あんたらは炎の吐息でシヨセルを温めて成長を促進させる」

ジョンは金龍にそう命令すると自分がかねてより計画していたラーゼルの観光地化を推し進めた。

エレナが幾ら交易品で優勢でもミストリアには切り札があった。

クレスア特産のスク水とブルマーだ。

ミストリアでは国王、ジョンの趣味の影響もあって青のワンピース水着が大流行して試験的に遊泳区域に指定されたラーゼルン島では泳ぎが楽しまれていた。

こうなると観光客の輸送を担当する会社も出現して、土産物屋も現れた。

税収だけで月6億デイルスを越える月もあったのだ。

しかも船会社が需要の拡大に応じて船を増産。

6家の船成金が出現するほどである。

その6家が美術品を買い漁り、芸術家が急速に台頭したのだ。

この収入も合わせて15億デイルスになる。

そんな急成長のミストリアをエレナは脱帽して見ていた。

「ミストリア本国を叩いておかなかつたのはあたしの不徳ね。こう

なつてはもう手が出せない。後2年早く生まれていればあたしは天下を盗つて見せたのに」

宮廷絵師のギャラハンがミストリアに寝返るに及んでエレナは早くも己の敗亡を悟つたようだ。

使える金は全て農村の復興に注がねばならず、農業国として出発せねばならないエティルではミストリアには太刀打ち出来ない。

商業を行い、産業を興そうにもジョンのようにブルマーネタを使うわけにも行かず、農村のストライキにより女子を登用するわけにも学問をさせるわけにもいかない。

男を登用するにも食うのに精一杯で学問をさせる余裕が無いのだ。

極め付きはエレナが女性であるという事である。

ジョンのようにやっても男をかき集めても（反乱が起きるくらい）自身の評判が下がるだけだ。

実際ストライキも起こっている。

女官を桁外れの50万人かき集め、教育を受けさせたが（エレナは教育を受けている）それだけでも3回叛乱が起き、武力で鎮圧したトート州をモデルケースとして女子に教育を受けさせた。

魔法使いが身内に一人出れば月収1万デイルスの左団扇が待っている。

然しそれでもエレナはたったの9人しか魔法使いを得られなかった。全員男である。

「姫。やはりこの国で女子教育制度は早計かと」

黒仮面卿は権力づくでかき集めた貴族の令嬢に囲まれながら忠言した。

言わずと知れたジョンの物まねである。

愛人という名目なら教育を受けさせても文句が少なかった。

「俺がやるなら問題は無いからな」

黒仮面卿はこの750人の弟子（全員女性）に魔法を教えているらしい。

「如何すればいいのだ？あたしは女の子の部下が欲しいのよ」

エレナは叛乱を電光石火の早業で鎮圧して、エティルを制圧すると女子の教育権を宣言した。この間1年も経っている。

ジョンが大艦隊を3千隻編成してミレイドに圧力を掛けていた頃だ。ジョンは蓄えた金で武器を注文して鍛冶屋の魔法使いに魔剣を造らせている。

758名に増えた大魔法使いと弟子2274名+5312名の見習いはアリシア18州を脅迫。保護国化していた。

アリシアは、強大なミストリアに抵抗できずに、和議を測り、停戦している。

播種量はシヨセルとシレーリムを掛け合わせた結果、シレーリムが10粒となり、食料自給率が180%に跳ね上がってしまう。

ジョンは傾斜国との取引を中止して今年生まれた310万人の乳飲み子を養うためにシレーリムをたらふく母親に食べさせた。

アリシアでは150万人の子供が生まれたが480万人近くが家族総出で宗主国となったミストリアに移住してしまう。

戦乱で経済が崩壊しかかっているアリシアでは子供を養えないからだ。

残りは480万人の老人と子供だけになってしまい、アリシアは弱小国に転落した。

貴族の中で残ったのはイーボルトとその側近だけである。実はこの男、スクール水着フェチのロリコンなのだ。

当然側近は14歳位の(エルフ)少女5人である。

全員スクール水着やブルマー姿でイーボルトの側に侍っていた。性道徳に厳しいアリシアでは鬼畜にも劣る行為である。

この辺の感性の違いがミストリアとの戦でアリシアが敗れ去る遠因となった。

「貴様の趣味がアリシアの敗因だとは思わんのか？」

アリシア王バトミント1世は食料を調達できなかった己の不徳を棚に上げ、イーボルトを怒鳴りつけた。

既に側近はミストリアに降伏して、残っているのは彼だけだ。

イーボルトはアリシア王の嫌味を無視して逃亡を進めた。

「王。ミストリアは確実に貴方の首を狙ってますぞ。早く逃亡した方がよろしいのでは？」イーボルトは、この愚王に付き従って最後まで王の側にいた。

自分の特殊な趣味を黙認してくれた王朝がアリシアだけだったからだ。

ジョンの支配するミストリアならさぞかし住み心地が良いだろうとも思ったがアリシア王を見捨てるわけには行かない。

然しアリシア王は、イーボルトの趣味に理解は示さないし、無能だとアリシア王がそう思っているから、イーボルトは三国1の名将と歌われながらどの国も軍人として登用しようとしれないのだ。

ギルモアを追い出されたのもギル・シャーンの最も可愛がっていた孫娘のマリー・リザーヌと（イーボルトの叔母に当たる。当時13歳）スクール水着姿で淫行に及んだせいだ。

当時イーボルトは15歳。恋愛自体はギルモアの法律では問題ないのだが、スクール水着での淫行がギルを激怒させた。

ギルモアのしきたりでは変態の二文字から逃れられない。

当然マリーと共に国外追放となった。

そして各地を放浪しながら同じ趣味の少女4人をかき集め、アリシアに流れ着いたのだ。

その国でさぞ酒池肉林に励んでいるかと思えばそうでもないらしい。とつかえひつかえ、6人で3日間大乱交に及んだ末、話し合い、やはり未成年の淫行はよくないと意見が一致して、18歳になるまで自粛する事にしたのだ。

然しそれでも汚名は拭い去れない。

アリシア王はついにイーボルトを登用することは無かった。

「お前を匿ってやったのはこの俺だ。お前の財力で兵が雇えると思っただけだ。こうなってお前のような変態王子に用はないわ。さっさとこの国から出て行け」

之を聞いたイーボルトは5人の少女を引連れ、ジョンの下に走った。外国ではブルマー、スクール水着の大好きなジョンが夜な夜なスクール水着やブルマーで大乱交を繰り広げている事になっている。ジョンがそういう口実で女の子に教育権を与えたのだが案の定誤解を生み、イーボルトは、ジョンの事を自分と同じ趣味の国王と思っただの。

「ミストリアに行けば俺を登用してくれるだろう」
才能はあるのにフェチな趣味が災いして仕官口が無いイーボルトは最後の望みをジョンに託した。そして愛妾の一人、ラナはイーボルトに先立ってジョンへの手紙を届けに船に乗り込んだ。

大洪水作戦

(3) 「何？イーボルトとな。その者は何者なのだ？如何してこの国に来たのだ？」

ジョンは不審げに軍師のトルハに尋ねた。

王国では、新しく配下に加えた、クデル將軍とイベラーク將軍をそれぞれ一万人の少將に採用したばかりである。

新たに財務省にコルコット総裁。

文部大臣にエレナの手を逃れてきたルイスを登用した。

実はエレナに通告して迷惑料として紅茶を貰っていたりするのだが本人は知らない。

元ルイスの部下の、アーケノイドは白仮面卿を名乗り、白衣の宰相と呼ばれる軍参謀総長に就任した。

白鷺はミストリア軍中将（部下5万人）、白衣將軍は中尉副官。

ガイはミストリア軍大将。（部下10万人）

ルイスの兵5万は、マーキュリー將軍に取り上げられた。

アリシアと和議を結んだ時に、接收した海軍は、増強して総数6500隻の大艦隊と化している。

実験的に製造された4千トン級戦艦も、何とか完成していた。

海軍司令官は、ゾンビ指令クルザームに、製造方面は大僧正ドツペリーが兼任している。

リザーは、金龍を再編成して、飛流軍団を組織していた。

試しに、ミストリアに抵抗する島をクルザームに攻撃させ、兵士を生け捕りにすると、放逐した。

アリシア方面では、徹底抗戦派のマリーとミューファアが激突。

マリーの軍を山岳地帯に追い詰め、降伏させる。

身柄は、アリシアに送り、イーボルトが保護した。

之に怒ったイーボルトがミューファア軍を三千の兵で奇襲。

之を蹴散らしてアリシアの山、ピクロスの城にて兵を募り、独立す

る。

たちまち3万の兵を掻き集めたイーボルトは、アルトニア領に侵攻して駐留していたミューフア軍を蹴散らし、その兵を併せて、15万の兵でアルトニアを支配下に置いた。

アリシアはこの機に、兵力の再編と国力の回復に取り掛かり、アルトニアに食料を援助した。

イーボルトは商会の倉庫に収められている、陶磁器を代金としてアリシアに送り、武器や防具を調べてミストリアとの決戦に備えた。

エレナはこの状況に喜び、莫大な軍資金を生み出すであろう蜂蜜をイーボルトに闇で寄贈。

エティルは、この機を逃さずに、海軍を増強して東方のペクダールに備える。

そしてミストリアの侵攻に備えて、護岸工事を始めた。

まさかとは思うが、あの卑劣な軍師のトル八なら村や街の住民を道連れにした、洪水作戦を行うかもしれない。

本来は優しい気質の娘だと思うのだが、戦争に手段を選ぶようなタイプではなかった。

因みに如何でもいいことだが、トル八には謀略担当の（ペクダール旧王家の）部下が3千人いる。

ペレトンの部下には、ペクダールの英雄ルーゼがついていた。

トル八は、ミューフアの敗戦を知ると、主力軍の一部4万を援兵として派遣して、実戦訓練を積ませる。

イーボルト軍は、3万の軍で応戦。

ミューフア軍をジータン、パルキアに追い払った。

イーボルトは追撃して、莫大な経済力で兵を再編して反撃に転じたミューフア軍を撃滅。

ミューフアは国境の村に潜伏して援軍を待つ。

そんな状況の時、イーボルトの使者がミストリアに訪れたのだ。

使者は不覚にも両者の間で、戦端が開かれた事を知らない。

それ故、イーボルトの使者の出現はジョンにとって喜ばしい事であ

った。

何時の日にかイーボルトを傀儡政権としてエティルに侵攻できるではないか。

そうチラと思っただが使者のラナは気付いていないふりをしていたのでジヨンは安心していた。

まあ当面は、ラナを丸め込んで、不利である戦局を好転させる心算であるが。

「ラナと言ったね？もし良ければ宮廷付きの女官長か僕の親衛隊長を勤めてくれないか？誓ってセクハラはせん」

取り合えず金と権力でラナを買収しようとした。

ジヨンはこの2つで、買収出来ない人間（エルフとドワーフも含む）がいるとは思っていない。

「えっ？」

之を聞いたラナは呆れ返ってこの王を見た。

流星は噂に名高いブルマー好きの変態王だ。

女の子なら誰でも構わずと言っわけか？

自分もスクール水着姿で淫行に及ぶ変態だがあちらは権力があるだけに始末に負えない。

同類の趣味の持ち主に見えるが人妻にも手を出すタイプだろうか？

「王様。私はイーボルト様の部下兼愛妾です。主の地位から保証してもらえませんか？出なければ王様にお使えするわけには参りません」

ラナはそれでもやんわりと条件を出した。

仕える？

戦端は既に開かれていると言っのか？

そしてジヨンは悟った。

ラナはこの事実を知らない。

不幸にも戦端は開かれたが、恐らく使者をだした時点では、和平工作をする心算であった様だ。

ジヨンはラナに言ってやった。

「主とは？ラナ」

ジョンが尊大に尋ねた。

ラナはジョンより、10歳は年上である。

ジョンの尊大な態度に、ラナは気分を害したが、思い直して友好的に笑顔を向けた。

ブルマー好きの変態王ならこんなもんだらうと思った本心は押し隠して……。

この王を怒らせたらいーボルトは兎も角、わが身が危ない。

ジョンの方も、ラナを怒らせて不利な戦局を打開出来ねば、エレナ軍の侵攻を許し、ミストリアが崩壊しかねない弱みがあった。

ジョンのジョークを聞いて以来、何かにつけてブルマー姿で王に言い寄り、取り入るうとする、健気な野心家のペレトンは兎も角、トウーロとトルハは寝返るかも知れない。

因みにペレトンはジョンの妃になりたいらしい。

特に実害はなさそうなので、ジョンの家臣は誰も止めに入らなかった。

ペレトンのブルマー好きが幸いして、王国のブルマー関連の収入が3億に膨れ上がり、兵の給料も上がっているので下手に反対すると、出世の道が途絶えるかららしい。

ジョンはそんな本心は慎重に隠して、重ねてラナに尋ねた。

スパイの報告で一応知ってはいるがスパイを使っている事がばれると外交上厄介なのだ。

ラナは、何故か殺伐とした空気に、少し怯えながらも、口上を述べる。

「元ギルモア公爵イーボルトです」

之を聞くとジョンはウザそうに聞いてみた。

「公爵様が何故にアリシアで、僕の従妹と戦端を開いたのだ？貴方は知らないのだろうか、此方としては、早急に和平を謀りたい所なのだ」

「はい？」

ラナはやつと殺気立った兵の理由が分かってほつとしていた。

こいつ等それで怒っているのか……。

マリー様と交戦に及んだのだろうか？

「ジョン様。イーボルト様は、長期戦に及べばミストリアの反撃で敗北する事位分かっています。停戦して使者を派遣すれば、和平に応じるはずですよ」

ラナはそう信じていた。

冷静に言い訳に走る。

「ではさつさと和平しよう。ペレトンさんをパタレーンに送り、交渉させる。ああ、交渉には、普通の格好で出向くように言明しておけ」

ジョンは、エティルとの交戦の責任を取らされ、投獄された後に、王命により復権したペレトンを和平特使に派遣する事にした。

やがて、巫女服姿で登場したペレトンは、ジョンに問う。

「私をあのイーボルトの元へ送ると言うのですか？」

ペレトンは、多少冷たい目でジョンを見た。

ジョンはイーボルトが何故ギルモアを追放されたか知らないのか？

「嫌なのか？確かにあまり評判の良い人ではないようだが、それは僕も同じだからな」

「……」

ジョンのこの言葉に、ペレトンは黙った。

主命である以上逆らうわけには行かない。

「分かりました。イーボルトを説得して見せましょう。降伏の見返りに何を与えられるか、先に聞いても良いですか？」

「金貨5億枚だ。後は領地の割譲と追放をイーボルトさんに求めよすかさず、ジョンは答えた。

「登用なさらないので？」

ジョンは答える。

「仕官ならエレナにでも仕えれば良いだろう？それともこちらに仕えねばならぬ訳があるのか？」

ジョンは致命的な失策を冒そうとしていた。

之を聞いたトルハとアーケノイドは慌ててジョンの口を押さえたと
言った。

「折角貴重な人材かも知れぬ者がこちらに来ているのですぞ。下手
な事を言つて本当に敵に回つたらどうなさるおつもりですか？」

その言葉にジョンは我に帰ったジョンはラナに囁く。

「ミレイドを攻略したら太守にしてやろう。ミストリア男爵の位も
つけてやる」

ジョンは打って変わって、破格の条件を提示した。

ラナは面食らう。

之は私に言っているのか？

ラナは答えた。

「私が太守なら主はどのような位に？」

ジョンは切り札を出した。

「帝国の財源を取り立てる徴税官の元締めはどうだ？僕の個人資産
の管理も任せても良い。税務調査と称して可愛い女の子のスク水姿
やブルマー姿が見放題だぞ」

之は学校法人の税務調査の話だ。

税務調査という名目なら、更衣室と風呂場以外の場所は堂々と入れ
る。

ラナは一瞬ギクリとした。

この国にもイーボルトのスクール水着好きが広まっているのかと思
つたのだ。

何処の国でも之で就職に失敗している。

「王様。確かにイーボルト様はそういう御趣味を持っておりますが
・
・
・」

言わなけりや良いのに錯乱したラナはつい言ってしまった。

「だからこそミストリアに来てみたのです。この王国はセクハラに
は寛容と聞きましたから」ジョンは無視して言う。

「法制作りを急がないと国民が勘違いして凶悪なセクハラ事件を起

こすかもしれないね。僕は女の子は全員かき集めたが何もしてはいないよ」

ジョンはこの時気まぐれを起こしてセクハラの定義を決めてしまった。

いわくブルマーや水着はもとより、下着姿までなら見ても（セクハラではあるが）罪には問われない。

痴漢行為は罪に問われるが基本的には公開リンチで半殺しにされる罪に問われたものは国外追放である。

なおスクール水着の着替えは（当然素裸）覗き厳禁で問答無用で終身刑になるが女の子の同意があつた場合は王国の持て男として尊敬され、爵位を与えられるしきたりとなつた。

なお双方の同意があつてのセクハラは15歳以上ならば罪には問われない。

この世界ではかなり厳しい法律であつたがわざわざスクール水着と定義されているところにラナは希望を見出した。

スクール水着をやらしい目で見えるものが多いという意味に受け取つたのだ。

この法律を実行させる為に法王のリージェル・アルバート公爵が裁判官（法規指令）に任命された。

そして返す刃で女子教育制度と家事労働を15歳以上と限定する法律を僅差で可決させた。

ラナは15歳だからこの法律だとイーボルトと浮名を流すことは可能だ。

しかも、この1年でジョンはトラド芋とトレニア用の牧草を、シリムとのローテーション方式で連作する事を思いつき、実行に移したばかりである。

ラナのような人材は貴重であつた。

法案を即日可決させると、再びラナを呼ぶ。

「有難き幸せ。ところで女子教育制度は移民の子にも適用されるのですか？」

ラナが不安そうに聞いた。

もし適用されるのなら当然生徒になる心算である。

「勿論だ。でもラナは人妻だろう？ バックアップ体制作りが大変なんだよな。子供を作られでもしたら学問は出来まい？」

ジョンはぶつくさと呟きながらも許可を出した。

「セクハラなら幾らしても良いが、子供を作ったら退学させて子育てに専念させるぞ」「・・・」

ラナは考え込んでしまった。

如何してそういう話になるかな・・・。

でも確かにジョンの立場ではそうとしか言えないか？

本人こそが、一番そういう事をしそうな気がするのだが・・・。
王だし。

「良いでしょう。学府に入り、魔法使いを目指させてもらいます。

その後で宮廷魔術師の座を目指させていただきましょう」

ラナは取り合えず学問に専念する事にしたらしい。

この3日後に、ミューファ軍とイーボルト軍は停戦。

イーボルトは軍隊を解散してミストリアに投降した。

マリーは抵抗を続けたが、ミストリアの増援部隊の到着で陣地を包囲され、降伏する。

ちなみに現在のミストリア軍勢力は歩兵18万、（訓練兵250万）
將軍51人。エレナ級が11名である。

大魔法使いは758人、弟子が2018人である。

見習いが7580名だ。

ゴブリンが8570人。

ゴブリン親衛隊が138人である。

金で雇った90名のトロールと3名の巨人も警護隊長を務めていた。
それに加えて食料で雇った最強のコボルト兵が40万人いる。

全員ミストリア軍の将校だ。

更に、白龍318頭（雛1,908頭）、金龍418頭（雛2110頭）の大軍が控えている。

人口は1990万人に増加していた。それに何処からか流れ着いてきた夜盗や海賊が194万人、加わり、2184万人となった。金で雇い入れた他国の農民が150万家族である。

ついこの前完成した2500トン級の大型船1万隻は海賊の首領ロルロン提督と補佐官としてミシエリア・ラフト・リート提督を指揮させた。

手下は元海賊と夜盗194万人である。

この海軍は良く戦い、ミレイド軍を一人残らず蹴散らし、捕虜にした。

そしてミレイレアを降伏させる。

そして15州を占領してしまった。

之によりミレイド3350万人の人間は（成人670万人）ジョンの配下となった。

なお、519万人の流れ者が戦火を避けてミレイドに移民している。旧ミレイド軍8万人（全員騎馬隊）はそのまま首都に駐留して国家から給金を貰う事になった。

ミレイドの玉蜀黍と、未納分の税金は、それを溜め込んでいた国庫と共に、押えられてジョンの私物と化している。

ミレイド海軍の誇る、1500トン旧戦艦と、備え付けの火炎放射器（動力と炎は魔法エネルギーである）も、ロルロン提督が鹵獲した。

ミストリアより遙かに進んだ、魔法使いと技術力は、ジョンの金儲けの計画を更に加速させる。

ミレイドの魔法文明を支える（古代の）宇宙エレベーターを押えたジョンは、兵力の一部を割愛して軍事兵器の製造に着手させた。

ミレイドに2隻だけ残っていた浮遊船の複製品の製造にも取り掛かっている。

ジョンとの決戦に備えて古代遺跡から発掘した物の様だ。

然し、取り敢えずは、ミレイレアを説得する事から始めるべきだとジョンは思った。

彼女を傘下に収めれば、国中の魔法使いを動員できる。

「ミレイリアさん。降伏してもらえないか？ミレイドに勝ち目が無いのはお分かりであろう。」

イーボルトさんも、マリーも降伏した。貴女だけで何が出来ると言うのだ？」

必勝の策でもあるのか、エティル方面のエレナは無視してジョンは言った。

皇帝が、部下であるルイスの娘であるゆえに見くびっているのかもしれない。

「王様。このミレイリアはシャリー王の配下でございます。王様に従う訳には参りません」

ジョンの前に捕虜として引き出されたミレイリアは毅然とした態度でそう答えた。

「王とは経世済民の志だと思っただがね。違っただか？」

ジョンは尊大に言い放った。
ミレイリアはそれには頷く。

「貴方の部下が、反乱を起こさねばこんな争いは起こらなかった。ジョン様に言っても如何にもならない事ではあるが、やはり腹が立つ」

ミレイリアが、ジョンに不満をぶつけてみた。
ジョンはあっさりとそれを認める。

ジョンは護衛を去らせると、ミレイリアに言い渡した。

「いいよそれでも。でも前の議会で全員一致で宰相になったのだからその責任は果たしてくれないと困るんだよね。それにシャリーを追放したのは僕ではない。怨まれるのは筋が違う」

別に怨んではいないが……。
ミレイリアは思った。

怨むならトルハかトゥーロだろう。

トゥーロはああでもしなれば、シャリーに殺されていただろうし。トルハは、ペクダールを滅ぼした瞳狩り戦争でシャリーを怨んでい

るはずだ。

それを考えると、叛徒共を怨むのは筋違いである。

然しそれでも……。

「そうですね。でも私はシャリー王以外ならミューファ様に仕えたく存じます。我が姪は皇帝陛下。仕えるのに何の不都合もありません」

ミレイレアは嫌がらせにそう言った。

ジョンが名目だけの傀儡とはいえ、前王シャリーの娘で、ミストリア皇帝であるミューファの

指揮下にミレイレアが入る事を認める訳はない。

ミレイレアはそう思ったらしいが……。

「それで良いよ」

ジョンは前線から戻ってきたミューファをミレイレアに面会させると、イーボルトを帰順させた功績により、アルトニア太守に任命して、兵糧と150万デイルスに、王国の重要な産物である砂糖の交易を任せた。

そしてミレイレアを配下にするように言明する。

「はい？」

ミューファは面食らったようだ。

ジョン様は何を考えているのか分からないとその顔が伝えている。それが分かったのだらう。

ジョンは説明した。

「ミューファさんがパタレーン戦線でイーボルトさんを降伏させている間に、ミレイドが我が手に落ちた。ミレイレアさんは、貴女に仕えたいというので望みどりにする」

之を聞いたミューファは、会心のカリスマ性でミレイレアに微笑んだ。

ミレイレアは不覚にも、この笑みに陥落した。

そして意外とあっさり観念したミレイレアは宰相職に復帰した。

ミレイレアは、国中の魔法使いに命令をだし、軍事技術の向上に努

め始めた。

宇宙エレベーターには、ジョン軍の精鋭であるゴブリン親衛隊とトロールを送り込んだ。

将来の宇宙戦略の為に、人間の有志で募った3千のミストリア宇宙軍を設立する。

司令官には、有志の一人であり、ジョンの両親であるフィレーシア・ラッセルとクライシエル・ニードが任命された。

シャリーの手を逃れ、ジョンを奪回する機会を伺っていたのだ。

シャリーは、あっさりと倒されたが、残党の報復を恐れて身を潜めていたらしい。

ジョンは、この2人を公爵に任命して、宇宙戦略を任せる事にしたのだ。

エティルではこの知らせを受け、5000トン級戦艦の建造に取り掛かった。

主力の700トン級ではミストリアには勝てないからだ。

陸軍も、兵力の精鋭化を断行して、孤立しても戦えるように、学問と軍事訓練両方で鍛え上げ始めていた。

農地も急速に復興をとげ、都市からは税収が流れ込んでくる。

この機を捉えて、ミストリアの商人が、ガラクタを金持ちに売りつけて、莫大な富を得ていた。

代わりに、エティルの蜂蜜を大量に買いつけ、保存食用のイナゴを捕まえる為の餌として使用する。

ミレイドを併合したミストリアは、他国から食料を輸入する必要もなく、蜂蜜だって自前で作るうと思えば何時でも作れるが、エティルと交易が出来るうちは、その必要はなかった。

「エレナ姫。どういたしましょう。最近家畜の値が下がり、家畜商人が苦情を言っておりますが」

エレナの部下達は、家畜商人からの貢物を目当てに、彼女に懇願した。

エレナの家畜増産計画により、ミストリアから密輸入した0.4デ

イルスを1デイルスで売るまでに価格の下がった鶏や60デイルスまで下がったトレニアに家畜商人は頭を痛めているのだ。

「そうだな。少し輸入しすぎたか？まあいい。取り合えず爵位を与えて黙らせておけ」

エレナは農村の復興で自給自足体制を回復しようと試みていた。それ故に出来るだけ輸入は控えている。

外貨は欲しいから輸出は奨励しているが、ミストリアでは停戦交渉はしていないという事もあってエティルの造船所を襲って訓練代わりに船を奪っていた。

エティルの復興を1月遅らせるたびにミストリアが優位に立つのだ。当然5千トン級戦艦は造船所ごとミストリアの手に落ち、海軍力をエティルより西に動かない事を条件に講和した。

ちなみにこの敗戦により、エティルの造船技術は10年遅れたといわれている。

その代わり、ミストリアは金で買収した全作業員2700家族を手中に治め、エティルは300トン級船しか造れなくなった。

エティル8千万の民は制海権を失い、エティル国内に閉じ込められる事となった。

更にトルハの策で、あの辺りの海底のマーマン王国システリアに釣り針と網と船を沈めておいた。

システリアの住民たる魚類を捕らえる3種の神器はマーマンにとって宣戦布告も同様である。おかげでエティルの勢力圏の海中で常に嵐が起こるようになり、漁民は全員失業した。

それに犠牲者こそ出なかったがエティル国内の全ての川がシステリアの怒りで氾濫し、農作物の99%を根腐れさせた。

「誰だ？システリアを怒らせたのは？」

辛うじて災難を逃れた農民達は、恨み言を並べ立てた。

「あの姑息なトルハに決まっているだろう？」

エティルではこの意見が主流となっていた。

証拠は何処にもないが……。

そしてジョンを含めてミストリアでも主流である。

「己、姑息な手を使いおつて」

この戦法はミストリア国内でも非難する者が大勢いた。

ミレイリアなどはその急先鋒である。

「そこまでして貴方は戦に勝ちたいのか？ 貴方には戦士のプライドが無いのか？」

ミレイリアは、トルハを犯人と決め付けて糾弾した。

当たり前だろうとトルハは思った。

私は王国の魔術師兼服飾職人である。

本来生産活動に従事する立場だ。

戦士のプライドなどあるものか。

「この海域のマーマン王国とは友好関係を構築するべきだと思いません。あるいは攻め滅ぼすか」

更に鬼畜なトルハの策に周囲は怒り狂った。

「そんな事したらエティルと同じ目にあうじゃないか」

トゥーロがあまりにも卑劣なトルハのやり口に噛み付いた。

「ミストリアは之でエティルに侵攻する事が出来なくなったのだぞ。この作戦にミストリアが絡んでいるのは誰の目にも明白ではないか？」

之に構わずトルハは進言した。

「私はミストリアの当面の国益を考え、王様に進言する。エティルがどうなるうと知った事ではない。王様。ドラゴン部隊に命令してエティルに食糧援助をさせる。旨くいけば責任をシステリアに擦り付けた拳句、救世主としてミストリアは漁夫の利を得られるだろう。お前ら2人と王様が黙っていれば」

この言葉で全員黙秘を貫く決意をしてみました。

エティル・ゼフィナではエレナと黒仮面卿は事の真相を知っていたが口には出せない。

ミストリアの謀略にはまった事が知ればエティルは崩壊する。

「ミストリアは救世主面をして援助に来るだろう。如何すれば良い

？」

黒仮面卿は頭を抱えた。

「どうしようもないさ。然しどうやって知ったんだ？我々が海の勢力をもめている事を」

エレナが答える。

「トルハの策だろう。我々は海の生き物を搾取しすぎた。自業自得という奴さ。それを公表すればあたしの責任になるからな。死者が0なのは脅しの心算なのだろう。次に海洋生物を食せば皆殺しにするとな」

エレナは以外と穏やかに言った。

「エレナ姫。ペクダールから奪った2大陸を割譲してミストリアの援助を受けましょう。そうすればジヨンは自分で怒らせたシステリアと戦う羽目に陥るでしょう。良い憂さ晴らしになるではありませんか？その上で天下統一の野心は捨ててミストリアの属国として力を蓄え、政治的実権を得る事に力を注ぐべきです。姫はまだ若い。逆転のチャンスは幾らでもあります」

エレナはうざそうにその言葉を遮る。

「気休めを言うな。今勝てないのに将来勝てるわけ無いだろう？あたしは負けたのだ。時期を待てばジヨンは天下を統一する。軍隊も経済力もあちらの方が数段上だ。猪突猛進のあたしでは100戦しても敵の守りを破ることは出来ない。降伏しよう。エティルは解散してアトポックとサーシアをジヨンに割譲する」

この激を受けて反対派の正義將軍とトルネー大佐がサーシアで反乱を起こした。

アトポックでもキルミー將軍が反乱を起こし、両大陸を占領した。嵐を超えて通告に行った手下はあっさりとエレナを裏切り、キルミーに付いた。

エティル本土ではエレナの降伏により、旧モラギ・ナをミストリアが占領。

1980万人がジヨンに帰服。残りは難民となって何処かに去って

いった。

エティルは崩壊して人口は20万人にまで落ち込んでしまう。

「なんとという卑劣な男だ。勝つためには手段を選ばぬ」

事の真相を悟ったセタはピンチで敗軍をまとめている途中だった。

モラギーナの丘陵を回復するべく反乱を起こしたのだ。

然しミストリアの金龍部隊に追い払われ、軍団は壊滅。変わりにピ

ンチはミストリアの保護領となった。

セタは海軍（50トン級）にて反撃を試み、惨敗する。

之がシステリアを更に怒らせ、ジョンが大金5千万デイルスを迷惑

料に海に投げ込むまで嵐は続いた。

その間、ミストリアは播種量18粒のシレーリムを生みだした権力

者の人糞を大量生産し始めていた。

「之が生産できればミストリアは更に強くなれる。そうだ。今ちよ

つと思いついたんだが・・・。」

ジョンは造船工の長に命令した。

「船を鉄で覆ってしまえ。沈まない程度にな。そして魔法使いに浮

遊石を造らせ、船を浮かばせるのだ」

「・・・」

部下の造船工は啞然とした。確かに出来るが、1万隻全部に装備す

るのか？

「どうせならミスリル銀の飛行艇を建造しませんか？エルフの神木

ディカル・ウエップから取れる樹液からは鉄の5分の1の重量でし

かも鉄の7倍は硬い、夢のような金属です。実はエルフの村アポル

トにディカルの森が群生しているらしいのです。許可させくれれば

早速材料の調達に言ってみります」

ミシエリアの出したこの思い付きの案をジョンは公認した。

「秘密裏に造れよ。1万隻の船には鉄で武装して真の計画を見破ら

れないようにしろ」

ジョンはこの他にもトレニアやマボウギユウと呼ばれる黒牛の生産

にも取り組んでいた。

こちらは自ら生産に取り組んでいるので船の計画は命令するだけである。

鶏も品種改良を重ねた挙句、卵一個で3日分の栄養が摂取できると言われるほどに栄養価の高い兵糧卵を開発した。

之を試しにゴブリンに食べさせた所、本当に3日間マラソンをしていたという伝説まで残ったほどだ。

之の開発により、兵糧の消費が3分の1にまで減少して国庫負担が軽減した。

ジヨンはこの卵を（無精卵）傾斜国に売り、莫大な利益を貪ったのだ。

その額27億デイルス。全てジヨンの私有財産である。

この金は野心を持つ貧乏人の為の組織、銀行の創設につき込まれたシステムは会員から集めた金を貧乏人に課して利子を取る。

（年60%）そして設けた金の10%を元本に上乗せして年に1回配当として10%を支払う仕組みだ。

なお、脱退は自由である。

元本は必ず保証された。

これらは議会の97%の賛成で可決された。

銀行法と呼ばれている。

これによつて、ミストリアに650ヶ所。

エティルに420ヶ所。

ミレイドに800ヶ所造られた銀行に、立身出世を狙う野心家の若者がミストリアは女性40万人、男性107人。

（ゴブリン8570人。

）エティルでは女性170万人、男性60人。ミレイドでは女性470万人、男性8人である。

パタレーンは長年の戦争で衰退の一途をたどり、60万人の商人の（アリシア以外）都市国家となつてしまった。こうなつたのは（男性の商人候補が少ないのは）女性が社会進出すれば大抵の男はジゴロになるからである。

ジヨンはこの希望者に千金を与え、商売を始めさせた。

ちなみに自分も10億デイルス銀行に預けている。こうしてジヨンは年1億の年収を確保したのだ。

之に水着の販売収入が12億加わる。

砂糖の販売収入が、20億。

武器の輸出が15億。

食料が8億デイルス位である。

月額55億デイルスの収入だ。

国庫には、月8億デイルスが積み上げられている。

「王。いい事を思いつきましたぞ」

1兵卒のライがジヨンに進言した。

「塩に税を掛けるのはどうですか？国民は確実に塩を摂取いたしま
すぞ」

ジヨンは直にその案を採用して塩に税金を掛けた。

この税はかなり国民に不評だったが月80億デイルスの収入を国家
にもたらした。

ついでに酒にも税をかけ、こちらは月8億デイルスであったがこの
収入はミストリアの鉄器騎馬団の編成につき込まれた。

1部の鉄器騎馬団は魔法の武具で身を固めている。

親衛隊でもなく攻撃部隊でもなく補給部隊に配属された857名の
戦士である。

ジヨンは自分で作った銀行から借金をしてまで鉄器騎馬団の編成に
こだわった。

酒税や塩税を私物化したくらいではとても足りないのである。

この不正に対して議会は2年以内の返済を要求した。

之に対してジヨンはラーゼルの国債発行と株の増発で10億デ
イルスをかき集め、私物化した150億デイルスの一部を返済した。

更に播種量18粒の奇跡のシレーリムを担保に60億デイルスを銀
行から借用。

借金を80億デイルスにまで引き下げた。

更に兵糧卵を担保に80億借り、不正借用の150億を1月で返した。
それなら最初からそうすれば良いとも思うがそのときは思いつかなかったのだ。

それに借金は膨れ上がっただけである。

利子を含めた240億デイルスはジョンにとっては鬼門である。返済出来るわけが無い。

「王。水に税を掛けてはいかがですか？」
「却下」

流石のジョンもそれをやったら叛乱が起きそうなのはわかった。只でさえ、ブルマーネタで変態王の烙印を押されているのに重税を掛ければ民衆の怒りが爆発して大乱が起こるだろう。

降伏したエティルが便乗して蜂起すればミューファが反乱を起こすかもしれない。

「皇帝陛下の動きに注意せよ。反乱を起こすかもしれない」
ジョンは自分で擁立したミューファを信用していないらしい。
当然だろう。

政敵の娘であるのだからと家臣たちは思った。

「何か良い税金のアイデアは無いのか？民衆の怒りを買わずに大金が入る税金は？」

ジョンは1億デイルスの賞金を掛けて募集してみた。

そして借金の利益に掛かる銀行税が採用されたりした。

税率は40%である。

他にもジョンの私有財産を増やす目的の貢物を一人当たり月5デイルス取り立てる案が採用された。

「そうだ。僕の借金返済も大事だが穀物は外国から買ってでも貯蔵しておけよ。飢饉が起きたとき食料が無ければ叛乱が起こる。エティルの二の舞にはなるなよ」

農水大臣のトゥーロに突如ジョンが言った。

「唐突で悪いが、農作物の1割を年貢として納めさせる。食糧を蓄

えるのだ」

トウーロは答えた。

「やっております。今のままの人口なら2年は持つでしょう。外国から買い付けるために50億デイルス程銀行から借用したいのですが」

ジヨンは考え込んだ。

国庫から支給するのは限界と言うわけか。

「分かった。銀行は融資をする。然し利子は払ってもらうぞ」

30億デイルスを俺が負担するのか？トウーロはあまりに理不尽なジヨンの指図に啞然とした。

こいつはブルマー論争のとき自分にたてついた事をまだ根に持っているらしい。

「どうやって返済しろと？」

トウーロはそう尋ねるしかなかった。

「海の利権を与える。システリアと交渉するなり攻め滅ぼすかして金を入手しろ」

そうか、関税を掛ければ数十億は稼げるかもしれない。

然し其の甘みにはジヨンも流石に気付いた様だ。

「税金は4割だからな」

何処までもセコイ王だとトウーロは思った。

帝国の内情

(4) 「なんとという素晴らしい国なのだ。俺の趣味を分かってくれ
るとは」

この言葉を吐いた男は勿論イーボルトである。

ミューファに降伏したイーボルトは、ジヨンの命令で、酒と女に溺
れていた。

女の子の方は、イーボルトの側近であるが、酒の方はミストリアの
地酒である。

ミストリアの新商品であるこの地酒を、一応降伏兵であるイーボル
トとその部下に、試しに飲ませてみたのだ。

卑劣な名軍師トルハの進言でこうなっただけらしい。

捕虜虐待と取られかねない暴挙であるが、本人達は満足していた。

酒と言っても、汚れきっている水の変わりに、開発されたものなの
で、アルコールは少ない。

子供でも飲んで問題にならない位だ。

テラ風で言えば、エール酒のようなものである。

流石にエール酒は子供には飲ませられないが、ミストリアの地酒な
ら問題ない。

因みに、イーボルトに飲ませているのは、料理用の地酒である。

料理の方も、ミストリアとパタレーンの農家から戦後の復興政策も
かねて、50万人分を買い付けて、イーボルトの部下達に振舞って
やっている。

イーボルト本人は、宮廷の料理技術向上を目的として集められたペ
レトンを中心とする女官達がもてなしていた。

大好きなイーボルトの趣味を理解したこの接待に本人は喜び、30
億デイルスを献上して、

ジヨンのご機嫌を取った。

この功績により、イーボルトの身分は回復され、一般人として首都

圏の出入りが許された。

彼はこの権利を利用して、5人の愛妾と共に新しく建設されたトールポール学問所で女の子の着替えを木の陰に隠れてチラ見している。ジョンの警戒を解く為の処世術だと、ペレトンとトルハは思っていた。

因みに覗いているのは、陸上運動の着替えである。

ミストリアの新法では見るだけなら罪にならなかった。

しかもトールポール学問所はセクハラにはやたら寛容で、国王の寝屋教室などと揶揄される位なのである。

助平にとってはこれほどの環境は有難いものであった。

トゥーロを中心とする部下たちの一部に、文句を言う者もいたが、元々の口実が国王の愛妾探しであるからそれも仕方あるまい。

しかもその愛妾たる者の年齢が平均13歳なので、ジョンはロリコンだと思われていた。

しかも、この制度によって、行き場をなくしたフェチな趣味の持ち主がラーゼルンに集まってきたのだ。

その数2700人。

彼らの造った街は俗にオタクシティと呼ばれる工業都市となった。

何故か機械工学の達人が多かったが・・・。

最近の王国の工芸品の3割は、オタクシティで生産されている。

税込にすると1億であった。

輸出用に生産された、様々な製品が、港町に運ばれている。

「こんなに美味しい国はねえぜ。女の子の生着替えを堂々と鑑賞出来る国なんてな」

イーボルトは元々助平な気性なのか、愛妾をほっというトールポールに浸入る毎日を送っている。

しかも徴税官の職権を利用してブルセラショップ、「スク水の館」まで開いてしまうほどであった。

いらなくなったスクール水着を税込の代わりに徴収してオタクシティのスクール水着フェチの若者に高く売り飛ばすのである。

趣味と実益を兼ねた笑いの止まらない商売であった。フエチの人種は金の続く限り目的の品を買い漁る性質を持っているのだ。

よって確実にぼろ儲けが期待できるのである。

イーボルトはこの商売で2ヶ月で1億デイルスを儲けた。

税金を（4公6民）支払っても6千万デイルス残る。

愛人5人を囲うには、十分すぎる額だ。

イーボルトは、アリシア方面での商売により、4億デイルスも稼ぎ出していたが、ジョンに資産と株を献上して、一株5千デイルスの株20万を失った。

ジョンはこの資産を運用してミストリアの砂糖生産と、軍馬の改良に取り組み始めている。

龍と馬の混血であるユナホーン（と名付けられた）の生産にも取り組んだが、一部の人権団体の抗議により、4万頭だけ生産されて中止になった。

ユナホーン族はジョンの命令で、ドルクレンの配下におさまり、物資の運搬を担当している。

イーボルトは、ありったけの物資を首都に集めて、ミストリアの経済力の増強に努めた。

「ラナよ。この金で巨大な城を建設するのだ。之だけの金があれば税金を納めても城位建てられる。パタレーンの国境付近に土地を買い、作業に入れ」

イーボルトは、商会の全資産、船（500トン級）4千隻。

財宝1200億デイルスを、首都に借りた借家に運び込ませていた。財宝を守ると称して、商会の部下3万人を首都に移住させている。

アリシアの商会拠点を失ったイーボルトは、ミレイド、ミストリアで勢力の拡大を図るしかない。

パタレーンの商会拠点もいずれジョンに押えられるであろう。

しかし、イーボルト商会の幹部でもある、愛妾達は即座に反対した。「アリシアとの国境にですか？」

ジヨンの親衛隊長に出世しているラナとイゲスは難色を示した。そんな事をされたら遠距離恋愛になるじゃないか？

何の為に、スク水姿になってまでイーボルトの側に侍っていると思うのだ？

一緒に居たいからではないか・・・

「私達は反対します」

ラナははつきりと言ってやった。

然しイーボルトは、女子の事情など考慮に入れない正確であるらしい。

しかもパタレーンは、壮絶な小競り合いの末、奪回した4州以外はアリシアの領土だ。

敵の襲撃を受けながら城を造れと言つのが？そりゃあんたには出来るかもしれないが・・・。

「私達はイーボルト様と一緒に暮らしたいのよ？アリシアには忠義の部下を送ってください」他の愛妾、メルゲンとマリー、レメンドが歩調を合わせる。

それが癪に触つたのか、イーボルトは珍しく激怒した。

「あいつらを信じられるのか？」

イーボルトは愛妾達に言った。

「俺の栄達を聞きつけ、何処からともなくやって来た7480人のゴブリンと3212人の裏切り者の民と兵士50名をか？俺が勘当された時、奴らがどういう態度をとったか忘れたのか？俺は忘れん奴等は転生の裏切り者なのだ。信用など出来るか」

イーボルトがミストリアに仕官してからスクール水着好きに転向したあからさまな部下のゴマすりに嫌気がさしているらしい。

しかも全員がミストリアの貴族になれると信じていた。

ジヨンはイーボルトの部下に、気前よく騎士の位を授けると、更なる献金を要求する。

拝金主義者のジヨンは、イーボルトにとっては鬼門であった。

然し王としてはマシな方だ。

イーボルトは、築城術に長けていて、アリシアの名城を建築している。

要するに自分で建築に行く心算なのだろうと愛妾達は思っていた。

「しかもそのうち6人もミストリアのスパイに成り下がった。俺を信頼しているのはお前らだけだ」

イーボルトがそう言うのとマリーがため息を付いて言った。

「そりゃ家族だもんね」

マリー達は言った

何故かいつの間にか愛妾達に紛れ込んでいたエレナも呟いた。

洪水作戦により国を滅ぼされたエレナは、泣く泣くジョンの庇護を受けている。

ミストリアの大將軍（兵10万人）に就任したマリーとエティル軍元帥（兵4千）に抜擢されたエレナは何故か仲が良く、ジョンへのご機嫌伺いを名目に遊びに来ていた。

エレナは突如現れては突っ込みを入れる才能に長けている。

ミストリアの瞬間転送装置（イーボルト所持）により、エレナはいつでもイーボルトの屋敷に行けるのだ。

因みに転送出来るのは一月に3回、3人までである。

マリーとエレナは二人とも一応姫であるので、国賓待遇で料金はたったの8万デイルスであった。

「今日はマリー」

マリーも挨拶を返す。

「ようこそ、エレナ」

一年前のシステリアの怒り戦争の頃なら有り得ない交友関係である。エレナは一時的とはいえ、天下統一寸前まで1人の犠牲者もなしに突き進んだ英雄なのだ。

トルハの老獪な計略に掛かり、1諸侯に落ちたとはいえ、まともなやりあつたらエレナに勝てるかもしれない將軍は11名しかいないだろう。

少なくともマリーでは勝ち目は無い。

ミューファも同様だ。

イーボルトなら勝てるかもしれないが・・・

彼はギルモアを侵略してきたペクダール軍150万をたった390名の手勢で打ち破った不世出の名将なのだがフェチな趣味のせいで愚将に思われ、徴税官にしかしてもらえなかった。

偏見の無いジョンでも流石にスクール水着フェチは変態だと思っらしい。

ジョンのは只の商売だ。

「俺が5千も軍勢を持っていたらあんな卑劣な戦法を使わずともお前に勝って見せたさ」

イーボルトは不用意に軽口を叩いた。

その言葉にエレナは疑問を持ったようだ。

穏やかに聞く。

「如何してなの？」

イーボルトは答えた。

「お前は軍人にしては優しすぎる。ジョンのように勝つ為には手段を選らばねばと言う所がない。それでは老獪なトルハの策には勝てんさ。盆上の戦争ゲームならお前はジョンに勝てると思うがね」

それを聞いたエレナは顔をこわばらせて聞き返した。

目にわずかに怒りを含んでいる。

「ジョンの差し金なの？ステリアの1件は」

エレナは思い当たったようだ。

ふと頭に浮かんだ疑惑をぶつけてみる。

イーボルトは呆れて言った。

この姫は何を今更言っておるのだ？

「それに気付かぬ愚か者はお前位だ。やはりお前は謀略には向かぬ黒仮面卿は不世出の軍師でトルハに匹敵するが彼だけでは今のエテル領でも納めきれない。本気でジョンに対抗する気ならお前が出陣した後背後を突かれぬ様にするべきだ。それにはスクール水着フェチの男は無能と言う思い込みを捨てるところから始めた方がいい」

イーボルトにとって「スク水大好き」な評判はかなりのコンプレックスらしい。

彼の就職活動に多大なダメージを与える趣味だからだ。

エレナもスク水フェチには偏見をもっている口である。

イーボルトの細かい忠告をつんざりしながら聞いていたエレナは思い余ってたずねた。

「如何してそういう話になるの？あたしがスクール水着好きの英雄を持って余しているように聞こえるけど？」

事実そうだろう。

イーボルトはそう思っていた。

エレナがイーボルトと手を組めば今頃は天下統一を出来たのだから。最終的にジョンに仕える事にしたが条件次第ではエティルに就いても良いと思っていた。

「俺は之でもギルモアでは不世出の名将と呼ばれた男だ。お前が攻め、俺が守り、黒仮面卿が策を講じる。之ならジョンを打ち破れたかもしれない。然し俺はそのジョンに仕官している。お前が叛乱の機会を待つ気であるのなら諦めた方がいい。お前が1国力をアップさせる間にジョンはその10万倍国力を増すだろう。攻め込めばジョン軍は必ず野戦に持ち込むから俺が軍司令ならジョンに7度位は勝利して見せるがね」

エレナは意外に思った。

食料の保護のためか？

あの私利私欲の王が何故食料などに？

「作物を守るために野戦に持ち込むの？卑劣なジョンらしかぬ戦法ね」

エレナは考え込んだ。

民の為に食料を守るなら聖王だし、金儲けなら私利私欲だ。

然し食料など売って金になるのか？

光合成で体力を維持して、滅多に食事を取らないエルフには、食べ物有難みが分からないらしい。

エレナは考えた末に人間やその他の生物が、食事を取る事を思い出した。

「あの変態王も部下や国民には優しい王であるのか？」

エレナはジョンを見直したようだ。

だがいつかジョンとは決着をつけねばならない。

ふとエレナは思った。

イーボルトだったらどうやってジョンと戦うと言うのだ。

「仮定として貴方ならどうやってジョン王と戦う？」

エレナはイーボルトに聞いてみた。

イーボルトは答えてやった。

自分の戦略眼を披露出来る機会は彼にとっても嬉しい。

早速聞かせてやった。

「南方大陸傾斜国を統一してジョンの目をそちらに向けさせるさ。

そして電撃的にエティルを占領する。ジョン王はお前と同じで兵の消耗を嫌うタイプらしい。大陸を押さえてしまえば諦めて、今度はシステリアを炊き付ける事も無く、撤兵するさ。そしてジョンがブルマー好きの変態だと言う噂を流し、ミストリアの保守派を叛乱に走らせる。6千万人はいるんだ。数千人は不満を抑えられぬものがあるだろう。そしてジョンの国に混乱が続く事を願ってアトポックとサーシアを再併合する。そうしてから返す刃でミストリアを奇襲すると言ったところか。そして和平に持ち込み、北はミストリア。南は傾斜国に譲り、天下を三分する。之だけなら5年もあれば簡単だ。然しその後を聞きたいのなら雲の彼方に住む雲巨人でも味方につけるしかないだろうな。ジョンは未だ制空権は握っていないから空軍を創設すればミストリアに勝てるかもしれんぞ」

ミストリアの龍部隊は、作物の促成栽培と森林の保護に使われており、戦争兵器ではない。

然し流石のイーボルトもジョンが空船部隊の創設に走っている事には気づいていないようだ。エレナは諦めたように呟いた。

「やってみよう。然し無駄に終わる公算の方が大きいかな？」

あくまで仮定の話ではあるがエレナは本気で出来るだけの才覚がある。

エレナはイーボルトやマリーとの歓談を早めに切り上げると領地に戻り、金に任せて雇った8万人の兵を引連れ、武装蜂起に走った。

(イーボルトはこの機密漏えいの罪で3階級降格され、中央政府がら、パタレーンに左遷された)

エレナは、軍を5手に分けると、ミストリアの守備兵の守る城を急襲して之を散らした。

更に、ジョンの部下でエレナ級の孟将ザドエンが6千の義勇兵にて立て籠もる城を瞬く間に包囲する。

ザドエンは、一応エレナ軍を独自に考案した煙玉で後退させると、部下を集めて言った。

「エレナは馬鹿なのか？武装叛乱などジョン王の250万人の正規軍が来ればたちまち鎮圧されるぞ」

ザドエンはジョンの勝利を信じて疑わない。

「まったくですな」
部下達が調子を合わせる。

「兵糧も我等だけなら3年は持つぞ。金だつて10万人の兵を半年雇えるくらいはある」

エレナの最初の一撃を耐え抜けば、反撃のチャンスは幾らでもあった。

それ故に油断しきつているようだ。

ザドエンは取り合えずエティル方面軍を組織して自力で城を守る一方、本国に救援要請を送った。

たかが10万弱の兵など、ミューファの率いるミストリア軍の敵ではない。

「1月もあれば援軍が来る。それまで持ちこたえろ」

ザドエンはエレナに降伏しようとした部下達を地下牢放り込むと二百の兵でエレナ軍を迎え撃った。

エレナを見くびって、どうせ負けたら城に逃げ込めば良いと思って

いる。

エレナはザドエンを無視して城を攻撃、残存兵を虜にしてしまった。「何だと・・・？城が落ちる訳がない」

部下の報告を受けたザドエンは城の金蔵を見捨てて北に逃げて行った。

「降伏してエティルの大將軍にならない？今なら北の4州の太守にしてあげるよ」

エレナは北へ逃亡したザドエンに寝返りを進めた。しつこく使者を送りつける。

それに観念して降伏する太守がちらほら出始めていた。

「エレナ様。あの悪逆非道なミストリアから女性を解放いたしまし
よう」

「ブルマー好きを強要する王に仕えたくありません。」

エレナは余りにもイーボルトの予言どろりに事が進むので拍子抜けしていた。

傾斜国はあっさりエレナと同盟を結び、保護国化している。

そしてエレナにとって幸運な事に、ミストリアの南部のチノハラ高原でジョン王の治世で初の反ブルマー大乱と呼ばれる武装蜂起が起こった。

叛徒は92名。

即日鎮圧されたが残党が海賊と結びつき、小塔を根城にヒカカキア共和国を宣言。

イーボルトの支援を期待してパタレーンに進撃した。

イーボルトはこのヒカカキア共和国に何故か大敗して、ジーダン領に逃げ込んだ。

「何？パタレーンが落ちたと言うのか？」

正確には、占領されたのはパタレーンの東半分だが、エレナは意外に脆いミストリアの軍事態勢に拍子抜けした。

ジョン王の側近のドルクレンは何をしているのだ？如何してパタレーンとエティルに増援部隊を送らない？

「恐らく反乱など即日鎮圧出来ると思っているのでは？」

「イーボルト様はあれでミストリアの名将ですからな」

エレナも言い募る。

「甘いな。イーボルトさんはあたしを見くびっていたらしい。ザドエンにこの事を伝えてやれ。降伏するしかなくなるはずだ」

エレナは黒仮面卿に命じて占領地の太守と兵を集めさせた。

そして2ヶ月掛かってエティル全土をほぼ手中に収めてしまい、ザドエンを孤立させた。

抵抗らしい抵抗は、エティルではもはや見られない。

然しエレナは焦っていた。

「降伏するように説き伏せられるものはないのか？」

エレナは苛立つて尋ねていた。

ザドエンを降伏させることが出来ねばいずれ体制を立て直したミストリア軍に殲滅されてしまうだろう。

どうせジョンの本隊が来るまでの優勢とはいえ、備えはしておくべきだと思った。

あの高慢なジョンに一子報いなければ気がすまない。

「黒仮面卿。そなたが出向いてくれぬか？幾ら人材を集めてもザドエンを逃がしてはエティルの統一は有り得ない」

焦ったエレナは、建国の基本方針を撤回しようとした。

それを黒仮面卿本人が押しとどめる。

「エレナ姫。幾らミストリアが制海権を握っている海域でも5000トン級戦艦がエティルに来るのには一月位は掛かるはず。かの国は内戦の最中であるようですので、暫くはこちらには来ないと思います。来たとしても反乱を平定してからなら三月位は掛かるはずです」

黒仮面卿が希望的観測を口にした。

敵の主力軍を撃滅しないで首都を占領してもいずれば、兵力で勝るミストリアに奪回されてしまう。

兵学の基本らしい。

「兵の一部を山岳にやってドラゴンを退治させる。その財宝で籠城戦に備える」

エレナはよほど焦っているらしい。

王城に立て籠もってミストリア軍を防ぐ心算でいるようだ。

黒仮面卿はそれを押しとどめる。

「姫。それをやるくらいなら話し合ってみてはいかがか？」

黒仮面卿はザドエンとの話し合いを提案した。

トップ会談である。

「応じるかな？」

エレナはザドエンの性格を考えた。

会談に応じれば虜にされるに決まっている。

「応じるでしょう。奴はジョンとはじっくりいっていないと思う。

降伏の口実を探しているはずですよ」

この旨を書き記した書簡をザドエンに送りつけると観念したのか意外にあっさりと降伏してミストリアに帰る事を承諾した。

「如何いう事だ？ミストリアはエティルを放棄する心算なのか？」

ザドエンを追い払い、エティル全土を手中に収め、陸軍が上陸できないように竹の柵を全ての海岸線に整備してからエレナは尋ねた。

「知った事か。我々はこの国民を飢えから救わねばならないのだよ。その為に比較的豊かなビンチや洪水の被害が少なかった北部地方から穀物を買う金が必要なのだ」

エレナに登用された学者のエドウィンがエティルの統治司令官としてありつただけの食料をかき集めてきたのだ。

このせいでエティルの軍資金は3日で底を尽いた。

明らかに宿敵ミストリアの配下であるバルボン將軍からの援助米を受けざる負えない。

そしてバルボン將軍がエティルから出ることは無かった。

「耕作地が回復するまで年貢の取立ては勿論無い。ミストリア軍の残した兵糧で飢えをしのがねばならん。然しミストリアの配下となつたかつての北部地方からは取り立てるぞ。ミストリアの庇護の下

繁栄を謳歌しているのは事実のようだから」

実際ミストリア量になってからミューファの考えた密集農法により収入は（播種量3粒で）4倍に膨れ上がり、（10cm間隔で12種類の穀物をまとめて植え育てる新農法。

酷く土地が痩せる為、連作は出来ない。）

かつて無い豊かな生活を謳歌していた。連作は出来ないので農法は3圃制である。

ちなみにピンチはこの穀物を餓えた貧民に高く売りつけ、大儲けした。

「ルシー姉様。暫くあたしは流民となった我が民をかき集めてまいります。部下を残していきますのでミストリアの侵攻があれば兵糧を奪ってください。それからエティルの本領の72万の民衆の税金は流民を呼び戻すために使います。そしてエティルを再建してみせる」

エレナは早速部下を各地に放って国民を集め始めた。

ミストリアの侵略を跳ね除ける為にはジョンに懐柔された北部の兵では駄目だ。

信用のおける流民の兵が必要なのだ。

「エレナ様。流民2万人集めました」

「こちらは8万人です」

たったの9ヶ月で394万人かき集めたエレナ達は、土地を与え、耕作を開始させた。農民と化した流民達は国家の手厚い援助を受けながら1月位で育つもやしの栽培に力を注いだ。

とにかく何でもいいから腹にたまるものを作るべき状況である。

耕作地では取り合えず、三圃制で麦と豆を作らせた。

一応北部の民2743万人を含めれば食料自給率は85%である。

北部は豊かな穀倉地帯が広がっている。

然し何時反抗するか分からぬミストリア派の民を信頼するわけには行かないのだ。

今のところは・・・。

「目指すは播種量15粒だ。徹底的に優良種を探し出せ1粒や2粒なら必ずあるはずだ。それと土の改良だ。分かったか？」
エドウィンは北部地方からのなけなしの食料を均等に分配して餓えから民衆を救うと土の改良に取り掛かった。

ミストリアの隆盛の秘密を土と播種量にあると見抜いたあたりは凄かったが手遅れであった。ミストリアではこの一年の間にミスリルの飛空艇、(500トン級)エレナを開発していた。
勿論名将エレナ・トウースにあやかっただ。

因みにミストリアのシレーリムは、播種量も研究の結果81粒にまでなっている。

エレナが之を知ったら流石に諦めて降伏するだろうと思うが不運にもエレナは知らなかった。「エレナ様。播種量7粒のシレーリムと思われる草の群生地を発見いたしました」

この程度の情報でお喜びする位技術的には遅れをとっている。
エレナのカリスマ性のみがエティルを統一国家たらしめている要因なのだ。

ちなみに、ルイスがトレニアに食べさせたシレーリムがいつの間にか群生したものらしい。「ルシー姉様。あたしはミストリアと和平したいと思いません。姉様のお力で実現させてもらえませんか？」
ルシーは怪訝そうに答えた。

「和平？私が皇帝なる名誉職に留まっているのは病弱だからだ。それを踏まえて言っているのか？」

「はい。能力的にはあたしより姉様の方が上の筈です。ミストリアと和平できるのは姉様しかいません。ここで和平出来なければヒカキアを平定した後にエティルを滅ぼそうと軍を派遣してくるでしょう。火球の呪文でも使われた日には竹の柵など何の役にも立ちません」

「柵などなくてもよい。帝国は磐石だ。今すべき事はミストリアに對抗する海軍を編成する事。そしてシステリアと講和する事だ」
ルシーは机上の空論を並べ立てた。

然し実行するべき者はルシー本人である。

「私は王都を動けぬ。ミューファ殿は果たして来るかな？」

エレナは一瞬誰のことを言っているのかと思った。

ルシーはミューファをミストリアの主権者と思っているらしい。

「ミストリアの皇帝はこの国と同じく名誉職です。実際にはジョン王が実権を握っております」

之を聞いたルシーは笑い出した。

「それならミストリアは恐れるに足らずだ。お前と戦に及んで勝てるのはミューファとイーボルト位しかおらん」

ルシーは勝つ為なら手段を選ばぬジョンの恐ろしさを実感できていないらしい。

トルハは、ミストリアの勝利の為なら、惑星をエティルに落とす位はやる姫である。

「ミューファ殿はお前より強いぞ。あの娘をジョンが傀儡にしているなら確実にミストリアは分裂する。暗殺するか利用するか出来ないならジョンの負けだ。何時の日かミューファにジョンは討ち取られるかもしれない」

それまで大人しく数十年も待っているというのか？まあいい。どうせ講和する心算でいるのだ。

ジョンが愚かなセクハラ容認政策で議会に解任されるまで、大人しく待ってやろう。

もつともジョンが倒されればミューファが政権を取って内戦になるのでなければ待つだけ無駄であるが。

エレナはほくそ笑むと、エティルの再建計画のために、重臣達との協議に入った。

セタの受難

セタの受難（1）

その頃セタは炎風のメンバー18名と共にエティル軍の執拗な追撃をかわし、エティル東方に幾重にも連なるエトナ山脈にひっそりと身を潜めていた。

鬱蒼とした木々の怪物樹人や、久しぶりの獲物を求めて次々とやってくる蚊などに苦しめられ、暑さにも耐えかねた5人の女性幹部のうち、2人が肌も露なスクール水着（エティルでは下着として使用されていた）姿になり、（ジョン派の象徴にセタが思っていた）怒り狂ったセタに切り殺され、食料の獣をおびき寄せるための囿とした。

残りの2人は之に恐怖して逃亡を図り、セタに捕まり、散々凌辱された後、之も切り刻まれ、魚の餌にされてしまう。

最初は190名いた炎風もある者はセタに殺され、ある者はセタの慰み者になり、ついには14名にまで減ってしまった。

このような所業の持ち主だからエティルの人民はセタを悪魔か鬼畜の如く憎んでいた。

当然補給も足らずに、村人を手にかけ、食料を奪い、少女を拉致して身代金を要求するという生活をしている。

「之では真正正銘、ただの夜盗だ。セタ様。エティルを放棄いたしましょう。いかにセタ様が勇将でもこの数の差では勝てませぬ。南方へ逃げ、再起お謀るべきかと思えます」

最後までセタについてきた14名の部下はセタの怒りに触れて切り殺されないように身構えて進言した。

セタに殺された4名の女性幹部の二の舞にはなりたくない。

忠義の為にセタと心中する気は部下たちにはなかった。

ただ、セタを見捨てれば自分達はエティルに降伏して拷問死するか道は残されていないだけの話である。

しかも裏切り者の汚名が子孫永代にまで付きまとうのだ。革命を起こして高級幹部にのし上がらぬ限り、この者共に幸せな未来はないだろう。

「セタ様。エレナはまだこの辺りの陸内港には気付いていない筈です。船で川を下れば密かに南方まで転進できます。その国で兵を挙げ、北はジョンに。東はエレナに。南を我等にといいわゆる天下三分の計を御取りになるべきです。そして反ジョンの勢力と結託してミストリアを攻略すればエティルは戦わずして降伏します」

セタの軍師ルミ・アーケシュトが懸命に説いた。

ここでエレナに決戦を挑むとか言われたら炎風は全滅だ。

セタはそこまで馬鹿ではなかったようだ。悔しそうに下唇を噛みながら宣言する。

セタは心中壮烈な復讐をジョンに施す事を誓った。

全ての権力を彼から奪ったジョン派のトルハに復讐するのだ。

「撤退する。天下三分の計だ」

セタは怒りにかまけて3つの村を焼き払い、村人を皆殺しにして憂さ晴らしをしながら港を目指した。

この間6名の兵がマラリアで死亡し、5人が村人との戦闘で戦死した。

死んだ者は、作法により、鳥葬で葬られる。

掛かった鳥はセタ軍の夕飯になるのだ。

「死んだ者に用はない。せいぜい俺たちの夕食に貢献するのだ」

こういう性格だから、部下に見放されてミストリアを追い出される羽目に陥った。

パタレーンやエティルを渡り歩いたが何れも敗れて、放浪している。このセタに組しよう勢力が無かったわけでもない。

数百人の山賊を率いるマラカシー家やエティル軍の大将、エラル・ドラームはセタの為に港を襲い、脱出港を確保してくれていた。

セタが女性幹部を殺害して食糧確保の撒き餌にしたり、(3日待つた)村を襲ってなけなしの食料を奪ったりしなければ手持ちの食料

が尽きる前にマラカシの押える隠し港に比較的安全にたどり着けた筈であった。

然しそれを言ったら女性幹部の二の舞である。

ミストリアを理不尽に追放され、復讐の為に各地の軍閥を渡り歩いているセタには、情勢がよく見えない。

どう考えてもジョンの天下統一は時間の問題であるから、降伏して領地の返還を求めたほうが、余程建設的であろう。

ジョンの最大の政敵、シャリーの娘はジョンの部下として手厚く保護されているのだから、セタだって優遇される可能性はあった。

然しもはや手遅れ……。

そしてセタの襲撃に脅えた村人の有志が自警団を結成してセタのいる山を包囲したのだ。

「村人の山賊狩りの義勇兵が我等を追撃。港へは入れません」

「この山は1万の村人に取り囲まれております」

部下達が顔を青くして報告した。

村人に捕まったらなぶり殺しにされるに決まっている。

「如何いたしましたしょう？セタ・ブレイメン様」

出来れば降伏だけはしないで欲しいと部下達は切実に思った。

降服した所で、どうせ殺されるに決まっている。

部下達は、セタの首を取って村人に命乞いをしようかと真剣に悩んだ。

一生鉱山で強制労働とかでも、命だけは助けてくれるかもしれない。

「セタ様。かくなる上は山に火を放ち、村人ごと焼死させましょう。

そして火に撒かれて逃げ惑う村人を切り殺すのです」

セタの軍師、ルミ・アーケシュトがそう進言した。

もはやそれしか、助かる道はないだろう。

然しセタは笑い飛ばして言った。

「正規軍でもないクズ共が100万人集まっても俺は倒せんさ。俺は一応ハイファ・エルフだからな。通常攻撃はきかんのだよ」

俺達はどうなるんだよ？

部下達はこの時逆心を抱いた。

セタが大見得を切ると手下たちが2人武器をセタに向けたのだ。

「何の真似だ？」

セタは不機嫌そうに呟いた。

トルハと言い、こいつらと言い、如何して俺を裏切るのだ？

あのブルマー好きの変態王より俺が劣ると言うのか？

「貴様ら。そんなに死にたいのか？」

セタは黄金の鞭を取り出すと身構えた。

「俺を裏切るのか？」

セタは逆上して尋ねた。

「殺人鬼より変態の方がはるかにマシだ」

部下達はやり返した。

「もうあなたには付いてゆけない。貴方の首を手土産にエティルに降伏する。命だけは助けてくれるだろう。」

セタは再び部下に尋ねた。

「俺を裏切ると言うのか？」

部下たちは黙ってセタを切りつける。

黄金の鞭で防いだが、その拍子にセタは足を踏み外し、山の急斜面を転がって川へ落ちた。「しまった。之では降伏しても処刑されるだけだ」

部下達は一番知恵のありそうなルミに縋る様な視線を向けた。

ルミはセタが生きていると信じていたが、この部下達を殺そうと決心する。

「包囲の解けるのを待つしかない。このエトナ山を1万位の兵で包囲出来るか。必ず諦めて別の場所を探す」

ルミは言い切った。

それでも部下達の不安そうな表情は消えない。

たっぷりと部下の不安を煽ってから部下に言った。

「お前はここで狼煙を上げてから川へ飛び込め。自殺したように見せかけるのだ。そうすれば私は安全だ。それともここで私に切られ

るかね？」

部下達はぶんぶんと首を振った。

「俺達は命さえ助かるなら喜んでルミ様の支配下に入ります。ですから見捨てないでください」部下達は必死に命乞いを始めた。

ルミはそれを無常にも拒否する。

ルミが剣を振るうと部下達は首を失い、地にふっした。

「役に立たぬものなどいらんわ」

ルミは死体を村人のいる方角へ投げ落とすと、仕方なく自分で狼煙を上げ、その場を立ち去った。

単純な農民の事である。

炎風が仲間割れをして殺しあつたと思うに違いない。

たとえ真相を見破られていても女性が主導権を握る事が皆無な（2年前までは）エティルではルミが殺したとは思われないのだ。

ちなみにルミがセタの手下となつたのは自分の才能をセタが認めてくれたからだ。

ミストリアも候補に挙がったがルミはジョンの為にブルマー姿を披露してやる気は微塵も無い。

第一セタの家臣であるルミと反逆者トゥーロでは、お家騒動に発展するに決まっていた。

ルミはジョンが即位するまでは、ミストリアの若伯爵であつたのだ。今はたつたの12デイルスでセタに雇われていた。

ルミの故郷の、南方の大陸には、栄えている時に買った領地が1州と民150人がいる。

当面はセタをその領地に迎えて、再起を謀る心算であつた。

傾斜国の更に南方にある大陸で、俗にビヤツカと呼ばれている。

ルミの領地は、砂鉄の生産が盛んで、魔法鍛冶師が2人もいた。

小国ながら、税収は4万デイルスにもなる。

ルミはセタを探す為に、水着姿になると川を探索し始めた。

身持ちの硬いエティルでは、水着姿でいるだけで、相手が勝手に避けてくれる。

やがて狼煙を見た農民がルミの計略どつりに惨劇の場に集まっていた。

「これは酷い」

農民の1人が息を呑んだ。

惨殺死体は腐乱化してラドカイン虫の食料となっていた。

こういう状況になれない農民達は、戦慄を覚える。

「仲間割れか？セタらしい最後だな。おそらく仲間割れの末に相打ちになったのだろう」

哀れな奴だと農民達は思った。

取り合えず担架を用意して、使用人の1人に墓地まで運ばせる。

「奴はミストリアの貴族だ。損害賠償は8割増しでジョンに請求してやれ」

村人は、セタに陵辱された女性兵士の死体を丁寧に埋葬させると、引き上げようとした。

然しその意見に反対するものも1人だけいた。

「之は計略だ。セタは死んではない。早くセタの居場所を探すのだ」

農民に雇われた傭兵、クラム・ドゥルムの意見である。

生涯に500人主君を変える事を目標にしているフリーターのこの若者は、380人目の主君にこの農民達を選んだ。

村の唯一の財産、5千デイルスと聖剣メタボ3を貰い受ける約束でだ。

ゲーム的に表現するなら攻撃力+1（10%増し）の魔剣である。

他国に残してある、部下15人（女性兵士6人と娘3人と妻を含む）は盗賊ギルドの援助で、

出店した織物屋で、月420デイルス儲けている。

クラムは仕入れ担当だ。

魔剣ならさぞかし客寄せパンダになるだろう……。

然し農民の反応は冷たかった。

鍬や斧を構えると、クラムの周りを取り囲む。

「あんたはもう帰っていいぜ。セタを倒したのは俺達だから報酬はなしだ。さつさとこの国から出ていかねえと打ち殺すぞ」

クラムは村人は初めから、報酬を払う気がないようなのをやっとなつた。

然し契約した以上は、例え騙されても仕事だけはしなければ、再就職は絶望的なのが、フリーターの辛い所だ。

只働きでも仕事をしないと、契約不履行で捕縛されるのである。

官憲はフリーターの言い分は聞かない。

聞いたとしても、警察に睨まれると、仕事がなくなるのだ。

そんな訳で頑強にクラムは言い返す。

「セタは死んでいない。この狼煙を見れば計略だつて事くらい分かるだろう。どこの世界に狼煙を上げて居場所を教えてやる敗残兵がいるのだ？近くを探せばセタは見つかるはずだ」

村人は既にクラムの忠言を報酬欲しさの戯言と決めて掛かっている。

「ああ、聞こえねえなあ」

思い切り馬鹿にして蔑んだ声でクラムに言った。

「セタは死んだんだ。報酬欲しさにこれ以上言いがかりをつけるなら官憲に突き出すぞ」

そう言つと村人5人がクラムを引きずつて川へ突き落とした。

「貴様ら。必ず官憲に突き出してやるから首を洗って待っているう」

・・・

クラムの捨て台詞に村人が言い返す。

「馬鹿な奴めが。俺達に支払い能力が無い事くらい推察できねえのか」

農民達は口々に川底へ落ちていくクラムに罵声を浴びせた。

それを見た他の傭兵は一目散に逃走してセタ派に走った。

然し勝利に浮かれる農民達はまだこの事を知らない。

クラムは落ちていく意識の中でこの村人に対する復讐を誓った。

「傭兵達が逃げたようだ。契約不履行の罪で手配しろ。全員縛り首だ」

とことん理不尽だが用済みになった傭兵の末路など何処の世界でもこんなものだ。

だから伝説の勇者様の末路はひた隠しにされ、吟遊詩人ですら歌わない。勿論用済みになったとたん上意討ちにされるのだ。

王にとっては邪悪な魔王軍も伝説の勇者様も同じ敵だ。敵を倒すには必要だが倒した後はどこにもいらないのである。

「川底に2千の農民を派遣しろ。奴の言うとうりセタが万一生きていたら傭兵どもと合流するかもしれん。それからクラムの死体は出来れば回収しろ。セタを殺した英雄として葬ってやらぬと後々言いがかりをつけられるからな」

そしてこのエトナ山を観光地にしてクラム饅頭やクラム煎餅を売ってしこたま設けるのだ。その時、農民の1人が村長に訴えてた。

「村長。娘御のメル・フォート様が傭兵共に拉致されたようにございます。引き換えに約束した報酬を迷惑料の10万デイルスと共に払うよう要求しております」

「何？」

自警団の代表である村長の顔色が変わった。

セタを倒していい気分だった村人の背筋も凍り付いた。

然し我にかえると、馬鹿にした様に言う。

「何を寝言をほざいている。無視して傭兵共を皆殺しにしよう」

女性に対する偏見が健在のエティル人にとっては人質は無価値であるように写る。

ミストリアは好景気で、女性の権利もある程度認められているが、エティルでは戦乱による荒廃で、政治の道具としか見られていなかった。

セタも少女誘拐に手を染めたが村人は1デイルスも出さなかったのだ。

その娘、エルフのアイリは、何故か陵辱される事なく、セタの召使になる条件で、港の味方に保護されていた。

「俺の娘を誘拐するとは。叩き切つてやる」

ミレイドの詩人の書いたミストリアの宣伝用小説（ジョンの部下が勝手に書いた）を読んで、

ミストリアに傾倒したらしい村長は、思わず怒号した。

この声に同調したものはたったの12名。

この時点で村長はミストリアへの亡命を考えている。

村長のビグンはこの言葉で確実に失脚して村八分にされるだろう。

「村長。村のしきたりに意義を唱えれば村八分にされませぬぞ」

娘御は見捨てるかと暗黙裡に語っている。

之に対して村長は言った。

「我らの王はルシー様だが？彼女が誘拐されても見捨てるのか？」

ビグンは同調した12名の村人を周りに集めて、3歩下がった。

「あんな小娘に何が出来る？」

之に村長が噛み付いた。

「俺の一人娘だぞ。お前らにだつて家族はいるだろうが」

村長はそう言うのと傭兵と取り引きするためにマラカシの拠点へ急行した。

この時点で村長の地位を剥奪されている。

クラムを川へ突き落とした村長とは別人だ。

やがてマラカシの拠点へたどり着いた。

食を求めて集まってきた流民の勢力を糾合して1500人に増えていたマラカシは、近隣の村を襲い、4万人の奴隷を従えていた。

「やっと見つけたぞ。営利目的の誘拐なら地図位用意しておけ」

ビグンは誘拐犯に毒づいた。

「そんな事したらエティル兵が討伐に来るだろうが」

部下の2人がビグンを嗜める。

旧エティル長官として有名な、カービー公爵とブレプソン伯だ。

何故かジョンを嫌い、ビグンに匿われていた。

エレナの2万デイルスの献金と、ミストリア皇帝の3千万の契約金でも口説き落とす事ができなかつたらしい。

ジョンもエレナも、金を返せと言い募ったが、もはや手遅れであった。

ビグンは10デイルス程度の球菌しか出しておらず、村長は実質的に首にされたので、明日からは路頭に迷う事になる。

「ジョンに仕えようかな？ 駄目かな、カービーにブレプソン？」

この2人が、ジョンを嫌っている事を知っているビグンは、遠慮がちに聞いてみる。

「まずはメル様を救出する事だ。お前の食事代位、面倒見てやるから心配するな」

ビグンは、カービーが狼煙で掻き集めた、300人近い元部下を見渡して言った。

「お前がジョンの手下になりたいのなら俺たちも仕えて良い。だがあの拝金主義者のジョンと

俺達が仲良くやれると思うか、お前は？」

カービーに言われてそれはそうだとビグンは思った。

確かにブルマー好きの変態王、ジョン・ラッセルでは性格的に愛想がない。

「それは別に良いんだ。シャリーだって凶悪な王だし、俺も結構悪事は働いたしな」

ビグンの心を読んだらしいブレプソンが呟いた。

「ここだけの話だぞ？ 旧ペクダール皇帝の双子の娘が、ミストリアにいるらしいんだ。俺達は例の瞳狩り戦争の実行部隊なんだよ。あのペレトンとかいうガキもメデューサー・エルフらしいから、下手に仕官したら殺されるに決まっているだろ？」

ビグンはようやく納得した。

確かにあのペレトンが相手では命はないかもしれないとビグンは思った。

「そのシャリーの甥に当たるらしいジョンに仕えている位だから心配ないんじゃないですか？ 大体あのジョンは何者なんだ？ 奴の両親はどうなっている？」

ビグンが何気なく聞いてみた。

「母親は、シャリーの手を逃れて何処かに身を隠しているようだが、大方は死んだと思っっている。父親はシャリーの手掛かり、普通のエルフに魔法で変えられて、南方の島に軟禁されたらしいな。ジョンと配下の將軍達は知らない筈だ」

ビグンは之を聞いて呆れ返った。
自分の両親だぞ……。

「シャリー失脚後に行方不明になっている。シャリー派の残党共が、密かに処刑したのかも知れんな……」

「……」

ビグンは不運なジョンの両親に祈りを捧げるとマラカシの兵が守る港の城門に部下を進めた。

「俺の娘を返してくれ」

ビグンはいきなり部下と共に土下座をして泣いて頼んだ。

人質作戦を取られては慈悲にすぎるしか手はない。

「お前らにも妻や子供がいるんだろう？」

ビグンは、クラムを暗殺する片棒を担いだ事は忘れていているらしい。

「お願いだ。俺にとっては可愛い一人娘なんだよう」

ビグンは泣いて頼んだが、マラカシは無情にも通告する。

「お前が10万デイルスに、傭兵との契約の報酬を払えば返してやるう」

ビグンは再び泣いて頼んだ。

そんな金があったら最初から払っているとは思わんのか？

如何して夜盗は、金持ちの居る街ではなく、貧しい村を襲撃するのだろうか？

ビグンは、心中毒づいたが、表面上は泣き落としを続ける。

「金を出せ。お前がたらふく資材を溜め込んでいるのは知っているのだ」

それは村の共同基金の資金だ。

村に橋を建設する為に、7年掛かって蓄えた7万デイルスだぞ。

迷惑な話だ。

「俺は村長職を解任された。資材には手が出せない。それにだ・・・」

「ビグンはそこで戦術を変えた。そんな金があつたら傭兵共に最初からくれてやるわい。娘を返せ。そうすれば見逃してやる」

マラカシがセタとつるんでいると知らないビグンは高圧的に条件を出した。

12名の村民も鍬を掲げて威嚇をする。

マラカシの兵は、そんなビグンをあざ笑う様に微笑を向けた。

「へっ、お前ら、俺の命令うには逆らえん事を分かっているかいようだな。まあ良い。3日やる。俺の命令を聞くか娘を殺されるかどちらかにするんだな」

そう言うつと威嚇の矢をビグンの目の前に放った。

慌ててビグンは後方に下がる。

「見下げ果てた奴だな」

ビグンは毒づくつと交渉を諦めて帰っていった。

12名の農民は、ビグンについて行った。

近くの洞窟に身を潜めて対策を練る。

「如何します？俺達はいいつの手引きをしると要求されるでしょうね？」

村民の1人が推測した。

あいつらは、貧乏村の村長の娘などを誘拐して、何がしたいのだ？因みに400デイルスあれば一年は遊んで暮らせるであろう。

「ビグンさん。如何します？」

部下の1人シャルロット・アートニムが尋ねた。

一応村祭りでも肉を切る役目を仰せつかった英雄である。

ミストリアの旧王家で、雑役婦をしていたらしい。

一応部下も3名だけいた。

トゥーロとトルハの反乱により職を失い、ビグンの元に身を寄せて

いたのだ。

部下もついて来ている。

「セタを見つければ娘さんを返してくれるのではないか？ ビグンさん。セタを探しましょう。奴を人質にしてメルを開放させましょう。」

セタはプライドが邪魔な上、あの会議と会議室での失策によって正規軍と戦える希望な少しも無い。

会議室とはセタが部下に見捨てられた崖の本陣のことを言っている。

「セタを探すのだ。」

どうせ物好きな女の子の家で匿って貰っていたに決まっている。

それゆえ荒狂う川の周辺を徹底旗に探し始めた。

この頃になるとエレナも自体をようやく違えていた事に気が付き、セタ・ブレーンへの倒滅作戦と評して6万人の兵士を（エティル政府軍に傾斜国と同じ数だけの給料を支払った）送ってやった。

中学生も含めたエリート魔法戦士で構成された最強の魔術師兼戦士である。

エレナはミストリアの豪商イーボルトの支援で集めたこの兵で、セタ排除によるエティルの統一を計画していた。

ジヨンはエティルに再侵攻する気は今の所はないらしいので自由に行動ができる。

エレナはそう計算している。

「君達は之から反政府武装ゲリラを撃滅しろ」

学閥で構成された兵の40%を占める24000の女性兵士には、エレナが直接号令を掛けた。

更にエレナは兵士達に与える報酬について付け加える。

「セタの首を取った者は刑務所に入れるが50万デイルス払ってやる。生け捕りにしたら2500万デイルスやるぞ」

この破格の報酬に部下達が色めき立った。

セタを生け捕れば家族が一生遊んで暮らせるだけの富が手に入るのだ。

「エティル王万歳」

「エティル王万歳」

部下達の王を称えるその声はミストリアに届いたと後世の学者によつて伝えられた。

明らかに誇張されて伝わっているようだが。

「諸君。あたしは人には優しくするがセタは人殺しだ。しかも人間ではない。捕らえて自決させるかミストリアの裁判官に裁いてもらう事になる」

兵士達は再び歓喜の声を上げた。

ジョンにセタを引き渡せばいくばくかの金が手に入るであろう。

「ジョンのやることもひとつは正しい。世の中金と食料だ」

エレナはそう思ったが身持ちの硬いエティル人にそれは言えない。

「セタは生け捕りにしろ。まあ殺そうとしたって我らの武装では無理だが」

そこで部下が口を挟んだ。

「エレナ姫。セタが本当に捕ったら如何なさるおつもりですか？エティルの国庫にはそんな余裕は・・・」

エレナの口約束を重く見た側近の黒仮面卿は釘をさした。

それを聞いたエレナは悔しそうに歯噛みする。

「セタは逃げたと思う。あのボンクラな我が兵にセタは倒せん。攻撃が効かないのだから倒しようがない。ほおって置いて傾斜国あたりへ逃亡させるのが上策であろう。あんな奴のために我が国民を犠牲にするわけにはいくまい」

エレナは深追いはするなと釘を刺しておいた。

2500万ディルス貰っても遺族に渡されるのでは甲斐がない・・・

ジョンと戦火を交えて悟った事、それは戦争は生き残る戦いであると言う事だ。

死んでしまつては命を懸けた意味がない。

生き残る為にはどんな卑劣な策でも平気で講じる。

それがジヨン流の為政者なのだ。

「一応反政府勢力は討滅する」

エレナはエトナ山に本陣を置くとセタ捕獲作戦と称する山狩りを始めた。

セタに苦しめられた旧ギルモアの農民は喜んでエレナに協力した。

なお、クラムを殺害しようとした農民達はエレナに捕らえられ、契約不履行と殺人の罪で、国外追放になり、ドラゴンのいる島に置き去りにされた。

彼らのその後の運命は誰も知らない。

農民の家族は、エテイルにも居られないので、ミストリアに亡命した。

ビグンは特別の計らいで亡命が認められた。

セタはその頃マラカシの手引きにより港で脱出の機会を伺っていた。ルミが河川で倒れていたセタを連れて港までやってきたのだ。

そしてセタが誇る超大型自動船サラデイス（430万トン級）にて脱出する為の食料集めに奔走していた。

「出来れば使いたくなかったのだがこうなっては仕方ない。サラデイスで傾斜国を併呑してくれるわ」

そんなものがあるならさっさと使ってエレナ軍を叩いてしまえば良いではないか？切り札の出し惜しみをしているからこうゆうめにあうのだ。

セタの部下はそう思ったがキレやすいセタを怒らせれば、死が待っている。

部下達は口をつぐんだ。

「如何考えてもこの国の造船工には造れませんな」
ルミが相槌を打った。

「エテイルにはないでしょう。無論ミストリアにも。我等は船内のゴーレム（無人）製造システムを復活させた。巨人召喚装置もな。傾斜国は我等との同盟を拒否できないでしょう」

セタは、之を聞くと珍しく哄笑した。

「そのとうりだ。然しゴーレムの存在が露見すれば著作権法に違反して我等の技術を真似するやからが出るに決まっている。それだけは避けねばならない」

セタは毅然と言い返した。

既にミストリアの叛乱から5年の月日が流れていた。

ミストリアでは魔術師軍団50万人による戦車部隊ゲラムCの開発に成功している。

人口もミレイドが7254万人（幼子1207万人）。

ミストリアでは4620万人（幼子770万人）エティルが3800万人になった。

人口統計に矛盾があるのは民族が移動をするからである。

ジヨンはこの兵で南方のルゼーティア公国を包囲攻略。

傾斜国侵攻の足掛りとした。

セタはジヨン艦隊（5千トン級）5千の包囲網を潜り抜けながら傾斜国へ向かう事になったのだ。

この戦いにジヨンは介入したらしい。

800隻もの艦船がセタの侵攻を妨げる為に配備されていた。

この主力艦隊は、囷としてセタの前方に陣形を構えた。

甲板には、ゲラムCの主砲が150門搭載されている。

大砲が珍しいこの世界では敵なしの武装の筈だ。

強いていえば、実戦訓練ができていないので、何処までセタに対抗できるか分からない。

「ジヨン王が自ら介入してきただと。傾斜国3億の民はジヨンにとって魅力的なのか」

セタが珍しく道理に合ったことを口にした。

ジヨンがセタ討伐に5千の艦船を投入するとは考えにくく、傾斜国撃滅の為の作戦の序盤と考えるのが普通だからだ。

「厄介だな。あの姑息なミストリアではセタ様に勝ち目はないだろう」

ジヨンは兎も角、あの姑息なトルハが相手ではセタに勝ち目はない

だろうとルミは思っている。

口にだせば確実にセタに処刑されるだろうが……。

「ジョンに傾斜国を取られては天下三分の計が崩壊するではないか」
危機感を募らせた、セタはサラデイスを強引に港から出航させ、ジョン艦隊を蹴散らしながら傾斜国を直指することにした。

ジョンのルゼーティア攻略が傾斜国侵略の布石と受け止められたらしい。

「サラデイスを出向させてミストリア海軍を壊滅させる」

セタは命令を発すると、サラデイスをミストリア軍の後方に回り込ませて後ろから奇襲する作戦を、ルミの進言により、決行した。

作戦を見破られないように、5隻の船を囿として海軍の前面に出す。之を見た司令官は、セタを見くびって掛かり、500の艦隊で砲撃させた。

セタ軍はミストリア艦隊の砲撃で沈没して、全員ミストリアの捕虜となった。

セタ軍の本拠を突こうと、艦船を前面に押し出し、港を攻撃させる。犠牲者は双方0だ。

勝利に浮かれてから空きになったミストリア艦隊の後方にサラデイスは回り込む……。

セタは容赦なくやたら豪勢な艦隊の本隊に大砲を打ち込んだ。

「じつ地震か？」

思わずそんな感想を抱く程、ミストリア軍は驚いた。

慌てて大砲により沈没しかけている、艦船の乗組員を救出に入る。

「何だあれは？」

サラデイスは、司令官の乗る船を守る護衛官20隻を一撃でしとめた。

こうなつては勝ち目はない。

その余りの巨大さに度肝を抜かれたジョン兵は一応攻撃はしてみたがサラデイスの砲門に6隻に50隻以上も沈められると諦めて道を譲った。

然しセタは諦めない。

逃げる船団を徹底的に追撃して負傷者を救出しながら後退する船団をほぼ全滅に追いやった。

「司令官殿、どういたしましょう？」

生き残った兵士が血迷った事をぬかして来た。

この状況で、しかも背後を取られて勝てる心算でいるのか？

司令官は憤慨したが怒りを抑えて優しく言った。

「負傷者を船に乗せて後退するぞ」

「え？逃げるのか？ミストリア将兵の誇りはどうなるのだ？」

部下がまた血迷った事を言った。

この戦いが敗戦だと言う事が分らないとは思えんのだが……。

「この戦いはどう見てもミストリアの惨敗だ。幸いにして死者はいないが……。もし我らに犠牲者が出たらあの色と欲の権化のジョン様はえらく悲しむだろう。手塩にかけた兵だからな。1人でも損害ができれば、兵の教育にかけた金が無駄になるのだ」

「うっ……」

部下達は、悔しさに涙を流した。

しかしそれ以上は抗議せず、セタの船に煙幕を打ち込んでから撤退する。

セタは追撃出来なかった。

この戦いでミストリアの損害は船4790隻、負傷者170万人のみである。

之により、ミストリアの天下統一は5年遅れた。

セタはルゼーティアに立て籠もったミストリア海軍を艦砲射撃して散々に打ち破り、撤退を条件に降伏させた。

セタはそのままルゼーティアに兵を置き、大ビヤツカ帝国の建国を宣言する。

人口6300万人の大国ルゼーティアから徴兵して300万人をかき集めたセタは動揺を隠せぬパタレーンに侵攻。之を占領した。

この報告を部下から聞いたジヨンは、

「なんて弱い軍隊だ」

と嘆く事しきりであった。

やはり金では強い軍隊は創れないか？

そんなことはないと思つた。

金で動かぬ者などいる筈はない・・・。

ジヨンは取り合えず、セタにあつさりと思れ去り、逃げ帰ってきたハタモン將軍を詰つた。

「お前には精銳5千を与え、パタレーン方面軍を任せていたのだぞ。幾ら300万とはいえ、もう少し持ちこたえられなかったのか？」
海軍への処分は寛大なものだっただけにハタモンは屈辱に耐え言い返した。

「出来たらそうしていますよ。でもそれをやると死人が出るだろう？それで良かったのか？」ハタモンが必死に抗弁した。

ジヨンは処刑はしない男だが、追放は御免だ。

ジヨンはハタモンにできるだけ優しく言つてやった。

「ああもついい。セタがミストリアに攻めることはないから安心して残存兵5千を休ませる。もし来るならその時がセタの最後だ」

ジヨンは一応残存海軍5千隻を使って海を守らせた。

サラデイスの火炮で全滅するのは間違えないのでこちらからは手が出せない。

ジヨンは早速金に任せて魔法をふんだんに使つた、新型艦の製造を部下に命じた。

金に任せて掻き集めた魔法使いと技術者は、早速命令を遂行する。

「強度を5倍にしる。金は幾らかかっても構わぬ」

「はっ」

部下はジヨンの渡した宝石入りの袋を大事そうに抱えて立ち去つた。早速主力兵器の製造に取り掛かる。

軍師のトルハが割つて入りハタモンにも命令を下す。

「サラデイスの火炮だつて魔力が尽きれば鉄屑だ。撃ちたいだけ撃

たせてやれ。残弾が0になつらゲラムCにて反撃する。だがセタも愚かではない。直に大勢非なりと判断してパタレーンに撤退するさ。そして残弾を補給するかするだろう。それを狙って筏で奇襲を掛け、サラデイスの動力を破壊するのだ。ハタモンはパタレーンに舞い戻り、反撃のときを待つて蜂起しろ」トルハは遠大なパタレーン開放作戦を立案した。

2度に渡つて折角占領したパタレーンを奪回されている。今度こそ確実に占領して保持しようという意気込みであった。

その為に給料で雇つた傭兵隊2万（正規軍は年給である）をハタモンに指揮させ、税金徴収は国で雇つたイーボルトの手下にやらせる事にした。

之によつてクーデターや叛乱は起こせなくなり、王の権力は飛躍的に増大した。

反乱を起こせば給料の支給が止まるからである。

サラリーマンやサラリーウーマンにとつて給料の支給停止は人生の破滅を意味しているから逆らえるわけがなかった。

兵士だつて家族を食わせねばならないから給料を60歳位まで貰わないと生活出来ない。

同然終身雇用が伝説となるのである。

それを防ぐための再就職が天下りなどと陰口を叩かれるのだからどうしようもないのである。「王。戦わないのなら今まで訓練を積んできたのは無駄という事ですか？軍隊は何の為にあるのです？」

ジョンの栄光とミストリアの為に信じて軍隊に志願したラーゼ司令官が軍隊を代表して聞いた。

軍の役目は民を守ることはないのか？

しかしジョンの答えは意外であった。

「経世済民の志しを果たす為に君達はいるのだ」

「はあ？」

いきなり超絶に飛躍した話についていけない部下達は啞然としてジョンを見た。

少なくとも兵士達がそういう答えを予測してなかった事だけは確かである。

「我々はセタの軍事侵攻の話をしておるのですぞ。経世済民の志と不戦主義は如何関係あるのです?」この時、ジヨンの側で控えていたトルハが説明してやった。

「この馬鹿共が。商業利益を守って税収を確保する為に決まってるだろうが」

能無しの手下や同僚共の余りのアホさ加減にぶち切れたトルハが粗暴な言葉でジヨンの言葉を解説した。

「ジヨン王はお前達を失って王の権威と税収に穴があく事を恐れている。働き手を失った家族は消費を控えめにするからだ。王にとつてお前達は商業利権の一部なのだ。だから最低限の税源を確保する為、結果的にパタレーンを見捨てて無傷で保持しなければならぬ。今セタと戦えばミストリアの全ての船が沈められるのかも知れないのだぞ。そうになったらミレイドは離反し、税収が減り、国民の生活が悪くなる。そう言いたいのでしょうか、ジヨン様」

「1つだけ違う」
ジヨンが言った。

「僕はパタレーンを見捨てるつもりはない。傾斜国への交易路が断たれては困るからだ。セタとは同じ空気を吸えないが、北傾斜国とは共に天下を収められるかもしれない」

ジヨンは手下達のセタ嫌いが影響してセタ音楽と称する風刺歌を手下に作らせ、国民に歌わせていた。

ブルマー好きの変態皇帝とミストリア国民に刷り込み続けるセタ派への反撃である。

もつともセタの悪行たるや余りの酷さであるので反発心から進んでブルマー姿になる貴族の娘が増えてきていた。

はたから見ればアホらしい戦いなのだがブルマー派は、反セタと女子の自由の象徴に受け取られている。

いずれやはりセクハラは良くないという時代が来れば廃れるかもしれ

れないが今の所はブルマー派に抵抗するものは以外にも家の家長や地主、職人などであった。

「あんな奴と僕を一緒にしたら怒るぞ」

ジヨンは嫌な事を思い出させられて不機嫌そうに言った。

「僕は確かにブルマー姿の女の子とイチャイチャしたいと言ったし、今は性的なこともしてみたいと考えている。然し、セタのような卑劣間に変態よばりされる覚えはない。体制が整い、期が熟したら反撃して補虜にしてやる。皆もその心算で今は自重しろ。今攻撃に出たら、たとえサラデイスを捕獲しても追放するからその心算でいろ。分かったか？」

個人的な恨みを心中に重ねて部下に言い放った。

「それにこの際だから訂正しておくが僕はコスプレで性的行為をするならスクール水着で試してみたい。僕の毒牙にかかる少女がいるなら、スク水姿で僕を誘惑する事だ」

最後の言葉はともかく部下達は一応ジヨンの真意を理解して言った。「分かりました。命令があるまではミストリア軍本隊は攻撃を仕掛けません」

部下達は誓約した。

それで当面の問題はミストリア株の信用回復に取り組む事となった。革命と戦乱のごたごたで株価は1デイルスにまで落ち込んでいるのだ。

言わずと知れた破綻寸前である。

借金も1200兆デイルスにまで膨れ上がっていた。

シャリーの残したサラ金からの借金が膨れ上がったらしい。

取り合えず借金の利子を停止する代わりに爵位を与える事にして無理矢理債権者を納得させた。

因みに公爵である。

債権者は一応喜んで利子の停止に応じた。

断ればジヨンは借金を踏み倒すだろうと言った本音はとても語れない。

「戦争をやる前に之を何とかせねばならんな。新税を取り立てるか？」

徳政令を出すのは簡単である。

然しそれをやると経済が崩壊してしまう。

「とにかく宣伝をして株価を上げるのだ」

ジヨンはそう決意した。

セタと戦うには経済を再建しなければならぬまい。

そして10億デイルスの賠償金を支払う約束をして屈辱的な和平をセタとした。

諸国攻防戦

(2) ミストリアを降したセタは、占領した国内から重い税金を(収穫の7割)取り立て、セタの王城ハルラーンの建設にエルフの労働者を使った。

セタは信用のおけそうなエルフを金で味方につけ、労働者の監視に当たった。

そして1万人もの精鋭を集めたセタは、忠誠心を試す為に、各地の山賊を討伐させ、集めた奴隷を、東方大陸に勢力を拡大中の、ゴドス帝国の商人に売り飛ばして利益を上げた。

ゴドスに渡った奴隷の運命はセタの知った事ではない。特にドラゴンが高く売れた。

隣国のバルト国との抗争に明け暮れるゴドスでは、兵器として極めて貴重なのだ。

ゴドスは代りに、特産品の緑の石をセタに寄贈。

之を国内の病人に売り飛ばして、残虐だが領民には優しい男と言う評判を勝ち取った。

ゴドスはセタの軍事援助を背景にして、バルト国を圧倒している。

バルト国は、ミストリアに援助を申し込み、謝絶されていた。

交易相手としては重宝されたく、食料を送って多額の利益は得ていたが……。

「セタ様。ゴドスへの援助は我らの命運を分けます。いつそ軍隊を送ってバルト国を制圧しましょう」

ルミはそうセタに進言した。

サラデイス以外の武装では、ミストリアにはとても勝てない。

なら、バルト国制圧に使った方が効果的ではないか？

「様子を見よう。東方大陸の国家はバルト国だけではない。バルト国をゴドスが制圧してから援助しても遅くはない」

ゴドスの勝利を信じて疑わないセタは、ルミの進言をはねのけ、国

内の財力を高める事に血道を上げた。

武術好きなセタは、武道大会を連日連夜開き、金品を徴収している。拝金主義者のジョンの真似をしている訳でもないが、為政者に金はつきものだ。

その意味では、ブルマー好きの変態皇帝と異名をとるジョンも間違っ
つてはいない。

だがそんなジョン王も1つだけ間違っているとセタは思った。

結局の所は、戦争は死人が出る。

あの時、ジョンの手下が犠牲を恐れずに、切り込んで来たら今の自分
はないだろうと思うからだ。

犠牲者のでない戦争など、ありえるだろうか？

兵士は生活費を略奪で徴収しているのである。

それを止めると言うなら、高額の危険手当を払わなければなるまい？
兵を殺すなど言うなら捕虜にしなければならぬ。

それには金が必要だ。

捕虜収容所を建設しなければならない。

「金を集める。我が軍の目的はあの卑劣なジョンに復讐する事だ」

金が集まれば、良い兵士が集まってくる。

セタはジョンとの戦いで、それを学んだ。

ミストリアでは私利私欲。

セタ軍では、富国強兵……。

どちらも金なくしては話にならない。

「あのブルマー好きの変態王をサラディスにて踏み潰してくれるぞ」
因みにセタは奴隷時代のペレトンとは意外に仲が良かった。

それ故に復讐の対象はジョンとトルハとトゥーロの3人のみである。
最近のペレトンは赤い服。

トルハは白い服を好むので、間違える事はまずない。

ペレトンはジョンの前では赤いブルマー姿か赤の巫女服姿でおし
ている。

そしてジョンからの給金で雇った、2600名の女官を束ねていた。

ペレトンの部下は、主の命令で青の巫女服で統一されている。

セタは自分の部下には黒の馬と、黒服で統一させていた。

この黒服の生産を請け負った服飾職人が大儲けして、セタから男爵の位と領地を授かり、セタの5傑と呼ばれる最強の軍団を編成した。その数4千。

南方のビヤツカ領（島）統一に力を発揮して、セタをいたく喜ばせたらしい。

パタレーンの国民は戦乱の中、離散して2600万人しかパタレーンには残っていないので、ビヤツカの奪取はセタの勢力を倍増させた。

それ故に砂糖の生産拠点を失ったミストリアは、急速に弱体化してセタと戦う力を失った。

逆にセタは砂糖を傾斜国に売ってその収入を国民生活の復興に当てた。

その余波で、ジョンの手下3名が部下と共にセタに寝返り、ミストリアの軍隊を養うブルマーとスクール水着の製造法をセタに伝え、子爵の位を与えられたのだ。

勢いに乗ったセタはパタレーンに進出していたイーボルトの配下を急襲。

之を散らして莫大な金品を奪っている。

イーボルトは不覚にも敗退して、1人の犠牲者もなく、本国へ逃げ帰った。

然し、幾らセタが暴君でも今の国力ではミストリアに反撃されてしまうのは分かっている。

ミストリアからの賠償金は1万トン級戦艦の建設費用に充てられた。サラデイスの大砲の生産化も進めている。

セタとしては余程に不本意であつたらしいが、スクール水着とブルマーの生産化と販売も始めた。

次々に新型を開発して、コスプレ用ブルマーとスクール水着を早急に売り出し、ミストリアの市場の2%を僅か数ヶ月で独占した。

「セタはやはり殺しとくべきだったな」

鬼畜の様な発言をしてしまったミストリアの1将校が追放された。この将校はセタの軍に加わり、ミストリアの情報をリークしていたらしい。

セタは蓄えた金を、ミストリアの企業買収につき込み、先進的な技術の吸収に勤めた。

サラデイス以外の文明レベルは、ミストリアの方が上だ。

ジョンには切り札のシレーリム麦があるのだ。

之がある限り、ミストリアが滅ぶ事は多分ない。

セタには切り札がなかった。

農業生産力と金が戦争の勝敗を決めるのだ。

サラデイスの火炮が幾ら火を吹いても、ミストリアを攻略は多分出来ない。

セタは一応それは分かっていた。

それに万一サラデイスを拿捕されたら、セタ軍に未来はない。

ミストリアに反撃の時を与えるのは危険だが、戦力の向上の方が重要だ。

セタはミストリアと戦う為に反ジョンの商人に金を借りてみた。

これでかなりの借金をしていたが之でミストリアの反撃を食い止められるなら安いものだ。

因みにゴドスにブルマーとスクール水着を売りつける計画があったが、ダークエルフの皇帝と

ゴブリンの住民が主体のゴドスではまったくうけなかった様だ。

バルト国では多少は売れたが、せいぜい3千万ディルスとミストリアでは取れないファークウム鉱石（ミスリルとオリハルコンの合金と言われる）が代りに手に入っただけである。

セタもミストリアも、たいしてファークウムを重要視していなかったが、ジョンは一応権益だけは抑えておいた。

何れ役に立つ時が来るかもしれないではないか？

そしてセタは軍隊を動員して、パタレーンに砦を7箇所造らせ、

ジョンの侵攻に備えていた。

傾斜国にも軍勢を派遣して、侵攻の機会を伺う。

「モースを生産させる。外国に売って大金をせしめるのだ。それから船でミストリア船を拿捕しろ。海軍を強化してしかも敵の株価を下落させられる」

セタは付近の海賊達に許可を与え、ミストリアの船を襲わせた。収益0・0000000001%と拿捕した船を国庫に支払う約束である。

海賊を焚きつける為の方便であり、収益に期待はしていなかった。

ミストリアの船は之により頻繁にビヤツカ海賊船に拿捕され、乗組員は（殺害すれば収益が減るから）全員開放された。

そしてミストリアが攻撃を自重しているのをいいことにミレイドまで船を送り込み、港を攻撃させた。

之に激怒した商人達は150兆デイルス相当の貢物をあらゆる方面からかき集め、ジョンに献上して嘆願した。

ミストリア軍の4年分の兵糧を添えてである。

「ビヤツカを野放しにしては我々は破産です。軍資金は差し上げますからどうか海賊を退治してください」

代表団の少女ファシーはジョンの目の前で手下に財宝の山を積み上げさせた。

ジョンの女子教育制度で経営を学んだ、新興商人である。

商人ギルドの元締めにブルマー姿になるだけで申し上がった、グラビアアイドルでもあった。

意外に経営能力があるのを買われて、13歳の若さで成り上がったのだ。

決してジョンがロリコンそうだから、この人（人間）が派遣された訳ではない。

「150兆デイルスの価値があります。旨く交渉すれば二百兆くらいで売れるでしょう。陛下が攻撃できないなら船を武装する許可を与えて下さい」

ファシーは、お色気をまじえながらジョンを説得しようとした。着ている服は韓国風の民族衣装である。

ジョンは之を見て当初の計画の変更を余儀なくされた。覚悟を決めてセタと戦うかそれとも降伏してセタの配下になるか。

ファシーを送り込んできたあたり、断れば商人は敵に回るであろう。「ジョン王。パタレーンは富の宝庫です。之を保持していただければ必ず王の富を倍増させてごらんに入れましょう」

ファシーは、ブルマー姿の参拝賞金をつぎ込んで、5年で開発した銀の腕輪をジョンに差し出した。

セクハラ男の攻撃を撥ね返すバリアー付きである。

之によつてセクハラ反対派に対するセクハラは皆無となった。

ジョンは一度ファシーの頭を撫ぜると不機嫌そうに言った。

「サラデイスにはどうやって勝つのだね？はつきり言うがミストリアの総兵力をつぎ込んでサラデイスには勝てん。白兵戦に持ち込んでもたぶん防がれてしまうだろう。セタがそれを考えていない筈はないからだ。それでもやれというのかね？負けるのが分かっていて兵を皆殺しにさせよと言うのか？」

こんな事を言い出すようではこの国もおしまいだなと居並ぶ家臣たちは思った。

だがジョンと運命を共にしてやろう。

奴はブルマー好きの変態皇帝だが、俺らの王だからな。

ジョンの一番のシンパであるペレトンですらそう思った。

イナクレンとトゥーロなどもそう思っている。

トルハは、降伏すればセタに処刑されるのはあきらかなので、交戦を主張していた。

そこに補給大臣のドルクレンが口を開く。

決して恋人を擁護している訳ではなさそうだ。

「俺に任せれば補給は万全だ。策はトルハさんが考えてくれる。攻撃するのはイーボルト辺りにやらせれば良いのではないか？」

イエスマンのドルクレンが、珍しく意見を述べた。

この人の活躍は極めて地味だが、暇な時は王国の武器や商売の特産品の開発を手がけている。

補給戦をやらせたら、ドルクレンにかなうものは多分ミストリアにはいないであろう。

「イーボルトだと？あの者が名将なのか？」

ジョンが驚いてドルクレンに尋ねた。

余り人の事はいえないがスクール水着の女の子と不順異性交遊に走る姿からは名将の面影はない。

しかもフェチは軽い男に見られがちだ。

因みにイーボルトの好みは、最近の日本で主流な露出が激しい奴ではなく旧型スクール水着と呼ばれる水着だ。

ミストリアでも旧スクが採用されている。

素材は樹脂だが、特殊な加工でポリエステル同様の感触だ。

セタ軍は、草の素材を生かしたスク水とブルマーを採用している。

製法は両国の幹部しか知らなかった。

「あの男がスクール水着フェチだという理由でミストリアの希望の星を埋もれさせるかね？ミストリアの法律上は問題ないし、コスプレ好きは彼の能力とは関係ない正当な趣味だ。セタに勝てそうな將軍はイーボルトしかないぞ」

ドルクレンは愛しのトル八さんのスク水姿を想像したようだ。

顔を真っ赤にして強弁する。

当然ジョンと家臣は、ドルクレンが怒っているようにみたようだ。

「奴は何を怒っているのだ？」

ジョンはペレトンに聞いてみた。

ペレトンにもよく分からないようだ。

「あの人は変わり者のドワーフですからね。あの人が私の弟か兄かになるのかと思うと気が重いです」

ジョンはドルクレンを見た。

ほおっておこう・・・。

奴の気紛れ等些細な事だ。

それよりもイーボルトだ。

それでジヨンは考えた。

試しに使ってみるのも1興かもしれない。

「徴税官イーボルト。お前をパタレーン総督に任命する。早急にセタを追い払い、サラデイスを確実に沈めよ。生け捕るうなどとは思わな」

ジヨンの命令はイーボルトに衝撃を与えた。

何処の世界にスク水姿の女の子と淫行に走る男を総督に任命する奴がいるのだ？

幾ら法律で問題なくてもモラルが低下して困らないか？

「おい。俺の所業を知ってるなら何故総督にするんだ？」

イーボルトにとってスクール水着好きの変態男の不名誉な称号はトラウマらしい。

ストレス性心的外傷も多大にあつた。

まあ自業自得だし、こういうのは彼の趣味を理解しているはずである愛妾の女の子の方がかかる傾向の方が強いと思うが……。

「お前の才能を試してみたくなつたでは理由にならんか？それともセタはお前には手におえないか？」

この挑発にセタは心に決めた。

そこまで才能を買われて、従わなければ男がすたる。

「命令なら喜んで従う。然しサラデイスは沈めなければならんのか？拿捕して海軍を強化するならきつと役に立つぞ。サラデイスには750年前の宇宙大戦（170の銀河が戦争を繰り返して、ブアンレイア帝国が勝利して170の銀河を統治したらしい）にて使われたゴーレム製造装置と巨人召喚装置が装備されている。セタは知らないようだが、サラデイスは宇宙船だ。余り遠くには行けぬが月か太陽系（この世界の）位なら6日で往復できる。それを沈めるのか？考え直せ」

イーボルトはジヨン王に事の真相をお語り始めた。「エティルには宇宙大戦で勝利したブアンレイアの惑星統治機関が置かれていたん

だ。俺はその民の正当な世継ぎである。まあその純血は俺の代で終焉するかな。俺は最後のブアンレイア人だからな。ちなみにミストリアの王家はブアンレイアのクローンと純潔人との間に出来た子供の子孫だ。一般にはハイファ・エルフと呼ばれている」

「ジョンは之を聞いたミューファに手を振った。意味不明のリアクションであるが従兄妹同士通じるものが会ったらしい。」

「私は知っていた。王も少しは勉強をなさって下さい」
ドワーフのトゥーロが嫌味を言った。

このドワーフは今でもジョンとじっくりこないらしい。ジョンは仕方なく決断した。

「分かった。サラデイスは好きにしる。どうせ破壊しても新しいのが来るんだろうが」

トゥーロを無視してジョンが言った。

「ジョン王。サラデイスは沈めぬべきです」

ミューファもイーボルトに同調した。

「商業権益を守るため、サラデイスは必要です。宇宙を手に入れたくありませんか？」

この言葉にジョンがキレた。

「だから好きにしる。失敗したら給料カット90%と3年の労役を課すからその心算でいろ」全員の給料をか？ジョン王は思い切ったことをなさる。それだけ手下を信用しているのだろう。

「我々は失敗しません。必ずミストリアの青旗をパタレーンに掲げて見せましょう」

ミューファは形式上はジョンの上司でミストリアの元首である。命令には逆らえない。

ジョンは仕方なく攻撃命令を与えた。

「海賊船に限定して攻撃を命ずる。全員捕虜にしてパタレーンの国民とせよ。それからこの前財務長官に任命したコルコット。150兆デルスの財宝を担保に紙幣を発行しろ。之で400兆デルス

を叩き返す。国民にはれない様に少しずつ増刷するのだ。そして商業の復興に取り掛かれ。言っておくがこの借金を返済するまで戦争の資金は出ない。やるなら自腹でやってくれ」

この言葉にイーボルトは応じた。

だが兵糧の現地調達だけは困る。

どう考えても経世済民の志に反する行為だ。

「補給だけは大臣殿にお任せする。軍事費は後で請求するが良いのか？」

ジョンも答える。

「ああ。払ってやる」

ジョンがそう言うつと聞いていたファシーが笑顔を見せた。

「そういう訳だ。できるだけ早急にセタを打ち破るだろう」

ファシーは商売用の笑顔を更に向けると、ジョンの気を引いた。

この辺は趣味と商業利権拡大の為だ。

因みにファシーは、グラビア衣装の販売で儲けている。

主な取引先は東方大陸だ。

東方大陸の国家のひとつラザニーヤ国では（人口1億）ミストリア製のグラビア衣装がブームとなっているらしい。

「できたら我社のグラビア衣装をペレトン様に着て頂きたい」

別れ際にファシーはそう言った。

どうもファシーはペレトンをコスプレ好きだと思っているらしい。

まあ今時平気でブルマー姿や巫女服になるような人だから、誤解されても仕方がない。

ジョンは代表団を下がらせると早速借金の返済に奔走した。

まずは国債を発行して400兆デイルスを内々に支払う。

そして税金を50%借金取りから取り立て、その金で更に200兆払い、税金を取り立てる。こうして借金を450兆デイルスにまで下げてしまった。そして更に150兆デイルスを2重担保にして新紙幣アールを500兆デイルス発行して借金を根こそぎ返してしまふ。こんな無茶な政策をとれば、普通は極度のインフレになるが情

報の伝達の遅い中世では信用を失うまでに数ヶ月は時を稼げた。取り合えずファシーに命じて、交易の強化に努めさせて、財源を確保する事に努める。

更にジョンはエティルとの交易再会の使者をしつこく送った。

そしてエレナを屈服させる。

1万人目の使者を送ったとき、流石のエレナも降参して交易再開の新書をミストリアに送った。

少しノイローゼ気味になっていたらしい。

適当に追い払えばいいものをいちいち話を聞いてやってたらしかった。

5分おきに新しい使者がやってきて交易再開を申し入れたのだ。

「エレナは落ちたか。よくやった。早速商人を送り込んでエティルの産物を買ひ占めさせる。そして紙幣を出来るだけ海外に出すのだ」このジョンの命令は実行され、エティルにはミストリアの紙幣アールが出回るようになった。400兆アールがエティルに流れたのだ。当然インフレになり、ミストリアに侵攻出来る余裕はなくなった。

それでもこの交易で国民所得が7倍に跳ね上がったので（生活レベルが5倍に跳ね上がった）文句を言うエティル人は皆無だ。

こうして金を根こそぎ返済したジョンは、ようやく他国への侵略に力を注ぐことが出来る様になった。

商人達の突き上げもはや抑えられない。

「王。之で心置きなくセタからパタレーンを奪回出来ますな。この1年、俺達がどれほど悔しい思いをしてきたか」

イーボルトとハタモンがセタを屠る為に近隣からかき集めた7万の精鋭がアイリスに集結していた。

イーボルトの新生ゴ布林軍団アーネスである。

モースもゴ布林用に7万頭用意した。

馬は鉄の鎧で武装しており、ゴ布林は皮鎧に小型のランスを装備している。

「王。必ずやパタレーンを開放してご覧に入れます。セタ・ブレイ

メンを倒してミストリアに平和をもたらしましょう」

イーボルトは丁寧な口調で進言した。

第5次パタレーン会戦の宣言である。

この会戦のためにミストリア株60億枚を担保にして銀行から借金をした。

返せなかったらミストリアは大商人アリサ・ロールス・レム・ケイトンのものになるだろう。ジョンは知らなかったが彼が借りた銀行はアリサの私設銀行である。

ジョンの公的銀行では流石に貸してくれなかった。

「軍隊の強化の為には金がいるからな」

部下に命じて、三千人も将校を集めたジョンは、取り合えず兵の訓練をさせる。

セタとやりあうなら、慎重にこした事はない。

「イーボルトさん。負ければミストリアは財政難のため崩壊する。

インフレを力ずくで抑えるのは限界だ。帝国300万人の公務員とその家族が路頭に迷うのを防ぐためには勝つしかない」

ジョンが訓示をたれるとイーボルトも言った。

「分かっております。今密かにパタレーンに人を送り込んでいますからもう少しだけお待ちください」

イーボルトはセタの建国したビヤツカ帝国のスパイがいるものと仮定して嘘をついた。

本当は既に15万人の現地調達兵が叛乱に備えて各町で蜂起の命令を待っていた。

港に狼煙が上がったら兵の詰め所に殴り込みをかけ、太守を捕虜にするだけだ。

密告者が出ないのはセタとルミがそういう人種を必ず処刑する人物だと兵に叩きこんでいるからである。

それに密告などしたら反乱者としてビヤツカに家族が殺されてしまう。

そしてミストリアの世になれば今よりいい暮らしが出来るのは火を

見るより明らかだった。

それ故にミストリアを支持してパタレーンに残っていた828万人の民衆である。

ビヤツカの難民は、ミレイドに住居を持った。

戦乱を引き起こしたのはジョンのせいだがそれでもセタよりはましだった。

セタは女子教育制度を認めなかった。

ジョンは（ブルマー姿を衆人に披露する条件付でも）女子を金蔓と見込んで教育を受けさせているだけなのだがそれでもブルマー姿になる事さえいとわなければ、（と誤解されている）魔法使いにも僧侶にもなれるのだ。

こんな国はこの世界ではミストリアにしかない。

しかも、ジョンの兵はその教育を施されたエリート魔法戦士軍団なのだ。

女性兵の割合が一般兵85%、将校が70%。将軍が62%である。閣僚は男のほうが多かった。

「兵を送り込めれば後は人海戦術でサラデイスを攻略するまでさ」
之を聞いたビヤツカのスパイは急いでパタレーンに戻る事にした。
之を伝えれば戦功第1、スパイ長になれるであろう。

そうなれば部下が出来、生存率が上がるのだ。

スパイはセタに褒められるその姿を夢想して悦に入っていた。

騙されているなどは露ほども思わない。

「へっ。あのスパイは行つたか？哀れな奴だ。戻ればセタに処刑されるのは目に見えている」ジョンが部下の言い様に相槌を打つ。

「他国の事に気を使うほど僕は善人ではないよ。あいつが処刑されればセタの配下は叛乱を起こす。その期に乗じて武装蜂起するのも一驚かな。反乱者の名前はええと」

ジョンはわざとらしくセタの家臣の名を8名上げた。

古典的な手だがスパイはあいつだけではない筈だ。

最初の捨て駒のスパイを泳がせて、策略にかけた心算で、悦に入っ

て（と思っっている）ジョンが本音を語るのを身を潜めて待っている
真のスパイが必ずいる筈である。

「あいつらが蜂起したらサラデイスに兵を送って乗っ取る作戦だったな。良いか？絶対に人には聞かれるなよ。聞かれたら終わりだ」
ジョンは作戦を強調した。

地下で盗聴をしていたスパイ長のルービンは報告に戻る事にした。
ジョンが作戦成功を祈願する大宴会を始めたからだ。

「トルハさん。作戦どおり、セタの将軍に手紙を届けるのだ。2、
3枚わざとセタに見せてやれ」

ジョンはトルハにこっそりと訓令した。

セタを油断させる為、ビキニアマーを着込ませた年頃の娘に酌を
させて水をチビチビと飲んでいる。

何処から見ても馬鹿王に見えるはずだ。

（本人の同意を得て）ビキニガールのお尻を触りながらペレトンの
悲しげな視線を受けている。

然し流石にペレトンのお尻を触るわけにはいかなかった。

ペレトンはセクハラには寛容なほうだが、（ブルマー姿で言い寄っ
ていてさえ）真面目そうなキャラが災いして「そんなに女の子のお
尻を触りたけりゃ私のお尻を触ってよ」などといつても誰も本気に
しなかった。

一途な少女であるゆえ、男は怖気づくらしい。

ペレトンの恋は恐らく結婚が前提であろうから。

それから数日後・・・。

「王様。イーボルトが予定どおり、パタレーンに向かいました。囹
のゴブリン兵団もリーフの正門を通過してパタレーンに向かっており
ます」

リーフの星門は古代ブアンレイア人の使っていたワープゲートの事
である。

昔は銀河中に、存在していたようだ。

「王様。セタの海賊兵団を全て生け捕りにいたしました。之でセタ

軍のふりをしてパタレーンに潜り込めます」

ジヨンの將軍達が戦況報告に訪れた。

「王。パタレーンの農民が武装蜂起したようであります。即日鎮圧され、代表者は捕らえられました」

ジヨンは將軍に言った。

「お前達も宴会を楽しめ。この宴会に10億デイルスも注ぎ込んだのだ。商売を活性化させる為にな。明日は帝国の財政難を解消するための税制の改革を始める。今のうちに英気を養っておけ」

ジヨンの役割は国内の統治である。

戦争は部下に任せておけばいい。

大体パタレーンの作戦地帯まで命令を送るのは今の通信システムでは不可能であった。

「明日からは茨の道が待っている。今の内に楽しんでいた方がよいぞ。この資本投下でルーシーは活気付くだろう。たった10億の投資が疲弊した民衆を活気付け、100億の税収になって帰ってくるのだ。資本投下と買い支えはケチってはいけない。国家が買い上げるのは問題があるから市民に変装させた軍人に買いに行かせろ、明日にでも」

ジヨンはビキニガールに酒を持ってこさせ、（純粋な酌をするだけ存在である）將軍に勧めた。

「私は未成年です。酒を勧めれば刑罰の対象に貴方がなります」

冷たい声でジヨンではなくビキニガールを見た。

こういう趣味は少女の思うところではない。

「スクール水着フェチのイーボルトの方がまだマシだ・・・」

少女は心底そう思った。

何故かミストリアでは、スク水フェチとブルマー好きの地位が高い。王族が率先して売り込んでいるからだろう。

その経済効果は180兆位だ。

ラザニーヤでは2億。

ゴドスでは2千万。

バルト国では5千万の経済効果である。

因みに借金の限度額はラザニーヤ3億、バルト1億、ゴドス4千万、ミストリア6兆である。

それ以上は貸してくれなかった。

少女は、ジョンへの評価を35%程下げた。

「そうか。では水杯をとらず。まさか嫌とは言わないだろうな」

ジョンはビキニガールに水と杯を持ってこさせ、少女に渡した。杯に大量の蒸留水を流し込む。

ルーシーの氷屋で買い占めた長高級な水だ。

一杯50デイルスはする。

「有難き幸せ。之もって帰って売っちゃ駄目ですか？」

「・・・」

少女の言葉にジョンは感激した。

ここにも僕と同じ感性の者がいると思ったのだ。

ジョンはこの部下をその場で親衛隊長に任命してブルーローズ卿の称号を与えた。

自分と同じ感覚の娘だと思っただけ。

この鼻屑をジョンの譜代家臣はあからさまに無視した。

そして代表者を選んでわざわざブルーローズ卿を苛めない事を確約している。

我々は地位が欲しくてジョン王に仕えている訳ではない。

勿論くれるなら喜んで頂くがそれによって忠誠心が変わる訳では断じてなかった。

トウーロ以外の側近は別段地位には興味がなかった。

それに冷静に考えれば之は降格人事である。

恨まれる筋合いなどなかった。

「近衛兵など置かなくても俺達が守ってやるさ」

忠誠心に溢れる兵士達はジョンを守るべく私設募金団を創設した。

帝国の財政基盤を固める為の僧侶医者者の養成に使われる。

宴会はこうしてチャリティーパーティーに変質した。

因みに、この時集まったデイルスは金貨35万枚。全て学校建設の費用になった。

そしてジヨンはミストリア8874万人。

ミレイド1・3824万人に増えた総勢2億の民衆（農民）から臨時税10億デイルス。貢物（20億食分の年貢）を取り立てた。

更に150万人になった商人から1人1万デイルスの臨時税（総額150億デイルス）を、20万人の職人と1600万人の使用人から10億の収入がある。

それに銀行から借りた60億デイルスの借入金を差っ引いて110億の純益が転がり込んでくる。

ジヨンの部下は体操着の収入で養っているので問題なくデイルスは国庫の宝物庫に積み上げられた。

「ドルクレン。新たな産物を考え出せ。このままでは帝国は崩壊する」

ジヨンは2億以上に膨れ上がった民衆を持て余していた。食料は問題ない。

辛うじて今年は持つだろう。

然し今年中にパタレーンを落せなければ深刻な食糧不足が待っているのだ。

兵糧卵だけで冬を過ごす羽目に陥るだろう。

確実に内乱となる。

セタなどの相手をしている場合ではないのだ。

「ラーゼルンに4千万ほど移民させましょう。そして今の内にパタレーンを落としてしまえば当面は飢えをしのがます。今僧侶を総動員して備蓄食料を4倍にしていますから来年は何とかなるでしょう。だがお望みとあらば開発をして見ます」

ジヨンは対して信用していないようだが一応誠意を持って答えてやった。

「頼むぞ。荒地という荒地は開墾してしまっただけだから。もう耕地に出来る土地は残っておらん。エルフの森を切り倒すわけにはいかな

いから」

ジョンは万策尽きていた。

反乱を起こされてしまつては犯された後に火あぶりかな・・・。

ジョンは男だからその心配はなさそうだが彼はそう思った。

考えただけで身の毛がよだつ。

因みに同性愛に走るならジョンの好みはセタ・ブレイメンであった。流石のジョンも之を公言するわけには行かないと思つているのかそれは言わない。

「少し夜盗共を集めすぎたか」

ジョンは商人を炊きつけて食料の輸入に踏み切らせていた。

自由貿易なら税金は取れるし、食料も国庫の負担なしで民衆に供給できる。

急地に追いやられたジョンは自由貿易を正式に採用した。

農民には税の免除を保証する代わりに年貢を納め、代わりに国庫から代金を支給するシステムを採用する。

このシステムを運用する為に農協を設立した。

農民の自給自足体制を維持してなお、儲けを得ようとするならばこのシステム以外にないとジョンは思っている。

「まずはセタをパタレーンから追い出し、かの地を得て、国土を得るのが先決だな」

ジョンはミストリア軍60万を動員して囿の餌兵をルゼーティアに送り込む作戦を立てた。

本命は取り敢えずは同族のいるルゼーティアである。

だがたったの60万では人口6000万人のルゼーティアは落とせない。

サラデイスをおびき寄せる餌兵に過ぎないのだ。

然し進軍してみると以外に守備隊があつさり而降伏してミストリアの軍門に下つた。

一応降伏するとは言つてみたが本当に降伏するとは普通考えない。

「何だと？」

之では作戦どうりに行かない。

セタの新手の計略か？ルミが指揮をとっているのか？

「おい。こいつ等をさっさと船に乗せてミストリアへ連行せよ。一応王侯の礼で迎えるのだぞ」

連れて歩いて反乱でも起こされたら事である。

本国へ送ってしまえばミレイレアが監視してくれるはずだ。

ルミの狡猾な計略と信じているジョンは用心深かった。

守備隊を船で本国に送ってしまうとルゼーティアを占領して女子教育制度の実行宣言をしたのだ。

但し、ミストリアの時と違ってセクハラな要求はしなかった。

流石に之は真面目にやらねば女子を味方に取り込むことは出来ぬと思っただのだ。

案の定セタの暴政に苦しめられていたエルフ達は（エルフは家事分担と共働きが基本らしい）ミストリアに恭順の意を示した。

ジョンは海軍を接收。

サラデイスの居場所を聞き出すためにエルフ達を尋問した。尋問して三時間。

「サラデイスは傾斜国です。天下三分の計と言っております」

ジョンはあっさり口を割ったセタの手下を船に軟禁すると大軍を率いて、スパイ達の報告を信じて国内の反セタ勢力の掃討にやっきになってたパタレーンの港町を奇襲した。

港町は之によりあっけなく陥落してルミは近くの町に逃げ込んだ。

「何だと？あのスパイ共め。後で処刑してやる。ジョンの策略に踊らされおって」

町の司令官であったルミは4千の兵で籠城して援軍を待つ作戦に出た。

主力は傾斜国へ遠征しており、帰ってくる当てはない。

おそらく3年は戻ってこれないであろう。

然しそうでもしなければ怒り狂った手下にジョンへの手土産代わりに首を刎ねられるのが落ちだ。

「必ず援軍は来る。守りとうすのだ」

ルミは無責任な公約を掲げた。

「ルゼーティアの海軍が助けに来るはずだ。お前達もジョン王の毒牙にかかりたくなければ死守せよ」

ルミはルゼーティアがすでに落ちた事を知らないらしい。

そしてイーボルトの蜂起によって既にパタレーンの主要都市が陥落した事も知らなかった。

パタレーン会戦の戦況はジョンも知らなかったからルミの兵に執拗に買収工作をかける。

援軍がもし来てしまったらジョン軍は撤退するしかない。

決死の援兵と戦えば確実に怪我人が出るからだ。

経世済民の志は商業利権を守ることだし、万一国内で敵の攻撃による死者が出てしまったら私利私欲の大儀にも反する。

一般に私利私欲は己の権益のみを追求する者の事を言うらしいが、それを権力者がやるには民を栄えさせねばならない。

持たざるものから奪うことは不可能だからだ。

民は栄えさせてから重い税金を獲るべきなのである。

米10俵の収入から7割獲れば7俵だが、100俵の収入なら4割でも40俵で5倍は増収を見込める。

なら米100俵を目指して努力するのが私利私欲の醍醐味なのだ。

そうすれば民は喜び、権力者は毎夜宴会を楽しむ。

何か間違っているだろうか？

「ジョン王、お喜びください。パタレーンが全て陥落いたしました。この町以外は」

イーボルトの愛妾ラナが報告にやって来た。

今の肩書きはパタレーン総督補佐である。

イーボルトのスクール水着好きが災いして愛妾も偏見の目で見られることが多かったが彼女も実力的にはエレナ級である。

25万のエルフが立て籠もるハルラーンを15名の手勢で落とす名將であった。

セタに愛想をつかして 突撃と共にエルフ軍が崩壊したのを差し引いても中々の采配振りである。

「ご苦労さん。総督にはいずれ報酬を与えると伝えておいてくれ。それから直にこちらに進軍して包囲に加われと言っただ。サラディスが傾斜国にいる以上ルミを追い払えねば挟撃されて結局パタレーンを失う」

ジヨンは60万人も動員してこの程度の城にてこずっているのかとラナは思った。

「突撃したらどうです？崩壊しますよ」

ラナがあっさりと言った。

この程度の城、形だけ攻撃を掛ければ総崩れになる。

ラナはそう睨んでいた。

「危険はおかせん。降伏するのを待つ」

ジヨンは兵の損耗を避け、占領したパタレーン大陸全土をその強大な国力により、ミスリルの柵で覆い尽くそうという案を実行に移した。

之には流石のルミも度肝を抜かれたらしく、その日の内に姿を消した。町は3日後に陥落。

兵士達は解散させられた。

大反抗作戦

(3) 「何？パタレーンが陥落したというのか」

その頃、サラデイスの火砲を頼りに北傾斜国をほぼ手中に収めていたセタはこの報告を聞くと捕虜にした7億のゴブリン族を従えて取って返そうとした。

既に北傾斜国は組織的な抵抗は出来ずに、王族とわずかな兵のみがテロリスト（傾斜国ではレジスタンス組織）となってセタに寝返った（と王族は思っていた）兵士達を攻撃していたのだ。

ここで手を抜けば王族の反撃にあってビヤツカ帝国は崩壊するだろう。

「こしゃくな若造が……。軍を取って返してミストリア軍を殲滅する」

案の定逆上したセタは、本気で軍を反転させようとした。

民間船までつき込んで、3千隻の船で15万人の兵をパタレーンに送り、主力の5千はサラデイスで運ぶ心算だ。

部下達、特に女性兵士は、逆らうと身の安全を含めて命が危ないの
で文句は言わない。

もともとセタの側にいる女官は、魔界から召喚した魔族であったが
。。。

魔族の女性は美人揃いである。

しかも50歳位の（魔族としては）若い女性であった。

セタは反逆者は陵辱するが、恋愛には興味ないらしい。

567年生きて、妻も子供もいなかった。

妹のセリアは、140歳の普通のエルフである。

勿論義妹だ。

この時、セタに進言したのが、セタに恋心を抱く、ルミであった。

犯される覚悟がなければ、こんな暴君に付き合ってられるか？

セタ軍に女性兵士が少ないのは単に犯されるのが嫌なだけだ。

ルミは慎重に言葉を選んで言った。

「お止め下さい。大勢は我が軍に不利です。ここでパタレーンに固執すればパタレーンも傾斜国もどちらも失い、流浪の身になりますぞ。ここは確実に北傾斜国を抑えて反撃の時を待つべきです」

軍師のルミは命からがら逃げ延びてきて図々しくもセタに進言した。命がけである。

セタに犯された女性兵士の二の舞には出来ればなりたくない。

「策はあるのか？無能なる軍師殿」案の定セタはルミの言葉に逆上した。

「元はと言えば留守を任せていたお前が失敗して領地を失う羽目に陥ったのではないか」

セタはその拳でルミの背中を殴りつけた。

「そのお前に俺の行動を諫められるいわれはないわ。200万のエルフを率いてパタレーン奪回に向かう。ルミは2万の兵を率いて王族を皆殺しにせよ。今度失敗したら只では済まんぞ

」

セタはサラデイスと200万の兵団があればパタレーンを直に解放できる心算でいるらしい。出なければルミに再起のチャンスを与えるだろうか。

「はっ。王族を皆殺しにいたします」

ルミは屈辱に耐え、セタを見た。

こんな外道でも一度は愛を交わした中である。（キス程度だが）裏切ってジョンに付く心算はなかった。

各地で兵を徴募すれば、20万人位は集まるだろう。

その兵で決戦に持ち込めば傾斜国を併呑できるかもしれない。

そうすれば信用回復に大いに貢献するであろう。

「ではさっさと行け。南部と西部も俺が帰ってくるまでに制圧しとけよ」

理不尽な命令である。

セタがジョンを叩いて戻ってくるまでに半年くらいしかない。

その時間でモルゲン大陸（という名前）を攻略しろというのか？
「無理だな。しかしやらねばセタ様に処刑されるだろう。」

ルミはセタが反撃の軍勢をパタレーンに向けて進軍させた後、
即座にゴブリンの村を襲い、皆殺しにした後、仁君で有名な西部の
泥利王にゴブリンの首を届けさせ、降伏するように脅迫した。

「何？ビヤツカとは何処の国だ？」

泥利王は不覚にもビヤツカを知らなかった。
群臣を集めて協議する。

「俺は降伏するべきだと思う。ルミに勝てるか？あいつは卑劣な策
ばかり使うトルハより狡猾だぞ」

別の者が言う。

「そうだ。ブルマー好きの変態などよりビヤツカの方がマシだ」

「そうだ、そうだ」

ミストリアを意識しているのか、部下達が言い募った。

然し之が泥利をあらぬ方向へ導いてしまう。

王国の利益と国民の利益を量りにかけた結果、助平だが名君の誉れ
高いジョン王に国を譲ってからミストリアに投降したのだ。

「何？泥利王が投降してきたと？」

報告をつけたジョンは酷く驚いた。

ジョンは領地が増えたのを喜んだが、領地を増やすと軍隊を配備し
なくてはならない。

余裕はなかった。

「如何する？ファシー？」

莫大な金で、ジョンの顧問に任命されたファシーにジョンは尋ねた。
ファシーはジョンに秘策を授ける。

「傾斜国は金の採掘と織物が盛んです。都にして天下統一の布石
にするべきでしょう」

ジョンは部下に命令すると、西傾斜国の守りを強化させた。
緑髪（蛇ではない）のペレトンとトルハも之に同意する。

「折角の貰い物。セタに奪われる訳にはいきません」

イナクレンなども配下のドラゴン兵団を率いて参戦したがった。ドラゴンは血の気のおおい生き物だ。

「ペレトンさん。部隊を率いて、セタの兵から西傾斜国を守ってくれないか？」

ジヨンは西傾斜国の守りにペレトンを任命した。

与えられる兵は西傾斜国兵4万人。

「私は文官でして・・・」

荒事が苦手なペレトンは拒否しようと思ったが、拒否すれば日頃からブルマー姿でジヨンを誘惑している苦勞が無駄になるかもしれない。

気紛れなジヨンを怒らしたら、損だ・・・。

「私でよろしいのでしたら任地に赴きます」

ペレトンは笑顔を作ろうとしたが、無駄だった。

ジヨンは不機嫌そうに見えたペレトンの顔をみて人選を誤ったかと思っただが黙っている。

「泥利王。部下を指揮する為の宝剣をお渡し願いたい」

ペレトンが要求すると、王はあっさりと宝剣を渡した。

「では行つてまいります」

ペレトンは子飼いの親衛隊を率いて任地に赴いた。

因みに船は西傾斜国の船団千トン級が5千隻である。

船が不足していたミストリアはこの船団を押えて戦力を回復する。

そしてジヨン王は泥利王のようにあまくはない。

即座に声明を発表して殺人鬼のルミと強姦殺人魔のセタを（かつて自分の手下を凌辱したことがあった）討伐する義戦を宣言した。

「我々ミストリアは立場的に婦女暴行魔のセタと共犯のルミを許すことは出来ない。討伐してセタを捕らえてルミと共に罪を償わせる故に、希望者は我が軍に参陣せよ。こないからと言つて国家を攻め滅ぼす気はないが、セタと同一の考えに染まるなら、友好関係は保てない」

この下手な演説で集まった兵はゴブリン30万人、ドワーフ5千人、

トロール30人である。

当然女性であるエレナは軍を率いて（インフレを押さえ込んでから）ルゼーティアに本陣を置くジョンの下へ参陣してジョン王に協力を誓った。

始めジョンはエレナを警戒していたが、報酬の話をエレナがすると安心した。

エレナは参陣の報酬としてミストリアの誇る播種量81粒のシリムを要求したのだ。

エレナは1度ジョンに反逆をしている。欲を出した方がジョンが安心するのだ。

「良くこられた。アトポックとサーシアはまだ攻略できないのか？ 僕としては早く攻略してあの憎きペクダールを滅亡に追い込んで欲しいのだが」

戦争になれば軍需物資が高く売れ、穀物の相場も跳ね上がるからパタレーンの穀倉地帯を押さえ込んだジョンとしては是非にも行って欲しいなどと言う本心は流石のジョンも口には出せない。

「ルシー様はお元気か？ 何れ天下の誉れ高いエティルに行ってみたいものだな」

ジョンはエレナが参陣する前に、ルゼーティアの産物とパタレーンの砂糖と馬を高く売って130億デイルスを荒稼ぎしていた。

その金でパタレーンの産物を買占め、好景気を演出している。

好景気はミストリアとミレイドにも波及して、ミストリアはラザニア国とバルト国の交易拡大に成功。

10億デイルス分の産物が手に入った。

鉱石はミストリアではラザ石（例の合金）と呼ばれていた。

ミストリアの傘下にエティルを加えれば、ミストリアは更に強くなる。

「ジョン王。狡猾なセタを倒す志に感銘して軍に加わった。セタは何処にいる？ さっさとセタを片付けたいのだが」
之に対してジョンは答える。

「まあ焦るな。セタなどは大した問題ではない」

この言葉にエレナは驚いた。

（この人はセタとの戦いを地方叛乱くらいにしか考えていないのだろうか）

思わずエレナはそう考えた。

ジョンの考えている事はよく分からない。

エティルを配下にする為にセタを利用したのか？

それともエティルにブルマーを売りつける気なのだろうか？

ミストリアから輸入したスクール水着とやらは実に役に立つ。

陸上運動用ではなくプレートメイル用の、鎧の摩擦で肌が擦れない様に着用する肌着として。ブルマーも意外と役に立つかもしれないから売込みにくければ買ってほしいと思っていた。

然しそれでも解せない。

理解に苦しむ。

「エティルが強大化するのが嬉しいの？」

エレナは尋ねた。

ジョンの発想は常人には理解しかねるところもある。

恐らくエレナを蛮族の娘ぐらいにしか見ていないのだろう。

確かにエティルは蛮族だが。

「交易相手国としてエティルは極めて貴重だ。だからだよ」

エレナの言葉にジョンはセタが開発していた大砲アームストリーム砲を売り込み始めた。

この際売れる者はみな売ってしまおう。

ジョンはセタからパタレーンを解放した時、大砲鍛冶も押えていた。セタは腕嵐砲の製造技術を失ったのだ。

「1門500万デイルスでどうだ？ここにある5千門を250億デイルスで売ってやろう。心配するな。大砲鍛冶は貴方に50億デイルスで譲ってやる」

この人身売買的な取り決めは双方の合意の下成立した。

大砲鍛冶は断り切れず、エティルに移住する事を承諾する。

そうでもしなければエティルとの友好関係は成立しなくなるだろう。それにミストリアには腕嵐砲より威力は落ちるが、戦車砲なら所持していた。

当然大砲鍛冶も沢山いる。

具体的には月450門製造できるだけの生産力を持っていた。

ガレー船なら月25基である。ジョンは早急に腕嵐砲に対抗できる大砲の製造を職人に命じた。

そして魔法使いには1億トンの超弩級空中戦艦ルミナスの製造を命じた。

ジョンは国内に豊富なミスリル銀をふんだんに使って、軍備の近代化に取り掛かったのだ。

よって幾ら返済しても新たな借金が増えるだけなのである。

「ジョン様。金返してください」

商人達はジョンに哀訴した。

然し、今のミストリアに返済能力はない。

仕方なく、ミストリアの観光収入を割愛して借金の一部を返した。

スクール水着の値段が好景気に便乗して2割ほど値上がりして、3億デイルスも増収した。

「エティルの栄光を信じているぞ。国のルシーさんに軍事力を強化するように伝えよ」

ジョンは、エレナに依頼した。

エティルはミストリアの領土では断じてない。

「王。南傾斜国は如何いたします？貴方の物になったのだから兵を送って守らねばならない。ルミを甘く見ては痛い目を見るぞ」

エレナが酔狂にも忠告した。

セタとジョンが共倒れになってくれれば漁夫の利をしめて、天下が取れると言っただけである。ジョンの独特の魅力に少しまいったらしい。

「そのうちな」

ジョンははやるエレナを抑えて言った。

「セタは南傾斜国を落とすことは出来ない。ここでサラデイスを失い、北傾斜国を奪われるからだ。既にサラデイスには僕の手下を送り込んでいる。じき陥落するさ」

ジヨンはパタレーン攻略作戦の成功で調子に乗っているようだ。

セタが巨人の居住区にしていた、西ノ島アデンを攻略して70万の巨人を入手した。

サラデイスがいなくても、この兵力なら必ず勝てるはずだ。

ジヨンとエレナはその情報を知らないらしい。

「エレナさん。よろしく頼む。セタを共に打ち破り、東は貴方に、西は僕に国土を分割する」エレナはふと疑問に思いジヨンに聞いてみた。

「パタレーンはイーボルトさんに任せるのですか？」

エレナが尋ねた。答える義務はジヨンにはないが、一応返事を返す。

「スクール水着姿で不順異性交遊に走るのは本人同士の趣味の問題だし、ミストリアの法律では問題はない。だがあいつの趣味は、帝国の浮沈に係わる厄介事になるだろうよ。スクール水着でそういう事をされると女の子が妙に男の目を意識してスクール水着を着なくなるからな。ブルマーとスクール水着の販売収入で兵を養っている僕には死活問題だよ」

エレナは更に聞いてみた。

「それなら何故イーボルトさんを追放しないの？」

エレナが不思議がって尋ねた。

王国の評判が落ちるのではないか？

「サラデイスに勝てる將軍は今の所帝国にはいない。イーボルトさんの趣味は10年後のミストリアには有害だが、今のミストリアでは貴重な人材なのだよ。あいつの趣味は今の所は変態の一言で片付けられるからな。差別用語なのかもしれないがイーボルトさんの趣味を正当なスタイルにしてしまうと帝国が分裂してセクハラ論争が起こるだろう。今は大して気にしないようだが流石にスクール水着で不順異性交遊に走られるとスクール水着は性交の儀式用衣装と取

られかねない。そんなものを着て男のいやらしい目線に耐えながら水泳をやれというのか？ 只の性的虐待と民衆の目には映るだろう。そしてセクハラに厳しい世になっていくのだ」

「ならやっぱ追放した方がよいよ。」

エレナはそう思ったが口には出さなかった。

「何処の世界に敵に助言する物好きがいるのか？」

「ジョン王。あたしは何処を守ればいいのか？」

エレナがジョンに3度尋ねた。

「ジョンも珍しく考え込んでいる。」

「直感勝負のこの男には珍しい。」

エレナは誤解したようだ。

「嫌らしい目であたしを見るな」

エレナは身の危険を感じたのか身構えた。

敵陣に身を委ねた状態で抵抗しても無駄とは思うが、一応拒絶する。

「僕は年上には興味ない。ペレトンさん以外は・・・」

エレナを怒らせたらしいと気付いたジョンは慌てて抗弁した。

「何でブルマーとスクール水着の販売収入の税金で大儲けしている」

「だけで僕の人格まで否定されねばならんのだ？」

自分に反抗する勢力はどいつもこいつも、僕をブルマー好きの変態

皇帝と言う。

確かにそう言う趣向もあるかもしれないが、僕の趣味の問題だろうか？

「エレナさん。次に同じような態度をとるならエティル領は没収す

る」

「だんだん腹を立て始めたジョンは、エレナに言った。」

エレナも大人しく引き下がる。

「側近の姫にブルマーコスプレをさせるあたり、誤解するなという」

「方が無理があるかと」

エレナも言い訳に及んだ。

「ジョンは思わず逆上する。」

「あれは僕がペレトンさんにやらせている訳ではない。僕の人徳を

慕って自主的にやってくれているコスプレだ」

その娘はジョンに気があるのではないか？

エレナは思わずそう思った。

幾ら性に寛容なミストリアでも、男の前でブルマー姿になど普通なるか？

公共の本陣でブルマーコスプレに及ぶペレトンらしき少女を見てエレナは考え込む。

「私何か？偉大なるジョン様の愛妃たる私が気を引きたくて勝手にやっていることです。別に良いじゃないですか？」

流石に側に控えていたペレトンは抗議した。

人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて死んじまえと昔から言うのだ。

そして穏やかにエレナに言う。

「姫様。話を元に戻しますよ。北傾斜国に攻め込み、本国を落とせ。所領は4対6でどうです？」

勿論あたしが4の方だねとエレナは思った。

エティルの隆盛はジョンの配下に加わった時に既に決まっている。

されデイスしか持たないビヤツカでは、ミストリアに勝てないだろう。

「エレナさんが6で僕が4だ。具体的には北傾斜国を僕に、その他はエレナさんの物だ。ミストリアの国力増強によって取り分は変わるがね」

いずれはエティルを飲み込む巨大勢力になるという意味か。

まあ良からう。

どうせあの狡猾なトルハにも、姉のペレトンにも勝てないだろう。

ジョンは多分気付いていないだろうが、あの娘はあたしより凄い戦術家だ。

ブルマー姿で男の気を引く女の子だから軽そうに思っているのか？

例えそうでも、あの娘は使える。

ミストリアを倒すには、まずペレトンを離反させるべきだ。

エレナはそう思っ、それでもその考えを追いやっ。

あのジョンがペレトンを放逐する訳がない。

むしろイーボルトを登用した事が本人の言っとおり、ミストリアの鬼門となるのだ。

もしそうなればエティルにも反撃のチャンスはあるのだが流石に同じ女性として彼女らを貶める気にはなれない。

このネタでジョンを変態よわばりすることは（自由意志であるので）ブルマー派の女の子を（99%の未青年女性を）変態よわばりするのと同じだからだ。

エレナは既に敗北を悟っ、ジョンの家臣になる気だが、部下は許さないだろう。

せめて部下を説得する時間が欲しい。

「ジョン王が真に経世済民の王であられるなら忠誠を誓いましょう。然し国内の意見をまとめるため15年の猶予期間を頂きたい」

その場の雰囲気は何となく忠誠を誓っってしまった。

「あたしとルシー姉様には手をださないでね」

ジョンはこの言葉に内心怒った。

僕はそんなにブルマー好きの遊び人に見えるのか？

女の子に手をだした事など一度もないぞ、多分？

何でブルマーの販売で儲けているからっ、変態よわばりされなきゃいかんだ？

ジョンは取り合えず、この怒りをセタに向けた。

エレナは、少し怯えながらも、友好的な視線をジョンに送っ、おく。

元々エレナはジョンの事は嫌いではない。只ブルマー姿を強要されそうなのが嫌なだけだ。

この趣味さえ封印すればジョンに従っ諸勢力は増えると思っのだが、

セタだっ、ジョンが普通の為政者なら、諦めて降伏するようルミ辺りが説得する筈だ。

ジョンのブルマー好き（今の所は誤解）が戦火を拡大させている。

エティルとしては、自分達さえ（人前で）ブルマー姿にさせられなければ、ミストリアがどういふ政治方針だろうと関係ない。勝手にしてくれと言った所だ。

ジヨンはエティル攻略は取り合えず諦めた。軍勢力なら一年で落とせるが、人民を口説くのに10年はかかる。贈り物でも贈って、イメージの回復に努めるべきだ。

然しエレナには脅迫めいた言葉を使った。

「エレナさん。面従腹背なら止めといた方がいい。あと5年もすればミストリアは天下を統一するだけの武力を手にいれる。魔法使いも専門職が50万人に増え、僧侶も200万近くいる。近隣諸国から集めた忠義の士だ。1日決戦を遅らせることに貴方の勝機は失われる。必要なら今ここで決戦しても良いぞ」

ジヨンはここぞとばかりにエレナを脅した。

エレナは不覚にも信じたようだ。

まあ嘘はついていない。

何れエレナにはミストリア軍一個師団（一万人）を任せてみよう。

「分かりました。然し真面目な話し、ジョン王のエティルに対する悪行の結果ミストリアを憎むものが若干います。彼らを納得させるのに時間が要るのです。勿論15年の間に情勢が変わればミストリアとの決戦に臨むかもしれません」

エレナはミストリアの強大な勢力を信じていた。

確かに大魔法使いは50万人に達しているが。

エティルでは残念だが勝ち目はない。

反乱など起こさず、配下におさまっておけば良かった。

「無駄だ。確かに僕は変態なのかもしれないが、セタの方が更に酷い。誰もミストリアの敗北は望まないだろうよ。セタの世は地獄よりも恐ろしい」

ジヨンの治める世だって貴族や悪人にとっては住みにくい世の中さ。エレナはそう思っていた。

然しジヨンはブルマー好きの変態王の他は別に悪い評判はない。

降伏すればブルマー好きの変態王の慰み者になるかも知れないが、死よりはマシだ。

「王様。あたしはセタを許せません。ミストリアの司法は彼を確実に終身刑にしてくれますか？」

エレナの問いにジョンが答える。

「ああ。だが裁くならエティルか北傾斜国の民衆だろう」

エレナは答えに満足した。

この拝金主義者の卑劣王に何が期待できるか？

ジョンはエレナに改めて本国攻略を命令した。

完全に部下扱いだがエレナは大して気にしていないようだ。

「では傾斜国を攻め滅ぼしに参りましょう。停泊地を失えばセタは西部の荒野に逃れるほかありません。そこに兵を伏せて白兵戦に持ち込めばセタを倒し、サラデイスを捕縛出来ます」

エレナは言葉を続けた。

「播種量81粒のシレーリムは頂けるのですか？先程も聞いたのですが」

悲願である農業生産力のアップの為に、屈辱に耐え、ジョンに従う事にしたのだ。

何処の世界でも降伏した女子は、慰み者にされるのが、普通だと言うのに……。

然し生まれた時から王様で、家臣に恵まれるジョンにはよく分からないらしい。

反応は冷たかった。

「無駄だ」

ジョンは、激しく言い放った。

エレナはそれをブルマー姿を披露しようとしないうちへ自分の意趣返しと受け取ったようだ。

「何故です？あたしがブルマー姿にならないのがそんなに気に入らないのですか？」

ジョンは頭を抱えた。

本心を完全に誤解されている。

H 関連ならどちらかというスクール水着の方が好きなのだがな
どと言う本心は流石にいけない。

「その話題から離れる。僕はペレトンさんのブルマー姿とミューフ
アさんのスク水にしか興味はない」

「・・・」

ペレトンは顔を赤らめてそっぽを向くが、ミューフアは一応平静を
保っている。

「私でよければお望みど通りに・・・」

ミューフアはその3日後に王国主流の学生用スク水Uバック形を5
着も買い込んだ。

巫女服は3着である。

如何でもよいかもしれないが・・・。

ジヨンは得心したらしいエレナに説明した。

「たとえ持つていってもエティルの土では2粒も実らん。土壌が全
く違う土に幾ら播いても99%無駄だから止めておいた方がいい。

100億出して買った株券が一夜にして紙くずになるような羽目に
陥るぞ。そうなっても責任は取らんがそれでも持つていくか？君に
後でガタガタ言われて僕が詐欺を働いたような印象を国民に与える
のは困るのだから。只でさえ僕は変態王と呼ばれている。之に詐欺
師を付け加えるのかね？」

素人が幾ら挑戦したって旨くいくわけがない。

ジヨンの場合は単に幸運だっただけの話だ。

「セタを倒したらゆっくりと農業の奥義を教えてやる。あらぬ噂
が立たぬように双方150人の側近を連れてくるように」

ジヨンはそう言う手下を呼び、何事か言いつけた。

手下は全員立ち去り、後にはジヨンとエレナが残される。

「ではあたしも行きます。ジヨン王陛下は船団を引連れ、後から御
出でになればよいでしょう」

セタの支配する北傾斜国など半年もあれば軽く落とせる。

問題はサラデイスと激闘になったとき死人を出さずに乗っ取れるかであった。

既にサラデイスが座礁して放棄された事などジヨンは知らない。

ジヨンの目をくらすため、西傾斜国を経由してパタレーンの西海岸から奇襲する作戦を立てたのが裏目に出た。

ジヨンの仕掛けたミスリルの柵に掛かって沈没したらしい。

西海岸は交易路になっていないので柵も6個しか沈めておかなかつたのだが……。

この時新兵器のカルガモ君が開発され、ミストリアの農業に大いに貢献した。

戦争景気で物資は売れに売れ、セタの持ち込んだコスプレ用ブルマの収益からの税金で、かつらの販売を始めて、大儲けしたのだ。

特に「帝国の名もなき女性兵士」の髪から作つたかつらは、500億デイルスで売れ、兵士は東方大陸に広大な領地を買つたらしい。

それを知らぬミストリア軍は、パタレーンでセタ軍を待ち受けた。

「セタは何処へ言ったのだ？何故サラデイスで反撃するか大砲を使わない？」

セタを失って組織的抵抗力を失つたビヤツカ軍はルミの元再結集をはかつが、エレナ君の疾風の如き攻撃に僅か1月で領土を失い、南極（地図上で最も南方にあるだけで寒くはない）に落ち延びた。

エレナは来た傾斜国を押えるとセタの兵を尋問しようとした。

「あつけない。セタは如何して反撃せんのだ？」

捕虜になつた7億のゴブリンを問い詰めた結果、セタの消息が分からないらしいという事が判明した。

「何だと？ではサラデイスは何処にいる？戦う気ならとつくにミストリア軍と接触しているはずだ」

エレナはゴブリンを更に尋問した。

ゴブリンは、7日以上も拷問に耐えたが、三角木馬をエレナが用意するとようやく口を割つた。

「南傾斜国經由でパタレーンの西海岸を奇襲する作戦なんです。今

頃30万の大軍がパタレーンを奪回するため、ハルラーンを包囲した筈です」

ほう。そういう作戦だったのか。

セタを以外に策士だ。

セタを只の連続婦女暴行魔と見ていたエレナは、少しだけ感心したがそれと之とは話が別だ。

女性の敵であるセタを許すわけには行かない。

「西傾斜国を屈服させる。セタがジョン王に敗れて撤退するときを狙って総攻撃を掛ける」

エレナはジョンの勝利を疑っていない。

操船技術のつたないセタの事である。操船を誤り、貴重な文化遺産でもある船を座礁させた可能性も視野に入れていた。

でなければ、ジョン王からパタレーン方面への転進命令が来るはずだ。

「取り合えずパタレーンは大丈夫だ。南極とやらを落として今度こそルミを生け捕りにするか？然し南極は磁場が強いからなあ。方位磁石も役に立たない。どうやってルミは南極に行ったのだ？」

エレナは少し考え込んだ。

「そうか貿易風に乗ればたどり着くだけなら何とかなるか？」

エレナは外洋航海用の船を所持していなかった。

強行すればセタの二の舞（推測だが）である。

ルミを追撃するのは諦めるしかなかった。

「サディズム將軍（略称サド）は南部へ進駐せよ。正式にあたしの領土に加える許可を頂いている。反抗者は排除せよ」

エレナはまず、国境守備隊の隊長に降伏勧告を促した。

傾斜国を入手してジョンに対抗するか献上するかすればあたしの立場が良くなる。勿論ルシー様も・・・。

「降伏だと？もう我々の王になった心算でいるのか」

エレナにとって運の悪い事に隊長の炉鳥下種は主戦派であった。

炉鳥下種は即座に軍を集結させ、エレナ軍と向き合った。

炉鳥下種は戦いに有利な川沿いの山岳の城に軍勢をおいている。当然戦いは持久戦となった。

ジヨンは迂闊にもエレナに兵糧を送らなかった。当然補給は続かない。

傾斜国はエレナより炉鳥下種に味方する。

「変態王の腰巾着に屈服などできるか」

講和の為にエレナの使者をそう言って追い返した。

そしてその夜に夜襲を仕掛けたのだ。

反撃などい有り得ないと油断していたエレナ軍は敗北。

国境の砦に立て籠もり、炉鳥下種の猛攻を防ぎきった。

「まつまさかあたしが敗れるとは・・・」

撤退する炉鳥下種軍に反撃を試みて兵力の殆どを四散させたエレナは身一つで港へ向かい、エティルへ逃げ帰ってしまった。

エレナの敗北につけこんでジヨンが北傾斜国へ攻め上るのは分かりきっているからだ。

命さえあれば何度でも再起は図れる。

エレナは決してジヨンがエティル本国を併呑するとは思ってなかった。

それをやると住民の宣撫工作に手間取り、セクハラ問題と合わせてミストリアが内部崩壊するとジヨンが不安に思っているからだ。

「ぬかったわ。今のあたしではセタはともかく炉鳥下種には勝てない」

エティル領内に戻ったエレナにジヨンは使者を送った。

「アトポックとサーシアを攻略する命令である。貴軍は軍を整え、出陣せよ」

この理不尽すぎる命令にサドを始め、エレナ軍の將軍達は交戦を主張した。

血迷っている。

炉鳥下種を倒せなくてジヨンに勝てる保証が何処にあるのだ？

「勝てない。エティルの人口は1億。ミストリアは3億だ。しかも

魔術師や僧侶はエティル中掻き集めても50人しかいないだろう。それなのにどうやって勝てというのか。お前らがあたしの政策に異議を唱えて反乱を起こさなければ今頃はミストリアに匹敵する魔法兵団を編成できたが？あたしに逆らった罪は重いぞ」

エレナはこんな馬鹿な手下に付き合ってられないとばかりに兵士達を追放すると13歳の女性のみで編成された部隊を徴兵して作り上げた。

その武力を背景に女子教育制度（体操着は上下ジャージとなった）を450万の剣の力で強引に認めさせた。

「あのジョンの属国にエティルをする心算かあ」

怒りの男共の叛乱は兵士達の実践訓練の場に過ぎない。全て即日鎮圧された。

なお、女子教育制度にかこつけてブルマーやスクール水着を売り、大儲けしようとした商人は拍子抜けしたが、めげずにパジャマとしてブルマーを売り出すことにした。

之が政治的思惑も重なってエティル中に広まり、寝る時の寝間着として国民服になってしまっほどの流行商品となった。

であるからして（パジャマを着て陸上運動をやる奴は余りいない）エティルでは助平な男の永遠の夢の1つであるブルマー姿を鑑賞できるのは恋人同士だけである。

この国でブルマー姿になってあげると言われたら男の愛を（かなりフェチだが）承諾すると受け取られ、当然同意の上と裁判所も判例を出すだろう。

この慣習のせいでミストリアは自国民のエティルへの移動を禁止せざる負えなくなった。

慣習の違いから（同意が成立したと信じて）女の子が凌辱される事件が起きないようにするするためだ。

エティル側では迂闊にもそこまで思慮深くなかったエレナの失策でエティル人が4人ミストリアに入国する事件が起きた。

同時期にミストリア最悪の婦女暴行事件とされたスクール水着美少

女凌辱事件が起こってしまう。

之はエティル人とは関係のない2人のミストリア人のエルフによる同意の上での不順異性交遊であったが、かねてからセクハラに寛容なジョン王の政策に不安を抱いていたマクユイ（セタとは関係のない1派）を激怒させた。

之を機にミストリアの国論は2分され、無実を信じる8割を占める擁護派と2割のマクユイが議会で対立する事となった。

ちなみに同じ様な性犯罪は6年で72件。そのうちの6件がスクール水着姿でいかがわしい事をしようとしたケースだ。

セクハラの段階で女性の反撃にあい、男は周囲の通行人にたこ殴りにされ、裁判所は6件とも（未遂なので）再販出来ないように強力な拘束呪文を掛け、釈放している。

具体的には女性に触ろうとすると雷が落ち、黒焦げになるのだ。

解除するには女性が裁判所に向いてその人だけ触れるようになる解除キーを教えてもらう必要がある。

なお47件がブルマー猥褻未遂事件。

残りの19件が普通の猥褻未遂である。

なお、ブルマー猥褻未遂事件の41件は最終的に（かなり強引だが）同意しており、たこ殴りにした通行人は治療費を払わされた。

犯罪行為を確認もせずにたこ殴りにする権利は通行人にはない。

そしてブルマー猥褻未遂事件を教訓にミストリアの女性は警報アラーム機能付きの、魔法の腕章を装着する事が義務付けられた。

セクハラされても構わないという奇特な女の子以外は・・・。

ちなみに他国ではエティルが1724件。

南傾斜国が4749件である。

ミストリアではセクハラがある程度公認されているのがガス抜きになるのか性犯罪については驚異的に少なかった。

然し一度こういふ事件が起こってしまうとやはりセクハラはよくないと言ふことになるのであろう。

実際、この事件後ミストリアの女学生のブルマー着用率は87%に

まで下がってしまった。

しつこいが、ブルマーとスクール水着の販売収入の税金で兵士を養っているジョンにしては死活問題である。

そしてスクール水着美少女凌辱事件以降、やはりブルマーやスクール水着の収入では頭打ちになり、魔法の腕章の収入に切り替えられた。

「エレナ姫。チャンスです。この機に乗じてアトポックとサーシアを攻略してしましましょう。そしてエティルへの援助を申し入れるのです。国論が二分されている今、ミストリアは拒否できません。金と技術をたつぷりと頂きましょう」

黒仮面卿がエレナに進言した。

この機を逃し、大人しくしては2度とチャンスはめぐって来ない。

「あたしは船を持っていないし、第一アトポックに着いたとたん敵の総攻撃で軍勢を壊滅させられる。どうやって攻め滅ぼしたらいいのだ？」

炉鳥下種に敗れて以来気弱なエレナが尋ねた。

「姫はジョンについています。ジョン王の威光を借りて脅せば2国とも降伏するでしょう。北傾斜国はまだジョンの手に落ちていない筈なので再び軍を送って占領すればジョンに対抗できます。大体2国の追討を命じたのはジョン王本人です。2国は確実に落ちます」
エレナは言われたとおり、2国に使者を送り、之を降伏させると北傾斜国を占領して自立を宣言した。

どうせ直に滅ぼされるが、少し位権力を振るっても良いだろう？

エレナはこの時、傾斜国の地で聖木アフエンの実である聖胡椒（ホーリーペッパーと俗に呼ばれる）を偶然発見した。

この木は魔力が込められていて、1年以上服用すると微力ながら魔力が宿るとされている。

ミストリアの呪文による魔法とは別系統の魔法だ。

「良いものを見つけましたな。早速原木も探してエティルに持ち帰

りましょう。ジョンが愚かな論争を始めている間に我々は国力を増大させ、魔法を発展させる。まずはサラデイスの姉妹艦のゴルデイス4隻の複製を作ることから始めましょう」

エレナ軍が炉鳥下種に敗れた後、黒仮面卿はセタに発見されてしまったサラデイスの発掘場所を調査し、船を4隻発見していた。

国内の魔法使いを動員して、複製製作に取り組ませている。

聖胡椒の発見と聖胡椒は、魔法使いの技術革新でエティルがミストリアの上をいったことを意味していた。

しかも古代人が残したらしい手引書まで付いているのだ。

エティルはこの発見で、ゴーレム製造技術と巨人召喚システムも手に入れることとなった。

どのような地形でも山彦を起こす事のできるほら貝とかエメラルド製の笛など一見役に多々なそうな物まで入手している。

エレナはこの技術でエティルの方から巨人を送り込み、巨人の住む妖精界に侵攻を開始して領地を獲得した。

エティルのゴーレム技術は巨人の島ナタール帝国を完全に圧倒して島を領地化したのだ。

そこで採れたフアーリウム鉱石（ダイヤモンドより硬い）とラルシス鉱石（男のメデューサ・エルフの眼球と同じ鉱石）を使って軍備の増強に乗り出した。

セクハラ問題で窮地に立たされているジョンを見限り、エティルに渡ってきた造船工を配下にしたエレナは造船工を妖精界へ送り込み妖精界での海軍の増強にも努めた。

銀河系ほどに広大な妖精界を支配するには造船工の力が必要なのだ。島だけでもこの惑星の35倍はある。

「エレナ姫。早速ゴーレムを動員してパターンを落としましょう」黒仮面卿がエレナに忠告した。

愚かな論争にかまけているうちにエティルの勢力を拡大する事に成功した。

後はジョンを倒すだけだ。

「いや。あたしがパタレーンに侵攻すればセクハラ問題を先送りにしてミストリアは団結する。分裂させておいてマクユイを支援するのが良い」

軍事的成功で自身を取り戻したエレナは妖精界に援軍を送り込んだ。ジョンと敵対すれば謀反になってしまう。

妖精界なら侵略して文句を言われる筋合いはなかった。

エレナは勢いに乗ってジョンに月額100億デイルスの上納金を収めると要求した。

セタが行方不明になって捜索に掛かりきりであったジョンに要求を拒む実力はない。

100億デイルスを泣く泣く支払った。

ジョンはそれでも文句は言わなかった。

エレナを敵に回せばセタが反撃に出るだろう。

それだけは避けたかった。

「意外と旨くいきましたな。この金で民衆の生活を向上させる」

エレナはそう言うとジョンに貰った播種量81粒のシレーリム（結局貰った）の栽培に専念する事にした。

パタレーン会戦

(4) サラデイスの残骸を背景にセタと配下6万人が飢えに苦しみ、各地の食料貯蔵庫を襲撃しながらハルラーンをめざしていた。

ミストリア軍がパタレーンに配備した7つの食料庫は、セタの意外な名称ぶりに怯えたミストリア軍の焦土作戦(食料焼失の罪で3階級降格された)によって全て陥落して炎上した。

セタ軍に食料を渡したら、悪名高いスクール水着美少女陵辱事件で混乱するミストリア軍では勝ち目はない。

軍の勝利は食料と金と指揮と戦術戦略で決まるのだ。

誰がブルマー好きの変態王になど本気で仕えるか？

ジョンに反抗する勢力の代名詞でもある。

ジョンのブルマー好きと、スクール水着美少女陵辱事件でジョンと国家に幻滅したパタレーンの2将は、セタに寝返り、イーボルトはたったの6千の兵で6万人のセタ軍を撃滅せねばならなくなった。残った兵も、イーボルトの為に命をかける気はない。

イーボルトはスクール水着美少女陵辱事件の影響で兵の信頼を失っていた。

「やばいな……。本気で勝ち目ない」

イーボルトは、コレクシヨンのUバック型水抜き付き旧スクの5千着を梱包して船に積み込む命令をだした。

全て税金の代りに業者から物納させた品である。

徴税官としての功績を認められて下げ渡された。

ミストリアの宝物庫には、スクール水着とブルマーが富士山位の量積み上げられているらしい。

「スクール水着は産業と軍の要だ。スク水なくしてミストリアに未来はない」

イーボルトは、セタの持ち込んだブルマーとスクール水着の製法も抑えていた。

之がある限りミストリアは何度でも再建できるとイーボルトは信じている。

「イーボルト様。セタは来ますかね？」

部下の1人、A大佐（部下千人）グラン・エットフォードがイーボルトに聞いた。

「さあ？こない方が良いに決まっているが、来るんじゃないか？」

イーボルトは、本国に援兵を要求すると共に、川を堰き止めて、セタ軍の進軍を阻止しようとした。

まともな軍隊なら、水攻めを恐れてよつてこない筈だ。

「ブルマーとスクール水着だけは敵に渡すな。之を敵に奪われたら俺達の給料は出ないぞ」

最近獲得したエティルの市場にビヤツカが介入したらミストリアは終わりだ。

セタの経済圏を奪つて、ブルマーとスクール水着をモルゲイン（傾斜国のある大陸）に広める事は、セタを撃滅する以上に急務である。最近は、ミストリアに服属した筈のエティルが軍事力を強化しているし、油断は禁物長期戦も出来なかった。

イーボルトは、落とし穴を掘り、その上に秘蔵のスクール水着を置いて見た。

まさかとは思うが、ビヤツカ軍なら罠に掛かるかもしれない。

イーボルトはセタを完全に見くびっていた。

謀略で叩きのめしてやる。

イーボルトは卑劣な軍師トルハの影響を受けているらしい。

小手先の策略を披露してセタを倒す心算のようだ。

然し形勢がやばくなれば手下はイーボルトを見捨ててセタ側に付くだろう。

イーボルトが兵の人望を持たないのは、特殊な趣味のせいだがそれならジョンも同じだ。

だがジョンの直轄兵は最初からジョンの特殊な趣味は知っているの
で裏切らなかつた。

それでも軍隊の士気は下がる一方で、マクユイの中にはブルマー禁止令の勅令を要求して武装蜂起に走るものまで出てきた。全員女子教育制度で家事手伝いの女性を失った男共である。

（全寮制の学校であるので）重ねて言うがこの世界ではブルマー派は女性解放の象徴として受け止められていた。

その代わりに男の性的欲望を満たす為にセクハラ御礼の国家にしたのにその恩恵を受けている筈の男共が反旗を翻すとは如何いう事だ？ ジョンには理解できない。

話し合いもしてみたが結局不調に終わった。

「王。ルーシーに御戻り下さい。このままではミストリアは内部崩壊いたします。パタレーンを放棄してミストリアに逃げましょう」「イーボルトはジョンを説得しようと試みた。

6歳になるジョンは頑なにこれを拒否した。

ジョンはマクユイの封じ込めを即座にミレイレアに命じ、マクユイにジャージの着用とセクハラ反対派の象徴として、青い薔薇の首飾りの使用を認めた。

マクユイにはセクハラをさせないとジョンはミレイレアの言葉を借りて明言した。

しかし、ここまで国家が譲歩してもマクユイは不安を隠しきれないらしい。

自警団を結成してミストリアの町の1つを実効支配した。

その数240万人。旧ミストリア人の男全員である。

夜盗出身者とその国で生まれた子供達、女子教育制度の恩恵を受けた者はセクハラを必要悪とみなし、叛乱には加わったのは僅かであった。

発端となった事件の無実を信じる者も信じない者も之には仰天した。98%のミストリア人はまさか反乱軍を起こすとは思っていない。

「何で胸や尻をちよつと触ったぐらいで内戦にならなければならぬんだ？」

大部分のミストリア兵は（女の子の兵である）そう思っていた。

確かに出来れば触られるのは少し恥ずかしいし、女性としては嫌なので出来ればやめてほしいとは思いますが反乱を起こすことはないだろうか？
しかも主力は男共である。

真相は家事手伝いの女子を失った者の腹いせと受け取った。
ジョンは之を地方反乱と受け取った。

早速若手の將軍に討伐を命令する。

將軍は軍勢を率いて討伐に向かい、反乱兵を包囲した。

幸運な事に反乱軍の食料は3カ月分である。

食料が尽きれば降伏する筈だ。

「奴は夜襲をかけると思いますかね」

將軍に部下が忠告した。

そんなことは分かっている。

反乱軍はその手しかミストリアに勝てる手段を持ち合わせていない。

「説得だ。ジョン様の兵は人殺しではない。話し合いで解決しよう」

將軍は、説得の才能では宇宙でも有名な、レトミー女官長を派遣する事にした。

ミューファ付きの女官長である。

説得の才能だけで、ジョンの隠し財産が50億デイルスも増えたと噂されているほどの人物だ。

それ故にジョンの外交を担当している。

セタだけは説得できなかったようであるが……。

「降伏しなさい。勝てると思っっているのか？」

使者に赴いたレトミーは、才能の欠片も感じさせない説得を試みた。
こんな交渉能力では、TVサスペンスの悪党でも落ちないだろう。

「降伏したら一人当たり100デイルス与えるとジョン様は言われた」

勿論はじめとして、お前らは牢獄行きだが……。

「俺達はジョン王のブルマー好きに抗議しているんだぜ？」

金など問題ではない。

戦争で生活は苦しいが、耐えられないほどではない。

決してブルマーの代金を踏み倒す為に反乱を起こしたのではないのだ。

「ギャグなのか本気なのか知らないが、軍隊をブルマーの販売収入の税金で賄うなど国の恥だ。即刻止めさせろ」

「では税金を引き上げても良いのか？」

レトミーは理不尽な要求を突き付ける反乱兵に質問した。

「ブルマーとスクール水着の収入が使えないとなると、税金は最低で一割アップ。ヘタをすれば15億デイルスから30億デイルスの負担増になるな。本当に良いのか？」

「だったら軍備増強をしなければ良いだろう？」

反乱兵は口々にそう言った。

大体剣と軍服だけでどうやってたら金が掛かるのだ？

「船の製造コストだな。海軍力の増強で、民間企業の技術も上がって、造船と大砲は好景気に沸いている。君らの都合で止める訳にはいかない」

レトミーは冷たく言い張った。

ついでに言えば、山師と農民も取引先が見つかり、好景気なのだ。

「話し合うだけ無駄のようだ」

反乱軍の首領は、交渉を打ち切ってレトミーを追い返した。

交渉決裂を知った將軍は愕然とした。

伝説の交渉人が之では、話し合いは無理だろう……。

「俺、実戦は初めてなんだよ。勝てるかな？」

將軍は交渉で片付ける心算だったらしい。

慌てて軍隊を進撃させた。

こんな調子で勝利を収めた軍隊は希であろう。

「ブルマー好きの変態王を倒せえ」

案の定反乱軍は討伐に来たミストリア軍220万人を一戦のもと打ち破り、兵士全員を追い払うと、独立宣言をしてシャリーを担ぎ出し、正当ミストリア政府を発足させた。

「何？220万員も訓練の行き届いた兵がいて如何して負けるのだ

？」

ルゼーティアで報告を聞いたジョンは、有望な將軍を処罰せねばならなくなり、嘆いた。

何とか敗戦の罪を不問にできないか？

將軍（ジェネラル・カート・ヒート2世）は追放するには余りに惜しい人材だ。

「將軍の罪を不問に処す口実はないか？僕の懐も暖かくなる一石二鳥の妙案は？」

無いだろう？

部下達はそう思ったが黙っている。

余計な事を言えば將軍の立場はもつと悪くなる。

そこへカルトミール老が現れ、貴重な意見を1億ディルスと引き換えに提言する。

「罰金刑にしたら如何ですか？王は部下に甘いので、厳しく処罰するべきかと思えます。それでいて罰金なら金さえ払えれば良いのだから、返済の為に命がけで働くでしょう」

そんなに上手いくかなあ？

部下達は危ぶんだがカルトミールは断言した。

ジョンはカルトミールに1億ディルスの価値を持つ宝石1万個を与えると下がらせた。

將軍には、3億ディルスの罰金を通告して、ついでにかつて敗戦したミューファとイーボルトには10億ディルスの金を支払うように命令した。

罰金は、3日後に銀行が立て替えている。

「ジョン王は何て良い人なんだ・・・」

本来なら処刑されても仕方無い立場である。

將軍はジョンに感謝した。

他の部下にも、ジョンの政策にやや懐疑的なミューファを除いておむね支持されている。

ジョンは低迷する支持率を取り戻す為、金を国中にばら撒き、国民

の関心を買っことに勤めた。

金で忠誠心を買えるならジョンにとっては安い買い物だ。

農民の税金も2割下げて、2公8民とした。

之も商売と所得税で大儲けしているジョンにとってはたいした痛手ではない。

痛手なのは反乱軍がミストリアの経済圏で活動している事だ。

スクール水着美少女陵辱事件で収入の落ち込むブルマーとスクール水着の税収が気になる所である。

砂糖が20億デイルス。

馬が10億デイルス。

所得税は120億デイルス（月額）位だが、諸経費で残るのは3億デイルス程度だ。

ジョンの保有するミストリアの株は、ジョンの命令で一部売りに出され、数百億デイルス儲かった。

その頃セタカルミの策略だろう。

同時期にスクール水着の女の子が6人の男に襲撃され、腕章のおかげで事なきをえたと言う事件が170件も起きた。

明らかに反政府勢力の嫌がらせであることは間違えなかったのでミレイレアも事件の沈静化を図った。

之を教訓に急遽ミストリアの腕の立つ女の子を（男だと職権を利用して猥褻行為に走るかもしれないので）400万人掻き集めてセクハラ防衛隊（SB小隊）を組織し、各地に送り込んだ。

平たく言えば警察官である。

警視総監には夜盗出身のローゼインが任命された。

之以降ミストリアの性犯罪と普通の犯罪は皆無となった。

人心が安定しているから叛乱はともかく犯罪はめったに起きない。

しかもSB小隊が出来るだけ犯罪を起こさないように不穏分子を見つけては説得しているのだ。

国家公務員の特権として結婚の自由を認めた事も総勢650万人の公務員を生み出す背景となった。

この巨大組織を守る為にブルマーは必要なのだ。

ジョンは輸入ブルマーとスク水に10%の関税をかけた。之だけで数十億の収入が保証される。

しかも国民も仕方ないと諦めるレベルだ。

ジョンは1億デイルスをトルハに与え、反乱軍の内部工作を担当させた。

その頃敗残兵が戻ってくる。

「如何するのだ？敗残兵を結集して反撃に転ずるか」
ルーシーに逃げ戻ってきた220万人の兵士は、断固決戦を要求した。

何かにつけ反抗的なエティルが介入してくる前に叩かねばならない。エレナはミストリアが危うくなれば裏切るであろう。

「この内戦が終わったら戦い漬の毎日から解放されるかな」

ドルクレンが海軍と連携して町の補給線を断ち切る作戦に出た。補給が続かねば降伏せざる負えない。

「早く国事を終わらせてトルハさんとデートしたいよ」

補給大臣としてミストリア人が10億人が1年食べられる糧食を米蔵のリーフの星門と呼ばれる禁断の地に隠し持っていた彼は、つい本音を漏らしてしまった。

トルハとは6年間も付き合っただ中である。

然しお互い国事が忙しくて、1度も普通のカップルらしいデートはしたことがなかった。

「俺はこの内戦が終わったら休暇をとるぞ。トルハさんとデートをするんだ」

「そんなに私のブルマー姿が見たいの？」

側にいたトルハが言った。

エティル風の恋人関係が基本であるトルハにはブルマーは告白の儀式の1環である。

エティルの愛はブルマー姿を見せてくれと男が思い人に言う慣習らしかったが1応硬骨漢で通っているドルクレンにはそんなフェチな

愛は語れない。

ドルクレンは、ブルマーをセクハラな衣装と決め付ける（今のミス
トリアでもそうだが）世代のドワーフなのだ。

よって相思相愛なれどお友達な関係が続いていた。

「私のブルマー姿を見たいなら見せてあげても良いよ？それを見る
のがファシス（ドルクレンの姓）だけなら」

エレナ統治下のエティルではその言葉はプロポーズも同様である。

然し恐らくドルクレンは気付いてもいないのだろうが。

「頼むからそんなはしたない格好は止めてくれ。」

俺はジョン王裏切る気はないだけでブルマー反対派だ。それをやら
ねば恋人同士になれないならともかく、ミストリアではそんな慣習
はない」

このセクハラに敵しい世界で、変態の汚名を覚悟しながらブルマー
姿になってあげると言うのがどれ程の愛か、ドルクレンは良く実感
できないらしい。

下手をすれば諸国民から蔑まれるような行為である。

ミストリアでも愚かな恋人同士がスクール水着で愛を語り合ったせ
いで内戦状態に陥ったのだ。

スクール水着美少女陵辱事件は愉快犯もとい狂言だとする説をトル
ハは信じている。

事件の現場は山小屋なのだ。

どの変でスクール水着になる必要があるのだ？

「女の子がブルマー姿を見せてあげると言っているんだよ、嬉しく
ないの？男なんてみんなやらしい目でブルマー姿を見ているっての
に貴方は興味ないわけ？」

トルハがすねて言い募った。

ドルクレンは思う。

そりゃそうだよ。

幾ら好きな人でもドワーフがエルフの女の子に性的喜びを感じるも
のか。

愛おしいとは思うが。

「トル八さん。俺はあんたを性的慰み者にする気はないよ。一所に居たいだけなんだ。それではいけないのか？」

ドルクレンは更に言う。

「それに今の情勢でブルマー姿で愛を語らうのはまずいしな。それにあんたは未成年だ。具体的にいくつかは知らんが10歳位だろ？ ゆっくりと愛をはぐくむ心の余裕がないとね」

ドルクレンが優しくトル八の頭をなでた。

「俺は行くよ。トル八さんは反乱軍を鎮圧する作戦を立ててくれよな。平和になったら買物でもしようぜ。ルーシーに大型デパートを立てた奴がいるんだ。俺の為にコスプレしてくれるなら水着姿になってくれよ」

「・・・」

トル八はこの冗談を真に受けた。

少し考えてから答えを返す。

冗談の通じないところはペレトンとよく似ていた。

「スクール水着に？良いよ。それが貴方の望みならね」

そんな事をされたら今度こそミストリアは崩壊するだろう。

軍の維持費が払えなくなる。

「ちよつと待て今のは冗談だ。スク水姿にならなくて良いからな」
言いようのない慌て方でドルクレンは前言を取り消した。

ここでもしトル八が早まったらミストリアはこの時崩壊していた。
レナの占いにもちゃんとそう出ている。

然し運命は未来を知ったミレイレアの手によって変えられつつあった。

それとなくドルクレンに悟らせるように忠告して誘導してしまうのには苦労したが。

「ドルクレンさん。私は貴方が好きだよ。何時か私のセクシーなスク水姿でメロメロにしてやるんだから」

2人とも、おもいきしスク水フェチであるイーボルトの悪影響を受

けているらしい。

然しトルハは本気であった。

「楽しみにしてるよ。でもメタボ体系になるのは止めてくれよ。ド
ワーフはメタボが多いがあんたがやる必要はないからな」

トルハは思った。メタボなエルフなど聞いたことがない。

トルハはそこで強引に話を変えた。

「話を真面目にしよう。ドルクレンさんはジョン王に補給物資を送
らなくて良い。レナの占いでは今年は飢饉らしい。まだ誰も知らな
いが。150年ぶりの大雨で作物は全滅する。ミストリアとミレイ
ドの作物は97%が根ぐされする。今のうちにエティルから食料を
買い付けるのだ」

いきなりとんでもない事をトルハが言い出した。

政治家で軍人だと、プライベートな話はやたら奇異に映る。

「予言はずれるのさ。でなければジョン王はシャリーに殺されて
いただろう?」

そのシャリーは正統ミストリア政府にいる。

殺しとけばよかったと思うが、誰も言わない。

あの可愛いミューファが悲しむではないか。

「そういえばそんなことも言ってたな」

ドルクレンは大して気にもしていなかったが大変な事態である。

ブルマー云々の話を気楽にしていられる状況ではなかった。

「ふふっ。私達のデートはもう少し先延ばしよ。後20年は国事に
専念すると思うから」

20年か、長いな・・・。

ドワーフの寿命は長くて500年から2000年位だし(一般論)エ
ルフはせいぜい千年位。

「国民が花婿では浮気する訳にもいかな」

遠まわしに振られたのだろうか?

ドルクレンはそんな気を起こしたが黙っていた。

トルハにそれを言っつては「やはり男は体目当てなのだな」と言われ

るのがオチである。

それに恋人が誰と浮気しようと思んだ時にかまってくれれば如何でもよかった。

3世代も年の離れた恋人を誰が体目当てで付き合うか？

孫娘もとい妹も同様である。

「どうせエルフとドワーフじゃ子供もできんし・・・」

トルハが悲しむので口外はできないが・・・。

トルハは意外に子供好きである。

ペレトンの子供でも養子に貰うか？

「ファシスさん。補給大臣の腕の見せ所よ。ここで手柄を立てればジヨン様の覚えがめでたくなるわ。私はセタを倒した後、敵の兵糧を持って民を救う」

セタ軍の兵糧が底を尽きている事を知らないトルハは、皮算用をしていた。

「東方大陸と傾斜国とエティルとペクダールに人と船を送って食料を買い占めよう。補給大臣の権限で予算を分捕ってくれない？一応ジヨン様にも報告して、トゥーロさんにも対策を高じてもらうけど万一という事もある」

「・・・」

本当にこの娘拾い物だった。

ミストリアの運命を謀略にして根こそぎ変えてしまった女傑である。

「あんた王家のエルフと言っていたが、何処のエルフなんだ？」

唐突に過去を思い出したドルクレンは聞いてみた。

トルハも思い出したのだろう。

笑顔で答える。

「ペクダールの王家の嫡流ジュデイス・ラ・アルモールの妹よ」

「あの瞳狩り戦争でシャリーに滅ぼされたアルモール王家の？」

この台詞にドルクレンは驚いた。

ジュデイスの両親をぶった切ったのは他ならぬドルクレンである。

「安心して。ファシスさんに怨みは無いから」

トルハは一応言っておいた。

「そんな事よりミストリアの未来よ。予算を成立させてくれなきゃミストリアは滅びる」

「然し王の命令なしで予算を成立させるのは・・・」

イエスマン根性が染み付いているドルクレンは困って抗議してみた。トルハがそれを素早く遮った。

戦略においてはトルハに敵うのはルミかゴドスの名称Aしかない。「この国の主権者は皇帝陛下だ。責任は私が取る。皇帝の勅令という形で500兆ほど借金取りから借り受ける。返済は5年後だ。補給大臣の辣腕に期待する」

ドルクレンはトルハの命を受けて食料探しに奔走し始めた。

金は借りられるだけ借りて4兆デイルスである。

この貴重な金を東方大陸の大穀倉地帯に（食料の値段がミストリアの14分の1）送り込み、

麦を買い込ませた。

代わりにバルランと（ミレイドの玉蜀黍）トレニア（ミストリアの5倍）を売りに出した。

取引先だつて自主経営に走るから、何時までも暴利はえられないが、この交易で30兆デイルスと東方大陸の食料の4割が手に入る。

ゴドスもラザニーヤもバルト国もこの交易の金で経済発展を目論んでいる。

ミストリアに対抗する新製品の癒し系ぬいぐるみの開発に勤しんでいた。

「何？トルハがか？」

ハルラインでセタの軍勢と向き合っていたジョンは、トルハの部下の報告を一心に聞いていた。

セタをさっさと撃滅しなかったのはサラデイスを捨てて悠然と陣を構えるセタ軍に恐れをなし、畏だと勘ぐったせいだ。

然しこの状況では、セタを撃滅して国難に備えるしかない。

「あのセタをさっさと追い払うべきだった」

公開しても後の祭り。

イーボルトさんに任せてさっさと本国に帰るべきだった。

兵力不足のイーボルトを支援する為にわざわざ主力軍でハルラインに出向いたのは早計だった。

「事は一刻を争います。セタを撃滅してミストリアへお戻りください」

トルハの部下のカナトンは情勢を必死に訴えた。

「確かに食料は豊富にありますが、長雨で田畑が破壊されれば例年どりの収穫は不可能です。何れ食料は尽きる事になります」

「そうか？」

懐疑的なジヨンは反論する。

「然しあれは如何見ても敵の罠だぞ。サラデイスを捨ててあんなに悠然と我等の進軍を誘うなど罠以外の何だというのだ？ 飢饉は雨季までは来ない。今は春だ。然し無謀な突撃をすれば我等は雨季を待たずにセタの火炮に全滅するであろう。もう少し待て。セタの食料が無くなればサラデイスで撤退せざるおえなくなる。その時がチャンスだ」

それは何時来るのか？ 明日か？ 明後日か？ 部下が苛立つて尋ねた。

「何時まで待てばよろしいのですか？ ジヨン王だけでもお戻りになられてイーボルトさんに指揮を任せれば良いではありませんか？」
ジヨンはその言葉に怒りを露にした。

「軍人としては僕では役不足であると言いたいのか？ 僕が地方紛争よりも国家の、国体の危機に対応してくれなければ困ると言いたいのだろうか。違うのか？」

役不足の意味間違っているぞと思つてが指摘するのは止めておいた。我儘な暴君ジヨンを怒らせると拙いからである。

「分かつておられるなら直にでもイーボルトさんに任せてルーシーにお戻りください。その結果パタレーンを失つてもこの未曾有の危機には些細な事ではありません」

部下は必死に説得をした。この混乱はジヨン王にしか止められない。

命の恩人であるジヨンの命令ならスクール水着美少女凌辱事件で動揺する国民を黙らせる事が出来るだろう。

「王。 お願いです。 王を連れ帰らないと私は責任を取って切腹する羽目に陥ります。 私はまだ死にたくありません」

この台詞にジヨンの心が動いた。

ジヨンはこう言う泣き落としに弱い。

「分かった。 お前が命令してセタ軍を打ち破れ。 そこまで言うからにはセタを倒せる自信があるのだろう」

「はあ？」

ジヨンは印符を（軍司令官の任命証）トルハの部下に与えると脱兎の如く逃げ去った。

トルハの部下01は印符を眺めながら唾然とした。

私が軍司令官だと？

そうかサラデイスの追撃を避けるための囷になれという事か？

この幸運に喜んだ01は手下に煽てられて段々その気になって来た。 このチャンスにセタ軍を打ち破れば戦功第一ではないか？

01は軍司令官になると直にイーボルトの執務室に足を運び、その支持を取り付けた。

しつこいがイーボルトのスクール水着好きは彼の軍事的才能とは関係ない。

味方につけておくに越した事はない。

「貴方もセタの布陣は畏だと思っつか？」

01はイーボルトに尋ねた。

因みに01は女性である。

彼女の民族は名前を付ける習慣がなかったようだ。

一族の兵5千を引き連れてミストリア軍の参謀兼軍師のトルハに従った。

一応階級は准将だ。

役割はトルハの護衛である。

01は重ねてイーボルトに尋ねた。

然しイーボルトはこう答えた。

「畏だな。恐らくサラデイスは不慮の事故で修理できない状態にあるのだろう。然し、セタの布陣は明らかに畏だ。奴はこちらが責めかかってくるのを待つて決戦する心算なのだ。でなければセタの性格から言つて艦砲射撃で陸のミストリア軍を一網打尽にしようとするだろう。セタは癩癩持ちらしいが、軍事だけなら俺に匹敵する才能を持っている。傲慢なセタの性格が折角の才能を無駄にさせているがな。悔しいがパタレーンを2分して廃墟になった西部4州は放棄するしかない」

01は嘆いた。

なら軍隊は何の為にあるのだ？

戦わずに和平したら兵などいらんではないか？

「この大軍でセタを打ち破れぬというのか？」

軍司令官になつた以上華々しい功績を挙げないと無能の烙印を押されてしまうではないか。

01はセタを追い払わなくてはならない。

そうしなければ追放される。

ジョンも余計な事をしたものだ。

私はできれば文官として忠義を尽くしたい。

因みに01の部下は昔はやった悪役のコスチュームで、ハイレグレオタード（全員女性）に露出の激しい皮鎧を付けただけの格好だ。ブーツは穿いている。

護衛兵というよりは諜報部隊の格好かもしれない。

「謀略ならあつさり撤退するかも知れんぞ」

少し考えて01は言つた。

イーボルトも同意する。

作戦はセタを挑発して誘い出すに決まつた。

そしてセタの悪口を付近の民衆に言いふらし始める。

「セタは悪逆非道の連続婦女暴行殺人魔である。部下達はそのセタに怯えて女性幹部のXX将軍とC将軍D将軍と組んで、セタを裏切

ろうとしている」

と言った流言だ。

事実だが01とイーボルトは真相を知らない筈である。

基本的にでっち上げであった。

それ故に所々流言には矛盾がある。

セタがやった覚えのない犯罪事件も含まれていた。

「何だと？」

セタは当然怒り狂う。

勝利者が略奪暴行に励むのは古くからのしきたりなのに、何故犯罪者の如く言われねばならないと言った所だ。

「小手先の流言作戦ですな。然し分かっているにも突撃を命令するしかできない。」

兵糧は明日で全て食い尽くすであろうから・・・」

謀略担当のXX將軍は01の策をあつさりで見破ったが、だからと言ってしまうようもない。

サラデイスを失ったセタ軍は撤退もできなかった。

「イーボルトは誤解されやすい男ですが軍隊はミストリアでも有数の精鋭です。勝てるでしょうか？」

勝てる訳ないだろう？

C將軍とD將軍はそう思ったが黙っている。

セタが強姦殺人魔になった事件の二の舞にはなりたくない。

徴兵されたから仕方なくセタの陣営にいるが、できればジョンの方に付きたいぐらいなのだ。

こんな奴について怯える位なら、いつそ謀反を起こすか？

ジョンは家族の安全と食料、給金だけは保証する男と聞く。

思い切ってセタに進言した。

「セタ様。ハルラーンに我が兵をお送り下さい。イーボルトと01を打ち破ってごらんに入れます」

「何？」

セタは迂闊にもその言葉を信じてしまった。

軍勢はC将軍に2万、D将軍に3万、XX将軍に1万与えて突撃させてみた。

之を迎え撃った01は5千の軍勢で迎え撃ち、士気を失ったセタ軍は白旗を掲全員ハルランに雪崩れ込んでしまう。

「何だと？それでも栄光あるビヤツカ軍の精鋭か？」

セタは嘆くが、帰ってきた裏切り兵の言葉は辛辣だった。

「忠誠を要求するなら食べ物くれ」

この兵の言葉に本隊の5千の兵も崩壊した。

どうしようもなくなったセタは案の定あっさりと挑発に乗り、全軍を率いて攻撃を仕掛けてきた。

そして後方に回ったイーボルトの兵によって座礁したサラデイスを乗っ取つとられてしまう。セタは孤立し、遁走した。

「おのれ、卑劣なジョンめ。必ず天罰を与えてやる」

セタは再び流浪の人となった。

根拠地の北傾斜国はエレナに滅ぼされ、南極にいける船はない。

セタは泳いで大陸海を横断するしかなかった。（地球でも500km位なら泳げる奴もいるらしい）

セタとの戦いは01の大勝利となり、多額の恩賞を貰った01は、軍を辞職。

東方に渡り、商人となったらしい。

賢明な処世術というものだ。

ジョンも止めなかった。

パタレーンはジョンの私有財産の1つとなり、サラデイスは接收。

勢いに乗ったジョンはエティルに進出。エレナを脅迫した。

そのエレナは妖精界侵略の秘密兵器、マトン級光速艇（2千トン）をナタール帝国領内で開発していた。

元々ナタールの主力兵器であったミストゴーレムを接收して自軍の勢力に加えている。

「エレナ姫。妖精界を征服した暁には世界の2割を俺にしてくれると言ったのは本当だろうか？」妖精界に使者としてやって来たエレナは

(時間がやや、ゆっくり流れる。妖精界の一日は地上世界の1.5日) 即答した。

「勿論だ。光速艇で侵略できるとこまで侵略しろ。あたしは妖精界の皇帝になりたいだけなのよ。誰が実効支配しても構わないわ」
エレナは妖精界の広さが天の川銀河の太陽系位しかないと思っているらしい。

ナタール王ビシャスはそう思った。

「エレナ姫。まずは東の大大陸の1つ、エターナルを征服するべきだと思う。地上世界の魔法使いをこちらに呼んでワープゲートをお造りになり、3分で行き来が出来るようにすればどんな遠方へも侵略できます」

「確かに出来るが。」

エレナは考え込んだ。

「この島を領有するだけでも手1杯だ。」

「ここは軍事力と経済力を増強する事から始めよう。農業生産を行える荒野を12万平方km分けて欲しい」
ビシャスは答える。

「良いだろう。エレナ姫。だが約束を破れば俺は敵に回るぞ」

ビシャスは近隣から掻き集めたフェアリーエルフ(単に妖精界に住むブアンレイア人の事)6千人を配下に使っていた。

イーボルトは知らなかったがブアンレイア人の強力な魔法の力はテラの核兵器にも匹敵する。ジョンは核兵器を配下に使っていたのだ。

「分かっている。ビシャスは軍を増強して近隣諸国を圧倒しろ。あたしはひとまずエティルへ帰る」

エレナは配下の魔法使いに命じてテレポートの上位呪文で光速船をエティルに送ってしまった。

そして金属貿易を始め、大量に魔法の金属フーリウム鉱石とラルシス石を輸入し始める。

東方大陸の当たりでも似たような金属は取れるが、こちらは純度50%。

妖精界のはオリハルコンの純度が90%だ。

エレナはジョンに隠れてこそそと軍備を強化して反乱が有利な講和に持ち込むか？

そしてルーシーに逃げ戻ったジョンは50万人の魔術師を動員してルミナスの製造を続けていた。

取り敢えずの目的はスクール水着美少女凌辱事件の解決であるが、之はジョンの手に余った。政治はセタの首をひねる様には行かない。そしてジョンは飢饉対策の方を優先した。

スクール水着美少女凌辱事件も重要だが、犯人は抑えてあるし、後回しにしても何とかなるだろう。

「戦艦など如何でも良いです。食糧生産に魔法使いをまわして下さい」

補給大臣のドルクレンが、トルハを通じて文句を言ってきた。

(因みに捕虜のビヤツカ兵は、裁判所が懲役20年の判決を下している。

食わせられないので、大金でエティルに引き渡してやった) ジョンはトルハに言う。

「通常業務をこなしてから対策を練らないと、景気は低迷するではないか？食料は君達が何とかする。僕が景気を維持する。之で何とかなる筈だ」

それはそうだが……。

トルハは取り敢えずは黙っていた。

様子を見よう……。

トルハは、勝手に予算を捻出した罪で1万デイルスの罰金。

ドルクレンは無罪となった。

ゴドスはこの月、バルト国を攻略。

ラザニーヤ国を滅ぼして東方大陸の西4分の一を制圧した。

海軍を増強して、あきらかに西を警戒している。

2人の行動は、敵になる可能性のある国を増強させた事になり、罰せられて当然だ。

トルハはゴドスに和平特使を送ると、ゴドスとの講和を計ったが、ミストリアの弱みが分かっているのか高飛車な事この上ない。

「ゴドスとて中央大陸のアドニア国を抱えていて西にばかり兵を裂けない筈です。無視して国力の増強に走る方が良くないですか？」
来るべき月への進出の為に訓練を受けている腹心のF將軍などはそう忠告したが無駄だった。

トルハは50万人の軍事援助と引き換えに和平を実現させ、後顧の憂いを絶つと食糧問題の解決に奔走した。

僧侶を使って保存食以外の食料を作らせ、保有する保存食の消費を減らしたり、保存食そのものを魔法で増やしたり、雨よけの傘を農地の上に取り付けたりである。

白龍が居るので氷の息で零れた雨を凍らせて川に投げ込めばかなりの農地が助かるはずだ。

そして切り札の金龍も居る。

ジヨンは金龍の炎の息で雨を蒸発させて農地を救う作戦を取り、回収できる川の水を災害用に倉庫に蓄えてみた。

ミストリアの200万人の兵も災害復興に勤しみ、多くの田畑を雨から救った。

当然村人はジヨンに感謝する。

「ジヨン様。有難うございます。」

「之でミストリアの民百姓は救われます。」

ジヨンのブルマー政策に反対していた勢力ですら彼を褒め称えた。飢饉の噂を（と国民は思っている）聞いただけでここまで本腰を入れて対策に乗り出す王はめったにいない。

予言の類にいちいち付き合っただけでやるほど権力者は暇ではないからだ。「あのおう、どうしてジヨン様はわし等を保護して下さるのですか？」

感涙きわまつた百姓の1人が農地の視察に出てきたジヨンに尋ねた。最近ジヨンの方針により、全ての農民は牛と農耕馬にトレニアと鶏を保持している。

収穫が格段に上がり、家畜を食わせる余裕が出来たので、文句を言

う農民はいなかった。

しかも子豚や牛や卵をを産ませて育てて肉として売れば、ささやかな収入にもなる。

農水大臣のトゥーロがこの仕事を進めていた。

御蔭でブルマーネタ以外の反乱は起こった事があまりない。

「あのう・・・、質問を聞いておられますか？」

質問に答えないジョンに苛立った百姓が再び尋ねた。

何処の国でも農民は虫けらの如く扱われるのにこの王は変わっている。

そんな感傷に浸っているらしい。

この男は私利私欲色と欲の権化だが、民衆を慰撫するのが何故私利私欲なのだろう？

皇帝のミューファにもジョンの本心は分からない。

「聞いている。君達の働きがないと国庫収入がいちぐるしく減少するからだ。それに君達の作る食料なくしてどうやって権力者は飢えを凌ぐのだ？」

ジョンは出来るだけ優しい口調で農民に言った。

「食料を他国から買う金があれば農民は要らないが結局農民からの税収入で遣り繰りしている以上農民には食料を生産させて売った金で食料を 得なければなるまい。でも売る食料があるならば最初から年貢を取り立てれば済む話だ。だから結局のところ食糧増産に走るしかないのだよ。僕はそう思うがね」

ジョンの本心を聞いた農民達は色めき立った。

こんな為政者は聞いたことがない。

少なくともかつてのミストリアにはいなかった。

「では女子教育制度を採用したのは何故ですか？農民にとって女子の子供は収穫や農閑期の時、男手をとられる為に 家事と育児を担当する貴重な労働力なのです。女子教育制度は勿論男女同権の観点からは素晴らしい事なのですがもう少し農民の事情をお察し下さり、農閑期だけでも給食制度と子育ての為の家政婦制度を創設していた

だきたいと思う次第にあります。男手はともかく女子まで取られては農業は出来ませんから」

わざわざ言うまでもなく男子教育制度も存在する。

こちらは通いであつた。

農民が主体なので全寮制にしてしまうと深刻な労働力不足になる。

ジヨンは制度を創設した時之に気付かなかつた。

「分かつた。早急に派遣してやろう。但しこちらにも条件はあるが」農民達の顔が青ざめた。

増税か？それとも労役？

「難しい条件が悪いがブルマーとスクール水着の評判を挙げ、女の子のブルマー着用率を上げる様、女子を説得してはくれんか？言うまでもなく軍の財源であるこの2つの着用率が落ちると兵士の給料が減り、軍が崩壊するかもしれん。それは防がねばならん。そして農地が戦火に燃え、飢餓に苦しみ、パタレーンの二の舞になるのは嫌だろつ？」

農民達は思った。

何だそんな事かと。

都市部ならともかく農民が女の子のブルマー姿をいやらしい目で見るとは、苦しい。

ブルマーは元々奴隷の作業着だ。

農民だつて（女性は）最近ブルマー姿で農作業をしている。

余り知られていないがミストリアは暑い国である。

少しでも暑苦しい服の面積を減らそうと短パンではなくブルマー（旧型タイプ）が好まれた。その見慣れた風景に過ぎない女の子のブルマー姿に、今更助平な気持ちになる男の子は皆無であつた。それ故にジヨンの出した条件の真意が良く分からない。

そんなに都市部では深刻な事態が起こっているのか？

「都市部とは商売以外では余り、立ち寄りらね。まあ一応努力はしてみるがあまり期待はしなざるな」

老人がジヨンに言った。

「でもなんだってこの格好が問題になるのかな？わしだってブルマー姿で農作業をしとるぞ。若者の穿く物と決め付けとるからアホな事を考える奴が出てくるんじゃない」

見た目では分からなかったがこの老人は女性らしい。

「それに男だつてブルマー姿で農作業をする者は僅かだがいるぞ。

ジョン王が女性の穿くものと決めつけたせいでこうなったのではないのかね？」

老人はジョンのブルマー政策にチクリと嫌味を言った。

「そうは言っても都市じゃ若者の着用率がダントツだからな」

商売用に農村に持ち込んだブルマーを500着老人に渡すと情けなく言い訳した。

その時若い男が話しに割り込む。

「確かにセクハラを認めればガス抜きになって犯罪は減るがね。然し都会人は気楽で良いわな。金さえ出せば幾らでも食料が手に入るのが当然の権利みていに思い込んでいるんだからな。俺もフェチな男だが1度王国の持て男に挑戦してみようと思っているんだ」

都会から（ブルマー姿を見たくて）就職活動に来ていた男が、以外に農業に溶け込んでしまい、趣味と実業をかねて農地の獲得の為気の合う美少女と偽装結婚する為（お見合いが主流の世界であるから結婚してから好きになる方式の恋愛が僅かだが残っている。友達としては一緒にいてもいい適な関係だ）お見合いで友達になった女子（17歳）にその旨をお願いしてOKを貰っている。

本当に好きかどうかは本人にも分からないのだろう。

「婦女暴行の罪で終身刑か追放になる確率が高いぞ」

その言葉に男は呆れたような顔をして言った。

「こんなのやらせに決まっているだろう？スクール水着の女の子にあらかじめ着替えを見せてくれるように頼むんだ。勿論結婚と爵位を前提にな。俺がその着替えを目撃した事を証明する女の子の証人がいるんでちょっとハズイがな」

余り知られていないがどこぞの馬鹿息子がこの法律を利用して手管

の限りを尽くして水泳部の女の子を40人（1応合法なので場所は特定されなかったが側に川のある学校らしい）の着替えを目撃してハーレムにしてしまった（イーボルトではない）らしい。全員と結婚したが離婚したのはたったの2人だけであった。

そのうちの1人がスクール水着美少女凌辱事件の犠牲者アンナ・ペレスモレスなのである。

この男どこかしてみた事ある顔だと思ったが、例のハーレム男か？

「俺はアンナも爵位も欲しいんだ。それでスクール水着での着替えを覗いてたらビヤツカ人の男に通報されてしまった」

何だと？この事件はこの男によって起こされたのか？

はた迷惑な話だ。

こいつのせいでわが国は崩壊寸前まで言っているんだぞ・・・。

「では何故釈放されたのか？再び同じ事を繰り返せば事の成り行きに係わらず追放するぞ」

男は答える。

「本人同士が同意と認めているんだ。釈放するしかないだろう。男爵の位も一応持っている。俺は正式にスクール水着での着替えを見たいんだ。同じ変態同士分かるだろう？」

ジョンはよほどこの男を叩ききつてこの茶番を終わらせようかと思っただ。

然しいかに民衆が信じなくても2人は恋人同士らしい。

切るわけには行かなかった。

「君はほとぼりが冷めるまで身を隠して大人しくしているといい。

君の軽率な行為がミストリアを脅かしているのだ」

ジョンは男に頼んだ。

この事件は闇に葬るに限る。

そして男はエティルの僻地に恋人と追放された。

亡国の皇帝

亡国の皇帝（1）

レナの予言どおりミストリアの大地に本格的に長雨が振り出してきた。

ジヨンはかねてから申し合わせたとおり、金龍を農地に配置して炎息により、雨を蒸発させ、残りを白龍の氷息で凍らせて川に捨てる作戦を決行した。

農民を総動員しての雨を飲み干し、僅かでも被害を少なくしようと決死の覚悟でシレーリムを雨から守った。

大飯食らいで有名なトロールが、この時大いなる武勲を立て、ミストリアの年間降水量の2%を飲み干す戦果を上げた。

流石にトロールは暫く使い物にならなくなったが、動員したトロールは貴族の称号（侯爵）と

一年分の無料食料券（国費支払い）を与えられた。

更にトロール全員に、ミストリアの英雄の地位を授けられる。

この論功行賞に不満を持つものもいたが、戦功第一なのは明白なので直接文句は言えない。

第一長雨は終わっていない。

文句を言わないで戦功を立てれば一階級位は確実に昇進できるかもしれない。

ヘタに文句を言ったら降格されて配下の者がその職に収まるだろう。

ジヨンは足りない兵力を補う為に公務員を動員しようとした。

「セクハラ防衛隊をミストリアに転戦させよ」

この命令により王国のセクハラ防衛隊も長雨対策に参加した。

本来治安維持に創設された部隊だが、なりふり構っていない。

ミストリアには子供と老人以外の全ての人間とゴブリン、エルフ、

ドワーフ、コボルト、トロールなどが掻き集められていた。

パターンとミレイドは、高齢者の手によって収穫が維持されてい

る。

ジヨンはミストリア本島を守り抜く事で王国の国益を維持しようと考えていた。

このジヨンの作戦を知ったエティルとペクダールは、技術支援を条件にミストリアに兵を送った。

名を隠してセタの兵も5万人ほどやってきている。

配下のルミとその兵团だ。

エレナとルミは宿敵であるが、人道援助は呉越同舟と決まっている。あらゆる国家民族宗教のいざこざをスルーして行なわなければならぬからだ。

セタ軍に救援を求める事はミューファとペレトン以外の全ての家臣女官軍人が反対したが、押し切って受け入れた。

これを機会にセタの領地の（宿屋以外の）返還に応じて、講和を打診した。

流石に即答で拒否されたが、これ以降セタは残虐行為を控えるようになったらしい。

エレナ軍150万人（30〜14歳の兵である）とリース一族の率いるペクダール兵350万人。

この機会に、セタはミストリアを取り込もうとして一部成功している。

戦艦を（4千トン級）2隻買取、自国の海軍を増強すると共に、ペクダールにも物資を送り込み

続けた。

ミストリアはこれでも技術後進国である。

文明的には新興勢力のビヤッカの方が、技術は上だ。

ミストリアの産物など、ブルマーにスクール水着、造船に大砲。

戦車、兵糧卵に観光業、シレーリム麦に肥料の土。

刀剣、巫女服位の物である。

パタレーンでは砂糖とモース馬。

ミレイドでは小説の収入位だ。

後トレニアと鶏の販売収入の税金もある。

長雨で、食料が不足すれば、景気は悪くなるので産業は衰退するであらう。

之を憂いたジヨンは、反乱軍に降伏するように促して使者を送った。「何？変態王が和平を申し入れてきただと？」

反乱軍の立て籠もる町は長雨であっさり壊滅してエティルの保護国になっていたがジヨンは諦めない。

使者には降伏させるように言い含めておいた。

「あのブルマー好きの変態王にして、金と女にしか興味のない色と欲の権化が俺達を許す訳ないだろう？死ぬ気で働け」

反乱軍の首領たるシャリーは、厳命するがもはや兵士に戦う力は残っていない。

之を機に、ジヨンは講和の条件に長雨対策に参加しろと誘って飢えに苦しむ軍隊を骨抜きにすると、カルトミールにエティルと交渉させて、街と住民を50億デイルスで買い戻した。

冷静に考えれば人身売買なのだろうが、反逆者に人権など認める国はテラの一王国日本位だ。

「カルトミール老。戦功にて君の娘を大尉（兵50人）に任命する。真美大尉と名乗るように」

ジヨンはカルトミールの娘（傾斜国風の名）を登用すると、試しに最近長雨対策の隙をついて
数を増やした狐と狼と熊を退治させてみた。

数日後、討伐を終えて（村人に売りさばいた）5億デイルスのデイルスを持ってきた真美はジヨンのお褒めに預かり、2階級特進。

更にジヨンの抑えている株価3デイルス、配当年1デイルスのパン屋を任された。

従業員は5人。

ジヨン王の直轄事業である。

このパン屋は、真美のカリスマ的魅力も手伝って儲かり続け、ミストリアのドル箱となった。

反逆者は、ミストリアでもっとも過酷な流刑地に送られた。長雨対策では、もっとも過酷な土囊積みをやらされている。飯の処分で、何れ正式に判決が言い渡される筈だ。

ジョンは、土砂降りの雨の中自ら陣頭指揮を執っていた。然しそれでも、経済活動を無視すれば、国民が餓死する。

雨に濡れても多少は平気であるような気がしたので、兵士や義勇兵に金で雇った市民を、有料のスクール水着で武装させた。（男用あり）

之が売りに売れて、300億デイルス位荒稼ぎしたらしい。

スク水でずぶ濡れになっても、体を拭けば良いだけだ。

スク水で肺炎になった女の子は聞いた事がない。

多少濡れても風をひく程度だろう。

勿論死者がでたら何かと不味いので急ピッチで、医術の研究が進められた。

食料は貴重なので、自国で開発した兵糧卵が最近のミストリア人の主食だ。

「国王は自分だけ上手いものを食っているんだ」

そう言うデマを飛ばした部下もいたが、早急に東方大陸に密偵として左遷させられた。

食料の枯渇に備えて主力以外の部下を飢饉のない地方へ、転勤させる作戦だ。

あからさまにやると国民が動揺するので、左遷の形をとっている。

金は宝石を（20デイルス）持たせた。

軍船は出せないの、民間船で送り届ける。

老人対策に、東方大陸にそれなりの領地を与えて他国に移民させ、国内の経済的負担を軽減する、後の世に鬼畜作戦と呼ばれる外道な作戦も、周囲の反対を押し切って強行された。

老人は与えられた東方大陸の領地で悠々自適の生活を送っているし、受け皿となったゴドス国

は人口を増大させ、国力を増進させたが、弱者切捨てといわれても

仕方がない。

「ミストリアでは養えないのだから仕方ないだろう」

苦情を言った老人の家族にジョンが言い放った。

食料ではない。

老人介護のシステム作りが困難で、財政負担が多いのだ。

他国の土地を買って楽隠居していただけるなら、その方がはるかにマシだろう？

「飢饉が収まったら何時でも会いにいけるように船団を用意するか
らまっけていてくれ」

ジョンは老人の移民希望者を募っていた。

ミストリア人の老人のゴドス移民者は数千万に及んだ。

之によりゴドスは急速に国力を増大させ、隣国を併合して東方大陸
の西と東と南と北の一部を支配下に置いた。

中央に位置するマヤ帝国（人口3億）のみがゴドスの侵攻を辛うじ
て防いでいた。

ゴドスはミストリアの長雨に便乗して、穀物をべらぼうな高値で販
売して500億デイルスの金を国外に流出させる事に成功した。

ゴドスはこの儲けで、ミストリア侵攻の為の5千トン級大型帆船と、
大砲ゴドスバスターの製作に取り掛かった。

ゴドスの直属の人口はせいぜい3万人位なので、併合した領地の1
2億の属民を押さえ込むには、強大な武力が必要なのだ。

ゴドス軍2千万は全員傭兵。

主力は8千である。

ジョンは之を聞いても別に恐れなかった。

ジョンにとってゴドスは老人ホームなのである。

嫌がる老人は、国庫負担の介護人に世話をさせる事にした。

まあ今の所は長雨問題のほうが重要なので、ゴドスから兵を借り受
け、軍事訓練と引き換えに、長雨対策に当たらせてたのだ。

「今年の収穫がなければ僕たちは餓死するしかないぞ。死ぬ気で働
け」

ジヨンは戦意を高揚させるため、食糧不足を装った。

ジヨン本人もサラデイスの技術を応用して造った有人ゴーレム、サクリアを導入して雨を防いでいる。

更に、サラデイスの技術を応用して天候を制御できる嵐巨人を召喚したりもしていた。

全体の30%しか制御できなかったが、それでも多くの田畑が救われる。

「王。出来れば司令官室で政務を行って欲しいのですが」

王の精進ぶりに、部下のトゥーロがたまりかねて忠告した。

王の責務は国を守ることであつて兵士や民衆を直接指導することではない。

どの英雄物語も英雄は自ら前線に立つが兵学上は間違っている。

「ヒーリングの魔法で弱ったシレーリムを回復させる。分かったか？」

ジヨンはブルマー好きとスクール水着美少女凌辱事件が災いして自分の信用ががた落ちになっていると思ひ込んでいた。

そのイメージを払拭するためにはこの国難を乗り越え、民衆思いの王である事を証明せねばならない。

「五月蠅いぞ。トゥーロさん」

ジヨンはウザそうに部下を見た。

「政務はミレイレアさんの仕事だ。僕の仕事は経世済民だよ。民衆を見捨てたら明日からは麦の飯は食えなくなるんだ。僧侶のヒーリングで増やした麦などトレニアの餌にもならんわ」

ジヨンの逆鱗に触れた事を知るとトゥーロは立ち去ろうとして控えていたペレトンにぶつかつた。

「失礼」

トゥーロは慌てて任地に戻り、部下の指揮をとる。

ペレトンが、トゥーロの変わりに説得した。

「ジヨン様。政務が滞って困るのですが」

やんわりとペレトンが言った。

「万一食料が底をついた時の為に司令官室で商売に励んで下さると私は嬉しい」

「ペレトンさん。誰が僕の代わりに農業の指揮をとる？」

「はっ？」

ペレトンは多分農水大臣のトゥーロでしようかと答えた。

彼以外に適任者はいない。

然し彼の指揮権が及ぶのは農水大臣直属の部下だけである。

「ミレイレアさんは政務で忙しいし僕以外に誰がやれば良いのだ？」

ペレトンは言葉に詰まった。

確かに代わりの人材は少ない。

「私が指揮をとりましょう」

ペレトンは自ら名乗り出た。

「あなたが？大軍の指揮をとった事があるのか？」

「ないです。然しどうにもなりません」

ペレトンはここぞとばかりに進言した。

「あなたは如何見ても文官タイプだ。王の大権を貸し与えるから代わりに商売に励んでくれ」

ペレトンの申し出をあっさりとはねると、王の印を彼女に貸し与えた。

「この長雨で食料が枯渇している所もある筈だ。真に残念だが安い値で売ってやれ」

ジョンはそれだけ命令すると長雨対策に復帰した。

正確には2年位は食いつなげるが経済的ダメージが大きすぎ、国は崩壊するだろう。

ブルマー好きの変態皇帝と呼ばれながらジョンが今まで政権を保持できたのは民衆を餓えさせない優しい王であるからだ。

その幻想が敗れたとき、民衆はジョンを退位させるだろう。

生まれた時から王様でそれ以外の能のないジョンにとっては退位は極めて深刻な問題だ。

王を首にされたらどうやって生活すればいいのだ？

食べ物は何とかなる。

エルフの食事は光合成と水だけだ。

然しその他は如何にもならない。

ジヨンはトゥーロを呼び戻して命令した。

「トゥーロさん。サラデイスには巨人召喚装置があつたはずだ。それを逆用して妖精界にミューファアさんを送れ。イーボルトさんの言によればあの子はブアンレイア人の筈だ。妖精界に居住するエルフ共を集集させて地上に呼び寄せ、長雨に対抗する」

ブアンレイア人の強大な魔力で自体を解決させようか？

そんな悠長な事をして良いのか？

まあ口実に過ぎないのだろうが。

「僕は引き続き、ドラゴンを使って雨を蒸発させる。産卵の時期に合わせて龍の息吹で大地を雨から開放するのだ」

ジヨンの訓令にミストリア兵は明らかにだるそうな態度を見せた。

口には出さないが、兵の士気が低下している。

「ジヨン王。少し休ませてやらないか。こう毎日氷運びをやらされては体が持たん。1日でいいから」

ついに側近のトゥーロが止めに走った。

ジヨンは何故か食料に五月蠅い。

「その1日が命取りになるのだ。麦は既に根腐れを起こしている。

ヒーリングでかろうじて食い止めているところなのだ。飢饉を乗り切ったら豊作祈願の革命祭り（鬼追い祭りのような物。権力者が鬼の役割をする）を行う。だが食料がなくて金儲けはできんか？」

ジヨンは士気の低下を自分のブルマー好き（この時点ではデマだが）のせいだと思っている。

ジヨンは一応名君なのに、拝金主義が災いして、兵士達の指揮は乱れがちだが、それでも支持率99.99986%を維持していた。

独裁者並みの支持率であるが、本人はそう思っていない。

ジヨンは国民に嫌われているものと信じているのだ。

「祭りだぞ」

ジヨンは部下の機嫌取りに、水を与えて宥めにかかる。
高級な水だが、部下はそう思わない。

能天気なジヨンは、祭りでもやれば兵の機嫌も直るだろうと思っていた。

しかし部下はやる気なさげに言った。

「ジヨン王。俺達は疲れている。この戦いが終わったら特別休暇2ヶ月と3日間の宴会、月給を1人あたり250デイルスにする事を要求する。要求を聞かなくても仕事はするが、やる気が格段に違ってくるぞ」

過酷な労働に耐えかねた女性兵士がストを決行した。

幾らミストリアの未来の為とはいえ、もう限界だ。

「やはりブルマー好きの変態王などにはついていけないという訳かね？」

ジヨンはブルマー好きの評判が、民心を得られぬ原因と思い込んでいた。

それを見た民衆が、慌てて宥めにかかる。

「言っとくが、あなたのブルマー好きは全国民に聞いたアンケートでは女性の99.99%が仕方ないと答えた。あなたの施した女性優遇政策が認められて人心が豊かになり、多少のセクハラは気にしない風潮が出来つつある。スクール水着美少女凌辱事件でさえ、65%がセクハラ擁護派に回った。我々はあなたのブルマー好きにけちをつけているのではない。我々はジヨン王が求めるなら何時でもブルマーにもスクール水着になる用意がある。抱きたいというのなら好きにしてもいいと言った者さえ、国民の少女の中に16237名もいた。ちなみにその筆頭がペレトン様だぞ？」

之を聞いたジヨンは驚いた。

ペレトンさんが僕を好きだというのか？

ジヨンは意外そうに考えた。

ブルマー好きの変態王たる僕の何処が良いのだ？

「正気かね？ああ、君達。3時間ほど休息して良いぞ。」

ジヨンはこの兵士のチクリを真剣に検討した。

まあ悪くない。

ペレトンは美人だからな。

あの娘は僕だけのグラビアアイドルになってくれるだろうか。

然し当面は食糧問題が優先だな・・・。

「要求を呑もう。月給は300デイルス。2ヶ月間革命祭りを行う。それで良いか？」

ジヨンはあっさりと要求を呑んだ。

部下達は一応納得して引き下がった。

ジヨンは金に汚いが、吝嗇ではない。

ブルマー好きだが、為政者としては有能である。

「ではさっさと仕事をしろ。300デイルスも出すんだ。過労死直前まで使い倒してやる」

ジヨンは休んでいた兵を駆り立てて仕事を再開させた。

休暇については却下されたようだが元々期待はしていない。

男の兵も、女性兵士達も、喜んで仕事を再開した。

龍達は、丁度雨が上がって日が出てきたのでゆっくりと昼寝をしている。

このチャンスに、出来るだけ土を乾かし、麦へのダメージを回復させねばならないのだ。

兵士達は火球の魔法を麦の側に（燃えないように）撃ち込み、土の回復を図り、ヒーリングで運悪く焼けてしまった麦を再生させた。

そんな戦いが2ヶ月も続き、雨季も終わろうとした頃、1人の少女が六千人の、飢えに苦しむドワーフを引連れ、ミューファの所領を訪れた。

既にミストリアの人口は3億人を突破している。

養う水と食料は少女の故郷、テーレ連合のそれをはるかに凌駕する。それなら飢饉に苦しむテーレ連合の民を救ってくれるかと思ったのだ。

「皇帝陛下。本当にミューファ様に会うんですかい？我が人口はた

つたの4千万。相手は帰順した属国として扱いますぞ。当然相手は陛下を人質にするかブルマー姿にして慰み者にするかしてくるでしょう。それでも行かれるのか？」

陛下と呼ばれた少女リピーム・シルは之を聞いて頭を抱えた。

何故ジョンがミューファを皇帝に擁立したのか知れないが、皇帝は話の分かる人だとリピームは思っている。

リピームは発言した部下を怒鳴りつけた。

「余計な事を思い出させるな。私の決心が鈍るではないか。そうしたらお前らは餓死にするかもしれないのだぞ。それでも良いのか？」

リピームは傾斜国の南方の大陸国家テーレ連合の皇帝である。

3億の民衆に食わせる妻があるなら少しくらい我等にも分けてくれるだろうと本気で信じていた。

しかもジョン王は（ブルマー好き以外では）不世出の名君で通っている。

リピームは感想を漏らした。

「豊かなところであるのは間違いないね。然しミストリアの道中雨ばかり降っていたのは知っているだろう？今年は凶作かも知れんぞ」

部下は不安に思ったが、ジョン王やミューファがテーレ連合を見捨てられぬ訳はないと確信していた。

見殺しにすれば、金儲けの客を失うからだ。

「ジョンのやり口は、常に私利私欲である。民が栄えてこそ国が栄えるという事を分かっている」

リピームは部下を派遣して皇室のお宝を根こそぎ売りにだすと、食料を買う当座の資金を捻出した。

皇帝との交渉が失敗した暁には、べらぼうな高値のついた麦を買わざるおえない。

リピームはミストリア王家の内情は知らなかった。

ミストリアの促成栽培の技術で1年に4回連作できる（土と肥料は補充する）事を知らなかったらしい。しかも、通常より倍も種を播いているので1年の収穫は通常の8倍であった。

それでも食料自給率はたったの280%位である。

飢饉が来ても直に餓えると言うわけでもなかったが、国民の危機管理能力を高めるため、真実を語らなかつた。飢饉が起きて食料を吐き出さないのは人道に反する犯罪だが、飢饉はまだ起きていない。今なら龍の息吹で、9割方は播種量60粒を維持できるだろう。

その事を町の住人に聞いた部下は言った。

「陛下。困りましたね」

部下の発言にリピームは考え込んだ。

ここまで使えない手下とは思わなかつたのだ。

リピームは使者を派遣してトップ会談を提案する。

ミューファは居なかつた。

既に妖精界へといつてしまつたらしい。

リピームは部下の男にミューファとの会見を望む手紙を渡し、出直す事にした。連れてきた5千隻の(千トン級)大船団には、自腹で政府の食糧庫から購入した麦を積み込み、テーレ連合へ送っている。ジョンが宣伝した食糧不足は物価の高騰をまねき、(今の地球なら立派な詐欺である。)450億デイルスも儲けてしまった。

ミストリアの株価はこの詐欺により、16デイルスまで高騰している。

後でこれを知つた民衆が流石に怒つて、責任者のゴルコツト長官は三階級降格され、騎士団長を命じられた。真に理不尽な話である。ちなみに儲けはジョンが隠匿した為、マクユイが蜂起して首都ルシーを襲つた。

正規軍の一部が(2人)ジョンを見限り、マクユイに付き、城門を開いた為、五百万人以上の兵士が首都で激戦を繰り広げ、マクユイを追い払つた。

「この収穫期の直前に反乱を起こすとは絶対許さん。兵を動員してマクユイを追い払え。容赦するな」

ジョンの命令でマクユイはセクハラ防衛隊に根こそぎ逮捕され、奴隷階級に落とされた。妻子には罪は及ばない。

どっちもどっちだと思うがジョンの所業はこの国では詐欺にならない。

「僕に帰順してミストリアの法を遵守するなら元の身分に戻してやる」

ジョンは捕らえた反乱軍にそう誘いをかけた。

「国家財産を私物化してブルマー姿の女子と戯れる変態等に誰が仕えるかあ」

兵士達はそれでもルーシーに置いて来た家族が、人質にされていると思ひ込み、反乱軍の首魁、バートン以外は降伏した。

降伏兵には懲役刑を課し、新たな港城、アセリアを1ヶ月で、南方の海岸に建設させた。

この城は南はルゼーティア、西はパタレーン。

東はエティルの最重要地帯である。

この地の商業利権を入手したジョンは自ら大船団を率いてエティルに赴き、事情を知らないエティルに取引を持ちかけ、砂糖と引き換えに食料を安く手に入れた。

それを馬鹿高い値段で売りさばき、1500億デイルスを儲けてしまっているのである。

こちらの富はミストリアの民衆に分配された。憐みではない。

ミストリアの民衆に投資すれば1000億以上の税金が転がり込んでくるからだ。

然し何時までもこんな事はしてられない。

新たな税金の道を模索するときが来ていた。

「税金のアイデアはないか？」

長雨を何とか凌ぎきったジョンは国庫を潤す税金について話し合いを持った。

「いいアイデアがあります」

予め策を検討していた家臣団はジョンに秘策を授けた。

「巨人貸し出し業などは如何か？1人1700デイルス位で」

ジヨンはこの家臣をしばき倒した。

「それは奴隷貿易ではないのか？」

流石のジヨンも即座に反対した。

「いえ、貸し出すだけです。妖精界を攻略して1億の巨人を集め、1700億の税収をたたき出してご覧に入れます。」

「・・・」

ジヨンはこの能天気な部下たちに頭を抱えた。

妖精界に1億巨人がいたとしてどうやって税収を取り立て従わせる
きなのか？

「使えない奴だ。どうやって1億も巨人を売りさばく心算なのだ？
それならセタと組んで奴隷貿易をしたほうが遥かに儲かるぞ」

ジヨンのこの発言で部下の1人がエレナに寝返った。

播種量81粒のシレーリム麦の種子を7粒も持つて。

然し表向きは依願退職なのでこの事はジヨンの死後450年も後になつて考古学者により発覚した。

「王。お戯れを。では如何いたしますか？」

ジヨンの謀略担当の軍師トルハはスク水フェチの変態太守イーボルトの目覚しい活躍により、パタレーンの株価が170デイルスにまで跳ね上がった事に目をつけた。特に変わった事をやったわけではない。

只税金を無税にして穀物での支払いに切り替えただけである。

それも収穫の2割である。

之により、経世済民的にゆとりを持った農民は、魔法使いを雇い、脅威の10期作に挑戦したのだ。

イーボルトの捧げた熊の生贄のお陰か、パタレーンの雨は平年の6割り増しですんだ。勿論大豊作である。

「パタレーンの商人に声をかけて穀物を集めさせ、飢饉が来たら売りさばいて大儲けしましょう。それとモースと砂糖の生産を増強して巨利を得ましょう」

とにかく収入源をブルマーやスクール水着意外に求めないとマクユイが再び反乱を起こすかもしれない。

ジョンは、物品納税制度を導入する事にした。1人当たり10デイルス分の月貢をミストリアの住民から取り立てる事にしたのだ。

之が悪名高い鬼の納税である。

然し、平均600デイルスの年収を上げる農民にとっては払えない金額でもなかった。

税収は他国に売りさばく麦を買い付けるために使っらしい。

農民から取り立てた金で農民から麦を買い付ける。

つまり、只で大量の麦を入手出来るのだ。

そしてそれを建国間もないエティルに売れば3倍近くで売れるのである。

この交易で月収400億デイルスが保証される事となった。(自腹で買い付けた麦も勿論ある)収入は軍隊の給養費と農機具の近代化に使われた。

具体的には魔法の掛かった農機具を作り出し、国民に売りつける。

一台1万デイルスもした馬車鋤ゴーレム(自動開墾機)も導入され、農民の税収を飛躍的に高めた。

ちなみに長雨を乗り切ったミストリアでは近年まれに見る大豊作で播種量152粒のシレーリムが912粒も実ったのだ。

ジョンは即座に傾斜国に麦を売りつけ、1200億の儲けを出し、飢饉の噂から需要の高まった国内でも高値で売りつけ、更に600億儲けた。

「王様。この地方でも10期作に挑戦しようと思えますがよろしいですか？陛下には肥料の研究をして頂きたい。その道では陛下にかなう者はいませんか」

農水大臣のトゥーロが尋ねてきた。

それを聞いてジョンはうざったく思った。

それくらい自分の判断でやれ。

「かまわん。ルミナスの生産に注ぎ込んでいる魔術師以外ならどれ程の勢力を使つてもかまわぬ。君には多大な期待を寄せているから農水大臣にしたのだ。はつきり言つてミレイレアが右宰相なら農水大臣は左宰相だ。古来より食料がなくて経営できた国が1つでもあるか？食料を作りすぎて困るのは価格の下落だけだ。だからこそ食料の最低価格は昔から決まっている」「いや、決まってるじゃないですよ。トウーロは思わず言つてしまった。

次にジョンがなんと云うかはルシアンム（大猿）にも分かる事である。

「君はもう少し聡い男だと思つていたのだがね。では早速食料の公定価格を決める命令を出してくれないか？それとも出来ない訳でもあつたのか？今なら罪には問わんぞ」
罪人扱いされたトウーロはふてくされて言い返した。

「この国では汚職は犯罪ではありません。俺は議会の議員でもありません。地元の商人達が俺の支持者で、資金面の援助も受けております。よつて立場的に商人の利益を損なう命令を出せないだけです。」

ジョンにはこの小市民の感覚が分からない。

「そんなものかね。分かつた。命令は僕が出そう。君はこの事を商人たちに通告しろ。議会にはかけん。ミストリアの僕の私領での話だからな」

この国は3つの勢力に分断されている。

ミューファ領とミレイド領とジョン領である。

パターンはジョンの私領だがイーボルトに管理を委託していた。

ちなみにパターンは意外にも中央政府の方針に反して（反乱ではない）スクール水着禁止令を出し、物議をかもし出した。

スク水フェチで有名なイーボルトの出す法律に思えないからだ。

更にブルマー禁止令も出ている。

「僕は商人の利益を守りたいのだよ。最低価格を決めなければ価格が暴落したとき商人も農民も一網打尽ではないか？税収も減る。そ

れでも良いのか？軍隊を食わせられなかったら国は乱れ、セタの侵攻を受ける。そうなれば民衆はあの暴虐なビヤツカの支配を受けることになるんだぞ」

ジョンはトウーロにそう言い募った。

「では行け。最低価格は7日分で金貨4枚だ」

ジョンはトウーロを追い出すと將軍のクデルとイベラークを側に呼んだ。

「お呼びか？」

2人は魔法の武具に身を包んでいる。

「ああ。君達には軍功により、金1億ディルスを与える。それと部下4万人を雇える権利を授ける」

こう言ったジョンは、アセリアを守る兵として2人を派遣したのだ。農民に対する給食制度と家政婦制度も議会の全会一致で可決された。こちらは農業防衛隊と呼称され、ドワーフの若者が中心の組織だ。

その頃リピームの方はやっと皇帝代理への面会が叶い、ジョン王に謁見する事ができた。

リピームは深々と頭を下げて慈悲を乞う。

「そういうわけでテーレ連合は、餓えております。代金は2倍にして帰しますからどうか麦を我等に」

あからさまに懇願した。

皇帝のプライドなど既にながかり捨てている。

そんなリピームをジョンは冷淡に眺める。

そして言った。

「飢饉の原因は何なのだ？」

まず尋ねるのはそこであった。

媚びる相手をこの少女は（ドワーフである）間違えている。

農民に媚びる事ができれば飢饉など起きなかったとジョンは思った。

「どうせ人民の飢えをよそに贅沢でもしているのだろう」

ジョンは変態の噂があるが本人は極めて質素な生活を送っている。

酒も煙草もギャンブルも女もやらない、金儲けだけが生きがいの男

であつた。

「とんでもありません。飢饉の原因はレビネア（虫全般）ですから。それでエティルに援助を申し込んだらあの国も飢饉で余裕はないと言われました。南傾斜国も同様です。もはやミストリアに援助して頂くしかありません。助けて下されば私の寿命が尽きるまで忠誠を誓わせていただきます」

リピームは慌てて言い訳をした。

この条件ならジヨンも文句はない。

「助けてやったらドワーフの鍛冶職人を全て動員して我々の為に武器を造らせるか？そして1人当たり200デイルスの礼金を払うか？」

之では脅迫しているみたいだ。

しかし、リピームはこの脅迫にあっさりと屈した。

元々ミストリアへの服属が前提の話である。

出なければ誰が酔狂にも援助などするだろうか。

ドワーフは、一般的に身分に拘らない種族である。

そして採掘の専門家であつた。

神話では光と闇の戦いで暗黒神についたというだけの理由で子孫永代にいたるまで差別を受ける可哀相な種族でもあつた。

当然、光の神に付いたエルフとはジヨンがドワーフの尽力で政権を取つて、王族同士が（トルハとドルクレンである。彼は一応王家の血筋であつた）仲良くなつてしまふまで、急敵同士である。（ドルクレンはリピームの兄である）シャリーは何故かドワーフを重用していたが・・・。

ジヨンの心には偏見の入る余地がなかつたので、一般的にミストリアは魔王軍と化している。その光の神、ルシアに付いたのがゴブリオン、コボルト、トロール、巨人、龍、人間、エルフの光の7種族である。

ドワーフは暗黒神についたらしい。

「王様。領土は明け渡します。直接命令を下してください」

焦れたリピームは、ジョンにそう申し出た。

ジョンは之を辞退する。

「嫌だ。今の僕にはテーレ連合を治める能力がない。自国の経営で手一杯なのだよ。大体僕はあんだのいる国をよく知らない。だが麦は送ってやるう。早速ドルクレンに命令する」

この何気なく言った一言がリピームの運命を変えた。

「ドルクレンがここにいますか？」

リピームは意外な所で就職していたらしい兄に心時めく。

「ジョン王。いまドルクレンと言われましたか？」

リピームの問いにジョン王が答える。

「我が陣営に随一の補給の達人だよ。エルフの娘を好む変人だから国を追われたのか？」

ジョンは恐らくドルクレンの素性は知らない筈である。然しこの答えは的を得ていた。

「ふふつ。ドルクレンは君の兄か何かなのか？あの男を手放したのは君かね？惜しい人材を無くしたものだ。あの男はイエスマンだが、補給に関してはあれに勝るものはいない」

ジョンは折角傘下に入ろうとしたリピームを蔑むのを止められなかった。

王の守るのは民と部下なのだ。国民を飢饉にさらす王など、ジョンにとつては悪役である。「畑を広げて農作物を育てるしかないだろう？シルさんは、僕のものであるシレーリム麦を只で寄越せと言うのか？独立国に対しての脅迫だとは思わないかね？」

この言葉にリピームは考え込んだ。

まあ一応麦は送ってくれると言うのでそれは問題ないようだが、この分だとジョンはドワーフ苛めを始めそうだ。

それを悟ったのかジョンが言う。

「心配するな。苛めはやらん。ドワーフの技術者10万人を此方に移住させてくれないかね？嫌と言ったら麦の供給を2%減らすだけだが・・・」

脅迫しとるのはあんたのほうだ。

リピームはそう思ったが、黙っていた。

この王を怒らせたなら本当に凌辱されるかもしれない。

助平で有名な王なのだ。

「まあ良い。ではテーレ連合に魔法の武器を一千万本注文しよう。値段は120億デイルスで良いか？」

ジヨンは法外に安い値であるが、敗戦国並の条件をつけた。完全に配下国扱いである。

「それから伝説のドワーフの宝物を差し出すように」
リピームは呻いた。

あれを差し出せと言うか。

ドワーフに伝わる仔馬の杖を……。

一日に150キロも走るといふ名馬である。

国土の狭いミストリアでは肩身の狭い思いをしている馬だがテーレ連合では伝書鳩の代わりに持ちいられていた。

ミストリアの（パタレーン原産）モースにも匹敵する馬であった。

「別に良いですけどね。600億デイルス払う気があるなら……。
あつ、麦でも構いませんよ」

流石はドルクレンの妹である。

交渉においては右に出るものはいないだろう。

「駄目だ。一応この国も飢饉に襲われているのだ。他国へやる麦などないことになっているのだ。いざという時の為の非常麦なのだから金にならないと民衆がぶつくさ言う」

ジヨンはリピームに冷たく当たった。

全くこの人に八つ当たりしてもどうにもならないと思うのだが……。

「君にはセタを攻略する司令官を命ずる。どうせ君の手には負えないと思うが傾斜国にセタが進出しないようにしてくれれば麦は幾らでも送ってやろう。どうだ？」

どうだといわれてもなあトリピームは思った。

要するに此方に選択権はないのだろうか。

「分かりました。セタは出来るだけ引き止めましょう。麦はテール連合4000万人の3カ月分で十分です」

こうでも言わねばあの気まぐれそうなジョンに処刑されるかもしれない。

民は大事だが彼らの為に今の地位を投げ出すつもりはない。

ジョンに仕えて栄耀栄華を極めるのだ。

「君は何か勘違いしているようだな」

ジョンが普段より冷酷な目でリピームを見た。口元も薄笑いを浮かべている。

之では全くの悪役だ。

「この僕が王なのだよ。君達は黙って僕に仕えていれば良いのだ。僕と取引するなど身の程を知りたまえ」

このジョンの発言にリピームは色めき立ったが文句を言うのは止めておいた。

ジョンは世間の噂どおり、金と女の子のブルマー姿にしか興味を見せない変態であるらしい。この男はドワーフの娘にも興味があるのか？まあいい。どうせ栄耀栄華にふけるか、殺されるかのどちらかだろう。

「申し訳ありません。国家は解体して陛下の沙汰を待ちます」
リピームはその代わりに名刀を所望した。

ミストリア王家に伝わる魔法樹の装備ひと揃えである。

「正気か？君は自分の立場を分かっていないようだな。テール連合など僕が250万の兵を出せば瞬間に落ちる。君にミストリアに逆らう事は出来んのだよ。大人しく沙汰をまつとれ」ジョンは生まれた時から王族で、我儘に育っている。

自分の意に逆らうものがあると我慢がならないらしい。

全く困った王だ。

こういう奴がいるから反乱は絶えないのだ。

「王。テール連合には異界へ行くリーフの星門がありますぞ。 10

0億デイルス投入すれば使用権を認めよう」

ジヨンは頭を抱えて変な方向へずれて行く交渉の妥協案を探った。
（本人達は大真面目だが）その結果、麦を1年分テーレ連合へ送る見返りに、武器と馬の援助を受けることになった。

その結果ミストリアはドワーフの秘法を手に入れた。

鉱山収入を20%増す事の出来る魔法のアイテムだ。

質素儉約を家訓にするテーレ連合では余り役にはたたなかつたらしいが、強欲な変態王ジヨン・ラッセルにとっては真に役に立つアイテムである。

特に全体の20%までなら1月に幾ら消費しても含有量が減らない真に有難い魔法なのだ。

ジヨンはこの魔法を使って60億デイルスの月収をかもし出す。之を注ぎ込んで、観光名所ジヨンパレスを造り出した。

ミレイドの収入の9.5割を占めるカジノに対抗する策である。

金の力で即日カジノはオープンして20億デイルスをかもし出した。ちなみにジヨンはこの金で傭兵を雇い、妖精を召喚して妖精界の中央大陸の男爵量をミューファに命じて乗っ取らせた。

勿論妖精界の者にふんだんに金を支払っている。

隊長はジヨンの手下レナに任された。

妖精界に先に送り込んだミューファは天の川銀河方面の（リーフの星門の1つが繋がっていた）1つ木星に送り込まれた。

リーフの星門は天の川銀河へ繋がっていたらしい。

労働用ゴーレム、サクリアは木星コロニーの建設に使われている。

ちなみにジヨン達の居るのはアンドロメダ星雲の惑星である。

サラデイスを元に急ピッチで開発した、魔道戦艦オーディーンによって月に1部のゴブリンを送り込んだジヨンは、（大気圏突入能力あり）セタの絶え間ない嫌がらせを回避しながら完成した（オーディーン3基搭載能力あり）ルミナス空母を、月に送り込み、取り合えずルミナス内の食料栽培システムを利用して農業をさせた。

一応月の土壤改良には取り組んでいるが、何時の日にか農作物が出

来るかわからない。

水を得る魔法は存在するのでそれは問題ないのだが、空気を生み出す魔法は存在しなかった。「レナ様。本当に占いでは俺達大地主になれるんでしょね？下手な島くらの財産が手に入ると言うから月探索隊に応募したのですぞ」

2年経つても月の97%（面積は地球の半分）しかテラフォーミング出来ない無能なレナに愛想を付かした手下がつい愚痴を言った。

「占いは絶対ではない。的中率は35%弱だ」

レナは妖精界と月基地総督となっている。

月には怪獣ヒドラがたむろしており、之を手懐けて侵略のスピードを飛躍的に高めた。

それでも冥王星と火星の辺りまで兵を送り込んだミューファには叶わない。

地球には、使者を送り、南極に拠点を設け、じわじわと勢力を拡大してきた。

「と言うのにこちらは月1つ攻略するのに2年。しかも入植者はたったの15万人。

儲けはたったの150億デイルス。ミューファ様は地球での密交易で1400億デイルス設けたというのにですぞ。」

「不満があるなら止めてけっこう。然し約束の領地は契約不履行の罪で没収だな」

レナは大仰に言い張った。

部下達が色めき立つ。

「月基地の周辺で栽培しているアルテミス麦の収穫が今年やっと豊作になりそうだ。」

それまで待て」

レナは手下共を殴りつけるとヒドラ退治を断行させた。

そしてケンタウロスの部族を倒滅して全員を傘下に治めた。

セタは（惑星から見て）緑色に変化した月にうるたえたがジョンの

仕業とは思っていない。

南極に落ち延び、傭兵と野党を掻き集めてビヤツカ帝国を再建したセタは、ゴーレムを組織してテレ連合へ攻め入った。

「セタが攻め入ったと？全く・・・。あいつら自分だけがゴーレム技術を保持してるとでも思っているのか？お目でいい奴だ」

即座に対ゴーレム用兵器、アキレスバスターを投入してセタの侵攻に備えさせるとジョンに援軍派兵の使者を送った。

ゴーレムの足首を魔法の鎌で砕いて動けなくした後、蛸殴りにして兵を捕虜にするのでこの名前になったらしい。

「セタはあの緑化月がジョン様の手下の植民地化の証だと気付いていない。愚かな奴だ。もつと愚かなのはエレナだがな」

リピームの手下でテレ連合宰相アトバ又はほくそ笑んだ。

「あのジョン様に愚かにも抵抗を続ける不屈き者と言うわけだ」

宇宙船を保持するミストリアにエレナは大砲のみでどうやって抵抗する気なのか。

愚かにも程がある。

妖精界で幾ら覇権を握っても、ジョンの兵はあの名将トルハの軍事能力に対抗出来る程の才人を入手するのは現実問題として不可能である。

レナの占いでは妖精会には軍神トパーズがいるのである。

世界も天の川銀河位はあるらしい。

50年位はほつといても平気だろう。

「如何してエレナが愚か者なのですか？」

軍務大臣頓知期間は、本当に只椅子に座っているだけの大臣である。狡猾なセタの軍事力にはついていけない。

「かくなる上は、陸上草むしり用ゴーレムザナトーンの軍事転用をお認め下さい」

アトバ又は腹が立って頓知期間を怒鳴りつけた。

何の為に並みの軍人500人分の給料を払い、退職後の天下り先を保証してきたと思っているのだ。

いざと言う時に、国家の盾に使う為ではないか・・・。

「アキレスバスターで応戦しろ。報告ではセタのゴーレムは空を飛べなく、魔法も使わないらしい。動きも鈍いから、アキレスバスターで十分に対抗出来る。切り札のゴーレムドールは出来るだけ使うな」

アトバ又宰相はここでセタ軍を叩けば、手柄を独り占めにしてミストリア王国の地方長官になれるかもしれない。

リピームがジョンの配下になれば対等な立場のライバルである。

テール連合の司令官になれるかもしれない。

気分だけでも合法的にテール連合の主権者になれるのだ。

「テール連合の沼沢地でセタを迎え撃て。あいつら、テール連合を見くびった報いを受けさせてやる。ああ。乗組員は必ず生け捕りにしてセタに送り返せ。ジョンが五月蠅いからな」

一応敵兵は捕虜にして自軍に組み込むジョンにとっては敵兵は皆殺しのテール連合は殺人鬼の集まりらしい。

「セタは殺せ。ジョン王はあの男の恐ろしさを知らない。生かしておいてはミストリアの為にならない」

頓知期間は早速国民を無理矢理徴兵した王立義勇軍を率いて沼沢地で決戦を挑み、セタ軍のゴーレムを6機鹵獲する事に成功した。

テール連合はこのゴーレムを沼沢地から引き上げて、セタ軍に強襲をかけ、大敗して領土の殆どを失い、首都の港町ルグイナシティに逃げ込んだ。50万に膨れ上がったセタ軍は之を包囲して、降伏を勧告する。

「ザナートンとゴーレムドールを使って反撃しましょう。このままではテール連合は崩壊しますぞ」

己の無能さを棚に上げて頓知期間が進言した。アトバ又は仕方なくゴーレムの使用を認める。

「一機はミストリアへ送ってやれ。どうせこの国は無くなるのだ。研究用に送ってやれば俺達の出世は保証される」降伏すると決めてからアトバ又は交戦意欲を完全に失っていた。

どうせジョンの物になってしまふのであるから・・・。

「和平など論外です。ザナトーン一機でセタゴーレム隊150機はおとせませすぞ」

どうでも良いと思った。

ジョン王のご機嫌伺いの方が重要だ。

セタは援軍要請から3日でルグイナシティに辿り着き、テール連合の反撃に備えている、海軍総督ミシエリア・ラフト・リートは、ミストリアで開発した超重力爆弾ビツクバン・ランタンを腰に下げて参戦していた。

早い話、新兵器のうちもつともへボイ物をテストする為にジョンは援軍を送り込んだのだ。

真相を知ったらリピームはジョンの敵に回るかもしれない。

「ジョン王は国内の統治に忙しく、私が派遣された。心配するな。食料は送ってやる」

ミシエリアはテール連合の兵士を鍛え直す事から始めた。

全ての兵力を海に投げ込み鮫と戦わせる程に苛烈な修行だったらしい。

耐え抜いたのは540万人中2千人のみであった。

他はセタ軍に寝返り、何故か登用されている。

初歩的な計略なのだが上機嫌のセタは気付いていない。

「この勢いでテール連合を抑えてしまふのだ。」

降伏兵を取り合えずモルゲイン大陸の攻略に派遣しながらセタは新たな構想を練っていた。

モルゲインさえ落とせばミストリアに抵抗出来ると信じて疑わない。

「皇帝陛下。ミストリアが介入する前に和平交渉をして占領地を折半するべきだと思います。今なら和平を拒めません」

ルミがそう言うとセタの顔色が変わった。

「何故だ？ルグイナシティは明日にも落ちる。テール連合は俺の物になるのだぞ」

ルミはセタの顔色を伺いながら進言した。

「この戦いの目的はテーレ連合をミストリア陣営から引き離す事です。占領しても配下に賢人がいない以上、ミストリアの250万人の本体に奪回されてしまうでしょう。ここは我慢して、多額の賠償金と3州の割譲と技術者の確保で手を打つべきです。下手に占領してしまうとあの変態のイーボルトがエレナと組んで攻め寄せるかもしれない。」

「ほう？」

セタは珍しくルミの意見に耳を傾けた。

そして和平交渉の使者をテーレ連合に送りつける。

驚いたのはミシエリアであった。完璧に策が裏目に出たので仕方がないが。

「ミシエリア殿。セタは思ったより頭の良い男だ。この状況では和平するしかない。それともここで戦って540万人の同胞を見殺しにさせるか？」

最初の計画では降伏兵が反乱を起こした隙にセタのゴーレム部隊を一網打尽にする予定であったがモルゲインに追放されてしまった。之ではセタに反撃され、ミストリアはダメージを受ける。

「身代金は王が出す。講和をしたければ勝手にしろ。私は王の命令があるまで此処で戦う。淑女共。80隻の5千トン級ガレー船と4万人の海軍でセタ海軍の後方を絶つ」

ミシエリアは相当に鍛え上げられた海軍を率いて、セタの後方を襲うと船員8万人を全員捕縛した。

之により540万の兵は退路を絶たれ、全員降伏する。

決死の覚悟で反撃してきたセタの水兵による人質作戦がなければテーレ連合を解放出来た筈であった。

アトバヌは早々に降伏してしまったので、ミシエリアが技術者ごと高額の礼金にて押さえ込んだゴーレム技術以外のゴーレムはセタの手に落ちた。

「アトバヌの奴。一体奴は何をしたいのだ？」

旧テール連合の参謀、ミトレンシナは節操のないアトバヌに、反感を覚えていた。

「私もミシエリアに付く。アトバヌは反逆の罪でいずれ王様に処刑されるだろう」

そう言っているとミトレンシナはアトバヌを見捨ててその場を立ち去った。テール連合は領地の95%をセタに割譲してようやく命脈を保ったがモルゲインを武力占領して抵抗する。(当時、7月の反乱により、新傾斜国の領土となっていた)

新傾斜国はミストリアに降伏して6千の兵で残存するセタ陸軍を決定して大敗した。

モルゲインはセタの衛星国となってしまう。

侵略者

(2) 「この馬鹿者が……。貴様は3階級降格でエティル方面隊長とする」

ジョンは大敗して戻ってきたミシエリアを怒鳴りつけるとそのままエティル方面に追放した。

温厚で(ブルマーネタ以外は)部下の責任を責める事は滅多にしないジョンにとっては、久しぶりの逆鱗である。

王宮御用達の商人ガンガルジャンから貴重な水を3杯も買わねばならぬほど喉が枯れ、3日も公務を控えたくらいだ。

然しジョンの怒りは何故かペレトンに向かった。

部下の密告があつて以来、特別な感情を抱くことになつた様だが、その分泣き言の聞き役にもなつている。

小心者のペレトンにはきついところだ。

それでもペレトンは色仕掛けの効果がでてきたと思ひ、満足している。

「月の食料はどうなつている？」

八つ当たりにジョンが尋ねた。

ジョンの唐突な命令にはペレトンも既に慣れている。

一応温厚を保っているが下手をすると逆鱗に触れるかもしれない。

慌てた家臣団はジョンに大金を献上してご機嫌を伺つた。

こういう態度は、権力者の怒りに火を注ぐだけだ。

案の定ジョンは機嫌を悪くした。

「月の食料はどうなつているのかと聞いているのだがね？聞こえなかつたか？」

不機嫌そうにジョンが言つた。

部下達は、ジョンの真意を測りかねて、黙り込む。

ジョンにとっては、経済方面の話と金儲けが重要だ。

戦争はその為の手段に過ぎない。

「僕は機嫌が悪い。質問に答える」
之を聞いた部下達は慌てて答えた。

「300億人が2年暮らせる位は多分あるでしょう」
「ほう？」

意外に月の開発は進んでいるのか……。

ジヨンは機嫌を直して再び尋ねる。

「鉱物はどうだ？月にダイヤモンド鉱山が眠っていると言う俗説は正しかったのか？」

ジヨンは家臣のイーボルトに尋ねた。

何故か返事を渋るイーボルトにジヨンは怒った。

短剣を取り出すと冷静に尋ねる。

「さつさと答える」

ジヨンは護身用の短剣をチラつかせながら聞いてみた。

ジヨンは戦況より、経済方面の話しか興味がない。

経済さえ良好なら、戦争には勝てるかと信じている。

イーボルトは、別に怖くはないようだが、ジヨンの手前怯えた様子を見せた。

ジヨンはその業とらしい仕草に怒ったが、穏やかにイーボルトに聞く。

「如何した？何か不味い事でもあるのか？」

普段からイエスマンの部下に囲まれているジヨンはこういう部下は苦手だ。

「あることはあるがね」

イーボルトがやっと答えた。

「戦況より経世済民の方が確かに重要である」
イーボルトは嘆息した。

「宝石や金がほしければそういう魔法装置を造れば良いだけだ。お前にはそれが出来る権力がある。だが当面は月の麦の収入を背景に民衆の慰撫に務め、反乱を封じ込めるべきだ。月を手に入れた今、モルゲインなどはいした領地でもない。ルミナスで第3惑星サラ

ーシアを落とすし、コロニーを建設する。パタレーン1、7665億人。ミレイド3、7252億。ミストリア3、1081億人のミストリア王国なら一億位ゴブリンを移民させれば直に100億、200億になりますぞ。お望みなら直にでも国中のゴブリンを集め、月に送りましょう」

ジヨンはこの時点で3億のゴブリンと160万のコボルトを従えていた。

月には、ケンタウロスの月防衛軍、ヒドラ隊もいる。

ゴブリンの繁殖力は物凄く、月で繁殖計画を行えば、直に増える筈だ。

まずは月やサラーシア。

そして頃合を見て銀河の物流の拠点トレビゾン攻略する。

イーボルトはその為の兵と軍事力を部下に命じて編成させていた。時が来ればジヨンはこの星系を抑えられる力を身につける筈だ。

「確かに。然し僕はダイヤモンド鉱山があるのかと聞いているのだが？」

不機嫌そうにジヨンが補足した。

余計な事を言うんじゃない。

部下はは国王の命令に黙って従っていれば良いのだ。

ジヨンは、取り合えず敵のいない宇宙方面の開発に目を向けていた。敵のいる所では、弱いジヨンの私兵では勝ち目がない。

国防軍は基本的に自国を守る兵だからだ。

ジヨンの兵ではせいぜい一人当たり、ゴブリン兵20名に匹敵する程度だろう。

この弱い兵を引き連れて、近隣の荒地を開墾するジヨンにとっては、資金源こそ重要だ。

「月にはダイヤモンド鉱山はない。ルテリア鉱石なる鉄の200倍の重さで、鉄の4分の1の硬さの金属があったが使えないだろう？」
イーボルトはそんな金属発掘に大切な国費を浪費した責任を家臣の誰かが取らされるかもしれない事を恐れている。

戦いなら、エレナだろうがミューファの手下の豪傑のギラルとクルザームにも匹敵する名将だが、ジヨンは政治家の才能にしか興味ないらしい。

宮廷儀礼にも通じていて、非常に貴重な男なのだが……。

「俺は戦場で戦いたい……」

イーボルトは常にそう思っていたが、ジヨンの下では無理そうだ。どの道イーボルトもペレトンも金属には詳しくない。

使えない金属だとイーボルトは決め付けたがジヨンは違ったようだ。商売の基本は、どんな品でも高く売りつける根性である。

そして経世済民の志を実行にうつすのだ。

「ふん。使えないかどうかは商人が判断する。取り合えずお前が鉱山を開発して、高値で売り飛ばせ」

「……」

イーボルトは黙りこくった。

如何考えても使えないと思うがな？

俺も商人なのだぞ……。

ルテリア鉱石。

商会で試しに使ってみるか？

あの拝金主義者のジヨンが命令するんだから何か使い道があるんだろう。

イーボルトは淡々と言葉を続けた。

「ですからサクリアの使用許可を……。鉄の200倍の重さが人の手で持ち運べるとお思いか？貴方もそれ程幼くはない筈だ」

イーボルトはどうもレナに言い含められているらしい。

国の開発したゴーレム、サクリアの使用許可を求めてきた。

一応国家機密である。

命の次に大切な、国費を注ぎ込んでいる以上、敵に鹵獲させる訳にはいかない。

「敵の手に墜ちたら、追放ぐらいではすまぬぞ」

ジヨンは本気だ。

「好きにしる。納税は正確にな」
ジョンは論争を打ち切った。

イーボルトを去らせると、近頃よく徴収している臨時税5億デイルスを元手にお救い小屋を立てることにした。どんな世界にも低所得者はいる。

下手に扱って反乱を起こされるより、食料を与えて黙らせるか再就職を斡旋する方が遥かにマシだ。

お救い小屋は高評だったらしい。
しかし、高所得者の多いミストリアではお救い小屋に来るものも少ない。

ゴプリンですら寄り付かなかった。
それでもこういう行為は人気取りには最適だ。

施しをうけて文句を言うのは、テラの某国位な物であろう。

「イーボルトさん。今のミストリアの税収はいくらだね？」
数日後の政務で、ジョンが質問した。

ここで言う税収は基本税である。

「1億位だ。商業税が400億。麦が120億。革命祭りの収益が63億。月と木星からの収益は120億と1400億だ。支出が兵の給金1人500デイルスで2500万の、ざっと3億と諸経費600億で、1月の純益1500億だ」

ジョンはこの金で、軍備を調べ、オーディーンとルミナスとサクリアの大量生産にはいった。属州からの安い麦の流入に備えて、最低価格を一週間分の保存食で金貨15枚に定めた穀物法を議会に通過させる事も忘れない。

お陰で農業は儲かるという事になって農地の相続争いが激化した位だ。

加えてミストリアの全ての男子には徴兵制を採用。（女子は如何考えても軍人には向かないとジョンは思ったから志願兵のみとなっている）

年500デイルスの給金も出たので一応喜んで兵役に付いた。

之を女性差別だという者が幾人か出たので、一応来る者は拒まずになっっている。

「イーボルトさん。国名を変えようと思うのだが」
定例の会議で唐突にジョンが言い出した。

「やはりミストリア王国では僕の反逆者のイメージが拭えないと思うんだよな」

ジョンは従兄妹のミューファから政権を奪った事を気に病んでいるらしい。

ミューファは気にしていないが、ジョンは如何考えても反逆者だ。然しそんな事唐突に言われてもなあ……。

こいつ何を考えている？

流石のイーボルトも、この気紛れな王の心中を計りかねた。

「ラティール帝国と言うのはどうだ？僕が初代皇帝というわけだがね」

ジョンのこの言葉に、ドルクレンの顔が凍りつく。

ペレトンは平然として、他人事を決め込んでいた。

この王の気紛れに付き合っているのは、身が持たない。

それに我々が反逆者なのは事実であろう。

ミューファに同情的な廷臣は、困惑と憎悪の視線をジョンに向けた。やはりあんたは帝位が欲しいのか。

彼らはそう思う。

最初からミストリアの王だろうか？てめえは……。

粗暴な言葉が家臣や部下の間によぎったが、取り合えずペレトンが宥める。

「ジョン様のお望みが、国名の変更なら、家臣に拒否権はない。議会の採決を待つべきである」

ペレトンは、巫女服姿で廷臣を説得にかかった。

部下は黙り込む。

いつものブルマー姿であったら、説得は失敗して反乱が起こったかもしれない。

トウーロとトルハとミューファは、何故か会議に欠席していた。一応熱病と言う事になっているが、誰も信じない。

ミューファは辺境で、兵の訓練を行っていた。

「良いのではないか？いかにも強そうな名前だ。だがな・・・、皇帝はミューファ様の方が良いぞ。お前は皇帝補佐官として実権を握るのだ」

ミストリアの文官が好意的な意見を述べるが、ジョンにとっては癪に障ったらしい。

「だまつとれ・・・」

ジョンはこの五月蠅い家臣を黙らせると帝政への移行をその日の内に議会に通告した。

「何？帝政だと？」

トウーロとトルハは驚いた。

ジョンは金にしか興味のない守銭奴だと思っていたが・・・。

「あの男にも野心があつたのだな・・・」

トルハは何故かその時軍隊の訓練を行っていた。

訓練に金はたいしてかからない。

それにしてもトルハは軍師。

トウーロは農水大臣である。

何故熱病だと言っているのに、会議を延期しないのだろうか？

仮病がばれている？

それにしたって、この2人ほどの重要人物を抜きにして国名を変更するか？

「ジョン王の考えることは良く分からないな？気紛れ過ぎる」

トルハは嘆息した。

「あの王は何を考えているんだらうな？国名変更のセレモニーで、軍資金を献納させる気なのか？」

それはありそうな話であった。

ジョンは金儲けの為には何でもやる私利私欲の権化である。

特に光合成で食事を取るエルフ族には珍しく、食料にやたら五月蠅

かった。

所詮旧態依然の、農民とゴマの油は絞れば絞るほどよく取れるものなりの発想しか持たないトゥーロにも、ジョンの考えが分からない。「まあ良いがな。普通にあの凄まじい勢いで増え続ける国民達を養うには、食料がいるだけの話だろう?」

いつの間にか、補給大臣のドルクレンは話に割って入った。

「熱病だと聞いてジョン様が見舞いに俺をよこした。因みに仮病はばれているから」

そう言うと袋から3千万デイルスはするであろうダイヤの首飾りを取り出し、トルハの首にかけた。

「理由は知らんが機嫌を直して王宮に出向いてくれとジョン様は言っている」

ドルクレンは金貨の入った袋をトルハに渡した。

「見舞金だそうだ。薬代の7デイルスと、解熱剤が入っている」

仮病がばれているなら何故見舞いに大臣をよこすのか? まあ突っ込まないでとトルハは思った。

「ファシスさん。ジョン王が国名を変更したと言っるのは本当なの?」

ドルクレンは答える。

「今更反対しても手遅れですよ?」

ドルクレンが恋人に丁寧に告げた。

文句があるなら会議に出席して言えとは、トゥーロには言わない。

「別に私は構わぬがな。どうせ私達の造った篡奪王朝だからな。ジョン王はそれを気にしているんだろうよ」

トルハは呟く。

しかし何故今なのだ?

この前の敗戦が原因なのだろうか?

皇帝就任のセレモニーで、国民の引き締めを図ろうと?

「どうせならもっと早くに決断して欲しかった」

正直そう思ったが、それを言っくと気紛れなジョン王に処刑されかねない。

金と食料にしか興味のない変態王だが、給料は滞ったことがないので、部下の信頼は厚いのだ。

それにブルマとスクール水着の販売収入が給料の源になっているので、ジョンに文句も言えない。

因みに鎧の摩擦防止用の水着は給料から天引きである。

鎧や制服自体は国からの支給品だ。

古くなった鎧は（一年買い替え）売り飛ばしても良いと言う、破格の条件である。

それ故に、帝国兵になればひと財産築けると言うので、入隊志願者が後をたたないのだ。

ドルクレンは、トゥーロの分も薬を渡すとその場を立ち去った。

因みにトルハ用の薬の中にはラブレターが入っていたが秒殺で細切りにされたらしい。

シヨックをうけたドルクレンが仮病で出仕を拒み、事が露見して1万デイルスの罰金を支払わされたそうだ。

「気紛れなジョン様の逆鱗に触れて追放された時に備えて、財産は分散しておいた方が良いだろっ」

トゥーロは、帝国では財産にもなっている女子用スクール水着を災難に備えて荷造りさせておいた。

この国では決して、変態行為ではない事は付け加えておく。それに最近のテラでは、メンズ用のスク水もあるようだ。

「当然だね。私はペレトン姉様の妹だから、追放はされないがそなたは危ない。逃亡の準備はしておいた方が良い。利権を笠にきて、あれだけ蓄えた財宝を没収されたくないだろっ？」

トルハは言った。

「ドワーフは頭が悪い等とは言われぬ様に私が知恵を授けているのだ。礼金は後で私の居住区に運んでおくように」

そして何時かはジョンに余計な事を吹き込む家臣が現れると思っていた農水大臣トゥーロはトルハと相談してラーゼルン島に屋敷を立てることにした。

どうもトウーロはこの気まぐれな王についていけないらしい。

農業を推進して国庫に60兆デイルスの金と2千億の宝石と(10億人分の)150年分の麦を蓄えていたトウーロも、ジョンの気まぐれには勝てなかった。

ジョンの命令があれば、トウーロは確実に処刑される。

「俺は所詮裏切り者だからな」

この負い目が常にトウーロに付きまとう。

今は大目に見られているようだが、何時の日にか蒸し返されて処刑される日が来るかもしれない。

こんな愚痴をトルハにするとトルハは笑いとはすが……。

不安を抱えていてもジョンは追放などしないと信じたいのだろう。

トルハは今度は真面目な顔で答えた。

「スクール水着好きの変態だっつてジョン王の配下にいるというのに心配のしすぎは禿げるぞ。禿のドワーフなんて聞いた事がない」

トルハはエルフなのにドワーフの彼氏持ちだけあって、考え方が豪胆だ。

「私の方が立場は複雑だよ。何時ブルマー姿を披露してのセクハラ行為を強要されるか分からないもん。大臣殿は殺されるだけですむから気楽に行こうよ」

トルハはトウーロを慰めた。

「ジョン様は今の所は権力にしか興味のないお方だよ。然し裏切り者は何れ処刑されるのが世のしきたりだ」

トルハは追放の不安と楽天主義が交錯する心中を打ち明けた。

「そうだな」

トウーロも頷いた。

心配したって今更如何にもならん。

トウーロは、こんな悩みはさておいて部下に命じた。

補給大臣のドルクレンを炊きつけて魔力を帯びたスーツァーマーに身を包んだ鋼鉄騎馬兵団を編成したのだ。

ジョンの主力部隊で総数250万人である。

志願兵のみで構成された。

金にすると5兆デイルス位。

鍛冶職人はこの法外な安値に、憤慨したが、一応注文どおりに、最高品質のスーツアーマーを作った様だ。

因みに女性用は皮鎧である。

指揮官を識別しやすくする効果と、体力的問題と美的効果を考慮に入れた結果だ。

この功績で、ドルクレンはラティール帝国初の男爵に任命され、褒美に金貨で100億デイルス分の名剣を賜った。

このあたり、ジョンはセコくない。

「トウーロ。君には名馬を与える。ミューファさんがテラから貰ってきた馬らしい。見世物にでもすれば、1億は儲けられる筈だ」
トウーロは恩賞に不満だった。

如何してドルクレンが名剣で俺は馬なのか？やはりジョンは俺を嫌っているのか？

「そんな事ないって」

トルハが慰めた。

「ジョン様は貴方に期待しているの。貴方以外で馬を育てられる人はいないわ。旨く馬を増やしてモース馬より頑強な鉄馬兵団の編成に成功すれば軍功第一よ。やりたくないならペレトン姉様になってもらって褒美をたんまり頂くけどそれでも良い？」

ここでトウーロは考えた。

確かにそのとおりだ。

「皇帝陛下。一体何頭位頂けるのです？」

即座にジョンが答える。

「600万頭位なら何時でも。テラ方面では、木星基地への移民を募集しているらしい。君も言ってみるかね？あの星には僕達の想像を超える兵器と麦がある。閃光で街1つ消滅させる核ミサイルとか、播種量800粒の麦だ。放射能汚染が酷い核ミサイルはともかく、麦のほうは使える」

ジョンは補足命令で、妻を譲ってもらおう事にした。帝国特産のミスリル銀での、バーター取引である。

「はっ。有難く頂く。税金に期待して頂こう」

そう言くとトウーロは下がった。

そしてトウーロは、褒美として与えられた馬を元手に、仕方なく商売を始める事にした。

まずは土地の選択である。

月に土地を買い、馬牧場を造る事にしたのだ。

既にテラ方面には、進出している。

別の銀河でもゲートを開ければ簡単に交易できる時代だ。

それ故に、何故月開発が、ここまで遅れているのか、よく分からない。

「月は放射能汚染が酷いんだ。どっかの馬鹿が大陸消滅兵器を月に打ち込んだらしい」

事情通のイーボルトはそう説明しておいた。

多分前の文明が戦争なんかで使ったに決まっている。

「帝国で開発した宇宙戦用空母ルミナスを月に送るのだ」

ジョンはそう命じる。

大量生産したルミナスを月へ送り、月基地を建設しようと言う計画である。

資金は無尽蔵と言えるほどにあるので、千基でも二千基でも造るだけなら可能だ。

ブルマとスクール水着の収入では流石に資金が足らずに、国庫の金も総動員していた。

「お前は一体何がやりたいのだ？」

あからさまにエスカレートし続けるジョンの野望を見かねたトウーロを含む同志がジョンに進言した事もあった。

「之だけ予算をつぎ込み続ければ、財政破綻は免れませぬぞ」

部下達は財政破綻で、自分達の首と給料の減額が訪れるかもと、不安に思っているらしい。

然しジョンは意にも返さなかった。

「ミストリア領の生産力で、増え続ける我が民を養えるのか？アホな事を言つとらんで仕事に就け」

ジョンは珍しく部下を詰った。

この台詞で何故かトウーロはやる気を出したようだ。

彼は渋々とジョンの命令に従った。

ジョンはこの論争を打ち切ると、新たな命令を下した。

「セタの行方が知れたら捕縛しろ。生きて裁きにかけるのだ」

ジョンは領地の兵を全て集めるとセタを倒すべくモルゲインに出陣した。

たとえ神が許したとしても、婦女暴行魔を世間に住まわせておく訳には行かない。

犯罪者に相応しいのは、刑務所だけだ。

それにジョンにとっては皇帝としての初陣である。

経済が崩壊する前に、セタを捉えないと、また停戦せざるおえない。

「今度こそあの女性の敵を捕らえて裁きにかけてください」

セタを憎む、ミストリアの女性は、献金3兆デイルスを国家に献納した。

「有難く頂こう。今度こそセタを捕縛してみせるぞ」

ジョンは留守を守る皇帝補佐官には何故か無名のシラクス將軍が任命した。

「では留守を任せたぞ。失敗は許さん」

シラクス答える。

「心配めされるな。俺は臨時雇いのバイトだが、50万デイルスの給料分は働いてやる」

之を聞いたジョンは、安心して命令を下した。

「セタ軍を1人残らず捕らえよ。どんな悪党にも裁判を受ける権利はある」

ジョンは部下を招集するとそう宣言した。

部下達もその心算だ。

生きて捕らえれば1人120デイルスを貰える協定を密かにシラク
スと結んでいた。

それに加えて捕虜は奴隷として売りさばいても良い旧ミストリアの
法律が残っている。

大抵はジョンが買い取るので余り酷い問題にならないうちに、いつ
の間にか帝国臣民に溶け込んでいた。

そんな献上奴隷の1人にフォートレス・ファミリアと名乗る少女が
いた。

エティルの内戦の時に孤児になり、帝国に売られてきたらしい。

最初は部下を2人つけて、苦情処理をやらせていたらしいが、ミユ
ーファの目に留まり、彼女の推挙により、本営付きの副官に任命さ
れた。

ジョンは何故か彼女を気に入り、即座に養女にして帝国の皇位継承
順位2位を与えてしまう。

1位はミューファであった。

フォートレスには、占領した惑星サラシアの陸地の95%を与え
られ、大公の位まで頂く事になる。

この鼻屑に国民と家臣団は怒り狂ったが、フォートレス本人には言
わなかった。

自分の財産を如何しようとジョンの勝手である。

然し将兵の士気の低下は避けられなかった。

「陛下。あの娘のどこが気に入ったのです？そこらへんをはつきり
させないと部下も国民も怒りますぞ」

セタ追討によるモルゲイン解放に動き出したジョンは部下のペレト
ンに窘められた。

ジョンのお気に入りへの彼専用のグラビアアイドルのペレトンですら
毎月150デイルスの年金と献策による褒美に月の土地700エー
カーを貰っただけだ。

(念の為付け加えておくが、ペレトンは断じて巨乳ではない)

領地に興味はないが、褒美の金が忠誠心の証とされるラティール帝

国では、重要な問題である。

「陛下の側に侍る女性は取り合えず私だけにしていただくとは有難いのですが」

ペレトンは珍しく反抗的に嫌味を言った。

「・・・」

ジヨンはあからさまな、ペレトンの嫌味に少し不機嫌になった。

俺の資産である、月やサラシアを如何しようかと勝手ではないか？

「フォートレスの才能は君の10倍はあるよ。いずれは、帝国宇宙艦隊を任せるからその心算でいる」ジヨンはペレトンにそう言うように急いでモルゲインに出陣してセタの軍を打ち破り、北傾斜国を併呑した。

セタは、南傾斜国へ敗走。蜂起した地方軍に補足され、ルミの手により救出される。

その後セタは姿をくらましたようだ。

本国に逃げ戻ったに違いないが、追撃するだけの予算はやはり足りない。

「如何しましょう？」

部下がジヨンに質問する。

ジヨンはあきれ果てて答えた。

「逃げ足は速いな。地方蜂起軍には1億ディルス与えて、ねぎらつておけ」

ジヨンは政治的効果を狙ってこう言った。

味方に冷たくすると敵が増えるだけだ。

「ジヨン様。セタを追撃して本国を奇襲いたしましょう。私に兵5千と船20隻を頂ければ必ずセタを捕らえて見せます」

何故かジヨンの陣営に居るエレナがそう進言した。

お互い戦っても利益は出ないと分かっているから奇妙な同盟関係が維持されているらしい。

だがジヨンは冷たく言い放った。

「セタは国内問題では暴君だが対外関係では覇権を争うライバルだ。

今セタを捕らえて世が平和になれば、国民は僕の方に目を向け、非難を始める。それにセタには名軍師ルミが居る。流石の僕もルミには勝てんよ」

エレナはこれを聞くと内心呆れた。

「セタを逃せば禍根を遺しますぞ」

それ以前にセタ討伐の名目を全否定する発言だ。

この経済利益しか頭がない、暴君ジョンを国民が見捨てるかもしれない。

大体総兵力2753人、人口600万（奴隷は除く）のビヤツカ帝国にどうやったら負けると言うのか。

「ジョン様。この機を逃せばセタ軍は体勢を立て直し、モルゲインを奪回しますぞ。そうなれば国内で謀反がおき、帝国は瓦解するかもしれないですぞ」

エレナは追撃を進言したが早い話、ジョンは自分を裏切ってエティルにて自立したエレナを信用していなかった。

そしてジョンは何故かセタを恐れ、この時も追撃の機会を逃した。

「掻き集めた軍資金は利子つけて返してやれ」

流石のジョンもあれだけ大見得切った手前、民衆の反発が怖かったらしい。

然し、経済が崩壊すれば、多くの人が食えなくなるのだ。

「セタと講和をする。地方蜂起軍には占領地の4割を与える条件で和平を提案しろ。僕はちよつと買物に町まで出るからトル八さんに後を任せる」

ジョンは無責任にも和平交渉を（かつてセタの奴隷であった）トル八に任せるとどこぞへ遁走した。

この筋金入りの気紛れに、部下は啞然とする。

「陛下は何を考えているのだ？」

エレナと皇帝の家臣団は愛妃ペレトンに詰め寄った。

一応この時の彼女の立場は王立最高顧問である。ブルマーネタのグラビアアイドルでありながら、その文官としての才能が評価されて

この地位に上り詰め、皇家の文官の元締めを兼任していた。

何分にも地味な職務であるので、余り評価はされないが、ジョンだけは彼女を大事に思い、常に側に侍らしている。

「ペレトン様」

部下が進言した。

「今セタを追撃すれば世界は我が手に落ちるのですぞ。和平など論外です。ジョン様を説得して追撃命令を出させて貰えませんか？」

部下の1人が気の小さいペレトンを恫喝した。

ペレトンは少し脅えたが、毅然として答える。

「皇帝陛下のご命令に背かれるのですか？ジョン様は和平を望んでおられるのです。それは貴方方がジョン様に信用されてないだけの話ではありませんか？ジョン様は、セタを追撃すればラティール帝国軍が内部分裂すると不安に思っているらしいのですから」

ペレトンは日頃からジョンに批判的な將軍達に嫌味を言った。

血の気の多い將軍達が色めき立つ。

「ペレトン殿」

部下がやや反抗的になってきた。

「文官が偉そうな事を言うではないか？」

シビリアンコントロールに対する反乱的発言である。

ペレトンは皇帝の最高顧問であり、彼女の発言によつては、この將軍の未来はない。

然し、ブルマーネタのグラビアアイドルを軽視する將軍はペレトンを軽く見ているらしかった。

「そもそも貴様が何故ジョン様の側に侍っているのか？そのロリコンじみた美貌でジョン様を籠絡しているからだろうか」

この將軍はもはや気がふれているのだろうか？皇帝の愛妃にこんな事を言ったら告げ口されるのが普通である。

この男の出世は間違えなく無くなるではないか。

「どうか追撃命令を・・・」

重ねて頼むがペレトンには軍を指揮する権限がない。

文句をつける相手を間違えている。

「皇帝を誹謗するものは不敬罪で追放されますよ？それでも良いのですか？」

ペレトンが出来るだけ穏やかに通告した。

偉そうに聞こえないように、努力はしているが、高圧的にみえるようだ。

「ジョン様の姦婦が俺を脅すのか？やれるものならやってみろ。俺の軍はセタを奇襲する。邪魔をするなら貴様をたたききるぞ」

將軍はそう言い放つと自腹で雇った兵900名でセタの本陣を奇襲して散々に打ち破った。

セタは身一つでモルゲインを脱出して本国へ逃げ帰る。

潮流をよく知らないラティール帝国軍では、逃げるセタを追えなかった。

それに帝国の主力兵器、オーディーンもルミナスもビヤツカ本国の砂嵐には勝てない。

「何だこりゃあ？初めてみるだよ」

ビヤツカ本国の島の1つで偶然砂嵐にあった將軍はあまりの暴風に進撃を諦めた。

その足でのこのことラティール帝国本国に戻ってくる。

「愚か者め。お前は追放だ。ジョン様がセタを逃がさぬようにわざとモルゲインをセタに任せたのが分からぬのか」

ジョンの心中を誤解したジョンの家臣団は、この將軍に怒りを向けた。

そしてペレトンから話を聞いたミレイレアが独断で密書を送り、この將軍を追放した。

將軍は、ビヤツカに逃げ込み、セタに斬られたらしいが、幾ら人殺しをしない戦争を主義とする（敵兵は基本的に生け捕りである）ジョンでもそこまで責任は取れない。

そのうちに、ペレトンに授ける土産物をしこたま買い占めたジョン

が兵の駐屯地に戻ってきた。

「陛下。命令違反をいたした者が居たので追放いたしました。セタに斬られたようです」

ミレイレアは最近帝国の魔法使いが開発した、情報の聖石（電話のような物）にて、ジョンに通告した。

こんな話になるとジョンは烈火のごとく怒り狂う。

「ミレイレア叔母様。追放した將軍の家族に慰謝料を支払うように」
ジョンは何故か冷淡に通告した。

「お前などに帝国を任せた僕が馬鹿であつたようだ。叔母様。貴方を宰相から解任して、財務大臣に降格する。新宰相はイーボルトさんだ」

ミレイレアは、勿論反論した。

そもそも陛下が職務放棄して土産物を買うのが悪い。

然しそれを言ったらジョンは怒るだろう。

「陛下の居に背いた者を処罰していけないのですか？」
之に対してジョンは言う。

「追放されればセタに頼るしかないのは分かつていた筈だ。それをむざむざとセタの手に掛けたのはお前の失態ではないのか？僕はちやんとペレトンさんに説明させた筈だ。セタと和平するのは、内部分裂を恐れての事だと。何故塔にでも軟禁してから僕の支持を仰がなかったのだ」

ミレイレアはようやくジョンの怒りの凄さに気付いたらしい。
慌てて反論する。

「陛下がいきなり逐電してシヨッピングなどをされていたのがそもその原因ではないのですか？」

こういふ言い方をされては例えそのとつりでも天邪鬼な態度に出たくなるのが人情である。

「ミレイレアさん。僕のいないときはお前が帝国の主なのだ。部下が斬られれば、理由の如何によらず処罰される。お前は僕の叔母様だから降格程度で許されるのだよ。僕を恨むのは筋違いだ」
「・・・」

「ミレイレアは考え込んだ。

確かにそのとうりだ。

「陛下。それでは私はイーボルトに引継ぎをいたします。確かにあの男の才能は私の20倍はあるでしょう」

この時ミレイレアはジョンについた事を猛烈に後悔したが後の祭りである。

ジョンはその日の内に、イーボルトに宰相職に任命して、ミレイレアを解任して財務大臣に降格した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0510g/>

為政者の戦い

2010年10月17日08時52分発行